……目　次……

子の権現……大和禎人……1
遠足……茂里英介……10
年寄りの冷ミステリー……山本儀一……20
フルートの奏でるアンダンテ・トリスト……山根三枝子……29
載　○町○丁目○番地（四）……山口健二……42
連　ハイラル挽歌（十一）……金子正義……51
藤木屋酒店の終焉……柴田富佐子……60
鏡花の女……三戸岡道夫……72
編集後記……92

表紙・カット：岸田幸雄　カット：大貫雄司郎

子の権現

大和禎人

子の権現は神仏混淆の寺で、開運・足の神さまとして有名な古刹である。昭和五十六年七月落雷によって惜しくも本堂・大師堂が焼失したが、近いうちに再建されるとのことだ。鉄の大わらじは健在。仁王尊の立つ黒門を出て、大鳥居近くには三軒の茶屋が並ぶ。

下りは、二本杉を左へ教育地蔵を見て車道をわずかに下り、右へ杉林の細道を下る。朱塗りの降魔橋、少し下って手打うどんが名物の浅見茶屋、不動の滝を背にした不動堂、舗装道路とつづく。

これは奥武蔵・秩父のハイキングガイドに載る記事でございます。コースを伊豆ケ岳へのあの男坂の鎖場を通ってロック・クライミングを楽しみながら、正丸峠の方から登ってきた若いハイカーたちのために書かれたガイドは（渡り廊下をくぐって境内に入る）と書いて前記の記事に続くのでございます。下りを吾野駅へたどる道順でございます。

また「子の権現・竹寺」というコースの方にも（教育地蔵の脇から二本杉に出る）という記事がございます。少し余事でございますが竹寺もまた神仏混淆の寺で、先年私も秋元不死男先生の句碑を見たく訪れております。

今年竹渓流ひびきやすきかな　不死男

伊予真石という自然石は青く、お酒をことのほか愛された方にふさわしく、持参した小瓶のご酒を注ぎかけますと、深くコバルト色に冴えかえるさまが印象に深うございました。私はつたないすさびに先生の流れをくむある俳誌に所属していたのでございます。（渓流ひびき……）とされた句の心は奇しくもこの地にあのことがあっていらい、毎年訪れるたびひしと私をとらえて離さない景観なのでございます。高麗川のせせらぐ奥武蔵の自然が、（やすきかな）の結句に通うのでございましょう。

夫をこの地に失い傷ついた心が慰められるように思われ、ひそやかな感傷にとっぷり身を沈めるのでございます。

竹寺へのコースは子の権現の庫裏わきを（渡り廊下をくぐって）さらに尾根伝いに約二時間ほど飯能の方に下るのでございます。五月五日の雨竹会は有名でしゅんの筍飯が知られております。夫の最後の勤めとなりました学校のP・T・Aの皆さま、それに現の校長さんなど教職員の有志を加えまして、その時期には供養の登山をあれいらい恒例とされているように聞いております。このことは私ども遺族の全くかかわりのないことなのでございますが、ありがたいことに思っております。皆さまで陽気に歌などうたわれ、賑々しくお登りになられるお姿を想像いたします。萠える若葉の季節、訪れる多くのハイカーの群の中に夫にゆかりの皆さまを発見することは夫の魂魄にとりましてもどんなに慰めになることかと思われます。近ごろは奥さま方がグループでお登りになることも多く、教育地蔵の由来なぞ一向にご存知なくても、

「あっ、教育地蔵だわ、お賽銭をあげて拝みましょうね」

と明るく朗かな光景が見られます。気にもとめられない路傍にありながら、子の権現への道しるべの役割を果させていただき、大らかにこのようなことをおっしゃって、アルミ硬貨など投げ置かれる方もあるのでございます。

その教育地蔵の由来を物語ることはいぶせく切ない思いを秘める私にとりましては心の底にあるみそか事を突き上げられ、思わず涙に誘われることでございます。

なんとも私といたしましたことが、感傷に溺れ筆をすべらせまして、お恥しく存じます。どうかお許しくださいませ。

昭和四十九年十月二十八日、この日は月曜日でございましたが、夫は子の権現近くまで登り、目的地を目前にしながら路上に倒れたのでございます。「急性心停止」のため急逝いたしました。体調から申せば日曜日に少くとも心身を休ませており、

「今日は気分が良いよ、行ってくるからね」

と門口まで見送る私にそう申しました。二人の間にはまだ新婚気分に近いものが続いておりまして、お恥しいことでございますが、

「ここでいいよ、今朝は早かったからゆっくりおやすみ」

寝乱れの髪に優しく夫の手が触れたのを覚えております。

（今日は気分が良いよ）と申しましたことはいつにないことで、無自覚の間に夫は健康をつねに気づかっていたことに後から思い当るのでございます。

夫が先の連れあいを亡くしましたのは五年前、一男二

女を残されての死別でございました。それから足かけ四年人知れぬ苦労も多かったはずに思われます。苦節の時代が長うございました。昭和四十七年四月、ようやく校長に栄進、同窓同期中の遅咲きながら一陽来復の時を迎えました。夫自身の私との再婚、長女の結婚と相次ぎ慶事が重なったのでございます。下世話なことで恐れ入りますが、とりわけ私との結婚は聞くだにうとましい嗤きの話柄にさらされたように思われます。何々ミスのコンテストの流行する昨今でございますが、郷里新潟での娘時代、ふとしてそのようなことに推されましたことが、私の人生を狂わせ、ついに未通のまま、縁あって浜田とは初婚で結ばれたのでございます。遅すぎた女の幸せでございました。ただ俗に人並の幸せと呼ぶ以外のものではない日々が流れました。しかし、それは束の間の幸せとして夫の死に終止符をうたれたのでございます。

手にいく種類もの薬をのせ、私の用意したコップの水をふくみ呑み下しながら、

「すまないねぇ、私がこんなだからキミにはほんとうに悪いと思うよ」

夫のそうした気のつかいようはまだまだ後添えの私への距離をおくもので、かえって私を悲しませましたが、同時に一方ではかなり私への愛に無理をしているのでは、という懸念も兆しまして心の曇ることでございました。夫の職務はおどろくほど過密で、心を労するだけでなく、年齢相応に体を愛うことなどとうてい望み得ぬ内容のものでございました。若い職員に互して、しかも率先を絶対のものとする一途の勤めぶりに見受けました。

この年に入りましてからも、六月は関西への修学旅行、七月の那須高原、八月には下田臨海と夏季施設と呼ぶ行事が続きましたが、そのつど常用するたくさんの薬を携行する夫を見送っています。血圧降下剤、一目でそれとわかる赤い心臓薬など、一々説明もつかぬほどの数でございます。

「うむ、那須も茶臼岳まではきついねぇ、しかし、山登りは健康のバロメーターでもあるし、頑張らなくては、今年を終ればあと一回でおしまいさ」

今年は職業用と申しまして、退職年齢を明年にひかえながらキャラバンシューズを買いもとめております。

「いまさらでもないと思ったが、あれが良かった、山登りは足ごしらえが大切ということがよくわかったよ」

この場合、夫はすこぶる元気に帰宅しております。

「キミのおかげで若返ったのさ」

と言う夫はいじらしいほどのはしゃぎようでございました。

「それにしても、人生朝露のごとしだねぇ、果ないと思ったよ」

何かと思いましたら、この那須高原学園ではいつも大丸で「深山荘」と申すところで少憩するのだそうでござ

いますが、そこの主が病死したというのでございました。

「昨年は親爺さん健在だったんだが、挨拶にも出られず夏場を炬燵にしがみついていて、変だなと思ったんだが、今年行ってみると息子があいさつに学園に来てねぇ、昨年死んだと言うんだ、やはり癌だった、それに比べるとボクは元気でねぇ、先生方が心配してケーブルで弱い生徒といっしょにと言ってくれたんだが、キャラバンがそれでは泣くからねぇ」

なんでも夫の多年仕えた校長さんが服装はすべて一流を好まれたそうで、あやかったもののようでございました。

哀しいことに夫はそのご自慢のキャラバンシューズを履き、死地になろうとは知らず、その日の朝も出発したのでございました。

「今日は軽いよ、正丸峠から昨年は鎖場で往生して伊豆ケ岳へ登ったもんだが、今年は軽い、奥庭の散歩みたいなものですよ」

夫はこどもの遠足のようにいつにないはしゃぎようで、心なし心配が過ぎったのは虫の知らせでしようか。田端駅に七時の集合ということであの土手上の道に生徒たちの群れる中、夫を目撃していた方があり、

「あれが先生を見る最後になろうとは思いませんでしたねぇ、なにか生徒にしきりに話しかけている、そんなようすでした」

この話はふしぎに生々しく夫の姿を伝えるものに思われます。勤めの中の夫の風貌姿勢を他からご覧になって、どうであったか存じませんが、鮮明に夫のその場のようすが、私もよく知っている背景の中に浮んだのでございます。それが夫婦というものでございましようか。

「つねに生徒と共に」を信条として深い愛情をもってこどもたちに接していた。「穏やかな雰囲気の学校」「ひとりひとりの生徒が努力する学校」「誰もがお互を大切にしあえる学校」という理想を説き、みずからその範を示した。

これは叙勲申請に際しての「功績調書」の中に見える文字でございます。どなたがおまとめになったものか、おおむね美辞麗句の中に埋まっている夫が少しく可哀想に思われますが、生徒との対話につとめた夫の姿勢を伝えてくれる部分でございます。

……三年生の遠足に学年の担当教諭とともに生徒を引率し、埼玉県飯能市の子の権現百メートル下の山道を登山中、十一時二十分、突然路上に倒れ、教諭・生徒らに介助されたが、「急性心停止」のため急逝した。享年五十九歳。

そして調書は末尾をこう記して終っております。死をもって購われた叙位であり叙勲といえる経緯でございます。公務中の突然の死としてあまり例のないものでございました。調書はコピーを頂いております。仔細に読む

うちに次のような数行が発見されます。

昭和十年三月十五日、東京府豊島師範学校本科第一部卒業、在学中より国文学、書道、音楽等多方面にわたり研究を積み実力を備え、教職への素地を培い、特に音楽ではヴァイオリンをよくし、実力は趣味の域を越えるものがあった。

あっ、とこの部分に読み及んだとき、私は驚きました。夫について知らなかった一面を知らされたのでございます。ヴァイオリンを嗜むなど露ほども私の知らないことだったのでございます。やはり私は何も知ってはいなかったという口惜しさに悲しみの涙があふれるほどでございました。調書はあくまで事務的で、私の知る由もない過去を証し、説きおこして現在に至るものと理解はしていたのでございましたが、ヴァイオリンを弾く俊直というプロフィルに迫る部分があろうとは思わぬことでありました。

遺骸は夕刻になって学校に戻りました。急死の第一報からすでに数時間を経ておりました。検死、検案書などの手続に手間どったものでありましよう。校庭を静かに、静かに一周して宅に向ったと聞いております。ドラマチックにこうした演出はまたどなたによるものか、区内各校には継送の電話による知らせがあり、教育委員会からは教育長、指導室長など、校長会は代表して会長さんがお迎えくださったと聞いております。この遠足は慣例の全校遠足ということでございましたから、続々帰りつく教師、生徒、そして出迎えの父母が校庭に溢れており、夫の柩車をお迎え下さったのでございました。

地味に、地味に今日に至り、そのために出世も遅かった夫にとってこれは生あれば驚倒せんばかりの光景でございましたろう。

十一月九日、土曜日。宅の方の葬儀をほど経て、献花式という行事が学校の方で催されております。後任の校長さんの着任を待って行われたものです。遺影の前に参列するすべての方から菊花をお供えいただきました。嫡男寛和さんに伴いまして遺族席にあり、皆さまのお手厚い弔辞やら、ごあいさつを拝聴しながら健気を装うことに一生懸命でございました。学年主任の方の状況報告があり、夫の倒れた瞬間、介護と事後処理に駆け廻われたようすなど、逐一をはじめて承りました。子の権現の住持、亮映師のお骨折の多かったこともつぶさに伺ったのでございます。生徒代表のあいさつは生徒会長でございましたが、ボーイッシュな声の爽やかさに、涙腺をいたく刺激され、並いる背後の生徒席がかすむのを覚えました。今は亡き夫の使命に生き、身命をささげた尊さをこの瞬間にはじめて心にうけとめ得たように思います。控室にあてられた校長室の水槽に主を失ったらんちゅうが一尾淋しく遊弋していた姿が印象に深く、記憶をとど

めております。

浅見茶屋は石垣を築いた道路上にありました。手打うどんが名物として知られたお店でございます。川を隔て橋向うにわずか平坦部があり、駐車場になっておりました。ここまでは車が登って来れるのでございます。一つ、二つ木守りの実を残した柿の樹下に寛和さんが車を入れます。降魔橋はここからすぐであとは山道に入ります。川は権現川と呼ぶようでございました。（関東ふれあいの道）として県内十三のコースを設定し、奥武蔵に古刹を訪ねる道とされる起点は名栗小殿、終点は飯能市吾野、全長九・五粁の道程でございます。環境庁・埼玉県の名を連ねて標識がよく整備されていることに感心いたしました。

「甘酒でも戴いて、あとはゆっくりまいりましょう」

寛和さんが気をつかってくれます。浜田の子女がうちそろってはじめて、夫の殉職地を訪ねようとしておりました。実はこの時期まだ夫の死が殉職に該当するものかどうか、公務災害の認定は判定を見ておりませんでした。申請手続その他で有楽町の（地方公務員災害補償基金東京支部）と申すところへ足を運んだのはすべて私でございますが、九階にある関係のオフィスへはP・T・Aの皆さまも陳情請願にお運びを頂いたと伺っております。循環器系の疾患を持病とした夫の場合、該当の判定を下されますものやら、きわめて微妙とされていたのでございます。

それやこれやで現地への足の踏み入れもようやくこの日になったのでございます。夫の歩いた道をそのままたどりたい、これが私たち家族の願いでございました。

浅見茶屋の内儀は四児の母だそうですが、まだ若く話好きでした。亡夫の事故死についてもよく知っておりまして、深い同情の色を示しました。

「ここで小休止がございまして、ええ、これからがいよいよ登りですから……、たいていの学校がそうなさいます、生徒さんは買物を禁じられていますから、私どもの店にはかかわりのないようなものでございますが、先生方にお掛けになるようおすすめしております、お茶などさし上げるんですよ、そうあれが亡くなられた先生だと思いますが、このベンチに掛けられて、はい、そうそうこの値段表の字をお褒めになりましたよ」

「……」

「誰の書いた字かとおっしゃって、たまにお尋ねをうけますが、お目にとまるらしゅうございます、これは親戚のものの手だと申上げたんですの、ええ、お年齢のころが、多分校長先生でしょうよ、山の上の出来ごとでございましても、手前どもにもすぐ知れまして、おやーぁというわけでございました」。

変哲もない値段表が壁間に貼られていましたが、たしかにそれはもったいないような雄渾の手蹟でビールその他の価格が躍るように見えたのでございます。

「お母さん、おみ足だいじようぶですか」

順子さんが労わるように言われます。

「さ、行こうか、お母さんがよければ、あとは一息でしよう」

寛和さんが、甘酒のお代を支払われました。これまで歩いて来た、またこれから歩く道すがらの一木一草がその日夫の目に写ったもの、そしてお内儀の話に出た夫らしいものとの会話は心に銘じたい、そして私を母と呼んでくれる夫の子女の労わりは、こうしてそろって出かけて来たことに大きな意義を添えるものとして、結婚いらいはじめての熱い感動が胸に上るのでありました。私たちの結婚をむしろすすめたのはこの方たちであったと聞いておりますが、思いがけない夫の死に残されたものの心の通い路をひらいてくれたようでございます。皮肉なことでございました。

冬の陽がシルエットを斜めに、空の明るくなるところまで四人で辿りつきました。もう頂上も近いと思われる九十九折に息を休めました。やはり私が一番弱いようでした。ともすれば遅れがち、一息、一息苦しい登りで汗びっしょりでございました。

ふと、私の目にその時写ったものがございました。花束でございました。それもかなり枯れて赤味がかった厚物の菊花のように見えました。黄の厚物がこういう変化をすることは知っておりましたが、セロハン紙に包まれた切花もそうなるものとは存じませんでした。妻としての私の直感が走りました。（夫はこの場所で倒れたのではないか）という思いでございます。どなたかが夫のためお供えくださったものに違いないのでございます。

「ね、寛和さん、あれ」

「なにお母さん」

遠慮がちな（お母さん）をこの人はその時申しまして、小返えりして私の傍に立ち、

「ね、あれ」

心ない登山者が枯れ萎えた花束を無用のものと道の奥に放ったものでありましようか、

「ここかも知れませんね、これはそうですよ、もう頂上の近いこのあたり、そうでしよう、よく気がつきましたね」

私たちは確信をもって、佇みました。平凡な形容でございますが、熱い涙のこみ上げる思いでございました。

この場所には後に標柱を建てておりますが、あまりお気づきの方もないように思われます。

東京都北区立新町中学校三年生を校長引率のもとに遠足登山中子の山参道にて心急停止校長殉職よって地蔵尊を建立して供養せり

（当所より殉職せる地点は道丁約七〇米のところなり）

これは「教育地蔵尊」と刻まれた石塔部の塔身左側面に読みとれる刻字でございます。身にのう衣。袈裟をまとう僧形、左手に宝珠、右手に錫杖をもつありふれた立像のお姿でございます。石塔の基壇は玉石を組んだ基礎のさらに上に据えてありますから、全体では地蔵さまの頭頂まで二メートル余の高さになっております。末法思想のさかんだった平安の中期以降、地蔵信仰はとくに広まったものとか伺いました。死者を解脱の道へ導くお姿として一般化したものといわれます。

なお、石塔の背面には私事にわたりますが、建主として次のような刻字がございます。参考までに写しておきますと、

昭和五十一年春彼岸ニ付建之
東京都北区〇〇　〇丁目〇の〇
建主　妻女　浜田キヨ
　　長男　浜田寛和
　　子権現天竜寺五世亮映代
　　石工初代飯能市島崎二郎

このようでございます。夫の公務災害の認定をうけ、「殉職」の文字をようやく刻むことを許される、時を待っての建立でございました。殉職の現地が崩れやすい地盤でございましたので、住持の亮映師がこの場所を提供されたのでございます。西吾野駅からの自動車道として拓かれた車道の一隅でございました。

「鳥居を寄進させていただきましょう」

天竜寺の師の御坊はそう仰云ってでございましたが、やがてそれも実現いたしました。朱塗りの山王鳥居という珍しい形式のものでございまして、明神形式の上に破風形の合掌造を加えたものでございます。日吉鳥居、合掌鳥居などと別名もある形式と伺っております。神仏混淆の姿をとどめる山寺の景観としてそれは必要なものであったのでございましょう。ありがたく素直にうけとっております。石工島崎二郎の名は御坊のお言いつけで格安の奉仕をした証しでありましょう。

仏にて神にて時雨いします　地蔵尊

地蔵尊は俳号、姓を松原と仰云る俳人の句でございますが、夫の身代りである地蔵尊が生々しい季節感をもって時雨にあう日の淋しさを思うことでございます。

私はかつて、娘時代津和野を訪れたことがございます。もちろんただ今のように観光の津和野としてクローズアップされ、女子学生たちの殺到する趣とは違いまして、戦中のことでございました。寺名の記憶もいまは定かでございませんが、（森林太郎墓）を詣でております。郷

里石州のこの地に分骨されたお墓と伺い、その通りに礼拝したのでございますが、同寺には（坂崎出羽守）の墓もあるなどのロマンを発見もいたしております。多分に文学少女の時代をもつ者としての名残りでございましょう。有名な鷗外先生の遺言の通りの墓石を見て感動を覚えました。

余ハ石見ノ人森林太郎トシテ死セント欲ス
（略）墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル（仮名デモ好イヨ）可ラス

という遺言はあまりにも知られたものでございますが、清々しく、潔よいものと娘心に思っておりましたからでございましょう。ご法名の院殿大居士を拒否されているのでございます。大げさでお大名なみのご法名はどこにも刻まれておりません。深い感動でございました。

わが夫の法名は

教専院観光俊清居士

とこのように墓石に彫られております。私のとやかく申し上げることではないように心得ておりますが、なんとも拙い、拙い法名に思われ悲しんでおります。教専、観光とあるあたりは、はっきり申し上げて厭でございます。教職一途に生きたから教専、菩提寺の観明寺の一字をいただいて観光なぞ、なんとかお知恵のなかったものでしょうか。教育地蔵尊の方の右側面にもかように彫られております。俗名浜田俊直は精一杯生きて、たまたま子の権現に登り果てたためあわれ、哀れと思うフシを私は胸に抱くのでございます。観光名所として経営熱心な五世の御坊も悪戯なお方でございますね。

ヴァイオリンを弾き、将来豊かな人生を願いとして多感に生きた青年浜田俊直は一体どこへ行ってしまったのでしょう。

落雷に焼亡した本堂、大師堂の再建落慶の行事は昭和五十八年十月二十三日に盛大を見たようでございます。お招きをいただいておりましたが、うかがうことができませんでした。俊直の命日の前後という慣いで今年は落慶の直後の十月三十日に登っております。

鉄筋再建の結構はまことにきらびやかで、山上に突如浄土のひらける趣に拝しました。県知事さんの筆になる記念碑の巨石もただ感じ入る外はないものでありました。亮映師につつしみご祝辞を申しあげ、水屋脇を右に、石段を登りまして、経が峰の鐘撞き堂に至り、奥多摩、奥武蔵の山々を展望して引取ったことでございました。

いま、私はひたすら回向の明け暮れを過しております。俊直の旧宅の裏手、方丈ほどの住居を与えられ、母屋の方から聞えてくる寛和さんのお子たちの声を聞き、古風に、しかし私なりの幸せに生きております。

拙い教育地蔵尊由来の筆をこのへんで擱かせていただきます。なにとぞお許しくださいませ。

遠足

茂里英介

小原は三年ぶりで秩父鉄道の乗客になった。午後一時半、客車の中は閑散としていた。大きな風呂敷包みを背負ったおばさんの姿が目立つ。池袋方面へ商いに行った帰りであろうか。さきほど、東上線の寄居で乗り換え、今日の講演先である秩父市へ向っていた。車窓から眺める低い山なみは、秋から冬への変化をみせて色彩が豊かであった。

彼は三年前、ちょうどこの季節、これから通過しようとしている長瀞へ、夜間中学の生徒を引率して遠足にきたことを思い出していた。

『そうだ、今日の講演は長瀞の遠足をまくらに話しはじめよう。おれがおとなの中学生の教育にどれほど情熱をもやしていたかを少しオーバーに喋ってやろう』

今日の演題は「教育の今日的課題」であった。何を喋ってもいいというのが主催者との約束で、彼はほとんど具体的な構想はもっていなかった。

夜間中学は全国にもそうたくさんはないので、その存在を知っている人は少ない。中学二部とも呼ばれているが、法的に公認されているわけではなかった。しかし、公立の中学校として夜間に授業が行われ、専任の教員も配置されている。三年間通学すれば普通の中学校と全く同じ卒業証書が渡されていた。開始されて三十年になろうとしているが、制度的には何も変っていなかった。

小原は夜間中学の存在を知ると、いちはやく転勤していった。それまでは普通の中学校の教員であった。

夜、五時半からの授業であった。彼はそれまでのありあまる昼間の時間を有効に活用し始めた。あらゆる会合に顔を出し、必ず立って喋るようにし、名前と顔を各方面に売り込むよう努力した。そして四十五歳を節目とし、退職する準備をしていったのである。退職後の肩書は、教育評論家であった。在職時から講演や座談会、放送、原稿依頼などでかなりの収入を得ていたし、退職後の見

通しもはやくからついていた。

電車が長瀞の駅に止った。プラットホームに多少の見憶えがあったが、なつかしむという情緒的な感傷は彼にはみじんもなかった。彼は夜間中学を利用しただけであり、おじさん、おばさん、知恵遅れの青年や娘を永い間めんどうみて来たことを思い出したくもなかったのである。退職して、評論家として世に出るまでのお客さまだと思ってつき合っていただけである。生徒の中にはいい先生だと感じて近づいて来た者がいたが、彼にはわずらわしいだけであった。

彼は長瀞の駅舎から眼を離すと、在職当時のいまわしい記憶をふりはらうように眼を閉じた。

長瀞への遠足当日は秋晴れで、冷めたい風もさして気にならないほどであった。

池袋の東上線の乗車券販売機の前で五名程生徒の姿をみつけた小原有一は「おはよう！」と背後から声をかけた。当日は現地長瀞集合にしてあり、詳細な地図や注意がきが渡され、長い時間をついやし、事前の指導連絡を繰りかえしていた。

生徒たち、といっても三十台、四十台の男性、女性、二十台の若者などであり、一見なんのグループかわからないような奇妙な団体であった。

行き先の切符を買うことで相談をしているのだが、駅名と運賃をみても目的地の駅名がみつからないらしく、うろうろと顔を見合わせていた。

「一番近いところを買って、乗り越し料金を払うのがやっぱりいいや、遠いところまで買ったら損するぞ」

彼らの一人が大声で提案し、他の者がいっせいに賛成すると、八十円の切符を買うべく行列した。機械はたくさん並んでいるが、最初の一人が使った機械で買わないと不安であるらしかった。日曜日の九時は改札口付近の人出はすくなかった。通りがかりにこの生徒たちの行動に不自然さを感じ、けげんそうに眺めて通り過ぎる人もあった。

小原は黙って眺めていたが、目的地までの切符を買うと一人で改札口へいった。彼はホームでも車内でも、生徒たちから離れていようともくろんでいた。そして、やつらのめんどうをみるのはもうご免こうむりたいものだと思うのである。

夜間中学の生徒の平均年令は三十五歳位で、最高年齢者は五十歳を越えている。ほとんど小学校一年か二年で学校へ行かなくなり、従って字が読めない、書けないで何年も、何十年も悩み続けていた人々であった。せめて週刊誌が読めるように、テレビに出る字ぐらいは読めるようになりたいというのが、入学動機の大きな部分を占めていた。

長瀞の遠足の参加生徒は生徒十五名、引率教員五名の計二十名であった。生徒たちは平日仕事をもっているので日曜日の実施となったが、生徒は一家の主婦であったり、子供の父親であったりするので、参加生徒はすくなかった。

池袋発の電車にはハイキングに行く服装の若い男女や、釣師の姿がぽつりぽつりとみられるぐらいで、ゆったりと坐ることができた。そういう乗客たちの会話や動作はいきいきしていて眺めていても快よかった。これから目的地で展開される楽しい時間への期待がそうさせているのだろう。

生徒たちもみんな一番安い切符を買い終ったらしく、改札を通って電車に乗り込んだようである。小原は遠くからそれを確めていた。長瀞の川原でバーベキューをやり、とん汁を作る予定なので、各自の持物は大きかった。おそらく誰かが大きな鍋をリュックサックの中にいれているだろう。彼らは大きな声でわめきながら荷物を整理しおわると、腰をおろした。中国からの引揚者が一人いた。日本語が全く通じないのだが、手を振り振り、ゆっくりと語りかけられている風景もみられた。

同僚の姿をさがしてみたが見当らなかった。このまえの電車で行ったにちがいないと思い、小原はさして気にもとめなかった。むしろ、しばらく、ゆっくりと本が読めると思った。彼の荷物は本が二冊だけであった。

電車が動き出したので、小原は本を開げようとしていたら、沢田という青年が、「お早うございます」と元気よく声をかけて、小原の隣りに腰をおろした。この生徒は二十五歳で、二年前に高校卒の女性と結婚したが、字が読めないのが妻にばれてしまい、うとまれはじめたので、勉強させてくれとやって来たのが三ケ月前であった。もう小学校低学年の国語の本は読めるようになった。

沢田は話し好きで、小原のところへ来ては、生徒たちの間の情報をよく提供してくれていた。

「先生、どうしてみんなのいるところへ行かないの」

少し知恵遅れもあるのか、口調が幼児っぽい。

「お前らのところはうるさくっていやだね。女のタレントの話しかしねえじゃないか」

「それもそうだね。先生、今日は遠足っていうのにどうして歩かないの、少し歩いた方が楽しいよ」

「そんなことは分っているよ。しかし生徒たちの体力に差があり過ぎるから無理だよ。十五歳もいれば、五十過ぎのおばさんもいるんじゃ、同じコースの山歩きなんぞできるわけがねえだろう」

「それじゃ、駅から川原までぶらりぶらり散歩するのがいいところなんだね」

「そうさ。第一、体育の授業みろや、三世代一緒に何ができるんだ。走るのはダメ、バスケットはきつすぎる、体操は腰がまわらない、体育の先生は泣いてるぜ」

「うん、そうか」

沢田はいまさら気づいたようにうなづいてみせた。

小原はわずらわしさを感じ、もう、あっちへ行ってくれ、といいたかった。沢田にはそんな相手の気持ちを読みとれるはずもなかった。彼は小原の方へ身を寄せるようにして、耳に口を近づけて話しはじめた。

「ね、ね、吉川さんの話、知ってる？」

「いや、聞いてないよ。なんだね」

「吉川さん、かわいそう。無断欠勤を続けて、成績を落したのはいいんだけど、やりすぎてくびになりそうなんだって」

「えっ、無断欠勤！、なんでまた、ほかに方法はなかったのか。今日は来てるの？」

「最初、参加するってたのしみにしていたけど、遠足どころじゃないんですね」

吉川は四ケ月ほどまえに、字が読めないといって入学してきた三十六歳になる男性で妻子があった。清掃会社でまじめに働いていた。ごみを集める車に乗っているのである。人望もあり、勤務ぶりがよかったので、係長になるだろうという話が仲間うちに広がっていた。係長になれば、配車とか、予定表、伝票の整理など、机上の仕事が加ってくる。吉川は入社時の履歴書は妻に書かせたものを使っていたし、仲間との深い交際もわざと避けてきた。彼が文盲だと気づいている者は未だいないのだろう。係長に昇格すればそれが周囲にばれてしまい、会社にもいられなくなる。彼の現在の読み書きの力は小学校の低学年程度にはなっている。しかし、人名漢字や、伝票整理はとても無理で、新聞を読むのもすんなりとはいかなかった。

沢田はおのれの情報で、小原がどんな反応を示すか興味があるようで、さぐる目つきになっていた。

「なにかいい方法はなかったのかなあ」

小原はじっとみつめる青年から、窓外へ顔をそらしてつぶやいた。吉川にしてやれることは何もなかった。無断欠勤で勤務成績を落せば係長にならず、これまで通り車に乗ってごみを集める作業をしていればすむという単純な結論と、それを実行に移した吉川の苦境はよく理解できた。他に方法は、と問われても小原は答ができなかったろう。あいつがそれでいいというのなら、放っておいてやるよりしょうがない。

「よし、わかった。吉川に会ったら励ましてやろう。おまえもがんばれよ、ひとごとじゃないだろう」

「そうですね、ぼくもがんばらなくちゃあ」

吉川の話をしたら気がすんだらしく、みんなのいるところへ戻っていった。

車窓からの眺めは郊外へ移っていた。小原は再び本を開こうとしているところへ、思いがけず、ずっと先頭の車輛からこちらに向って進んでくる同僚の姿を発見した。

今日の遠足の引率責任者になっている東海林初子教諭であった。六十歳になろうとしている彼女は夜間中学発足当時からの教員だった。夜間中学は校長と教頭だけは昼間の中学と兼任で、他はすべて夜だけの職員だった。今日この両方とも不参加で、彼女が校長に代っての責任者である。遠足の計画や雑務など一切、他の四名の男性教員から押しつけられている。

長瀞の川原で、何かつくって食べる遠足は彼女の発案だった。野外調理は、生徒の中に家庭の主婦三名、娘が三名もいるので、教師が教えることは何もなかった。

「小原先生、おはようございます。三人の先生と、残りの生徒は前の電車で出発しております。私はひと電車待って、この電車にしました。全員そろっています。改札を出たところで待っているそうです」

「じゃあ、なんとか現地に無事集合できそうですね」

「だいじょうぶと思います。ところで小原先生、池袋の切符売場ではどうでした、長瀞まで切符買いましたか、みんな」

「いや、八十円の切符で乗越して駅で精算だそうです」

「やっぱり、あれだけ教えといたのにねえ、精算に時間がかかりますね」

彼女は吊り革に両手をあずけて、すわろうとはしなかった。彼女は先頭車輛からずっと歩いて、生徒の頭数を数え、小原の姿を確めて、全員乗車したことを確認したかったのだろう。それじゃあ、というと、元きた方向へ戻っていった。登山でもするような服装はすこしオーバーだなあと、小原は苦笑して、彼女の後姿を眺めた。

目的地の改札口を出たところには、ひと電車まえに乗った数名のグループが待っていた。同僚の三人も退屈そうに立っている。精算の窓口に一列に並んで、八十円の切符をさし出していた。誰かが一括して切符を集め、まとめて精算しようとはしないのである。金銭的なことは誰も信用しないという空気がある。釣銭の計算ができない者が多いからであろうか。小原は知らん顔をして、彼らの列を素通りして外へ出た。

駅から荒川の上流へハイキングに行く若者たちの姿が続いていた。土産物店はもうほとんど店を開けて、通行人に声をかけていた。

生徒たちの服装はさまざまで、登山スタイルもあり、昨夜学校へ来たときと同じ服装の者もいた。女性は買物にでも行くスタイルで、両手に荷物をさげている。年令の近い者同志が、二人、三人と寄りそって出発した。まさか、これが中学校の遠足とは誰も気付くはずはなかった。

小原は最後尾をぶらぶらついて行った。先頭はもちろん責任者の東海林であった。五十メートルほど先を歩いている。

沢田は土産物をのぞいて歩き、一人だけ遅れがちであ

った。

「おい、土産は帰り道で買えよ、荷物になるぞ」

「先生、ちょっと待って」

沢田は一軒の店へとびこんでしまった。小原は彼を残して行くわけにもいかず、だいぶ前方へ行ってしまった人影を気にしながら店の前に立って待つことにした。

沢田のどなるような大声に、小原は、何事かと店の中をのぞいてみた。沢田は一メートル程の木刀を手にして値段をまけろといっているのだ。彼の目付はけわしく、口調は、あの幼児っぽさはみじんもなく、やくざのようなことばづかいだ。

「沢田、どうしたんだ」

小原は一歩店にふみこんでいった。

沢田はちらっと小原の方をふり返ったが、

「なんでもないんですよ。おばさんよお、どうしても値引きはできねえっていうんだなあ、おやじがいるんだろう、おやじを呼べよ」

「用達しに行って留守ですよ」

店番の年寄りは物の怪でも眺める態で沢田を相手にしている。

彼は、しようがねえや、買ってやらあ、と荒っぽくいうと千円札を折ったままで、老婆に向って投げた。

なにがしかの釣銭を、恐る恐る彼に差し出すと、

「ありがとうよ」と口の中でいうと離れて行った。

沢田は掌に受けたバラ銭を数えることもせず、ポケットに押しこむと、店先に立っていた小原を無視して、木刀を振り振り仲間のあとを追った。

小原は急ぎあしで列のうしろに追いつくと、まだ木刀を振ってたのしそうにしている沢田に、

「さっきはどうしたんだ。あのおばあさんがかわいそうだったぞ」

沢田は、えっ、といかにもとぼけた顔で小原を振り向いたが、

「ああ、あれですか、なんでもないんですよ。買物のときは一発おどして値切るんです。ずっとまえに釣銭をごまかされて、友だちにばか扱いされたことがあるんですよ。それ以来いっしょうけんめい計算を習ってるんですが、未だだめです。知らない店の人間は信用できないし、相手になめられないようにしないと、またいつ金をごまかされるかも知れやしない」

沢田はもうこの話はいいだろうという感じで、あしを速めて、列の中央へ進んでいった。

川原に到着した頃は昼に近く、川原で遊ぶようなこともなく、早速野外調理の準備にかかった。家族連れのハイカーの姿もぽつぽつみえはじめた。巨岩の上にレジャーシートを敷き、持参した物を展げる家族もあった。

男の生徒たちは、割りあてで運んだ荷物を女たちの傍に放り出すと、さっと連れ立って岩のかげにかくれた。

間もなく、岩かげから細い煙があがりはじめた。引率教師に遠慮して、かくれて煙草をすっているつもりなのだろう。学校には職員室に喫煙コーナーを設けてある。生徒はそこ以外の場所では禁煙であった。

小原は女性たちのバーベキューの準備を、すこし離れた石の上に腰をおろして眺めていた。中国からの引揚生徒が鮮かなリーダーぶりで、彼の注意を惹いた。五十歳に近く、中国語の通じない仲間たちに混って何を考えているのか、彼には想像もできなかった。

東海林がそばへやってきて、小原に話しかけた。

「果して今日は食べられるものができますかね」

彼女たちはやっと小石を並べ終って携帯燃料に火をつけた。

「どうですかねえ、ほんとのことといって、ご免こうむりたいな、連中のお遊びの相手は」

「でも、そういわずにがまんして食べてやってくださいな。小原先生は今日は手ぶらでしょ」

東海林は小原が本二冊しか持ってないのを承知しながら、改めて、それを確めるように、彼の手許をみた。

そこへ同僚の佐藤教諭がぶらっとやってきた。

「今日の遠足は団体扱いでなくて助かったよ」

とひとりごとのように話しかけてきた。

佐藤はある大学院の博士課程を修了している学者であった。昼間の時間を学究生活で過している。身分は正規の教諭で年金も退職金も小原と全く同じように約束されている。

佐藤はこの夏の林間学校のとき輸送係をやり、団券を購入して栃木の方へ生徒を引率したときのことをいっているのである。土、日の一泊の林間学校だが、昼間の中学の間に割りこませてもらって実施したのである。

その時は生徒が二十一名で引率者七名、計二十八名で電車で現地へ向った。出発駅の改札口でまず足どめをくった。佐藤と駅員がはげしく口論していたことは小原もよく記憶している。駅員は、「これが中学生か」と、眼前にたむろしている生徒たちを指さしている。年令、服装が異様に映ったのである。やがて若い駅員は駅長室にかけこんで駅長を引っ張ってきた。駅長はおだやかな顔で佐藤と話し合い、若い駅員に説明してくれていた。

若い駅員は生徒たちが改札口を通過するのに、人員の確認もせず、顔をそむけて、全員通りすぎるのを待っていた。目的地の駅を団券で通ろうとしたときも足どめをくって、二十数名が、不審げに眺めて通る客たちの視線にさらされていた。全く出発駅と同じ光景が展開されていたのである。生徒たちはおとなしくことの成りゆきを見守っていた。

「団券のときの輸送係は引き受けるものじゃないわ」

東海林がうなづいてみせた。

「今日個人切符で、教員は助かったけど、駅の精算係は

ひどい目にあったね。八十円買って乗り越しがあんなにいてはねえ」

佐藤も乗り越しの件は知っていたらしい。

「ところで佐藤先生は大学院の研究も終りでしょう。論文集はどうしました？」

小原は彼の近い将来の見通しについてさぐりをいれてみた。大学の講師か短大などに勤めてもらえばお互いに好都合という思惑があった。

「えっ、なんとかまとめました。教授も心配してくれているんですが、女子の短大ぐらいしか口がないようで」

「じゃあ、間もなくこの生徒たちともお別れですね」

「そういけばいいんですがねえ」

東海林は黙って二人のやりとりを聞いていたが、

「お二人いなくなったら淋しくなるわ。小原先生も評論の方へご転身でしょう」

「私の方は失業してしまうので、これからどうやってくっていこうかと」

彼女は大きくうなづいてみせてから、急に思いついたように、

「そうだ、ご相談しなくてはいけないことがあるわ。お酒のこと。男の人が水筒にいれてもってきているようですね。連中の内緒話を小耳にはさんでしまって」

「困ったねえ、持ってきた奴の見当はついているが、どうしますか」

佐藤は小原の意見はという感じで、小原の発言を求めた。

「事前指導ではっきり禁止したことだから、対策は二つしかないでしょう。連中がかくれて飲むのを見て見ないふり、つまり黙認か、約束通り、連中の持物検査をして酒類をとりあげ、池袋で解散するときに返えしてやる、このどちらかでしょう」

小原は他の二名の教員も入れて、五名で相談した方がいいなあと思ったが、酒のことがそんな重大事だという認識は彼になかった。飲みたい奴には飲ませてやれ、という考えだ。東海林はそんないいかげんなことではすまされない性格であった。彼女はいった。

「連中はこんなことをいってますよ。顔の赤くなる奴は飲ませるな。その代り、帰りの電車で飲め、池袋へつく頃赤くなるのはかまわねえや、だって。池袋で一杯やって帰る相談までして」

「しょうがねえ奴らだ、もっとも、連中の酒飲ませろは今始ったことじゃないが」

佐藤は彼女に同調して、最後に、世話をやかせやがってと吐き捨てるようにつぶやいた。

野外調理の方は準備が進んで、金串にさした野菜や肉からかすかに煙が立っていた。華やいだ嬌声が次から次と起り、毎日の世帯の苦労を忘れられるひとときを愉んでいることがわかる。大きな鍋もかけられ、とん汁もや

がてできあがるだろう。男の生徒たちは早くも手を出して、火にあぶったものを口にいれ、女たちにしかられたりしていた。

飲酒と喫煙のことはどの夜間中学でも悩みの種で、学校によって対応はまちまちであった。絶対に許さんと簡単に結論づけて厳しくやっているところもあると聞いているが、小原の学校では生徒に対する同情論があり、また、彼のように、こんなことは適当に考えておけばという放任説もあって明確な結論は出してない。

生徒たちは全員が水筒持参で、都会の水道の水なり、お茶なりをつめてくることになっている。とん汁用の水も、東海林の指示で、誰かが背負ってきているはずだった。

水筒に酒をいれてきていると疑われているのは遠峰という十七歳の少年で、登校拒否児で小学校へ三年位しか行ってなかった。年輩者にかわいがられて元気になり、最近は変に調子づき、教師に反抗的なところもみられた。中年者と行動を共にし、煙草も酒もかなりのものになっていた。

生徒の中には川岸に降りて、きれいな水の流れに手をさしいれたり、顔をあげて、美しく紅葉した山々を眺める者もあった。小原はバーベキューさわぎをしりめに、川へおりて行った。

浅瀬の石から石へ跳んで、対岸へ渡り、薄暗い樹木の間の狭い小径に足をふみいれてみた。前方を若い男女が腕を組んで、ためらうようすもなく進んでいく。ハイキングコースになっているのだろう。小原はすぐひき返すつもりでゆっくり黄色い落葉の感触をたしかめていた。

石ころの上の昼食会はどうなっているかと、小原は川を背に戻ってみると、食事は車座になって始っていた。主食はたいたご飯を各自持参になっていた。

「小原先生、どうぞ、ここへ」

すばやく小原に気付いた武林というおばさん生徒が手招きし、からだをずらし、敷物の上を手で叩いて、ごみを払った。ありがとう、と小原は腰をおろして車座の連中の顔を順に眺めていった。男の連中はもうだいぶ酒がはいっているようで、喋る声もいつもより大きくなっている。

「先生、ご飯ないんでしょう」

武林は白いにぎりめしを銀色の包装紙にのせ、小原にさしだし、同じ銀色の皿に串にさしたものを前に置いた。武林は四年がかりで自動車の免許状をとったことで有名で、軽自動車で通学している。子供の保育園や幼稚園の送り迎えのための免許取得とか。

「男の連中はだいぶ酒をのんでるようだね」

小原は武林に小声できいた。

「どっか遠くの岩かげに水筒もって、かくれて酒盛をしてきたみたいですよ。東海林先生が気がついて、あわて

て水筒をとりあげたときはもう空っぽだったんです」

「岩かげであわてて飲むなんて、無茶もいいところだ」

「でも、未だ誰かの水筒にはっているらしいです」

「誰のかわからないのかね。解散するまであずかっておいた方がいいんだ」

「どうもここにはないみたいです。どこかの岩のかげにでもかくしているようです」

引率の教員は四人かたまって、それぞれ適当に料理やとん汁をごちそうになっている。

人出は時間を追ってふえ続けている。大きくたいらな岩の上には家族連れが弁当を展げて談笑し、それにあきてしまった子供たちは岩の間を跳びまわって遊んでいる。

武林はそんな光景で自分の子供を想い出したのか、

「こんどの日曜日、うちの子をどこかドライブに連ってやらなくちゃあ」

しんみりした調子でいうと、小原を振り返った。

年齢差の大きい男たちが四人立ちあがった。手に金串を一本ずつ握っている。

「どこへ行くの、お酒はだめよ」

東海林がどなりながら立ちあがった。沢田が、

「お散歩です。お腹いっぱいになったので少し運動しなくちゃあ、ねえ、みんな」

散歩、散歩、とあとの三人が唱和した。

「そんな長い串をもって散歩ですか」

「そうです。水の流れのほとりで食べたいんです」

沢田は東海林をからかうようにいい捨てると、おい、行こうぜ、と三人に声をかけた。

二十まえの女生徒が立つと、四人の後姿を眼で追い、

「あの人たちどこへ水筒かくしたのかしら、わたしもいっぱいやりたいわ」

「ばかいうんじゃありません」

東海林がその生徒の上衣を引っぱり、一緒に腰をおろした。

秩父市の講演会場へは二人の青年が車で駅に出迎え、送ってくれた。小原が会場へ着いたとき、地元の合唱団が出演していたが、すぐ終り、彼の出番だった。会場の正面の大きな紙に、小原有一とかかれているのを満足げにいちべつし、一つだけステージにおかれた椅子にかけた。主催者の文化サークル代表の講師紹介であった。

「小原先生は、現在、教育界の第一線のあらゆる分野にご活躍中で、ご無理をお願いしてお越しいただきました。特に、ラジオ、テレビの教育電話相談などで有名でございます。非行問題研究所の理事などたくさんの肩書きをおもちで、この方面の第一人者として今日は……」

（了）

年寄りの冷ミステリー

いつか来た路

山本儀一

暮れなずむ空の下で、まあるいオレンヂ色の装飾灯が舗道に黄昏の光を流していた。

山田氏は駅前のストアで求めた品の紙袋を携げて、郊外の小さな盛り場をゆったりとした足どりで通りぬけた。穏かな横顔には時おり微笑さえうかんでいる。

住宅街の防犯灯が周囲を鮮やかな若葉の色で装っている角へくると、山田氏は立ち止まって目を配る。たしか、あの角にはポストのある煙草屋があったっけ。

セブンスターを買って千円札を崩した。まだ時計の針が見える明かるさだった。山田氏は店の横で一服つけ、旧家の主のように店先に坐っている皺の深い老婆の顔を見ていた。

花の香りが漂ってくる生垣の横丁を、ゆっくり歩いた。部長から来月の異動で課長昇進の内示を受けたことを、麻里子にだけは黙っていられなかった。今宵は二人だけでお祝のパーティを開くことになっている。

見覚えのある二階建の古いアパートだ。昼の月のような裸電球の光の下で「第三希望荘」の外階段の影が身をすくめている。

「すてきなプレゼントを用意してあるのよ。七時半までにはいらしてね。途中で飲んできちゃいや。二人だけで祝杯あげるんだから」

山田氏は麻里子の言葉をまた思い起した。情事のあと二三度送ってきたことがある。部屋には上げず、二階の廊下の柵に寄って少女のように胸の前で手を振り、さっと戸口に隠れてしまう麻里子だった。滑りどめのイボが光っている鉄板を、山田氏は静かに踏んだ。二番目のドアだ。頬がほころびる。

ノブを回して、押しても引いても動かない。ブザーを押してみた。鳴らない。茶目気を出したな。山田氏は苦笑してドアに耳をつけた。人の気配がする。耳を疑った。浪声に似た女の息づかいである。戸口の差込みカードに

「加山」とあるのは麻里子の姓ではない。生活費を安く上げるために、同郷の知人と同居しているのだ。二人だけのパーティが急に決まったのは、同居の女性が法事で帰省している留守を狙ったからである。麻里子は離婚歴のあるOLだが、万事に地味でつましく、小心な山田氏にとっては恰好な情人であったが、今宵は極めて不愉快な行き違いとなったらしい。麻里子はどこへ行ってしまったのだ。

ノックした。悦楽を中断された女の呪いの呟きがもれている。山田氏は続けてノックした。そんな事は後でゆっくりやれ。まだ宵の口じゃないか。「どなた」と苛立った声がして、覗き穴の色あせた紅い布がめくれ、とげとげしい女の目。

「鈴木麻里子さんはおいでしようか」

「あんた、いったいだあれ。そんな名前の人きいたこともない。失礼しちゃうわ」

目の前を、くすんだ布が意地悪く覆った。山田氏は頭にカッと血が上るのを感じながら、階段の鉄板を音立ててかけおりた。まさか、これが麻里子の〝すてきなプレゼント〟ではあるまいが、どこか歯車が狂ってしまった。傷心の山田氏は再び花の香りのする暗い生垣の小路を、ひどく惨めな気分で戻った。

商店街へ出て赤電話が目につくと、山田氏は立ちどまった。麻里子がまだ会社にいるとは思えないが、ひょっとしたら緊急の所用でもあって、警備員に伝言を托してあるかもしれない。

ダイヤルを回し終えぬうちに、「この番号はただ今使用されておりません……」二十年も勤務した会社の電話番号を間違えるなんて、バカな。山田氏はこんどは慎重に回しはじめる……「この番号は……」またあの冷やかな声。何ということだ。今まで裏切られた怒りに似た感情で浸されていた心の中に、不気味な恐怖がのたうち始めた。

まだ九時前だ。妻と二人の子供たちは、自分の帰宅を待ちわびているだろう。地面にしゃんと立っていられるように、ここで確かめておかなくては。

「はい。……山田でございます」

「ああ、おれだ。子供たちはまだ起きてるか。今日は同僚の送別会があって遅くなった。二次会は遠慮してこれから帰るからな」

「もしもし、どちらへお掛けでしようか。こちらは小山田でございますが」

「バカッ。何をとぼけているんだ。こっちはマジメなんだ。たいへんなんだよ」

山田氏は怒鳴りつけたつもりだったが、最後の言葉はほとんど泣声になっていた。妻の声が別人のように乾いてとり澄していた。いや、あれは妻ではなかった。電話機を置く音が非情に響いた。もう一度かけ直す勇気はな

かった。へなへなと崩れ込みそうになる膝を、やっとのことで持ちこたえた。

つい先に見つけたスタンドバーに飛びこんだ。水割りをダブルで続けて三杯のんで、山田氏はやっと人心地がついた。身体がゾクゾクする。そうだ、きっと悪い夢を見ているのだ。うろんげにちらちらと自分を眺めるバーテンの眼の色を読んで、山田氏はふらつく足どりで通りへ出た。

駅前広場の周縁はブロックで囲った植込みになっていて、ベンチが置いてあった。山田氏は水銀灯の下に腰をおろした。携げていた紙袋がなくなっているのに気づいたが、もうどうでもよかった。電車が着くたびに、家路を急ぐ人影で広場は華やぐ。やがて放射状の道路に人影は吸いこまれ、空虚な地面が拡がる。家に帰りたいと思った。だが帰るのが怖い。

山田吾郎はここに実在している。丸三機械工業営業第二課、来月は課長になるはずの、実直に仕事一筋に勤めてきた四十二才の男。家には妻房子三十七才。口やかましいが良き妻だ。長女めぐみ中三受験勉強中。長男彰中一野球少年。鈴木麻里子のことはやめておく。おれは独りぼっちではないんだ。

山田氏は最前から駅前交番の赤い灯を見つめていた。あそこへ行って、ボクの家へ連れてってと頼むのか。とんだお笑い草だ。山田氏は自分をこの悪夢の世界から抜き出して、家族に引き渡してもらいたいのである。そのためには、自分の厳然たる存在を誰かに確認させなければならない。

植込みの茂みを飛び越して、制服の男が二人急ぎ足でやってくる。巡査だ。何か事件でもあって現場へ急行するところか。山田氏は身構えた。ベンチの前を先に立って走り過ぎようとする若い巡査の腰に、いきなりしがみつく。よろめいた巡査は身体をひねって山田氏を投げ飛ばす。すごい早業。頼もしい警官だ。山田氏は植込みの縁に腰から落ちた。尾骶骨をしたたか打って息がつまった。激痛が背骨を走って脳天まで貫く。動けなかった。

「よっぱらいか」

「酒癖の悪いヤッだ。行きましょう。こんな手合に構ちゃいられない」

年配の巡査はいくらか気がかりらしく、山田氏の顔をまじまじと覗きこんだ。

「いくらお年寄りだって、乱暴すれば拘引しますよ。さあ、気をつけてお家へお帰りなさい」

優しい警官だ。山田氏は唇を動かすが、声が出ない。あわただしく遠ざかって行く靴音をききながら、山田氏は意識を失った。それは尾骶骨の痛みのためではなかった。

ゴットファザー

明日のレースの検討をひとまず終えて、加茂氏は坐を立った。ガラス戸をあけ、冷々とした夜気を大きく吸って伸びをした。見えない月が、葉末に光っている。独り暮しの老人には虫の声に溺れてしまいそうな夜だ。

戸を締めようとして、濡縁にうずくまっている茶色の猫を見つけた。シッと追ってみたが知らん顔している。足の先で押しやると、声を立てずに啼く表情をしたまま、動こうとしない。人なつこいのか。それとも病気なのか。よく見ると案外かわいい顔をした若猫であった。餌をやらなければ居つくこともあるまいと思って、戸締りをして寝た。

床に入ってから眼をとじて、さき程の検討をあれこれと反芻する。加茂氏にとってはこの前夜の夢想が、何よりの娯しみであった。

夜更けての電話で目がさめた。

「もしもし、加茂さんでいらっしゃいますか」若い女の声である。「あたくし、オオタタネコと申しますが、お心にとめておいて頂けましたでしょうか」

「太田さんねえ……」

加茂氏は首をかしげた。オオタタネコ。どこかで確かにきいたような気はするが……記憶の糸を一つ一つたぐっているうち、涯もない薄明の洞穴の奥を窺っているような気分になってくる。それにしても電話の若い女の声の生々しさとは結びつけようがない。

「失礼しました。あたくし結婚して姓が変りましたの。以前はハタと申しました……」

女はしばらく、老人の戸惑いをやさしく見守るように言葉をひかえてから、「三輪さんという茶道の先生を憶えていらっしゃいませんこと。母が三輪先生にお茶を教えて頂いたご縁で、生まれてくるあたくしの命名を、先生とお知合いの加茂さんにお願いしたということを母から伺っておりますが」

「ああ思い出しましたよ」

加茂氏は懐しそうに大きな声をあげた。

もう二昔余りになろうか。四十代の加茂氏が、今様の脱サラ生活の中で右往左往していた頃である。三輪さんはもう髪に白いものが目立つ未亡人であった。加茂氏は趣味で嚙った易占が縁で、近くに住んでいた三輪さんと

往来があった。何となく気の合うお婆ちゃんだったのである。三輪さんからお弟子の畑さんの初子の命名を頼まれたとき、加茂氏は固辞した。面識もないこちらが土地の名士とでもいうならともかく、初子初孫の誕生を待ちかねていた人たちを差し置き、何の縁りもない素寒貧の身で、軽々しく引受けられるものではない。ところが三輪さんは強引であった。わたくしは加茂さんを念頭に置いて、赤ちゃんの命名を引受けたのですから、お七夜も間近の今さらお断りすることはできませんと迫るのである。眉唾ものの姓名学など信じない加茂氏は、すっかり当惑してしまった。

姓と名が着きすぎるという意見もあったらしいが、畑多稔子と呼ばれる女の子が地上に出現したのは、こんな経緯からであった。

その多稔子が太田氏に嫁しては、ますます姓と名のふさわしい佳名があろうが、なぜ今になって電話をよこすのだろう。以来職業も住居も転々とし、加茂氏に愛想を尽かしたかみさんは、二人の子供を連れて去ってしまった。よく電話番号を探しあてたものである。

「あたくし、太田多稔子となりましてから、すっかり変りましたの」

意味がよく分らなかったので、加茂氏は黙って耳をすましていた。

「まだひと月ばかり暇がありますので、名づけ親としてあたくしの運命を定めて下さいました加茂さんに、心ばかりのご恩返しをさせて頂きたいのでございます」

加茂氏は何も応えずクシャミをした。

「加茂さんが今一番望んでいらっしゃることは何でしょう。教えて頂きたいのですが」

加茂氏は面くらった。この女はたしかに変っている。気が変でなければ、からかっているにちがいない。ふざけた問いにはふざけて応えるのが礼儀というものだろう。

「さし当っての願いは、あしたのレースの馬券が当ることですな」

「あら、競馬をなさいますの。あたくし競馬というものを全く存じませんのよ。要点だけでも教えて頂けませんかしら」

ほらごらん、何も知らない癖して、と苦笑しながらも、競馬の話となると加茂氏はまんざらでもない。電話投票に加入して便利にはなったが、当り馬券を窓口で現金に換える喜びは消えたし、預金通帳がジリ貧になって行く不安だけは確実となった。年金をもらうたびに僅かずつ資金を補充して、老後の生甲斐だけはどうやら繋いで来たのである。

「大体分りましたわ。こんな風ではいかがでしょう。一日に一レース、加茂さんのお好きな馬券、つまり連勝複式とかいうのを一種類だけ買って下さいませんか」

翌土曜日、加茂氏は堅そうな特別レースを慎重に検討

して一本にしぼって的中した。日曜日も同様に安い馬券を一本で取った。次の週末まで加茂氏は狐憑きのような顔して過した。太田多稔子の祈りを汚すまいとして精魂を尽くして検討した結果だと思ってはみたが、もし彼女の神通力がレース結果を作ってくれるものならば、馬の能力適性人気などにこだわる必要はないのではないか。

加茂氏は次の土曜日の特別レースを無印枠どうしを結んだ馬券を千円買って、震えながらテレビを見ていた。万馬券が出た。万才を叫んだ加茂氏は小便をチビっていた。翌日は資金を一万円にふやして大穴を取った。

第四週目が終ったとき、計算してみると戦果は五千万円を超えていたが、加茂氏は索漠たる気分で乾涸びた指を組んでいた。

夜、太田多稔子から電話が来た。

「いかがですか。競馬は面白かったですか」

「はい、二週目まではカッカとして夢中でしたが、今週あたりは何の為に競馬をやるのか分らなくなってしまいました」

「儲けたお金で何かお楽しみになりました」

「お金は通帳に入ったままです。金があっても今さら楽しみようがないのです。中央競馬会に腹いせしてやったような気にもなりましたが、考えてみると錯覚ですな。本命馬券ばかり買っていれば、衆生に功徳を施せたはずなのにと、悔んでいる始末です」

「いっ時のお楽しみですもの、よろしいじゃございませんか。もう期日が参りましたので、これからお迎えに上りますわ。三輪先生もお待ちかねですよ」

「お迎えって……」

電話は切れていた。しかし、老人の心には疑念も不安もなかった。

ガラス戸を開けてみると、濡縁の上に例の若い猫が、突っぱった後肢を月の光の中にさらして、固くなっていた。

ママのために

その日の午後、時雨空のはれ間をみて買物して帰ると、由利子が茶箪笥の抽斗（ひきだし）の奥から例の小瓶を見つけ出して遊んでいた。小夜子は顔から血のひくのを感じてかけよった。

「なにしているのッ。これは毒なんだよ。まちがって口へ入ったら、死んじゃうんだよ」

恐ろしい見幕で小瓶を取り上げられた由利子は、ママの膝を叩いて泣きだした。

錠のかかった薬局の戸棚からこの薬を盗み出した時は、もう家を出る決心をしていた。ラベルは見たはずだが、あわてていて、今は覚えていない。腹癒せのためだとしたら瓶ごと盗んで捨ててしまえば、あとで大騒ぎになったはず、あるいは今でもたまにこみ上げてくる指先の苛立ちに唆されたものだろうか、自分でもはっきりしない。人を殺すことの出来る毒薬を持っているのだと意識すると、自分がひと回り大きくも強くもなった気分がした。何の必要もないものだが、二粒の白い丸薬と共に、この昂揚した気分を捨てさるのが惜しまれた。ヤクザが拳銃もった時もこんなかしら。とはいえ、由利子に虚をつかれたのは大へん迂闊だった。小夜子は膝の上の暖かい赤毛の髪をいとおしげに撫でて、

「もう泣かなくてもいいの。あしたママと市場へ行って、堀割へ捨てちゃおうね」

小夜子は小瓶をもとの抽斗に隠した。

母親と一緒でもと、たって望まれて十九で結婚してからの二年間だけが、小夜子にとっては楽しい青春であった。やがて思いもかけぬ夫の交通事故死。お誕生前の由利子を抱えて社宅を出て、一間きりのアパートで恩給たよりの母との三人暮しとなった。保険金や賠償金それに僅かな退職金など、扱いつけぬ額の金は前後して入ったが、預貯金の目減りのひどい時節だった。生涯の夢である持家どころか、このままでは母娘孫と女三代の暮しの行方にも不安が募った。小夜子が万引のスリルを覚えはじめたのはこの頃である。

小山薬局の主人との縁談が仲人口でもちこまれた時

「お前は一生に三べん亭主を替える運勢だとさ」と母は言った。早く二度目を済ましてしまえ、ともきこえたが、小夜子も先行き心細い暮しはいやだった。家作も何軒かもち店も繁昌という触れこみに、気持は三十過ぎの男やもめとの再縁に傾いたのだが、聞くと見るとは大違いだった。小山はひどい吝嗇漢で、店の収支はおろか家計の財布さえ委せられず、子連れの家政婦同然であった。おまけに夜はといえば、まるで買った女を弄ぶようないやらしさ。嫁いだ妹という女が時おりやってきて、暇を見ては母親を訪ねたい小夜子を不審げに横目で眺め、こそこそ兄に耳うちするのを見ると、小夜子は腹をきめた。まだ目新しかったスーパーストアでへまな万引をやったのがきっかけで、小夜子は家を出された。店の評判にかかわると、もみ消しに躍起となっている小山を尻目に、小夜子はさばさばした気分で、母のもとに帰った。

二度目の結婚は半年で終り、しばらくは女三代のアパート暮しが続いた。母に言わせれば最終となる配偶は、かなり格落ちした。

戦後間もなく、焼け瓦と土台石の散乱した崖下の八十坪ばかりの土地に、汚れた古鞄を抱えてひそんでいたおスミ婆さんのもとに転がりこんだまま居ついたのが、酒井番作である。婆さんは元は歴とした料亭の女将だとも、旦那に死なれた妾の成れの果だとも、人の口は様々だったが、この小地主は番作と縁を結んで幸せな晩年を送ったらしい。金はない代り大へん器用で手まめな番作は、いつの間にかどこからか古材や古建具を運びこんで、潰れかけた小屋を玄関にガラス格子のついた家に直し、竹垣まで結った。近所では相撲のおじさんと親しまれ、場所中は朝暗いうちに起きて出かけ、夕方は振舞酒で気嫌よく帰ってくる。まだ食糧事情の窮屈な頃は、紺の厚司の大袋に残肴やパンの耳などつめて帰り、婆さんと懇意にしてくれる隣近所に配ったりした。場所が替るとしばらく留守をするので、婆さんのための心遣いである。晩年は白内障と関節炎で一人歩きできなくなった干涸びた婆さんの面倒を、番作はなかなかよく見ていた。その死後はずっと一人暮しであった。食事、洗濯は手なれたもので、髪が伸びれば古バリカンを器用に操った。力士の醜名の入った洗晒しの古半纏など着ていても、いつも身ぎれいにしていた。こんな番作の所へ若い子連れの後家が入りこんで来たから、隣近所の陰口もなかなかきびしい。来春は一年生に上る由利子も、時々泣かされて帰った。

内祝の席で、胡麻塩頭の脳天の薄い番作と母を並べると、老夫婦と娘と孫、そんな錯覚を小夜子はしそうだった。娘のような小夜子を迎えて番作がハッスルするのは煩わしいけれど、路地裏とはいえ駅へ七分という場所柄、最近の地価の値上りをきくにつけ、早くこの土地を自由にできる立場を得たい。それまでは我慢我慢の小夜子である。優しい番作を決して憎いとは思わないが、せめて三十前に、どこかで自分をきっと待っている人と結婚し、由利子と母と夫と四人で、寝間も居間も客間もある広い家で幸せに暮せたら、と小夜子の夢は奔った。

いつか母子の間にこんな会話があった。

「こんどのお父さんのこと、好き、嫌い」

「嫌い」由利子はきっぱりと言った。

「どうして。前のお父さんと違って優しいし、いつもお土産もってきてくれるのに」

「だってあのおじいちゃん、夜ママのこと苛めて泣かすんだもの」

小夜子は言葉に窮したのである。

その日は夜に入っても降りみ降らずみの肌寒さだったが、番作の帰宅は遅かった。

酒臭い息を小夜子の耳に吹きかけて、

「今日は旦那衆のお供をして、ブルーフィルムを見てきたよ」

小夜子はもう寝ている由利子に目をやってから、「いやらしい」と番作の尻を叩いた。

番作の枕許にはアルミの薬缶がいつも置いてある。年のせいか夜中に渇きを覚えることがあった。ひと汗かいた後は、水を口のみして、身心ともに満ち足りて熟睡した。

この夜はひとしきり揉み合ってから、番作が枕許に手を伸ばすのを見て、珍しく小夜子が「あたしにも」といった。番作は気軽に恋女房に薬缶を渡す。小夜子はちょっと気まり悪げな素振りをして見せてから、可愛い口をあけてトクトクと水を流しこんだが、急にはげしく咳き、こむように腰をくねらせて身もだえし、指の先から薬缶が落ちて転げた。番作は呆気にとられて身を起し、「おい、どうした」と、由利子を起さぬように小声で呼んで、肩を抑えた。布団を濡らして流れた水が畳に吸いこまれると、小夜子はもう動かなかった。

由利子は楽しい夢でもみているのか、微かに笑みをうかべて睡っていた。

「おれじゃねえ。こんどはおれじゃねえ」

番作は震えながら呟いていた。

フルートの奏でるアンダンテ・トリスト

山根　三枝子

たしか市で出している広報の片隅に

『この指とまれ』

という見出しのところがあった。そこには次のような広告が出ていた。

『フルートに興味を持っている人、又はフルートを愛好している人、皆で楽しくやってみませんか。初心者も大歓迎。連絡先は、猿山キン子　電話　四六ー四八二三』

私はひやかし半分の気持で猿山夫人に電話してみた。ハキハキした口調の女性が出て来た。彼女、何才位の年齢の人かな？私は音楽にはいくらか下地のあることと、フルートに何かしらホンワリした夢のような気持のあることを彼女に伝えた。そしてもう一つ年齢のことを問題にしていることもつけ加えておいた。それについては何も意見らしいことは言わず彼女は云った。

「では三月三十日に一度希望者だけで南文化センターに集まることにしてありますから　是非当日午前十時に視聴覚室にいらして下さい」

いよいよ三十日が来た。しかし急用で私は出席出来ない羽目になってしまった。猿山夫人に連絡しなくては…と思った。たしかに彼女の電話番号をメモしたのにそれも何処かにまぎれ、猿山という名前さえ忘れてしまって住所録の引きようもなかった。あんな風にさもフルートをやりたいようなことを云っておきながら何んの連絡もなしに欠席することを気にしながら私は外出した。そしてこのことはもう他の色々な雑事にとりまぎれて消えていってしまうことだと残念な気持も少しばかりあった。ところが三十日の夜、猿山夫人から電話があった。そうだ、私は彼女に自分の住所と電話番号をあの時知らせておいたんだっけ。私はすぐ無断で欠席したことを弁解してあやまった。彼女は別に何も気にしている様子もなくサラリとした口調で「今度、もう一度四月七日に集まることになっているので来て下さい」と云った。彼女のか

けてくれたこの一声はフルートとすれ違いの運命になってしまうことから私を救ってくれた。

自宅から南文化センターに行くには一寸交通が不便だ。近くにあるバス停からでは駄目で十分近く歩いて国立病院までいき、そこから一時間に二本か三本しか出ていないバスに乗らねばならぬからだ。このセンターの建物は十年以上も前から出来ていて、生花、謡曲、書道、英会話、絵画など色々なグループがあって利用されていたようだが私は一度も足を運んだことがなかった。

指定の日が来た。その日フルートの為に時間通りに教室に来たのは四五人だった。猿山夫人は

「白鳥さんは幼稚園の用事で少しおくれる由で、犬山さんと牛尾さんは生協にアンケートを届けてから来るそうです。だけどきようは皆さん集まります」と言いながら室の両はじに片づけてある折りたゝみ椅子を真中の方に運び始めた。私達も手伝った。

この視聴覚室は丁度コンクリーリ製の箱の中に入ったような感じの室で二重の扉になった入口と反対側にある非常口の鉄の扉以外には窓一つない。天井は高く丁度二階の天井位の高さに相当する所に蛍光灯が沢山ついていて四つばかりある穴から冷房や暖房の空気が吹きこんでくるようになっている。慣れないと一人でいるのがこわいような室である。あれこれしているうちに「おそくなって済みませーん」といいながら主婦とおぼしき人達が三々五々集まり全員十一人が揃った。公団住宅とその近くに住んでいる二、三人を除いては、お互いに顔見知りのない人達であった。

皆、椅子にかけると猿山夫人が要領よく挨拶をした。次に順々に自己紹介をすることになった。

「私はそこの団地に住んでいる犬山です。フルートを持つのは初めてです。二人の子供の母親です」

「私は鶴間に住んでいる羊原です。私もフルートは初めてです。よろしく」といった調子に紹介は進む。いよいよ私の番になった。

「私は国立病院の裏の方の桜台に住む山根です。どうも見廻したところ皆さんは私の子供達みたいな年頃ですよ。私、フルートに一寸した憧れを持っているので何んとなくこの会に参加して来ました。でも皆さん、私一人だけ孫が六人にもなろうとしているおばあちゃんなんですよ。フルートなど一度も手にしたことないので果たしてついていけるかどうか分かりません。落ちこぼれになるかも知れません。でも落ちこぼれても室の片隅で邪魔にならないように何んとなくフルートを吹かせて下さいね。どうぞよろしくお願いします。」と云った。年をとり過ぎるということは、くやしいことだ。いつの間にこんな謙虚なものの言い方が出来るようになったんだろう。若い頃の私だったら鼻っ柱の強い、もっと生意気な挨拶をしたであろうに。更に皆で話していくうちにお互いの

ことが色々分かってきた。年齢も一番若い犬山さんが二十七年生れで、最年長は馬原さんと猿山さんで十七年か十八年生れだった。

「それでですね」猿山夫人は口を開いた。

「私達を指導して下さるのはこの方です」西山豹子さんが椅子から立った。一寸恥ずかしそうに、しかし嬉しそうな顔をしてペコリとおじぎをした。

「西山さんも『この指とまれ』でたまたま私のところに電話下さった方の一人です。彼女はこの春、音大を出られた芳紀まさに二十二才のお嬢さんです。大学四年の時からバイトでヤマハ音楽教室などで教えて来られた方ですので教える方も多少慣れていらっしゃると思います」

「よろしくお願いします」皆口々に云った。

西山豹子さん、一番若い人が先生なのだ。

彼女は流行の髪型なのだが後ろに髪の毛をたらし額にも長目に毛を下げていた。化粧など殆んどしていない顔は十人並だが背は高くしっかりした体格だ。着なれたTシャツに何度か水をくぐって着やすくなったGパンをはいている。ペチャンコで先の尖った不断ばきの靴に至るまで姿全体に統一された調和があった。ピッチリ体についたGパンが太腿あたりの健康的な肉付のよさを隠しおおせず同性に対してもセクシーな魅力を発散していた。

彼女はフルートを手にして口にあて一寸首をかしげて「ピピピピーピッ」と音を出してみた。十年間フルートを吹いて来たという彼女の唇の下部は金属製のフルートの歌口にピタリと固定し、やゝ外方にめくり返し気味の唇は厚く見えた。彼女の姿は「フルートを奏でる乙女」という題の絵にしても結構いけるなと私は思った。

「この中でフルートを持っている人は何人位かしら？」猿山夫人がきいた。三人位の人だけが自分のを持っていた。持っていない人は買うことになった。唇をピッタリ付けて息を吹き込む楽器なのでピアノやヴァイオリンの様に一寸、人様のものを借りてやってみるわけにはいかない。先ず楽器を用意しなくては何も出来ないわけだ。

「大体、おいくら位するのですか？」誰かがきいた。

「銀製のや、金を部分的に使った高級品だと五、六十万からもっと高価なものもあります。十五、六万位のもありますが初心者用にはこの七万円位のが適当かと思われます」私はせめて十五、六万位のが欲しいと思った。しかしこの年齢でやってみて果たして出来るものかどうか。何しろ息を使って音を出す楽器だ、体力と大いに関係がある。買ってすぐにやっぱり駄目だったなんてことになったら勿体ない。まあ七万円位のところで我慢しよう。そして若し私が駄目だったら孫の誰かが屹度使ってくれるだろう。他の人達もこの七万円のを申込んでいた。

西山先生がまとめてフルートと携帯用の譜面台を注文して呉れ一週間ばかり後に又センターに集まった時に注文した一人一人にフルートが渡された。サックのファス

ナーを開け黒レザー張りのケースを開けた。濃紺のビロードの張られた箱の中でフルートがギラギラキラッと光っていた。私の目を射たこの美しい光り輝きを長い間忘れることはないだろう。はじめてフルートを手にする嬉しさはこのキラキラする輝きと同じ位に輝かしいものであったから。

フルートは三つの部分に分解されてケースに納められている。頭管部、胴管部、足管部だ。吹奏する時はこの三つの部分をつなぐのだ。頭管部に穴があり、歌口といってそこから息を吹込んで吹くのだ。そして多少形や用途の異った十数個のキイがついていてそれ等を押さえて、いくつ穴をふさぐかに依って種々の音程の音が出るようになっている。面白いことに金属製であるので温度に依るフルート全体の長さの伸び縮みがあり、伸びると音程が全体的に下がる。三つの部分をつなぐ時、最后まで押し込んで一番短かくした時のA音は大体四四〇ピッチの震動となるように作ってある。ピアノ等と合奏する時は少し抜いて四二〇ピッチ前後にしてピアノのA音に合わせるようにする。しかし吹いているうちに息で暖まるとフルートの長さは伸びて音程はかすかながら下がる。又息を吹き込む角度や息の強さでも音程は変わる。楽器をよく理解する為には未だ未だこれからうんと時間のかゝることだろう。

初心者が初めてすることは頭管部だけを持って歌口から息を吹込んで音を出すよう連習することだが、これが簡単のようで中々音は出ない。唇は歌口に対して正しく平行線になるよう平たくする。息は唇の一センチ前後の巾で紙一枚位の厚さのすき間から出て、半分は管の中、半分は管の外に出るように吹き込まねばならぬ。一寸したコツなのだろうが初心者にとっては理屈で説明して貰っても中々出来ない。いくらフーフーっと吹いても音にならない。初めての人達は皆、音が出ないでフーフーフーとばかりやっている。そのうち一人出来二人出来という具合にピーピーと音が出るようになった。私は「やっぱり駄目かな」と思ったりする。先生が中々音の出ない私の所にやって来た。管を手で持つ角度や吹き込む角度をなおしてくれる。それでもいくら吹いても音にならない。「あゝやっぱり落ちこぼれだ」と意気消沈する。そして「そんなにおっかぶせるように説明して下さっても出来ないですよ、先生。私の前歯は入歯だから屹度駄目なんだわ。あたし室のすみで一人でやってみますからもうあまりかまわないでおいて」と云った。しかし何かの拍子に先生が「熱いスープをそっとフーフーとさますようなつもりで……」と云った。このことは百の理屈よりもピンと来た。ピーッと音が出た。後ろの方で初心者達の連習を見ていた猿山夫人が思わず手をたたいてくれた。

「この十人のうち全々はじめてやる人は七人だからこの七人が一緒に、あとの三人は今までにやって、少しは

吹けるのだからこの三人が一緒にという具合に二つのグループに分かれて練習することにしましょう」猿山夫人は更に続けた。

「この視聴覚室は月に二度しか借りられないんです。だから七人の人達はあとの二回位は先生の自宅に伺って教えて貰い三人に追い付くようにしたらと思いますが、どうでしょう?」皆は賛成した。

桜も散って急に暖かくなった四月の或る日、きようは初めて先生宅にいく日だ。タックスフリーの洋酒類を入れてきたとても丈夫な布製の袋があった。アラスカの白熊の模様の大きなポケットも外側についている。「これは丁度いい袋だ」と思いながらフルートを入れて出かける。なるべく近所の人に会わないようにコッソリと足速に歩いていく。自分の楽しいことは隣近所に隠しておいた方が結局は自分の得という哲学からだ。先生宅はすぐに分かった。自転車が数台門の脇に止めてあった。皆自転車で来たんだな。あたしだって乗れるんだけど。それにこの四月にうちのおやじさんが買って来たばかりの軽くてピカピカの自転車がある。でも先生宅は近いし、それに最近はあまり乗っていないから止めておこう。玄関脇の洋間に七人と猿山夫人が揃った。練習を始める前に皆で相談したり、とり決めなければならないことがあった。

「センターの方にこの会のことを届けたり、視聴覚室を予約したりするのに、このグループの名前が要るんです。何んて名前にしたらいゝかしら?何かよい考えはありませんか?」猿山夫人が云った。皆があれこれ名案を出したあげく「アンダンテ」というのが一番わかり易く、又口にしやすいのでこれに決まった。そして初心者の七人は「アンダンテ、セブン」あとの三人は「アンダンテ、スリー」という名前が出来た。

左手の人差指と中指それに右手の小指でキイを押さえて吹くとAの音が出る。ヴァイオリンもピアノと合奏する時はピアノのA音（ラの音）にA線の音を合わせて他の線の音もA音との関係でそれぞれE・D・Gと合わせていく。A音は大事な中心的な音だ。左手の三本の指を使い三つの違った音を作ることが出来る。つまりハ調でいえばシラソだ。その三つの音を吹いてきれいな音を出す練習をする。「メリーさんの羊」というあの簡単な誰でも知っているメロディーはこの三つの音だけでひける曲だ。「シラソラシシシーラララーシシシー」という具合に。タンギングの練習もした。一つの独立した音を出す時に音の頭にしっかりしたアクセントを付ける為、タンギングをするのだ。舌の先をトゥッと動かすのだが、これも初めは馬鹿にむずかしく思われた。

沢山の色々な説明を聞いてそれによく従うことも大事だ。しかし全神経を使って先生又は上手なフルーティストが吹く音や様子を、耳と目を皿のようにして注意深く感じとることが大事だ。そして真似をすることだ。人間

の赤ん坊は言うに及ばず、囀る小鳥だって屹度ひな鳥の時に母さん鳥の啼き声を一所懸命に聞いて全身で受け止め真似するのだと思う。

「アンダンテ」の創始者である猿山夫人はマネイジャー兼事務員、色々な雑務を一人でこなしている。どちらかと云えば小柄でいつもズボンをはいていて、彼女のスカート姿は見たことがない。視聴覚室の予約、皆の都合から割り出した練習する日時の取り決め、先生の都合による練習日の変更、そしてその連絡から楽譜のコピーまで中々大変なことのようだ。彼女はフルート歴はかなりあるようだ。上手に吹けるかと思うと以外の所でまちがったりもする。一寸お調子者のようなところがあるが皆の気持をいつも気づかって自分をいつも反省しながら、それでも失敗を繰り返しながらやっているという感じ。会計の方だけはさすがに白鳥夫人に頼んである。色白の彼女は目が大きく細身で背の高い美人タイプ。優しくて人の立場をよく考えてくれる人。電話などで話していても私と結構、無駄話など付合ってくれる。キチンとした所のある人で猿山夫人の人選は適格だ。

五月六月の好時節は月日が駆け足で過ぎていく。猿山夫人や西山先生の間で話し合いのついていることのように思えたが、或日猿山夫人が「十一月上旬の文化祭までに云々……」と言っているのを聞いた。どうやら十一月に市でやる文化祭にアンダンテの腕前の程を発表する予定のようだ。末だ大分時間があるようだし、さしせまって本当のことのようにも考えられず聞き流していた。しかしだんだんと文化祭という目標があることがはっきりして来た。それに若い人達は皆そのことを楽しみと言おうか一種の張り合いにもしているようだ。私は今更人前でフルートを吹いたりすることに積極的な意欲も興味もない。しかし今ここで私だけ出演しないなどと言っても皆の意気込みに水をさすようになる。まあ出る出ないはとにかくとして出演する積りで一所懸命やれば上達もするかも知れないなどと自分に言いきかせた。

「メリーさんの羊」の次の練習曲は「河は呼んでいる」だ。これも主に左手の指使いだけで中音で吹くのだから初心者にはやり易い。たゞ息づかいは難かしい。音がうまく出ないのでつい沢山の息を出してしまい息が続かなくなって音がへなったり、途切れてはいけない所で思わず息を吸ったりしてしまう。

「これぢゃあ、河は流れてませんね」と先生は云う。「河は逆流かぁ」と誰かが云う。この曲は三部に分かれていて三部合奏になると結構いける。

七月の暑い盛りになった。センターの視聴覚室は冷房がきいてはいたがフルートを吹いていると汗ばんで来る。唇の下の歌口をあてる部分が汗と化粧品のクリーム等で滑り易くなるとフルートがうまく固定しない。何度も口のまわりをハンカチでゴシゴシこすっては吹く。小一時

間も立ち続けて練習していると疲れてくる。「私だけ例外だから椅子に腰掛けて練習させて」と云いたかったが、よした。又フルートを支えている手や肩が疲れて来ると落ちて来る。そうすると角度が悪くなるので音が出にくくなる。夜、自宅で練習する時は近隣から一番離れている東側の部屋にいき東側の窓だけ少し明けて防音のことも考えた。東側は訓練所の空地でずうっと向うまで原っぱだ。草原を渡って来る涼しい夜風がひばの垣根越しに心地よく入って来る。わが亭主は暑がり屋の私があえてクーラーとテレビのある室を出てムッとする他の部屋にいって練習するのに少しばかり感心もし驚きもしているようだった。

九月になり、皆以前よりかなり上達して来た。文化祭に演奏する曲も決まった。「セブン」の人達は「河は呼んでいる」と「荒城の月」。「スリー」の人達は「ヂ・エンタティナー」と「シェルブールの雨傘」。全員に先生も加えた十一人の人達で「フィーリング」とヴィヴァルディの「四季」の中の「春」第一楽章ということになった。他に先生の独奏もあった。四季が一番大物なので専らこの曲の練習に集中した。上手に吹かねばならぬ重点的なパートには先生とスリーの人達が適当に配置され、セブンの人達がそれぞれ四つのパートに配属された。私は一番簡単で易しそうな第四のパートに入った。若い人達に決して負けてはならない。地味に確実にパートの責任を果たさなければならない。弦楽四重奏だがイムヂチの演奏による「春」をスコアを見ながら何度も聞いた。かすかにしか聞きとれないが第四パートを特に注意深く聞いた。第四パートである低音部は同じ音、同じテンポの連続があって一見つまらなく感じられる。しかし音程もテンポも派手にさまざまに動く高音部が浮かれてふらつき出ないように常に「コッチだコッチだ」と呼びかけるように低音を響かせるのだ。又或る時は自由気儘に歌う高音部にそれとなくこちらから歩みよってハーモニーを生み出すこともしなければならない。

各部毎にそれぞれ自主トレイニングをやった後、はじめて皆で集って合わせてみた時、中々うまくいかず、こんな曲をするのは一寸無理ぢやあなかったのかなと思った。西山先生も長い足を振り回わしたり床をふみならしたりして皆のテンポを調えていこうとしながら吹いた。西山先生は確に大変そうだった。しかし皆もよく頑張った。

十月になるといよいよ追込みで週に二度、三度と集まるよう猿山夫人から出発した電話回覧がかかって来る。センターの視聴覚室も何度も借りることが出来るわけではない。センターの近くに住む白鳥夫人のマンションを借りて練習したこともあった。

やはり演奏する曲で「フィーリング」を練習している時であった。この曲は高音部をセブンの中の四人が受け持った。私もその中の一人だ。合奏してみるが中々綺麗

に演奏出来ない。
「そこはもっとやわらかく」
「そこで息が切れたら駄目なんです」
「出はじめのミの音がはっきりしない。チャンとタンギングをして下さい」
「ダメダメ。そこはもっとのばすの」
と云った具合に様々な注文が西山先生からつけられる。
猿山夫人は
「やっぱり一人よく吹ける人を高音部に入れて二人下におりたら」と提言する。
「あたし、下におりるわ」と私は言った。
「今頃になって下に行ったって慣れてなくて、かえって難かしいわ」と白鳥夫人は私を高音の一のパートにとどまるよう言う。
「下手にしか吹けない」と面と向って言われなくても具合がわるいので場所交換などと云うことになると皆それぞれに神経にピリッと来るものも感じるようだ。私は常に年齢的なハンディキャップがあるのでこんな場合は何時でも下手に出る。「あーあ自分のヴァイオリンを持ち出せばこの一のパートなどとても美しく弾けるんだがなー」と思ったりする。それに小娘みたいなものから「あゝでもない、こうでもない」とケチをつけられてはあまり気持のよいものではない。「私だってお前さん位の時はヴァイオリンがとても上手だったんだぞ。あんたが云う注意なんて百も承知なんだが、たゞフルートに慣れていないから思うように出来ないんだ」とはっきり言えたら胸がスッとするかも知れない。「それに、なんだ、やっぱりピアノやヴァイオリンは、ダイヤモンドであり、金であるんだ。フルートは銀かニッケルだ。前者が宮廷のものなら、フルートは野のもの。あたしの出来てあなたの出来ないヴァイオリンはフルートなんかより高級なんだから…」なんて思いが横切るように頭をかすめる。それに猿山夫人だって少しばかりフルート合奏の経験があるからといって生意気な批評だの意見だのを出し過ぎる。あっ、駄目だめ、こんなことを考えては。感情的になってはいけない。楽しくやるには人の和が大事だ。それに猿山夫人は西山先生の御機嫌も適当にとらねばならぬ立場にあるのだ。西山先生が面と向って皆に言えないことも彼女が憎まれ役になって云うこともあるのだ。ある時皆でいろいろな相談をしている時だったか猿山夫人は云った。
「それにねー第一、大先生なんてとてもこんな所に教えに来てはくれないでしょ。西山先生は大学出たてで若いし…だから来てくれるのよ。彼女結構、引っ張りだこでね、やれ演奏会の助演だ、それ教室に来てくれだのって頼まれて甲府に行ったり横須賀に行ったりなのよ。ホント云って、あれだけ吹けて、教え方もとても上手だし…一寸こんな安いお月謝でやってくれる人ってない

わ。ホーント。いい人丁度よくあったもんだと思うのよ」
「あなたが西山先生に先生として来て下さるようお願いなさったの？」と私が尋ねた。
「それが違うの。彼女はフルート同好者としてあの『この指とまれ』をみて参加したのよ。市の建物を使って市の催しといってもいいもので、だから月謝もお安いって云うわけ」
そういうわけでマネージャーの猿山夫人は時折西山先生の御機嫌とりの芝居を見せてくれる。
とにかく十人のおばちゃん達は小学生や中学生達に教えるのとは違い西山先生にとっては少し手ごわい生徒達のようであった。レッキとしたピアノの先生も生徒の中にいた。馬原夫人だ。彼女は可成り、つっ込んだ質問をしたりして西山先生の速答をはばんだりしたこともあった。私も又「先生、G♯（シャープ）とA♭（フラット）は結局同じ音でしょう、どうして譜面では区別するのでしょう？」と尋ねたりした時、先生は「？」こんな顔をしていた。
「アンダンテ、スリー」の人達が三部合奏を馬原夫人のピアノ伴奏ですることになっていて、曲は「ヂ、エンタティナー」。この曲はいつかテレビで黒人の有名なフルーティストが実に上手に吹いているのを聞いたことがあった。演奏会も近づいて来た或日、セブンの人達も皆でその練習を聞いていた。どうもピアノの伴奏と三人のフルートが息のあった演奏に感じられない。
「どうしてかしら？」
「ピアノの伴奏が歯切れがよくないんぢゃない？」
「そうね、ピアノが一寸ベタつくね」
「ジャズ音楽の雰囲気が出ないのね」
聞きながら皆ヒソヒソ言い合っていた。
その時白井雞子夫人がヌケヌケとまるで鶏がときをつげるような大声で
「西山先生がピアノ伴奏替ったらあ」
と馬原夫人にも聞えるように叫んだ。西山先生も、現にスリーのメンバーで演奏している猿山夫人も黙っている。馬原夫人はどんなに感じただろうか。彼女はプロのピアノ弾きなのだ。たゞクラッシックの演奏にこりかたまっていて所謂ジャズ調のピアノ弾きではない。
上気して一寸不快気味な顔をして「どうしようもない」っていう表情をしていた。
演奏会が近づくに従い、だんだん皆にとって万事がきびしくなって来た。いつもの様に猿山夫人に端を発した電話の回覧が来る。
「セブンの人達、これじゃあ困るって云うのよ。（誰がそう云うのよ？。セブンの人達って私のことじゃあないか。）一度セブンだけで練習することになったの。明後日の十時。場所は白鳥さんのマンションよ」ということだった。大低の人達は二人か三人の子持ちのお母さん達だ。自転車の後ろに子供を乗せて幼稚園に連れて行っ

てから練習に駆けつけたり、日によっては「もう時間だわ」と言って練習場からアタフタと去って行ったりする。三人の子持ちの猿山夫人は「ああ、もう、うち埃だらけよ」などと云う。幸い私はもう子供などいなく、夫と二人暮らしなのでその点彼女達よりずっと楽だ。

或る日のことだが西山先生はパート毎に吹かせ、出来の悪いパートには何度も繰り返しやらせたりした。西山先生は名ざしで注意することは相手の感情を考えて出来ない。各自自分のことをよく反省してみなくてはならない。馬原夫人が云うには

「あの○響なんてオーケストラね、中ではあれで中々大変らしいのよ。譜をめくるふりしてにくたらしい相手の譜面台をけっとばして倒したりするような喧嘩もけっこうあるんだってさ」そんなこともあるかも知れないと思った。音楽の世界では、会社、その他の中の様に平、係長、課長、部長なんていう序列を作って秩序を保つなんてことはない。実力、それもはっきりとは分かりにくい場合もある実力の世界で揉み合うのだから。

いつもいつも無条件に楽しいことばかりの日が過ぎたわけではないが、合奏の楽しさという一つの目的の為に自分をたしなめたり努力したりして、いよいよ演奏会の日が来た。

玄関をはいった所にあるロビーで皆に会う。いつもは碌におしやれもしないで中には顔も洗わないのではないかと思われるような顔をして練習に馳けつけていた人達もこの日は皆見違える程美しくなっていた。私などとは違って何んといっても彼等には若さという何ものにも増して強いものがある。白いブラウスに濃紺のスーツを着た小柄な犬山夫人はまるで高校生のような感じ。白いブラウスに黒のビロードの上着を着て、下の方が細くしまったズボンをはき、さり気なく手入れした美しい髪毛を長くたらした羊原夫人、色白で眼の大きな彼女はまるで昔の外国の王子様を思い起こすような感じ。エレガントそのもののような白ブラウスにフレアスカートの白鳥夫人、何故だか彼女のお見合の日はこんなであったのではないかしらと思わせた。私は息子がパリーから買って来てくれた白絹のブラウスに礼服用の黒スカートをはき、母のかたみの、目立たぬダイヤの指輪をはめた。高年齢の私は一所懸命身だしなみをしてやっとどうにか皆の仲間に入っても全体の印象を悪くしない程度になれた。猿山夫人は背が低いからといって上げ底で、かかとも高いエナメル靴を持参して来ていた。他の人達もそれぞれ美しく粧って来ていた。西山先生は午前中は横須賀の教室にレッスンがあり、午後二時頃から始まる演奏に間に合うようにかけつけてくれた。ゴッタがえしの準備室の片隅で猿山夫人の用意したお辯当の洋巻ずしをパクついていた。

文化祭プログラムの第一番目は「やまんば」という人

形芝居。母親達に依る演出で子供達も前の方に沢山すわって見ていた。二番目は一般成人のコーラス、三番目は若い青年男女グループのコーラス、その次が「アンダンテ」に依るフルート合奏、その次は母親達のギターグループの演奏、そして最後は邦楽であった。私は司会を頼まれていたので一寸した挨拶と演奏の前に作曲者名と曲名を言わなければならなかった。舞台から一寸離れた所においてあるマイクを握ぎる。舞台だけは明るい照明があてられているが聴衆のいる所は暗くて顔などもぼんやりとしか見えない。それでも皆が熱心に聴こうとしている雰囲気はよく分かった。彼等は皆、出演者の家族達か親しい人達であり好意的であった。

「……　何しろこの「アンダンテ」の人達のうち七人はフルートを手にして末だ半年位しか経っておりません。ひょっとすると今日は下手に吹くかも知れません」と云った途端に猿山夫人が「下手なんてこと絶対言っては駄目よ。上手な様な顔してればいゝんだからね」と挨拶する時の忠告として私に言ってあったのを思い出した。私は慌てて「でも上手に出来るかも知れません」と云ったので皆が軽く笑った。

演奏は普段の練習の時より二、三割方下手に吹いたようであったが兎角演奏は終った。それにしてもヴィヴァルディに栄光あれ！。二百数十年も昔に彼は何んと美しい曲を作っていてくれたんだろう。おかげで少し位演奏が下手でも充分楽しく美しいものであった。それに会場になった講堂は音響効果のあまり良好でない所で、上質の音楽であったら残念なことになる筈であったがあまり上質でない演奏はかえって下手な部分が反響でごまかされてしまい上手、下手が適当にごまかされてしまった。とにかく入場料を取って聞かせたわけではなし、どうということはないんだ。

午前中から、かり集められていた皆はヤレヤレ済んだ、これで一段落だとばかり雑然とした準備室に戻った。白井鶏子夫人の御主人が現われてバラの花束を持った西山先生を中心にして写真を撮ってくれた。彼は三十代の半ば位の知的でキリッとした男性であった。枯草色のチェックの上質の上着を着ていた。いつも予定外の時にお金を集めるようなことがあった時等に「ああら、お財布の中に百六十円しか無いわ」とか「あーら、きよう廿日じゃあないの、二十五日迄待ってよ」なんて鶏の啼き声みたいな大声で叫んでいた鶏子夫人、そしておしゃれな鶏子さん、彼女の御主人はこんな立派な男だったのか。白鳥夫人が「うちの主人です」と紹介してくれた男も鶏子夫人の旦那様にまさるとも劣らぬ素敵な紳士、一流商社の営業マンとかいうことだった。「お世話になっております」と私が頭を下げると彼は私より一層礼儀正しく「こちらこそ」と頭を下げた。其の他の人達の夫達も皆、そろいもそろってイカす亭主達であった。そしてどの男に

も共通していた点は社会の中で何かしら有意気な歯車の一つになっているらしいということで、女房を愛し子供をかばっているという至極あたりまえのことが馬鹿にはっきりと浮かび上って私の目に映った。当日、他にも展示会だの色々な催物がありセンターの庭の芝生には臨時に焼芋屋、わた菓子屋お汁粉からカレーライス屋までが店を並らべていた。演奏前に準備室にはいって来て、

「おかあさん、ねえったらあ　もうカレーライス食べてもいい？」と目を輝やかせて母親の顔をみていた男の子。又出演間際で舞台脇のついたての横にいた私達の中に割り込んで来て、母親の腰のあたりにまつわりつき、ヒソヒソ声で何か母親にうったえていた女の子そんな子供達の仕草までが今の私にはとても幸せそうに見える。母親である彼女達は人生の輝かしい時代に今自分達がいるんだということを果たして認識しているだろうか？多分否というのが答であろう。否であるが故に一層幸せそうに思われる。この日ばかりは何故か独り者の西山先生がわびしく見えた。

「西山さん、あなたも皆んなに負けないようなおむこさん見付けなさいよ」と私は心から言った。

若いメンバーの人達は皆、子供達をひき連れ忙しそうにセカセカと又楽しそうに頼もしき亭主達の車に乗って帰宅していった。私は牛尾夫人と二人で焼芋売場に並んで少し待って焼芋を買った。彼女も電話で亭主に迎えを頼んでから彼が来るのを待つ間であった。

「さようなら。じゃあ又ね」と挨拶して私はセンターの外に出て独りでバス停に向った。時計を持っていなかったので、あと何分バスを待つのか分からない。すぐ傍にオートバイから降りて何か相談している若者達がいた。時間をきいた所三人一度に時計を見て教えてくれた。あと八分でバスが来る。朝からの雨はあがって西の空には青空も出て来ている。陽はそろそろ傾きかけて来た。焼芋の温かさと美味そうなにおいのような些細なことにさえ私を慰めてくれるものがあった。私はバスを待ちながらぼんやりと西の空を見ていた。そしてこんなことを思い出していた。

絵画、彫刻、建築等にすばらしい傑作を沢山残したあの有名なレオナルド・ダ・ビンチが若かった頃、或る教会が壁画を描く人を探していることを知ってそれに応募する。その時実力を示すことを何かするよう請われた彼は道具を使わずに一つの円を描いたそうだ。審査員は素手で完全な円が描けるところに彼の才能を感じとって壁画を描く仕事を彼にやらせることにしたとかいうことで、これが彼の輝かしい人生のスタートであったとか。

そこで或日のこと私は一つの音を長くフルートで吹きテープにとって聞いてみた。その音は私に何を感じさせたであろうか？重い赤ん坊を背負い、手に下げた買物袋

には大根やキャベツや醤油の一升びんや、味噌を入れて道を歩いていく自分自身。「何んて重いんだろう。でも頑張れ、もう少しで家だ」と一歩一歩踏みしめて忍耐しながら歩いている自分自身。この年令になる迄生活して来るということは何んと精力をすり減らす仕事であったであろうか。テープに記された私のフルートの音はエネルギーを消耗し盡くそうとしている人間の吹き出す音色であった。その音色は私の年齢つまり数十年を生きて来た人間の歴史すべてを物語るような響きを含んでいた。若さに満ち満ちてこれから燃やし続けるエネルギーの火の塊りを体内に蔵し、体のすべての器官はあらゆることを克服する可能性を秘めて鼓動していたあの若き時代は去ってしまっている。今やすべての器官は衰えエネルギーの塊はいつの間にか残り火のようになってしまっている。残り火はもう美しい魅惑するような音を吹き出す力を持っていない。なまじ、掻きたてれば灰になってしまう。

帰宅してみると我が家の亭主は眠そうな顔をしてそれでも好きなテレビのスポーツ番組を見ていた。ガラス戸越しに見える庭の木々。どうだんは濃い赤に紅葉し、藤の葉は黄色になってもまだ枝にしがみつき、すおうはみすぼらしい枯葉をつけたまゝ、もくれんはすっかり葉を落している。山茶花だけが透明なまでに白い花を沢山つけている。そして其等すべてがきよう一日の最後の夕映えの中に静かに時の経過に従っていた。そしてその庭の様に象徴されているような我家の亭主がそこに存在している。そうだ、我家の亭主がわざわざ来る程の会でもなかったんだと思った。それでも私は云った。

「ヤイッ来なかったね。焼芋やんないから」

「フウン？」

と私の方を一寸見た亭主は又テレビの方を見て馬耳東風。そして

「お風呂、丁度いい温度だよ。早くはいんなさい」

と云った。

金之助
木曽夫
ラク

連載　○町○丁目○番地（四）

山口　健二

若い母親が、当才の子供に絵本をめくりながら、そこにある乗物の名前を覚えさせようとしている。

「ヒコーキ」

「ジドウシャ」

「デンシャ」

「オフネ」よ、「ウミ」「ミナト」

オフネは青い海と、白い雲が浮んでいる空を背景にして、港の岸壁に横づけにそびえている。真白い三層もある船室・窓・窓・四角い窓・丸い窓。デッキにはぎっしり人が並び、岸壁にも人垣が幾重にもハンケチなどを振って群れ、「ジドウシャ」も二ツ三ツ小さく見える。当才の子供は、「オフネ」という母親の言葉に耳そば立てて反射的にその物を識別しようとするよりも、そのうしろに廣がった真青な海を、白い雲がふんわりと漂う空を後ろに、そそり立っている巨大な「オフネ」を、何時もアパートの窓やテラスから見るうす濁った空や塵介を巻き上げて疾走する車しか見ていない目をうっとりとさせて、不思議の国の魔物をみる心地で見とれている。

大正十三年秋、神戸埠頭に出迎人の群がつめかけ、横づけになった欧州航路客船白山丸から、やがて降りて来る山出木曽夫を迎える一団も岸壁の人の群れに交り、一年ぶりに父親を見ることになった廉作は、何か底知れなく恥ずかしく、大人たちの後ろに小さくうつむいていた。山国育ちでそれまで「ウミ」を見たことのなかったかれの目には、前に横たわった一万tの白山丸の巨体は、丁度当才の子供が絵本の「オフネ」にうっとりと見とれた気分に似通った一種のおそれに震えている。

舞台は演劇風に一転して、港に程近い日本風の旅館の二階三十畳ほどの部屋へ移る。大人たちは、我れ先に競い合って、帰朝した山出木曽夫に近より、ある者は肩をたたき、ある者は手を握り、あるいはいん懃に畳に額をつけて日本風に挨拶をかわし、大正十二年の大震火災や

人の消息を語るもの、第一次世界大戦に敗れたあとの独乙の有様を物知り顔に質すもの、欧州全般の生活ぶりや船中での生活如何と話しかけるもの、それは騒然とした虚栄と交際の場であり、互いにその場だけでやがて消えてゆくむなしい無意味な言葉のやりとりに過ぎない交歓に熱中して湧き立ち、家族の者たちは廉作を含めて母ラクの後ろに追いやられていた。廉作の目には、父親木曽夫の目が、交歓の合間に、時折かれらの上にそそがれる感じを眩しくうけとめて、畳を見てうつむいていた。

舞台は又暗転して……　東海道急行列車の食堂車の中にうつる……。西洋風に、オートミール・パン・コーヒーが、水菓子鉢を中心にして白布を敷いた卓子に順に配られていく、子供ばかり一組に、それにラクを加えた卓子である。白いドロリとした汁に点々と麦が浮いて見えるオートミールの平皿を前にして、うつむいて涙をこぼしかけている廉作が、そこにもいる。家族と、東京方面に帰る出迎人だけと云う限られた人数の中で、ラクは漸く家庭の空気をとり戻して木曽夫に言った。

「この子は牛乳で育ったくせに、妙に牛乳をきらうんですのよ」

木曽夫の眼があわれみを込めて廉作にそそがれたかにかれは感じた。廉作はふと丸一年母ラクの実家山上森之助の家で兄恵太弟幸太らとちがって返り見られず可愛がられなかったと云う印象が漠然と濃い霧のように晴れ上らぬまま、父親木曽夫の華々しげな帰国の風景の中に感傷的になっているようであった。舞台は此処でもう一度急転して……　突如うっそうとした木立を両側にした山路を、人力車が列をつくって登ってゆく。これらの人力車は、今日の木曽夫の帰省のために生家が両毛線の寒駅にいつも一台は常駐している人力車に、更に近隣の町から駆り集めた四台を加えて、〃山出木曽夫お国入り〃の行列がつづく。これらの人力車は、鉄道の寒駅から更に山一ツ越えた袖が谷村へ向ってゆく。沿道の山裾にぽつぽつと点在する山家の住民は、この時ならぬ人力車の列に〃何事であろうか〃と飛び出し、子供たちはつんつるてんの着物の袖で鼻水を横なでしながら裸足で走り出して人力車を追い、ある者は只わけもなく〃バンザイ・バンザイ〃と叫んで立ち続けた。廉作は一番うしろの車の中で閲兵する将軍の優越感を感じていた。〃俺は東京の小学校に通っていて、いつも洋服着て靴はいていたぞ〃

〃おれはこうべちゅうミナトで一万tの船を見たんだぞ〃

〃おれはキュウコウ列車の食堂でオートミール食ったぞ〃

〃おれのオトオさんはこんな人力車にゃ毎晩乗って帰って来るんだ〃……　両側が木立でかこまれた山路は間もなくカッと明るく切れて、両側に水田や畑が広がり、前方にガリガリ尖った山並みが見える風景の中を走り、やがて四五戸の人家のかたまりを越えると、四、五百米先に、白壁の塀にかこまれた他の農家とは比べることの出

来ない城の様な建物の甍が見えて来る。あれよと見る間にガッシリした扉を左右に開いた長屋づきの門のある屋敷の中に、人力車は吸い込まれた。

ゴクン、ゴクンと前後左右にゆれるブレーキ停止につづいて電車は駅のプラットホームの人群れの顔と胸をかすめた。止ると入口のドアを蹴破る勢いで乗る者がなだれ込んで、降りる者はそれを押しのけ突きとばさなければならない。急ブレーキ停車による激しい揺れと入口からどっと吹き込んだ風に打たれて廉作は横に倒れかかった姿勢でぼんやり目が覚めた。金七円四十銭也を払って、浅草松屋の内部がガラン洞に焼けた建物につづいている東武浅草駅から、たしかに人群れに押され、揉まれてのめりこんだ車中であったが、飢えと疲れに廉作は抵抗出来ない眠りに落としいれられていたのであった。それはわずかな時間であったであろうが、かれにとっては甘美な夢の細切れであった。だんだん現実にかへって来た眼の前には、人は立ったらそのままの姿勢で立ちつくさねばならない混み方で、そういう乗客の足許を容赦なく押しのけて、ひと群れの若者が片肌ぬぎ、向う鉢巻き姿で花札賭博を遊んでいる。その顔はいずれもテラテラと脂汗で焼け、安焼酎の匂いをあたりに散きちらしている。かれらは花札賭博を遊ぶというより、今迄おさえ込まれて来たかれらにとって甚だ不当で、得体のわからない強権の重圧に滅茶苦茶に反抗をこころみるために衆と安焼酎に力を借りて開帳している風であった。その肩先には〝さぁひっくくってみやがれ〟と云う気勢がつっぱり尖っている。車内には異様に尻上りする関東北部の訛言葉があふれ、甲高く飛びかっていた。ある者は昭和二十年三月と五月の東京大空襲の中を自分がどんな危険をおかして掻い潜って生きのびたかを語り、ある者は戦地にある息子、縁者がこれからどのようになってゆくのかと情報を求め、かりそめの車中だけの縁を必死につなぎとめようとする空気であった。縫い目やところどころ擦り切れた帯を、それでもきちんと御太鼓に結んだ中年の女の大き目の風呂敷包みは、多分米麦にとりかえられる衣類であろう。その停車した駅は、東武の要衝に当る町の駅とも見えて、ひとわたりドアのあたりの怒号と喧噪がおさまっても動き出そうとしない。発着は、その車の状況できめられるもののようであった。プラットホームには、警察官が組になって乗降者の荷物や、からだのあたりを調べている。そのような警察官は、他にもいく組もいる様子で、かれらは、体格もよく、栄養も行きとどいているように廉作の目には見えた。かれらは、車内で公然と開かれている賭博は横目で見ただけである。〝経済警察〟と言うのであろうか、不図あれらの乗降者の荷物や、身体から剥ぎられた米麦は、どのようにしてルートとかに乗せられ自分たちに配給されてゆくのであろうか、中途で消えてゆく分量はもしかしたら……というぼんやりした疑いが廉作のあたまの隅を力なく横ぎる。〝正しいもの〟を正しいとし、正しくないものには本能的に怒りを感じることが出来た地盤は、生命を拾って国に帰って来てから、廉作の心の中でも、日毎に、急速に崩壊して来たらしく、あけはなされたドアから吹きこむ風に乗って、うそ寒い弱さ頼りなさとなって身体中に染みわたる思いで、かれは眼の前の賭博衆から目をそらし、眠りをよそおった。発着時刻表など全く当てにならない電車も漸くドアを閉じ走り出してのろのろと次の寒駅に入った。

「共産党野郎め！　今に思い知らせてやるぞ」

一人のやせた中年の男がドアから出がしら憎しみを吐き捨てるようにつぶやいた。かれは特高警察官であったか、それとも、憲兵軍曹上りでもあろうか、〝公職追放〟又はそれに似通った世の中の待遇の中で、昨日まで風を切った肩をすぼめて自分の生家の田舎へでも米麦を求めてゆく途中の姿かもしれぬと、うす目をあけた廉作に瞬間的な印象を残して去った。この男にとっては不正なものはみな〝共産党〟であり、反軍、反国家的言動はすべて〝共産党〟と云う言葉でのしるよりほかに智恵はないのであろう。それも廉作にはうとましい感じではあったが、戦前、戦中、日本の進攻に学問的（？）なより所をあたえて来た名前の知れた法律学者が〝民主主義をわかりやすく〟と云う本を書いて時の流れにおくれまいとし、〝一億総ざん悔〟などとお節介なざん悔を読者に強いるモノ書き学者先生も現れ、スイスを日本国のゆきつく理想像とする素早い、血迷った考えも廉作の気怠く萎えた身体にはうとましいことであった。

電車は袖が谷村に通じる寒駅に着く五駅前の、昔城下町であった小都市に至るまでに乗客の大部分を降ろし、車内には立っている者もなくなり、尻上りの激しい訛りの会話も静まって来ていた。あたりに開けた田畑は、何か廉作の記憶によみがえって来る色と匂いを帯びているようにかれには思えた。車中の居眠りの中にあらわれた切れぎれながら甘美な夢の風景は二十数年前の思い出であって、そんなことがある筈もないのに、東武線と云う私鉄のプラットホームに吹きさらしの待合小室一ツだけポツンと建っている寒駅にも、何度か降り立ったことがあるような親近感がこみ上って来るのであった。亡父山出木曽夫が明治の拾年代の後半から吸って生きて来た空気が立ちこめているのだ。人ひとり出入り出来る改札口には駅員はいない。今廉作一人を降ろして出て行った電車を指呼して見送った駅員は、そのまま線路に背を向けて自製の二十坪程のホームわきの畑に向って蟹の横ばい風に歩きながらゆっくり放尿していた。駅を出ると、それでも一台の木炭車が客待ちしている。廿数年前、廉作ら

が人力車をつらねて行った山出の家を、この木炭車の運転手が知っているであろうか。ためしてみたいいたずら心が廉作をそそのかした。運転台から窓枠に足をのばして居眠りしている中年者の足をゆすってかれは言った。

「山出というううちへ行きたいんだが…　遠いかね」

「オッ、山出さがね、すぐあそこだ、でも乗るかね」

その運転手は〝山出〟という苗字に、親近感とも敬意とも受けとれる顔つきになって言った。

「あんた山出さの何しや」

「うん俺、遠縁のもんだ」

かれは亡父の生家を訪ねるために、普段着ていたよれよれの軍服を、亡父が晩年重い洋服を嫌って愛用していたコールテンのスーツに着がえては来たのだが〝少しダブダブ過ぎたかな〟と栄養を失調して四十キロ代に落ちた自分のやつれた姿を一寸気にした。〝遠縁のもんが米を貰いに〟それは口の中で消えた。かれは、行く先の亡父の生家の現状についてこの運転手からもう少し予備知識を仕入れておきたい気持ちにせかれたが、かれは車の後尾へまわって煙突のついた内燃機関をかきまわすとすぐにドアをきしきしと音を立ててあけ、廉作を押し込んだ。廉作の手には今朝アメ屋横町で買ったあやしげな菓子折の包みが抱えられていた。〝兎に角、これで自動車で乗りつけられる〟。

「山出木曽夫の二番目のせがれです。戦争から帰って来ましたので、ご挨拶がてら……」それでいい。そう言わねばなるまい。いきなり「米を少し分けて下さい」とは言えぬ。それは言えぬ。東京の山上の家の有様などを話題にしながら、それとなく察して貰うよりほかに仕方があるまい。

廿数年前、人力車を連ねて村中を驚かす洋行帰りの〝お国入り〟をした山出木曽夫のせがれが、しかも根も葉もない噂ながら父に似てデキがよくて帝国大学と云う所を出たと伝えられている筈の廉作が、敗戦の挙句とは云え乞食同然に米を貰いに来たとは素直に言える所ではなかった。

自動車は煙突から黒煙を吐いていったん駅の正面に開けたみすぼらしい町に入り、右折を二度して、踏切りの木材をごとがたとゆるがせて何やら見覚えのある広びろとした田圃みちに入った。〝そうだ此処らに川があった筈だ〟…〝あった、あった、川はある〟〝だが水はもっとゆるやかに豊かに流れていた筈だ、この干上りかけて石が無惨にあらわれた川原はどうしたことか〟「昔ここまで太平洋から鮭が登って来た」と父木曽夫が母ラクに話していたのを廉作は思い出していた。それは二十数年前の夜の食卓での父と母の会話であった。

「俺はなぁ、鮭は箸で身をくずすと蛆が出て来る程塩のきいた塩引きが好きだな、矢張り子供の時分食いなれたものが一番うまい」

毎日、魚屋が盤台・俎を台所口まで持ちこんで、その場で切身にしてゆく甘塩の鮭を女中に焼かせればそれですむラクの暮らし方に対する批評もその言葉の中にあったのであろう。

「まあーいやだ、あたしはいやですわ、そんな腐ったお魚なんぞ」

母ラクは顔を思い切りしかめて、あから様に好みの天地のちがいを言い切ったばかりでなく、その言葉の抑揚のなかに、夫木曽夫の山家育ちを軽んずる響きと、自分が普段に使っている細かい心づかいが通じていない不満がこめられていた。母ラクが、戦場から命を拾って帰ったばかりの廉作に語ったように、木曽夫が五十代の終りに、病院から昼やすみに母屋へ引き上げて来て、炬燵に横になって身体を休めながら兵営から届いた廉作の葉がきを読み終えて〝廉作のヤツ〟とつぶやいて、その晩から呼吸の苦しさを訴え出して、三日後に、枕許に注射器とアンプルを投げ出したまま、殆んど自殺ではないかとさえ思える死に様であったとすれば……その二人の三十数年に及ぶ夫婦生活は、お互に全く別の世界に心を向けて背中合せであったにちがいないと廉作には思えるのであった。二人を繋ぎとめていたものは、わずかに二人の共同生活のあかしであった子供たちを世間という額縁に合わせて育てあげることと、日本人の金甌無欠信念の上に建てられてきた社会的規範という頸きに押えこまれた一生であったということになる。まだ三十を出たばかりの独り身の廉作には、それ以上二人の心の世界に入ってゆくことは、わずか数分の木炭車にゆられながらの回想の中では困難であったが、二人がそれと気づかずに金縛りになっていた社会的規範は、戦争に破れた時を境にして、山が音を立てて崩れてゆく勢にも似て、たしかに崩れ去ってゆく気配を廉作は感じていた。

電車の線路が大きく曲線を描いて消えてゆく雑木林のあたりは、わずかに浅い緑に色づきかけて、じっと忍んで来た北関東のきびしい冬とやがて別れを告げようとしていた。木炭車はいくつかの木立に囲まれた人家の塊をやりすごすと、廉作の車中の甘美な夢のひと駒にあらわれた程見事ではないが、白壁にかこまれ、森を背にした確かにそれらしい屋敷の門前についた。石段があってそれ以上は自動車は入れない。確かに門扉は頑丈な木材で、百年の年輪をその色に残してはいたが、飾金具は、紋章の跡を残して無惨にはぎとられていた。それは鉄類の供出という国家の要請によってであろう。〝どうも様子がちがうぞ、二十数年前に人力車は開かれた門の中に吸いこまれた筈だ〟廉作は車中の夢の中味を追った。

「もう一ツ門があっただろ」

かれは運転手に言った。此処で車を降りては、何やら恰好がつかぬ。

「あれッ…　そうだ東だ」

木炭車は、もう一度田圃道にバックして、直線に五十米程走り、ガリガリと石畳に乗り上げた。

〝あった〟車に沿って左に流れた白壁の塀は、夢の中のものよりずい分低く、土もところどころ崩れて、半ば開いた門扉も飾金具ははぎとられた跡を残し、門につながる長屋の窓格子も二三本折れたままではあったが中には人の住む気配があった。廉作は、夢の中でのように左右に開かれたその門を、車に乗ったままずっと母屋の前まで乗りつけたかったのだが、半開きの門をその運転手の手で左右に開かせて庭に乗りこむには、木炭車は滑稽に見え、みすぼらし過ぎた。

半びらきの門扉の中に、屋敷は不思議な静けさの中に横たわっていた。

「山出木曽夫の二番目の廉作です。戦地から帰りましたのでご挨拶がてら参りました」

廉作は電車の中で作った口上をもう一度頭の中で繰り返してみて、車から降りた。半開きの門扉をそのままにして、その間をすりぬけて入るのは貧弱な感じではあるが、さりとて自分の手で重いものを左右にゆっくりと押し広げるのもこの際はばかられる。木炭車は佇んでいる廉作を残して寒駅へ引き返してゆく。長屋の木格子小窓から一人の老婆が廉作を見おろしていたが、その顔には廉作は見覚えがない。子供の時から、何度か見たことのある写真帳にのっているこの家の家族のどの顔にもそれは当てはまらなかったのである。今はもう余り永くためらって門前に佇むことは、たとえ亡父木曽夫が晩年重い背広を着ることを嫌って愛用していたその頃としては上等の茶のコールテンのスーツを、普段着ていた古軍服のかわりに一着している廉作ではあったが、矢張り怪しまれてはいけない。かれは思い切って門扉を肩で押して入った。

右手に間口十五間ぐらいに見える母屋が横たわっている。中の庭をはさんで二棟の土蔵が鍵形に見える。母屋の外れは造作のある中庭につづき廉作が初めに木炭車で運ばれた門は長屋がわりに道場風の建物につながっている。山上森之助の屋敷も、山出木曽夫の病院、母屋を含む広がりも、此処では母屋の前に開けた空間にすっぽり入ってしまう。この庭で、農事の仕上仕事が行われたり、木曽夫の少年時代には、高野佐三郎らと親交があったと云う木曽夫の兄金之助が近隣の若者八百余名を集めて剣の練習もやったのであろう。

鶏がいる。二十羽程勝手に散った餌を啄んでいる。犬がいる。何と云う種類であろうか、猟犬特有の長い足を女性的に折りまげて、餌を啄む鶏をいたわる目つきで長々となっている。そこには廉作が二十何年も忘れていた

静かさが、早春の真昼の明るさの中にあった。〝そうだ、この家のあるじは猟の名人とかきいていた。飛び立つ山鳥を狙いうちすると聞いたことがあたっけ〟若い女が一人縁側に腰かけ足をぶらぶら遊ばせながら鶏を見ている。廉作には覚えのない顔ではあるが、どこかこの家の家族であるということが直覚的に感じられた。

「いらっしゃいました。どちら様で……」その日本語はあきらかに東京弁に近い。

「山出木曽夫のせがれです。戦地から帰りましたので、先祖の墓にお参りがてら……」

廉作はあらかじめ用意してあった口上に少しはずれたと感じながら言った。

「あれえッー　おばぁちゃん、おばぁちゃん信州の叔父さんとこの廉作さんよ、屹度…　さぁどうぞどうぞ」

女は縁側から白い脛をあらわに母屋の土間の入口へ小走りした。

このひとは、俺を廉作さんと名ざしした。誰も俺が訪れることを前もって知らせてない筈だ。母ラクは、亡父の生家へ米麦を貰いに行くことを潔しとしない口調で「利左ヱ門さんが木曽夫が死んでから、入院患者用の布団をゆずってくれって言って来たことがあるんだよ。あんな大きな百姓で入院患者用の木綿の布団など…　矢張りモノがなくなって来ていたからネ」と戦地から帰ったばかりの廉作に家を守って来た話のついでに言ったことがあった。そばにいたサクラが「大野の叔父さんも布団を始末しないかって言ったことがありましたヨ」と言った。利左ヱ門はこの家の当主であり、木曽夫の従兄弟であり、大野の叔父はラクの弟で〇町〇丁目〇番地の加寿刀自の面倒を見ながらその地所をねらっていると廉作には思える男であった。女だけで世帯を守ってゆくには女を捨てた強さがまだまだ必要であったのだ。

利左ヱ門は、木曽夫とは兄弟のように育てられたらしい。だから利左ヱ門は木曽夫を〝アンチャン〟と呼んでいた。そのかれは留守の様子で〝おばぁちゃん〟と呼ばれたラクと年恰好がおっつかっつの、腰のあたりにしなやかな品をのこした老婦人が縁側にあらわれ、急いで土間に通じる重たげな杉戸をごりごりとあけた。この婦人には見覚えがある。この家が三夫婦そろったことを祝った写真をかれは見たことがあった。この家の全盛の頃の写真であろう。そこにこの婦人は二人の男の子を膝と脇に坐らせてうつっていた。〝そうだ利左ヱ門の妻のおカナである筈だ〟木曽夫の妻のラクはこのおカナとは気が合ったのかよく子供の廉作らに〝仲人口なんだろうね、山出の家はあの県で数えられる程の大地主だと言われてあたしゃ木曽夫と一緒になったんだが、あのくらいの家は近処の村にだっていくつもあるらしいし、今の利左ヱ門さんになってからは左前なんじゃないかネ、おカナさん

もそんな中で苦労なことだろ」ともらし、盛んにおカナの嫁っぷりを賞めたたえたことがあったので廉作もいつの頃からかおカナという名前に好意を持って来ていた。

土間は左は三十畳程のみがき込んだ板張りの控えの間につながり、その奥にガラス戸張り越しに囲炉裏がみえる。土間の奥は、そのまま台所に通じ、黒々と竈が三基坐っている。三基とも今はもう使われていないのであろう。経三尺もある平鍋が蓋もなく煤けている。そのわきに馬屋と一頭の馬がみえる。兵士のときに歩兵砲を取扱わされた廉作には少し馬がわかる。これは全くの駄馬輓馬ではない。顔立ちがいい、脚から腹への切り込み具合がしまっている。田畑で使うのであろうが、この家のあるじの好みが此処にもある。〃入口に風呂場があった筈だ、畑仕事を終えてまず入る風呂は土間につづいている筈だ〃廉作の眼は一目でこの家の現状を見ぬいてやろうとする気持で尖っていた。

「さぁどうぞ、どうぞ」と招じ入れる婦人は囲炉裏のわきの子供手一抱えもありそうな大黒柱の下に小腰をかがめた。〃あった〃二十数年前に風呂場であった部屋の跡に米俵がざっと二十俵程たった今脱穀場から運びこまれて取りあえず積み重ねられた風情でピラミット型に積んである。土間の隅にはジャガタラ藷が無雑作に積みころがしてある。廉作の腹が〃ぐう〃と音立てたようで、かれはその音を気づかれまいと殊更上づった声になって言った。

「おカナおばさんですね、みなさんお変りありませんか」

（未　完）

連載

ハイラル挽歌（十一）

第一章　海拉爾の白旗

金子正義

十五

中野隊が大興安嶺を、死の引揚行軍に彷徨っていた八月十四日、ハイラル要塞は未だソ連軍の猛攻に耐えていた。

第二地区要塞は、東側の砲塔やトーチカの大半が破壊されて仕舞ったが、未だ残っている砲塔では、地下要塞から砲弾を運んでは、攻め寄せるソ連軍に頑強に反撃していた。だが一弾を撃つと忽ち数十倍の敵弾が集中する有様だった。

東側七番砲塔には、川崎曹長以下十二名の砲兵と、零号作戦発動で補充された歩兵一個分隊がいたが、砲弾でペトン諸共飛び散ったり、砲塔から跳び出して撃たれ、もう潰滅の状況であった。壕内の到る処に、胴体だけの屍体や、顔を潰されたり頭を割られて、誰だか判らない兵隊が折り重なっていた。

川崎曹長の遺体は、首の無い人形がキチンと軍服を着けたように、左右の肩から双眼鏡ケースと、図嚢を交叉して掛け、軍刀を確っかりと握って内壁に凭れていた。

未だ生き残っていた岩松軍曹と舟田一等兵は、戦車の轟音や砲弾の炸裂と爆風の中で、狂ったように弾丸を装填しては撃ち続けていたが、遂に敵弾が砲身に直撃し、物凄い爆風で二人諸共吹き飛ばされ、防壁に叩きつけられた。

昏倒して意識を喪った岩松軍曹は、茫茫とした昏睡の内で幽かに故郷の渓流のせせらぎを聴いていた。次第に渓声は高まって、耳殻を圧するキャタピラ音となり意識が戻った。蹌踉めき立ち上った瞬間、再び落下した砲弾が砲塔の掩蓋を直撃した。爆風で掩体や防壁が崩れ、降り注ぐ砂煙を被って岩松軍曹の半身は土砂に埋まった。瓦礫の床が続けざまに炸裂する砲弾で踊っていた。

頭がガンガン鳴り、脳漿が破れ流れるようだった。突如、地軸が大鳴動した。遂に要塞地下の火薬庫が大爆発

したのか、と落胆すると、そのまま意識が薄れていった。
「岩松軍曹殿！　岩松軍曹殿！」
と連呼する声に気がつくと、舟田一等兵が懸命に瓦礫を取り除いていた。我に返った岩松軍曹は土砂に埋まり込んだ半身に力を入れ、懸命に奮ん張って這い出した。引摺り助けた舟田一等兵も全力を使い果して口も利けず、暫くは重なり合って倒れていた。
　砲塔の大きな破壊穴から、硝煙渦巻く戦場が見えた。七、八頭の軍馬が銃砲弾の雨と降る中を群がり走っていた。破壊された要塞内の厩から飛び出して方向を見失った軍馬であった。軍馬の群れは、東に疾走しては引き返し、南に跳んでは首を高く伸ばして悍声をあげ、狂ったように弾み飛んで馬首を北に転じた。群れから駆け離れた数頭が鼻面を合せて蠶を激しく振り、横ざまに跳ねてバラバラに走っていった。砲弾は容捨なく炸裂して火柱と土砂を舞い上げ、駆け廻る軍馬は次々と仆れ、その嘶きが凄まじい爆裂音の内に悲痛に響いた。軍馬の狂奔はほんの一瞬であった。忽ち猛烈な砲弾の炸裂と爆煙の中に消えた。
　砲撃が止むと、鰐の背のような厚い装甲部を震わせて戦車が現われた。砲弾の破壊穴で凹凸の激しい陣内を自由に走り廻る戦車は、穴だらけの地表を上下する度に、巨大な爬虫類の腹のような車底を露わにして、崩れかかったトーチカの銃眼や、残っている砲塔を探し当てては戦車砲の狙い撃をした。
　我に復った二人はもうこれが最後と、焼け爛れた迫撃砲を引摺り倒して、崩れた土砂の中に埋めた。全力を使い果して暫くは腰も立たず、虚脱したように砲塔の天井を見上げると、破壊穴から空が見えた。高く深い紺碧の空があった。苛烈な戦場は幻のように、人間の営みも全て虚しい夢のように見える蒼穹であった。
　覚悟を決めると激しく鳴っていた胸の動悸が治まったが、肩から背にかけて激しい痛みを覚えた。手を廻すと破れ軍衣に血糊が重く滲み出ていた。
　不思議にもさしたる傷も無い舟田一等兵が、
「軍曹殿、早く床下の連絡路に脱出しましょう」
と叫んで、円匙で瓦礫を堀り起して連絡路の入口を探した。漸く蟻地獄のように土砂が沈下する地下連絡路を掘り当てた舟田一等兵は、岩松軍曹を抱えて滑り込んだ。土砂と一緒に滑り落ちた地下連絡路は、迷路のように折れ曲っていた。暫く手探りで行くと中央地下道に出た。十燭光の電球が所々にある要塞地下道は、伝令兵や、衛生兵が慌しく行き交っていた。教えられた医務室を尋ねて、薄暗い地下道をぐるぐると歩き、何度も階段を上下して漸く衛生隊本部に達した。
　医務室は、重傷兵が蠢めき足の踏み場も無く、軍医の出口中尉や看護兵が殺気立って手当をしていた。舟田一等兵は、床に屍体のように横たわっている負傷兵の列に

岩松軍曹を割り込ませて、再び火線に出ようと暗い地下道に立ったが、何処へ行ったら良いのか分らなかった。

十六

　八月十五日は朝から無気味な程に静かであった。砲声も焉み戦車の動きも無かった。
　原中佐が望楼から敵陣を見渡すと、要塞に向けて並列しているソ連軍野砲陣地の草原に、ランニング姿のソ連兵が出て、屈託なく腰を下して話し込んだり、グループで球を蹴ったりしている、中にはわざわざ日本軍陣地に近付いて寝転ぶ者も見える。そのうち、砲身に兵士が跨ってバラライカを弾き、大勢が取り囲んで合唱を始めた。
　次第に賑やかになると、女兵士とダンスに興ずる一団もあり、一方では民族舞踊であろうか、大きな輪の内で数人の踊り手が、リズミカルに手足を振り、激しく躰を屈伸させて踊り狂い、取り囲んだ兵士が歓声をあげていた。ソ連軍陣地全体が祭礼のような騒ぎである。
　原中佐は、呆気にとられて、何度も展望鏡を見直した。余りにも異常な、日本軍の常識では理解できない狂態である。原中佐は、日本軍を無視した、傍若無人の態度に憤りを覚えたが、勝利に酔って日本軍を愚弄する太太しい態度のようだが、途方も無く楽天的なスラブ人特有の民族性なのかも知れない、と思い直し乍ら司令部に戻った。
　野村旅団長に報告すると、物に動じない野村少将も、
「ふう・・うん・・・千早城を囲んだ鎌倉勢か・・」と微笑んだが、
「何にかの謀略かも知れんぞ」
と原中佐を凝視した。
「一寸と突っ衝いて見ましょう」
　原中佐は驕慢なソ連軍に夜襲をかけようと思った。
　ソ連軍は既に市の東側丘陵一帯の日本軍施設を全て占拠し、廃墟となった市内に充満していたが、主力部隊はハイラル要塞の攻略に手間取ることを嫌って陸続として内陸部へ向って南下していた。ハイラル包囲軍は、もう日本軍は要塞の地下に逼塞して手も足も出まい、と戦果に慢じて油断しているに違いない、夜襲をかける絶好の機会だと思った。
　原中佐は、直ちに地下ケーブルの電話を使って、残存する要塞各指揮官に、
『本、八月十五日二十四時を期して一斉に敵陣へ夜襲斬り込みを掛け、野砲、戦車を破壊し、敵戦力に重大なる損耗を与えよ』
と特別夜襲攻撃を命じた。
　各隊へ斬り込み命令を出した直後の午後二時、慌しく通信隊の板垣少佐が戦闘司令部に入って来た。
「重大な情報です。逃げ遅れたハイラルの一般邦人と一緒に、同盟通信員が要塞内に収容されて居りますが、重

大な情報であると、ラジオ放送のメモを自分の処へ持って参りました。余りの事の重大性に驚いて居ります」と十五日正午の東京放送の走り書を差し出した。

原中佐は一寸と目を通していたが、重大な内容に愕いて板垣少佐を見返した。薄暗い電灯の翳りで少佐の顔は蒼白である。原中佐は文章に明るい副官の森脇少佐を呼んで、

「此れを見て呉れ」

とメモを渡した。

森脇少佐は、ほとんど判読できないラジオ放送の聴取メモを、何度も黙読しては、読み取った文字を罫紙に書いた。三人は額を寄せて一言一句吟味して読み返したが、半信半疑で、只顔を見合せて言葉も無かった。

『……非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ収拾……茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク……米英支蘇四国ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル……朕カ陸海将兵ノ勇戦朕カ百僚有司ノ励精朕カ一億衆庶ノ奉公各々最善ヲ尽セルニ拘ラス戦局必スシモ好転セス……戦陣ニ死シ職域に殉シ非常ニ斃レタル者……朕ノ深ク軫念スル所ナリ……堪へ難キヲ堪へ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス……』

重苦しい沈黙に耐えられないように

「天皇陛下のラジオ放送など有る筈が無い。敵の謀略ではないでしょうか」

と板垣少佐が自信の無い声で言った。

「陛下の放送で無いとしても、一言一言は日本人の肺腑を衝く、謀略としてはこんな難しい言葉をソ連軍が書ける訳が無い。此れは本物であると思います」

と森脇少佐が冷静な声で言った。

原中佐は判断がつかず、三人揃って旅団長室に入って野村旅団長に報告した。

野村少将は黙々と罫紙と聴取メモを見較べ乍ら読んで、

「本物であろう。此んな手の込んだ謀略を使う訳が無い。だが、本物であるとしても、統師経路を正しく通った軍命令がある迄は妄りに動くことは出来ない。例え本物でも目前の敵と日夜悪戦苦闘している将兵に知らせることが出来ようか。決死の戦闘で昂ぶっている将兵は簡単に承服する訳が無い。大混乱となる懼れが有る。暫くは伏せておけ。誰にも漏らすな。通信隊は、爾後もラジオ無線の傍受に注意し、断絶している師団司令部との交信を回復させるよう全力を挙げるよう」

と言った。

板垣少佐は、毅然とした旅団長の言葉に心の動揺は消えたが、新に複雑な不安を抱いて通信隊本部に帰って行った。

第四地区要塞の将兵は、斬り込み攻撃命令を、今や遅しとばかり待ち倦んでいた。第四地区陣地は、ハイラル

市の南東十五粁程にある丘陵を利用して構築されていた。第二地区陣地程堅固でないが、地下施設を持った永久陣地で、ハイラル防衛の後方の要とされていた。

だが、ソ連軍は一向に進攻せず、全く無視されてほとんど無傷のままであった。

ハイラル防衛の主力は、ハイラル西北方にあった。北方三河方面よりの進攻には、第一地区の安堡山、河北山の要塞で。満洲里方面よりの攻撃には第二地区、第三地区の要塞で抑える作戦であった。だがソ連軍は要塞正面攻撃を避け、機甲部隊で主幹道路を突破して市内に突入し、各要塞陣地の裏側から攻撃をかけたので、各地区陣地は分断されて仕舞った。市街の東の平坦地には放送局、軍人会館、軍人家族宿舎が在り、東に向って高くなる台地に師団司令部を始め、各連隊本部、兵器蔽、弾薬庫糧抹倉庫、病院などが広く点在していたが、既に開嶺方面に撤収しているので、ソ連軍は直接攻撃しないで全て手中に収めて仕舞った。

ハイラル南東の第四地区要塞は、市街や満鉄線、軍事基地防衛の搦手となっていたが、ソ連軍は一寸攻撃したのみで黙殺して素通りしているのであった。八月十二日には、傍若無人にも第四地区陣地の直ぐ下にある日本軍飛行場に、偵察機二機を舞い降ろしてそのまま発進基地としている。

ハイラル方面のソ連軍の作戦は、戦車部隊が主力で、空軍は余り使用していなかったが、偵察機や観測機は頻りに飛ばしていた。元々一面が草原地帯なので、飛行機は何処でも自由に発着出来たが、日本軍の飛行場が無傷のまま放擲されているので、ソ連軍が占拠したまでのことだった。

第四地区陣地の金井中尉は、毎日望楼から双眼鏡で、我物顔に発着するソ連機を見守って歯軋りしていた。

八月十五日夜半の敵陣斬り込み命令は、待ち望んでいた処であった。早速斬込隊を編成し、自ら指揮して飛行場に突入した。無警戒の格納庫や倉庫に忍び込み、偵察機に石油ビンを投げて爆破し、ソ連兵の天幕に手榴弾を投げ込み、不意を衝かれて狼狽するソ連兵に機関銃を掃射して悠々と引揚げた。

十五日夜半の斬り込みは、金井隊の戦果ばかりでなく、各隊もほとんど無傷で、ソ連軍の野砲三門、戦車十数台を爆破し、ソ連兵多数を殺傷して引揚げて来た。

日本軍は、易々と戦果をあげて日頃の憤懣を吹き飛ばしたが、ソ連軍は、八月十五日正午を期して日本軍は降伏し、停戦協定を結ぶ交渉に入るものと無警戒だったので、日本軍の夜襲は、正に寝耳に水であった。ソ連軍では圧倒的な兵力よりすれば、夜襲による損害は微々たるものであったが、協定を無視した日本軍を膺懲しようと、一時の混乱を整え直すと、十六日払暁から猛烈な砲撃を日本軍要塞に加え始めた。

第二地区陣地には夜も明け切らね空に、次々とソ連機が襲来して照明弾を落し、その蒼白い光の下に戦車の大群が地軸を揺がせて押し寄せた。攻撃は執拗に十六日午後に至るまで津波のように繰返して、戦車砲、自走砲、火焔砲を射ち捲った。

さしもの猛攻が漸く跡絶えた午後二時、板垣少佐が戦闘司令部に飛んで来た。今度は関東軍の当局談を傍受したと言って走り書きを出した。原中佐が、森脇少佐と読んで見ると、悲痛な言葉で停戦を告げる内容であった。

最早、謀略とは言えない。有り得べからざる日本軍の降伏という事態が起きたのだった。

三人は揃って旅団長室に入った。野村少将は暗い電灯の下で黙々とメモを読むと、静かに机の上に置いて一言も発しない。原中佐が堪り兼ねて、

「閣下、如何がでしようか、自分は信が置けると思います」

と言った。野村少将は、

「慎重にせよ、戦闘停止は師団から何んとか言って来る迄待とう。師団との交信は未だ切れたままか」

と板垣少佐に尋ねた。

「はい、無線は利かず、完全包囲で伝令も出せません」

と原中佐が代って答えると、

「そのような事態ならば、総司令部か、第四軍司令部から、飛行機でも飛ばして来るだろう、一日待とう」

と悠然と言った。

ピタリと砲撃を止めて日本軍の反応を見ていたソ連軍は、日本軍が降伏の様子を見せないので、午後四時再び猛烈な砲撃を始めた。もう、地下要塞以外は、地表に在った全ての防衛施設は破壊し尽され、壊れ果てた砲塔や周囲の壕で最後迄、肉迫攻撃を敢行していた歩兵部隊もほとんど消耗して、僅かに残った将兵は地下連絡路を辿って要塞地下に引き揚げて行った。

日本軍砲塔の沈黙を良いことに傍若無人に陣内を走り廻るソ連軍戦車は、地上に突出している要塞入口塔や、トーチカの一つ一つを虱潰に砲撃し、分厚いトーチカの縦十五糎、横二十五糎の小さな展望穴まで狙って、正確に戦車砲を撃ち込んでいた。

破壊された砲塔の地下室には、未だ生き残った砲兵が蠢めいていた。撃つ砲が破壊されたので、最後の肉迫攻撃をかけようと攻撃の機会を窺っていた。

戦車が陣内深く侵入して動き廻っているので、ソ連軍野砲も砲撃を停止した。野砲の炸裂と地響が止んだので板垣中尉が、展望穴から敵状を覗こうと顔を寄せた瞬間戦車砲が撃ち込まれ、忽ち頭部が粉砕されて即死した。

砲塔地下に潜っている兵隊は、凝っと砲撃に耐えているのが死よりも苦しかった。地鳴りする砲弾の炸裂は、肉体への強迫であったが、地下室の闇は精神への重圧で

あった。幽閉された死刑囚が闇の中で圧殺されるような怖れに、我を忘すれて飛び出した。地表に出れば忽ち撃たれると知り乍ら、闇の中に蹲って蟄伏するより、明るい太陽の下で思い切り大気を吸って死に度かった。生き抜く苦しみより、死の安らぎを求めて次々と飛び出しては殪れた。

五番砲塔では梅地軍曹他三名が生き残っていた。最早、役立たずの砲座にしがみついていても死があるばかりと、彼等は砲座の下の厚いペトンで固められた地下装薬室に転がり込んだ。厚いコンクリートで四面を固めた装薬室は、出入口も鋼鉄製の二重扉となっていた。如何なる砲爆撃にも耐える絶対安全の防壁であった。内側の鍵を掛けて閉じ籠れば敵はどうにも出来ない。仮に扉を破って侵入した時には、室内の火薬に点火すれば敵兵諸共木ッ葉微塵である。

重く厚い扉は外界の一切のものを遮断して仕舞った。地上の戦闘の凄まじい轟音や雄呼びも断たれ、唯、漆黒の闇であった。音も色も時間も空間も無い密室であった。梅地軍曹は何の手応もない虚ろな、頼り無い闇に耐え切れず、兼てから持ち込んで置いた菊正宗を手探りであけ、喇叭飲みにして次々と兵に廻した。墨汁を流したような光の絶縁された密室では、声をあげる以外に生きている証拠が無かった。酔が廻ると兵隊達は獣のように唸ったり、大声で「畜生め、馬鹿野郎！」と怒鳴っては躯ごと厚いコンクリートの壁にぶち当ったりしていた。梅地軍曹は連日連夜不眠不休の激戦の疲れで酔が出て、崩れ倒れて深い睡りに陥ちていった。

長い睡りのようであった。コンクリートの冷え込みで目を覚した梅地軍曹は、漆黒の闇なので未だ深い井戸の底で睡っているように思えた。頭がガンガンと痛むのが醒めている証拠であった。夜光時計を見ると、九時を指していた。十六日の午後九時なのか、数日を経ているのか分らなかった。真の闇でも兵隊同志の眼が獣のように怪しく光っていた。その反映で幽かに手元が見える。

梅地軍曹は立ち上ったが、脳髄の中核が虚ろに抜けたようにふらふらと揺れ、思考も定らず焦々と混乱して今にも狂い出しそうだった。遂に耐えられずに重い扉を押し開けた。壊中電灯を向けると入口に折り重なって兵隊が斃れていた。光線を動かすと至る処に屍が累々と繋がる惨状であった。蹌踉き出て壊中電灯を輝らして行くと、バラバラの手足胴体や、顔も判別できぬ死骸が浮かんだ。内には壁に靠れて腰を下した姿勢で、眼球が飛び出し鼻から血を吹き出して緒切れていた。鬼気迫る地獄図のよう光景は、砲声が焉んで静寂となると一層凄じく死屍愁々と迫ってくるのだった。

梅地軍曹は生残った兵隊達と声も立てず地下道を逼って要塞司令部に辿りついた。地下兵舎には各砲塔や前衛陣地の肉迫攻撃隊将兵が、各方面から追い詰められて集

っていた。苛烈な陣地防衛戦に土竜のようにして生き残った彼等は、闇の地下壕でも獣のように眼が利き、異状な方向感覚で迷路のような地下道を辿って、地下要塞中を食物を求めて歩き廻っていた。

要塞は地下何層にもなっていた。砲、工、歩、の各部隊の兵舎、将校室等は上層にあったが、戦闘司令部、会議室、被服所、炊事場は中層にあった。下層は医務室で病室の続く奥に糧抹貯蔵庫があった。反対側は発電装置の在る機関室で、最下層に行く昇降機があって、兵器弾薬庫に続いていた。第二地区陣地の各方面から撤退して来た生き残りは、戦闘司令部に隣接する集会室や、兵舎に収容されているので直ぐ糧抹所を探り当て、牛罐や乾パンを盗み出して来た。地下道の処々にしか吊ってない十燭光の坑内灯では、警備の輜重隊には咎められる懼れはないと、次々と数名が交替で忍び込んでは米、酒まで運んで来た。

酒を呑み、飢渇が治まると、追い詰められた獣のよう居直って、ごろごろと寝転んでいた。極限状況に狎れ切った関特演以来の古兵達は、

「敵さん、いくら弾を撃ってもお手を挙げない日本軍に呆れて、このまま行っちゃうさ、内陸部へ行って見ろ、待ち構えた関東軍の精鋭で、袋の鼠さ、俺達は要塞から撃って出て、逃げ帰る敵さんを国境へ追っ払うのよ」

と一縷の望みをソ連軍の退去に托していた。だが司令部の当番兵が『生存者は一丸となって、十八日未明敵陣を突破して鉄道線路に沿って興安嶺の開嶺まで撤退する』と勿体ぶって洩らすと、忽ち要塞内に拡がった。

戦闘司令部に近い混成隊に潜り込んでいた梅地軍曹は、未明の突撃は愈々玉砕戦であろうと思った。万が一重包囲を突破したとしても、敵中数百粁を踏破して開嶺に辿り着くのは不可能に近い。遂に最後の時が来たと覚悟を決めた。だが要塞内に収容されている一般邦人や、婦女子はどうなるのか、自分達軍人は戦いの常として疾うに諦めているが、非戦闘員には玉砕は苛酷である。

司令部陣内には医務班の看護婦や、最後の引揚列車に乗り遅れた軍属の婦女子が居た。彼女達は戦闘が始まると健気にも傷病兵の手当は勿論、炊き出しから弾薬の運搬迄手伝って不眠不休の活躍をしていた。今は疲れ果てて、医務室や炊事場の隅に、三、四名ずつ蹲っていた。防空頭布の内の顔は幽鬼のように蒼白となって息も絶えんばかりになっていた。

その婦女子は、到底部隊と共に要塞より撃って出て、長途の撤退行軍に耐えられ筈が無い。譬え陣内より脱出しても興安嶺の広漠たる草原に飢え斃れるか、曠野を彷徨してソ連軍に捕えられるかであろう。

そうした苛酷の軍命を知っているのか、彼女達は此処彼処に死んだように眠っていた。梅地軍曹は要塞に入って以来、彼女達の兵隊にも劣らない活躍振りを見ている

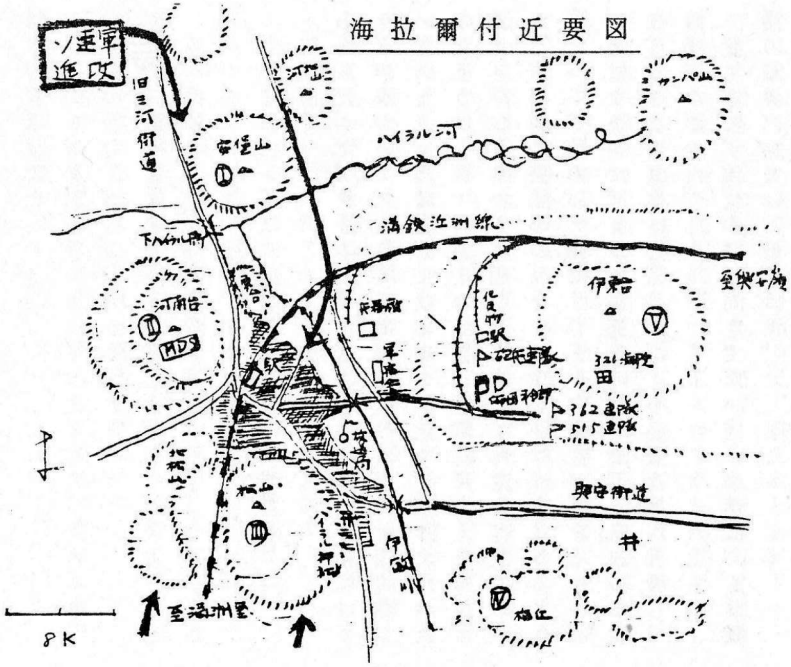
ので不憫で堪らなかった。だが、悲運なのは兵隊も一般邦人も皆同じなのだ、誰もが生きているのは数時間に過ぎない。今、生きていることが不思議なのだ。実は長い夢を見ているのかも知れない。いや、現実そのものが地獄なのかも知れない。地上には火焔が渦巻き凄まじい爆発音が狂噪している。正に地獄の世界である。此の地下要塞には至る処に重傷兵が倒れ、腐った血肉の蒸れ返る悪臭や、哨煙と薬物で噎せ返る臭気が充満している。其処此処から傷病兵の呻きと痛みを訴える叫びがしている。無傷の者はほとんど居ない。血と泥と汗で真黒になって獣のように目ばかり光らせている兵隊達は果して人間であろうか。理不尽極まる鉄火の殺戮の中で人間の魂は消滅して仕舞ったのであろうか。誰もが未だ生きべき人生の半ばにも達していない。然かもその生きて来た歳月は滅私奉公の自己犠牲の半生であった。特に大陸に渡った男達は粗国の為、醜の御楯となって外敵を防ぐ捨石となって生きて来た。それが今、薄暗い地下要塞で死を待つばかりとは一体どうしたことであろうか。梅地軍曹は激しい憤りで狂い出しそうであった。

思いは同じなのであろう、頭を抱え込んで坐っていた兵隊が突然ふらふらと立ち止ると、

「畜生め、露助にやられて堪るものか！　俺と一緒に死んで呉れ」

と絶叫して壁に靠れている女の手を引張った。女は抵抗する力も無く崩れて動けなかった。

海拉爾付近要図



藤木屋酒店の終焉

柴田富佐子

広い昭和通りに、すっぽり蓋をかぶせたような高速道路が出来てから、徳二の町の様子は急激に変化して来た。

狭い軒を連ねて並んでいた二階建の家並みが、気がつくと細長いビルの行列に変っていた。頑固に古い店構えを守っている徳二の店は、きれいに生え揃ったビルの歯並みの中で、一本だけ抜け損った乳歯のようであった。

「この店へ来ると、ほっとするよ」

古い馴染みの年寄りは、誰れもがそう言って、戦前の造りそのままの店内を見廻す。徳二の店の一角だけが、再度の空襲にも難を免れて奇蹟的に焼け残った。じいさんが店の最盛時に建てただけに、かつて四斗樽がずらりと並んでいた棚は、太い柱が黒光りして縦横に組込まれている。四斗樽を扱う事もなくなって、今は何を並べても中途半端で使いにくい空間にすぎないが、徳二は敢えて手を加えずに来た。酒を商って続いて来たこの店の魂が存在するとしたら、居座る場所はそこしかないと思えるからだった。ウィスキーなどの小瓶を並べる棚にはガラス戸がついていたり、味噌樽を並べた棚には傾斜がついていたり、当時としては極めて漸新なデザインだったのだろうが、ウィスキーの品数が圧倒的に増えた今は、ガラス戸つきの小さな棚など、却って邪魔な存在であったし、味噌は袋詰めの品を二種類もおけば事足りるようになって、傾斜した棚にはつまみ物を並べておくしか使い道はなかった。ビールが売上げの七割近くを占める現在、大きな冷蔵庫は必需品だが、不必要な棚が邪魔して置場がなかった。

要するに、現代の酒屋向きでない店の構造は、もう我慢の限界に来ているのだった。

その上、右隣りのビルを建てた時に店全体が右に傾き、左隣りのビルの坑打ちで左によろめき、裏のビルが始まれば後ろにかしいだ。その都度それぞれの建築会社が、一応の手直しはしてくれて、見た目には水平を保っているが、家の芯はもうガタガタで、却って三方のビルに三方から支えられて、やっと真直ぐ立っているような感じさえする。

店の内からも外からも、ビルに建て替えねばならない時機に来ている事は、徳二にもよく解っている。

ビルに建て替えた人の半数は、店だけを残して住いは郊外に移したり、或いは土地ごと売り払って立退いたりしている。残った半数の人々は、一階を店として使い最上階を住居に当てている。

狭い敷地に建ったビルでは、エレベーターをつける余裕がなく、多くは階段だけだから、人々は上り下りを嫌って余程の用がない限り下りて来ない。一度下りて来れば、あれもこれもと用を足そうとするから、持ち切れない買物の荷は「あとで届けて」という事になる。徳二の店の品は、全部が全部と言っていいほど重たい。嫌とは言えずに配達していると、夕方には徳二の足は吸いこめるだけの水分を吸って膨れ上った海綿のようで力が入らず、上げた積りの足が上っていなくて、ほんの少しの段差にもけつまづいた。小柄で肉づきの薄い徳二でも、子供の頃からの慣れで、見かけよりは力があるのだが、もういけない。無理して配達した日は風呂に入っても疲れが抜けず、床に入ってから膝から下がジンジン痛んで寝つかれなかった。止むなく「配達は二階までにお願いします」と張り紙を出したら、ビルに入っている事務所の若い連中は店を変えたらしく、目立って註文が減った。

中元の時期は気が張っているせいか、徳二は比較的元気に動いた。大口の配達は断って、酒二本とかビール一打位の配達を、休み休みこなした。今年は空梅雨で梅雨の時期が暑かった代りに、七月に入ってからは割と涼しい日が続き、働き易かったせいもあった。

配達から帰って自転車を立てている徳二の脇に、小型トラックが止った。車から下りた若い男が荷台に走り寄り、勢いよく荷台の囲いを外した。重ねたままのビール函を二つ、苦もなく持上げて隣りのビルに入っていった。

Tシャツが汗でへばりついた広いその背を、徳二は惚れ惚れとした想いでみつめていた。やがて空壜を入れたビール函を三つ重ねて男は出て来たが、そこにいる徳二の姿に気がついて函の横にそらした顔を綻ばせた。

男は通り一つへだてた武蔵屋の息子である。

空壜を荷台に下した彼は徳二の方へ向き直り

「お体の具合はいかがですか」

言いながらシャツの裾で流れ落ちる汗をぐるぐるっと拭いた。顔からも体からも立ち上る若さの熱気に、徳二は目まいがするほどの圧迫を受けた。

「お隣りにまで出しゃばっているようで、何だか申訳ない気がして」

「なに、こっちがだらしがなくて手におえないからお願いしたんですよ。気にしないで下さい」
「ええ」
「よろしくお願いしますよ」
「じゃ、まだ配達があるもんで、失礼します。お大事に」
男は頭を下げて運転席に飛び乗った。トラックが走り去るのを見ていた徳二は、その時気管を逆撫でされるような痛みを感じた。息をつめて徳二は痛みの遠退くのを待った。ハンドルを握る手に力が入って小刻みに震えだした。
「あら、お父さん、なにしてるの」
帰りの遅い徳二を案じて店先へ出て来た尚が走り寄って来た。
「市村さんが、さっきからお待ちかねよ」
自転車を尚に預け、先に徳二は店へ入った。
市村はレジ台の脇に腰かけていた。
「ようしばらく」
「いつも忙しそうだね」
「うん、まあね、どうしたの、調子悪いんだって」
「大した事ないんだが、年かな」
「年ったって、俺なんかこんなに元気だよ。どっか悪いんじゃないの。奥さん心配してたよ」
「なに、大した事ない」
「大した事なくてもさ、一度診て貰えよ。痩せたじゃないか」
「うん」
「早くいきなよ。尤も、徳ちゃんは小学校の時から予防注射っていうと逃げ廻ってたもんな、今でも医者が恐いんだろう」
市村の笑いにつられて徳二も笑った。笑いながら、笑ったのは随分久し振りな気がした。
尚が茶をいれて来た。
「ところでさ、いい話持って来たんだよ。とっときのいい話。ねえ、奥さん、奥さんだっていい話だと思うでしょう」
「ええ、でも私には、よく解んない」
尚は盆を抱えて奥へ入ってしまった。
「もうそろそろ建ててもいいんじゃない。徳ちゃんとこだけになっちゃった」
「そうだね、いつの間にか周りはみんなビルだ」
徳二は熱い茶が好きだったが、この頃は熱いものを飲み込むと、食道を下りていくのがひどくはっきり自覚できて気味悪かった。
「どうかしたの」
みぞおちを押えて考え込む風の徳二に、市村は顔を寄せた。
「いや、なに、お茶が熱すぎたんだ」
「奈良ゼミって言ってね、徳ちゃんとこは小さいのがい

ないから知らないだろうけど、国語を専門に教えてる塾なんだけど、これがなかなか流行ってててさ、本部は神保町の方なんだが、この辺にも一つ分校を欲しいって言うんだよ。国語ってのは、一度にあんまり大勢は教えられないらしく、そんなに広い教室はいらないんだそうだけど、それでも二十坪位の教室は必要なんだそうだ。ここ三十坪はあるだろう」
「いや、四十二、三あるよ」
「そりゃ立派なもんだ。それだけありゃ、建坪三十五、階段やトイレをとったって二十五、六の教室は十分できるよ。五階建てにしてさ、一階と五階はあんたんとこで使うにしても、二、三、四と貸せるじゃないか。俺んとこもそうだけど、雑居ビルってのは面倒なもんだよ。階によって出入りする人間が違うんだから、いろんな問題が起きるんだ。全部同じ人間が借りてくれるなんて、こんないい事ないんだよ」
「そりゃ、そうだろうけど」
「それにさ、食い物屋なんかに貸すと、汚れは激しいし火の心配はあるし、匂いは出るしゴミは多いし、いい事ないんだ」
市村のビルは、一階から三階までを喫茶店、天ぷら屋、スナックに貸し、四階を事務所、五階を住居として使っている。
「スナックなんて、若い客ばかりだろう。喧しいったらないよ。遅くまでカラオケで歌ってやがって、うちの奴なんか、頭にきちゃって、カラオケやめないなら追い出してくれって毎日喚いてるよ」
「どうして今の若い者は、ああ歌いたがるんかね」
「そこへ行くと、塾ならさ、金払って遠くからわざわざ勉強に来るんだから、静かなもんさ。火は使わないし、汚す訳じゃなし、いいと思うよ」
「うん」
「ね、その上、権利金はすぐに払ってくれるって言うんだから、それで頭金は出来ちゃうだろう、家賃は多少安くしなきゃならないけど、階段から踊り場まで全部ひっくるめて借りてくれるんだから、どう考えたって損はない話だと思うよ」
「まあ、不動産屋のあんたが言うんだから間違いはないだろうけどさ」
「ただ一つ、条件があるんだ。それで俺も実は急いでいるんだけど」
「条件」
「相手は何しろ学校だろう。だからどうでも四月から使えなきゃならないんだよ。それには逆算して十月には工事を始めなきゃ間に合わないんだ」
「十月って、もうみつきしかないじゃない」
「そうなんだよ。だから俺もシャカリキに候補地を探してるんだ」

「でも、頭金はどうにかなっても、後の金が足んないよ」
「それは大丈夫、相手の銀行が貸してくれる事になってる。家賃をそっくり銀行に返していけば、七年位で返せるよ」
「七年も」
「それが普通だよ」
　ここ三、四年の間に、周りの同業者は相次いでビルを新築した。ビルの一隅に納ったガラス張りの店は光に溢れ、誘蛾燈のように若い客や通りがかりの客を捉えて売上げを伸しているのは事実だった。
　いつの間にか徳二の背にひっそりと立って話を聞いていた尚が、
「いいわね」
と呟くように言った。
「考えとくよ」
「考える必要なんかないよ。俺が徳ちゃんに悪い話を持込む訳ないだろう」
「うん。そりゃそうだけど」
「どうせいつかは建てなきゃならないんだから、いい話が来た時に、スパッと決断しなきゃ。お互い神田の生れじゃないか」
「うん」
　土地っ子の二人は同じ小学校で机を並べた仲だったが、徳二が中学を出るとごく自然に家業を継いで酒屋になったのとは違い、市村は家業の畳屋に早々と見切りをつけて不動産屋になった。土地っ子の顔の広さと、古い畳屋の信用を後盾に「市村土地建物」は近辺では名の通った不動産会社になっている。
「建てるにしてもね、その前に決めなきゃならない事があるんだよ。だから、少し時間をくれよ」
「解った。大体察しはついてるよ。じゃ、又来ら」
「うん、有難とう」
　市村を店先まで見送って奥へ入ろうとした徳二は、胸元から何かこみ上げてくるような感じで、慌ててズボンのポケットからハンカチを取出した。ぬるっと生温い感触が喉を通った。
　（矢張り――）ハンカチに残った鮮烈な血の塊りは、徳二に結核の再発を確信させた。
　昨夜の中に尚が電話で知らせたと見え、まだ掃除も済まない店に直子が入って来た。
「もう九時よ、遅いのね」
　尚の手から箒を奪うようにもぎとって、直子は床を掃き出した。
「明子はどうしたの」
「クラブの合宿で山中湖へ行ってる」
「お父さんの具合が悪い時位、家にいたっていいじゃないの。電話したの」

「いいよ、じき帰って来るんだから」
「ちっとも役に立たないんだから、全く」
「へた手伝うと、又店をやれって言われるのが怖いんだろう」
「そんなバカな」
　直子は話しながらも、手際よく棚の品物を並べたり、空壜を片付けたりしている。直子が動く度に、爽やかな風が吹き抜けていくようで、尚は柱にもたれてうっとりと直子の動きを見守っていた。
「お父さんは」
「御飯食べてるんじゃないかしら」
「そう」
　来るたびごとに、直子には店の荒れようが目についた。品物が補塡されないまま棚には埃が薄く積っているし、半端な空壜があっちの片隅、こっちの片隅に転っている。未整理の伝票が束ねて電話の下に挟んである。それは徳二の体の具合が、よほど良くない事を暗示しているように直子には思えた。その日の帳面はその日の中に片付けてしまわないと気分が悪いと言っていた徳二を、直子はよく覚えている。
「お父さん、今日はどうでも病院へ連れていくわ。あたしその積りで、泉を置いて来たんだから」
　直子は茶を飲んでいる徳二に体をすりつけるように坐った。
「前から、疲れた、疲れたって言うから、一度診て貰いなさいって言うのに、病院へ行くの嫌がって、あたしの言う事なんか、何にもきかないんだから」
　尚も台所から出て来た。
「大袈裟なんだよ。わざわざ呼び出したりして、直子に悪いじゃないか、なあ」
　笑いかけた徳二の目を、直子は捉えて離さなかった。
「だめ、またそうやって胡麻化す。どこも悪くなくて、血痰が出たりするもんですか。さあ支度して、早く早く」
　徳二は二人の女に追いたてられて、仕方なく洋服を着替え始めた。
　病院での診察の結果は、肺癌に間違いないという事であった。詳しい検査をするために明日にでも入院するように言われた。
　一週間の検査が終った後、医師は結核の再発だと徳二に言った。今はいい薬が出来てるから、じき直りますよ、とも言った。そのいい薬が混っているという点滴を一日に一回受けるだけの退屈な毎日であった。尚は許されている面会時間の間中、病室にいた。
　店は「事情により当分の間休業いたします」という張紙を直子が書いて張出した。
「大丈夫ですよ。問屋さんの方も組合の方も、お得意さんにも、直子が廻って事情を話しましたから」
「直子のやる事にそつはないだろうけど」

「ええ、直子に任せておけば心配はありませんよ」
長くいた店の者が辞めた時に、車を廃止した。と同時に、自転車では廻りきれない遠くの得意や、自転車では運びきれない大口の飲食店からは手を引いた。残った小口の飲食店も、ごく近くの三、四軒を除いて同業者に譲ってある。店へ買いに来る客だけなら断るのも簡単だろう。よく気の廻る直子のした事に抜かりはないだろうが、徳二が生まれるずっと以前から続いて来た店を自分の代で閉めるという事は、覚悟してたとはいえ、体を貫いて立っていた柱を取外されてしまったような頼りなさに体が震えるようであった。
「またやれる時が来たら開けましょう。お父さんがよくなるまでの事ですよ」
徳二の足を揉む手を休めずに尚は言った。

徳二には三人の娘がいる。
長女の直子は、高校の時も高校を出て銀行へ勤めるようになってからも、よく店を手伝ってくれた。尚に似て色が白く、徳二に似た小造りな顔立ちは日本髪の似合いそうな古風な印象を与えるが、銀行の中でも目立つ存在だった。勤め始めた翌年に得意先の若社長に見染められて縁談が起り、支店長が間に立って話が進められた。店の跡とりにと思っていた直子を失うのは惜しかったが、相手の男も、男の家も、直子の伴侶として申分ない事に徳二も尚も魅了されてしまった。
まだ娘は二人いる、という安心感もあった。
何より、徳二自身が健康で若い者を一人使って結構大きな商いをしていた。
次女の光子は、誰れに似たのか勉強好きな娘で、大学の英文科を出て中学の教師になった。高校生になった頃から、徳二も尚も横文字の本ばかり読んでいるこの娘には何か違う人種に対するような違和感があって、直子のように気軽に「店を手伝ってくれ」とは言えなかった。光子の方も手伝う気は全くないまま大学の先輩と結婚しアメリカへ行ってしまった。
二人の姉が去った後、年の離れた明子は一人娘のように育った。直子のように器量良しではなく、光子のように勉強好きでもない明子はおとなしく養子を迎えて店を継いでくれるものと徳二も尚も思い込んでいた。
所が明子は高校を卒業すると、
「私は絶対に店はやらない」と宣言して短大へ入ってしまった。
物心ついた時には、父はいつも帆前掛けをしめ自転車に乗っていた。荷台ではいつも空壜のぶつかり合う音がしていた。母は起きてから寝るまで、台所と店と倉庫を三角形に動き廻っていた。だれか一人は店にいなければならなかったから、家族全員でゆっくり食事をする事もなかった。休日でも、父はやり残しの帳面や伝票の整理

倉庫の片付けに追われ、母は溜った家事の始末に働き通しだった。
寝てる間以外の時間を、すべて店に縛られ動きのとれない両親の姿に、自分は絶対にあはなるまいと、ずっとずっと前から心に決めていたのだと、明子は言った。こんなゴミゴミした町中に住むのも嫌だ。小さくてもいい、郊外で花を植えたり犬を飼ったりできる家に住みたいと思って来た、短大を出たらいい会社に就職し、適当な人を見つけて結婚するのだと明子は言った。
「それじゃ、この店や、お父さんやお母さんはどうなるの」
明子の意外な言葉に、もう涙声の尚が言うと、
「酒屋なんて、そんな割のいい商売じゃないでしょう。それはお父さんが一番よく知っている筈よ。それなのに店、店、って拘泥るのは、お父さんもお母さんも酒屋に生まれて酒屋に育って、酒屋しか知らないからよ。もっと目を大きく開いて、他の商売や他の暮し方を見てみたら……店なんか辞めたって、土地も建物もあるんだから、二人の生活位なんとでもなるでしょ。ビルにするんだったら、酒屋なんかやるより、喫茶店にでも事務所にでも貸した方が、よっぽど楽で儲かるんじゃないの。働く事ばかり考えないで、少しは楽する事も考えたらいいじゃないの、二人とも、もう年なんだから」
短大に入った明子は、台所はやってくれたが、店の方は意識的に手伝おうとはしなかった。
直子を出すんじゃなかった、徳二にも尚にもそれが悔まれた。人当りのいい気配りの利く働き者の直子は、店にとってかけがえのない後継者であったのだ。
二週間ほどで徳二は退院を許された。
薬が効いて徳二は顔色もよく、体にも元気があった。
「今はいい薬ができて、有難いことだ」と、見舞いに訪れる同業者に話している徳二は、もうすっかり治った積りになっていた。
みそっ歯だらけの幼児の口の中みたいに品物の欠けた棚を見廻していると、諦めた筈の店が又惜しくてならなかった。すっかり片付いた帳場に坐っていると、ガラス戸を開けて今にも客が入って来るような気がする。
「お父さん、灯りをつけちゃ駄目ですよ。お客さんが入って来ると困るから」
徳二が店の電気を全部つけたのを見て、尚が台所から声をかけた。
「わかってる」
徳二は帳場以外の電気を消した。直子の手で帳面はきちんと締められている。徳二が入院した七月の末日で、売掛けも買掛けも残高が纏められ、棚卸しの一覧表も出来上っている。
それは、この店の生命がすでにそこで停止してしまっ

ている事を示していた。例え今、客が入って来て品物を欲しいと言っても、徳二は棚の品を渡す事は出来ないのだと思った。もう店を辞める事を、既定の事実として後片付けをした直子が恨めしくなった。何か一言、直子に言ってやらねば済まない気で、徳二は受話器を取上げた。

「あら、お父さん、どうかしたの」

電話の主が徳二と知って、直子は不安な声を出した。

「お前帳面をすっかり片付けちゃって……元気になれば、わたしだってまだ、もう少し位はできるんだよ」

「ああ、そんな事、何かあったんじゃないかと思ってびっくりしたわ」

「そんな事って」

「それだけ元気があるなら結構よ。ああよかった」

「何がいいものか。まだ辞めると決めた訳じゃないんだ」

「そうですとも、お父さんさえ元気になれば、いつだって又始めたらいいわ」

直子の言葉で軽くなった気持ちとは裏腹に体がひどく疲れて、受話器を置くと徳二はその場にうずくまってしまった。

徳二の咳は次第にひどくなった。絶えず咳をしては、絶えず唾を紙にとる。だから枕許の屑籠はすぐ一杯になってしまう。気管を逆撫でされるようなあの気味の悪い感覚が離れない。食欲が落ちて、元々肉の薄い体が目に見えて痩せてきた。直子は尚と相談して医師に会いに病院へ行った。

「すぐ入院して下さい」と医師は言った。

制癌剤は、その副作用として貧血症状を招くので、病状をみながら或る程度の量しか使えないという。そのギリギリの所で制癌剤の注入を止め、貧血症の治療を始めると、癌は元の勢いを取戻して拡散しだす。そこで又入院して制癌剤を許容量まで使う。貧血がひどくなったら制癌剤を止めて退院する。退院していれば又癌は勢いを取戻す。そうした入・退院の繰返しの間に、体は確実に衰弱し癌の力は強くなっていく。

「残念ながら、今の段階ではそうするよりないのです」

医師は直子に説明した。死の近付く足音が次第に高くなり速くなって徳二を襲っている事は確かだった。

この前退院した時、徳二が市村に例のビルの話を進めてくれと言ったという事を尚から聞いて、直子は市村に会わねばならないと思った。

電話で連絡しておいて、直子は市村の事務所を尋ねた。市村はすぐ事務員にコーヒーを運ばせた。父親の最も身近かな友人として直子は市村には何でも隠さずに話せた。徳二の病状が決してよくない事、長くてあと二、三か月の寿命な事を打開けた。

「ですから、十月に工事にかかるなんて、とても無理で

す。父の留守にあの家を毀すことは出来ませんし、母も私も、気持ちに余裕がないんです」

「知らなかったよ。この間随分元気になって退院したから、もうすっかりいいんだと思ってた。本人もそう言ってたし」

「父は結核だと信じこんでいますから」

「そう。残念だけど、この話はなかった事にして、急いで他を当るよ」

「本当に勝手言って、母も申訳ないと言ってます」

「まあ、又いい話が出る事もあるだろう」

煙草に火をつけた市村は、大きく煙を吐いた。

「徳ちゃんとは長い附合いだからね、こんなガキの時から妙に相性がよくて、小さいのと大きいのと、凸凹コンビだなんて、よくからかわれながら遊んでた」

市村は涙ぐんだ目を窓の外へ向けていた。

しばらく沈黙が続いた。

「所で、後はどうするの、明子ちゃんは矢張り駄目」

視線を直子に戻して市村が言った。

「ええ、絶対に酒屋は嫌だと頑張ってます」

「失敗したね。直ちゃんさえ嫁にやらなきゃ、徳ちゃんも何もいう事なかったんだ」

「そうですね。私だって、はっきり父から店をやってくれと言われていれば、考えも違っていたんですけど」

「あんな大きな会社の社長夫人じゃ、今さら帰って来て酒屋をやれとは言えないね」

「でも、私、あんな父を見てると、可哀想で可哀想で、子供を連れて戻ってもいいと思う事もあるんです。私を育ててくれたのは、あの家の人達じゃありません。父と母です。死にかかってる父の為なら、家へ帰ったっていいと」

「おいおい、心臓に悪いような事言わないでよ。それでなくてもふとっちゃって、心臓が弱いって医者に言われてるんだから」

「冷静に考えてみると、明子の言う事も当っていない事はないんです。住んでる人間がこう減っては、家のように飲食店を相手にしてない酒屋じゃ、成り立っていかないんですね」

「そうなんだよ。若いだけに明子ちゃんは明子ちゃんで純粋に状況判断しているよ。俺のみた所じゃ、この辺で酒屋として生き残るには、業務店を主体とした大きな商いに徹するか、店をきれいにしょろず屋的な品揃えをしたCVS化するか、そのどっちかだと思うよ。どっちにしても、若い人達でなきゃ出来ないからね」

「もう、母も私も諦めているんです」

「これも時代の流れだね。本当に変っちゃったからこの辺は」

坐っている市村の目の下を、左右に高速道路が走っている。右に左に終日走り過ぎる車の列が、この町を変え

二度目の退院の後は、徳二はもう起上れなかった。病室に当てられた奥の茶の間に敷いた蒲団に横たわって、徳二は終日うつらうつらしている。直子が「お父さん」と声をかけると、一呼吸おいてからゆっくり首を声の方へ廻して、今度はまじまじと、まばたきもせずに直子の顔をみつめる。

「苦しい、お父さん」

徳二は頷く代りに一度まばたいた。少しでも多くの空気を吸いとろうとするように、鼻をふくらませ力を入れて息をする。それだけで疲れてしまうらしかった。

「ミズ」

直子はすぐ枕許の吸い飲みを徳二の口に差込んだ。徳二は目をつぶって、一心に水を吸いこんだ。ゴクッ、ゴクッと異常に大きく喉が鳴る。二廻りも三廻りも小さくなって、夏蒲団の下の体は、小学校一年の泉が寝ているようだと、直子は思った。

もう、いい、ありがとう、というように、徳二はまばたきして顎を引いた。タオルで口の廻りを拭いていると、徳二の胸のあたりでゴボゴボという音がし、直子が手を引くと同時に徳二の口からは潮を吹くように水が勢よく吹き出した。飲むことは飲んでも、それが胃に落ちないで逆流してしまうのだ、と直子は思った。食べ物にしても同じだった。食べる事は食べても、数分後に吹き出してしまう。その吹き出す勢いが強ければ強い程、徳二の体は衰弱を早めた。

なぜ胃に落ちないのだろう――徳二の病状が新しい局面を迎えた事は、直子にも察しられた。

食べる事も飲む事もできなくなった徳二の皮膚には、縮緬状の横皺が一面に拡がり、茶褐色にくすんだ。直子は、小学校の頃に上野の博物館で見たミイラのようだと思った。

翌日、徳二は入院した。拡がった癌細胞が食道を取巻き、丁度袋の口を紐が閉めるように締めつけているから、そこから先へはいかないで戻ってしまうのだと、医師は言った。

「何とかならないんでしょうか」

うつむいて涙ぐんだきり口も利けずにいる尚に代って直子は尋ねた。医師は点滴で水分を補給しながら制癌剤で抑えるしか手だてはないと答えた。

徳二の胸には太い注射針が打たれ、四六時中点滴が続けられた。点滴の中には、小麦粉を水にといてねばりが出るまでかき廻したような灰白色の液があった。脂肪分だというその薬は、そのみかけ通り重たるく血液に淀むらしく、徳二はひどく苦しがった。附添婦が目を外している隙に、両手でその針を抜き取ってしまう事も度々あった。

徳二が意志表示をするのは、その行動だけになってしまった。

徳二の瞳の中に直子の顔が写っても、その瞳は微動だにせず、混濁した意識を思わせるだけである。見つめている直子の方が辛くなって、徳二の上瞼をそっと下して目を閉じさせた。

徳二の告別式を最後の花に、藤木屋酒店は百年に及ぶ歴史の幕を閉じた。

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

＊同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

鏡花の女

三戸岡　道夫

〔一〕

いちめんの雪景色。
音もなく雪が川面に降る大川端。
その水面に一羽の白鷺。
その白鷺がばたばた羽音をたてて翔びたつと、あたかも白鷺の精のように、橋の上から川面をのぞく、その美しさが凄いような、芸者小篠の横顔。
すーっと川面をすべって屋形船が入ってくる。
その大写し。
中に客と芸者が乗っている。
舟は雪にうずもれた料亭辰己屋の桟橋に着く。
出迎えに出た小篠が桟橋際に待っており、舟から降りた客の上に蛇の目傘を差しかける。
その小篠のたおやかな腕の曲り……。

これが戦前の名画「白鷺」の出だしのシーンである。原作はもちろん泉鏡花の「白鷺」で、芸者小篠に主演するのは往年の大スター五條すま子である。

内容は薄幸な芸者小篠の幽艶な悲恋物語である。白鷺の精のように美しい芸者小篠は、若い画家の稲木順一が好きになる。しかし小篠は船成金の社長五坂熊次郎に狙われている。だが金の力で迫る五坂社長の言うことを小篠はきかないものだから、憎まれ、意地悪され、最後に雷雨の夜、追いつめられた小篠は簪で咽喉を突いて自殺する……、というのがあらましの筋書きであるが、それを演ずる五條すま子の清艶さといったら、それは例えようがなかった。

これは五條すま子の銀幕生活最盛期の作品で、つややかな大輪の白牡丹のうるんだ花弁の白さを、ぼっとかすんだ霞のむこうに見るような五條すま子の顔は、日本の

美女としては空前絶後の凄艶さで、その美しさを幽幻美にみちた鏡花の世界に美事に生かしきった監督の手腕もさすがであった。

五條すま子の代表作「瀧の白糸」と並んで、トーキー時代に入って彼女の代表作に数えられる。

その昔、この「白鷺」をいつごろ見たのか、速水一良ははっきり覚えていない。多分、戦前、まだ小学生の頃だったであろう。映画好きな母につれられて行った場末の小さな映画館で見たのにちがいなかった。だからその記憶はほとんど朦朧としてしまっているのだが、その時の五條すま子が子供心にも美しかったこと、そして映画の出だしのシーンとラストシーンの鮮烈な印象だけは、今になってもまるで記録にとどめたように一良の中に記憶されていた。

その映画を一良はもう一度見に行こうとしているところであった。道を急ぐ一良の瞼の裏に、雪の大川端を翔びたつ白鷺の羽ばたきが、幻のように甦ってくる。それだけでも一良の気分は浮き立つようだった。

長い間一良はこの「白鷺」を幻の名画だと、すっかり見ることを諦めてしまっていた。戦後三十余年の間、数多くの戦前の映画がリバイバル・ブームの波にのって上映されたが、どうしたわけかこの「白鷺」だけは、まるで神隠しにでもあったように、まったく姿を隠してしまっているのであった。フイルムが戦災で焼けてしまったのかもしれない、そうとでも考えるより外に考えようはなかった。そうでなければこの名作が再公開されない筈はなかった。

見たくても、見られない…、一良はすっかり諦めていた。それがたまたま鏡花生誕百年を記念して、突如として上映の運びになったのである。

場所は銀座のあるホールであった。表通りからちょっと入った、一階が喫茶店、二階三階が高級レストランといったビルの五階にホールがあって、ビルの経営者が文化事業に興味を持ち、飲食業という本業の外に、ホールを文化的な催し物に開放しているのであった。

一良がホールに入るとあまり広くない場内はすでに満員で、辛うじて後の方に一つだけ席を見つけることができた。だが客は更につめかけて、やがてブザーが鳴り、場内の照明が消えたときには、壁にも客がびっしりと立ちはだかっていた。

場内が闇の底に落ちると、スクリーンに字幕が映りはじめた。白黒の古い映画はやや色がうすく、多少ちらちらしたが、しかし見にくいというほどのことはなかった。

字幕が次々に流れるにしたがって、一良は次に現われるシーンを待った。はたして記憶通りの雪景色のシーンがそこに現われるか、どうか。

字幕が終ると、予期したように、大川端の一面の雪景色となった。

一良はあっと息をのんだ。三十年以上も昔の記憶通りの雪景色が、そのまま眼の前に浮かんでいたからであった。

画面は徐々に動き、そして雪の降り積む水面に、一羽の白鷺をカメラは捉える。

白鷺は次第に大写しに……。

クローズアップが終ったところで、白鷺は羽音たかく翔びたった。

画面は一転して、川面にかかる橋の上。

橋の欄干が雪の中に墨絵のような線を描き、そこへ五條すま子の芸者小篠の横顔がクローズアップされる筈であった。

画面は音もなく雪の橋を映しつづけている。

そして、その橋の上へ小篠の顔が……。

その、瞬間……。

画面が白く、ぱっと消えた。が消えたと思ったのは、白い炎がスクリーンを渦を巻いて、斜にゆれて駆けのぼっていったのである。

フィルムが切れたのだった。いや正確に言えば、フィルムが燃えたのであった。古いフィルムは不燃性フィルムではなかったのである。

開演早々のアクシデントに、人々は黒闇の中でいっせいに舌打ちした。そして暫く待っていたのだが、映画はなかなか上映されないのであった。

映画が続行されないのは、実は映写室の中で、不思議なことが起きていたからであった。というのは燃えはじめたフィルムがなかなか消えないのであった。消えないどころか、映写機にかかっていた一巻が燃えつきると、火はそれだけでは満足せずに傍に積みあげてあった他のフィルムにも燃え移り、「白鷺」のフィルム全巻をあっという間に灰にしてしまったのであった。

消火に映写技師が手を下すひまもなかった。まるで火は呪いの火のように燃えひろがって、「白鷺」全部を焼いてしまったのであった。それはまるで映写室を突然の刺客が襲うと、あっという間に「白鷺」を殺し、魔風のように逃げ去ってしまったのにも似ていた。

「白鷺」上映は中止となり、観客はそのまま夕暮れに早い銀座に吐き出された。

期待していたものが突然中断されて、そのまま帰っていく……、そのいらだたしいような、胸が途中でつかえたような、どうしようもない中途半端な不満を胸に抱えたまま、一良も人混みのなかをのろのろと歩いた。

銀座もちょうど中途半端な時間だった。もしこれが映画が終った時間であったなら、銀座はとっぷりと暮れて、ネオンがしっとりと妖しく輝いて見えるのに、昼間でもない、そうかといってまだ夜でもない、半端な時間に放り出されたのでは、銀座は昼と夜とが互いに身体を寄せあいながら、しかしまだ一体にとけあわない、変にぎすぎすした落着かない雰囲気であった。完全な闇を背景にしていないのでネオンや街灯の光は、透明で落着かないガラスのように光り、それは銀座通りの中空に幻の別世界のように輝いてみえた。そのちぐはぐな感じは、まるで今の一良の中途半端な気持の反映のようにも思われた。

考えてみると五條すま子は一度もスクリーンに姿を見せないままに、映画は中断されてしまったのである。こんなことなら何のためにわざわざ銀座まで足を運んできたのかわからない。

火事はまるで五條すま子の美しい顔がスクリーンに現れる寸前、それは計算されたように起ったという感じがした。五條すま子の顔がスクリーンに現われるのを妨害しようと、火はそのタイミングを待ちうけていたように思われる。

夜の闇がまだ十分でないので、その力を十分に発揮できずに中途半端に輝いているネオンが、そのとき一良の眼に飛びこんできた。それは突然暮れなずむ銀座の街頭を襲った稲妻のように思われた。

その稲妻を感じたとき一良は、五條すま子の美しい顔がスクリーンに現われるのを誰かが邪魔しているのではないかと思った。

長い間世間に出ることを押えられていた五條すま子の美しさが、やっと今夜「白鷺」のスクリーンを通してその姿を見せようとしたのに、その一瞬前、それはふたたび何者かの手によって焼失されてしまったのではあるまいか。なぜか一良にはそんな気がしてならない。

五條すま子は誰かに邪魔されている……。

五條すま子の美貌は何者かによって幽閉されている…。

そう思うと「白鷺」のラスト・シーンがネオンの稲妻に二重写しになって、一良のなかにあざやかに甦ってきた。

……

はげしい雨。

きらめく稲妻の凄さ。

いやがるのを無理やりに料亭の一室に閉ぢこめられた芸者小篠。五坂社長の宴席である。

「帰らせてください、お願いです」

涙を流して頼むのだが、女将や、姐さん芸者に邪魔されて、部屋から出ることができない。

追いつめられて、泣きくずれる小篠の髪から、ぱらり、と簪が落ちる。

畳の上の、銀の簪の、大写し。

はっと憑かれたように、それを見つめる小篠の横顔。

やがて小篠の指先が畳にのびて、簪を握ると咽喉をぐさりと突いて、小篠は死ぬ……。

外には狂ったような雨と、稲妻が凄い

……

〔二〕

五條すま子は昭和初期の、まだ無声映画時代の銀幕に彗星のようにデビューした。そしてそのよき時代を十数年、女王星のように光り輝いたかと思うと、またあっという間に姿を消した謎の大スターである。

日本の代表的美人といえばまっ先に名前をあげられるのはこの五條すま子である。そしてまた戦前日本の銀幕の女王といえば、これも異口同音に五條すま子であった。だから「絶世の美女」という言葉は五條すま子のためにこそあるのではないかと、一時一良はそう思ったことがあった。

最初に五條すま子が芸能界に出たのは、舞踊家としてであった。幼い頃から日本舞踊にたしなみの深かった彼女は、女学校を卒業すると同時に、舞踊の舞台にデビューしたのであった。

しかしその美貌はたちまち映画界の眼のつけるところとなり、一年半ばかりで銀幕の世界へとスカウトされることになったのであった。

その頃の映画界には珍らしい華族出身であるということが、五條すま子の名声をいっそう華麗なものにした。そしてその貴族の血を引いた神秘的な美しさは、あっという間に彼女をスターの座に押し上げたのである。

五條すま子はデビューすると、「唐人お吉」、「落花の舞」、「散りゆく花」、「影法師」、「籠の鳥」、「船頭小唄」、「慈悲心鳥」と、たてつづけに主演してその艶麗な容姿で銀幕を飾ったが、なんといってもその美と名声を決定的にしたものは、三年目の春に撮った「瀧の白糸」であった。

「瀧の白糸」は泉鏡花の「義血侠血」を映画化したもので、妖しくも美しい鏡花の世界が見事に映画化され、五條すま子の代表作であると同時に、日本映画黎明期の不朽の名作でもある。

その水芸師、瀧の白糸に扮した五條すま子の美しさ、清艶さは、たとえようもなくて

「……さながら錦絵を見るような情趣に濡れた、美事な作品……」

と、当時絶讃されたものであった。

その後「瀧の白糸」は数えきれない女優によって何回も映画化され、また舞台でも上演されているが、しかし五條すま子の「瀧の白糸」をしのぐものはいまだ出ていない。今後も永久に出ないであろう。

だからその美しさはいまだに不滅の星のように輝いていて、つい最近も一良がある雑誌で「日本映画史」という特集記事を読んでいると、毒舌をもって鳴るさる高名な作家でさえも、五條すま子の前にだけは頭をさげて

「……五條すま子が演じた「瀧の白糸」の美しさは、

いまだに目にやきついている。そのころの五條すま子の美しさというのは、単なる美女ではない、何物かがあった。強いていうならば品格である。当時、気品のない女優は絶対にスターにはなれなかった……」

と書いていた。

五條すま子の「瀧の白糸」については、一良にもかすかな記憶があった。しかし、ずっと昔の、これも小学校の頃の記憶である。

だから、もう幻のようで判然とはしないのだが、銀の簪を楽屋銀杏に結った漆黒の髪にななめにさし、将棋の駒を散らした浴衣姿の瀧の白糸が、夕涼みに現れる、月夜の河原にまどろむ若い書生に近づいていく、その幻の白い花のようにつややかに清艶な五條すま子の美しさは、一良の子供心にもやきつくようだったことを覚えている。

そして五條すま子がその後幽幻美に彩られた鏡花のもろもろの作品を、次々と銀幕の世界に登場させたのは、この「瀧の白糸」の成功が端緒であった。

「瀧の白糸」の次に演じたのが「日本橋」で、これもその妖しい美しさが絶讃され、次に「辰己巷談」、「白鷺」、「売色鴨南ばん」、「南地心中」、「婦系図」、「春晝」、「歌行燈」、「註文帳」、「通夜物語」、「眉かくしの霊」と、女優生活十年の間に五條すま子は百本にあまる映画に主演したが、とりわけこの鏡花もの十二本は、鏡花十二選とよばれて、五條すま子の代表作となり、また今でも鏡花ものを演ずる場合の古典となっていた。

しかし戦争がそろそろその魔手を太平洋の彼方に伸ばしはじめた頃、どうしたわけか五條すま子は突如として映画界から去ったのである。それがあまりに突然で、しかも、その女優生活が花と輝いている最中であったから、世間はあっと驚いた。

それはあまりに突然で、まるで謎のような引退であった。

引退の時、五條すま子は舞踊家の出身らしく、帝都劇場で記念の舞踊会を開いて、銀幕生活の幕をとじた。

一良はその記念舞踊会を、母について見にいった記憶がある。劇場の中は満員で、観客が廊下まで溢れていた。母といっしょに人混みを押しわけてはいったが、しかしまだ中学校に入って間もない一良は、人垣の底に埋ってしまって、舞台どころのさわぎではない。そのうち人に押されて母とは離れ離れになり、気がつくと廊下に押し戻されてしまっていた。

一良はもう舞台を見ようとするはかない努力をあきらめてしまっていた。だが、その時、ふと廊下をふり返ると壁にはめこまれた鏡の中に、華やかな舞台が映っているのが嘘のようにはっきりと見えた。

一良の中には奇妙な興奮が湧き上ってきた。一良は大人達には背をむけて、そのひっそりとした鏡の中を夢中でのぞきこんでいた。鏡の奥で、遠く、小さく、明るい

舞台が、暗闇の彼方の萬華鏡のようにきらきら光るのを、一良は誰にも邪魔されずに思う存分に見た。そして美しい衣裳を着て踊る五條すま子の白い顔を、遠い世界の幻を鏡の底に覗くように見たのである。

こうして文字通り五條すま子は戦前の映画界に彗星のように現われ、彗星のように輝き、そして彗星のごとく消えた。

しかし五條すま子の謎はその引退後もつづいたのである。それはその後ぷっつりと彼女は完全に世間から消息を断ってしまっているからであった。

記念舞踊会を最後に、五條すま子はいかなる映画にも、いかなる舞台にも、そしていかなる雑誌にも顔を出そうとはしなかった。そして終戦後、多くの女優がカムバックした中にあっても、五條すま子だけは絶対にその姿をスクリーンに現わさず、そしていまだに五條すま子の消息は不明なのである。

伝説のような謎の美女……。

だが世間は彼女が姿を隠せば隠すほど、その存在を知りたがった。その絶世の美女をもう一度この眼で見たいという大衆の願いを受けて、テレビ局や雑誌社が何回となく五條すま子を追いかけたのだが、それは一度も成功することなく終っていた。

〔三〕

画家の速水一良がさる実業家から、美人画の依頼を受けたのは半年ほど前のことである。

一良の艶麗な美人画には愛好者が多い。しかし一良としてはそろそろ単なる美人画家からの脱出を考えていたので、最近は美人画の注文はなるべく受けないようにしているのであった。しかし今度の注文主は昔からずっと贔屓を受けている実業家でもあったので、断わるわけにはいかなかった。そろそろ七十才に手の届こうというその実業家は、ことさら一良の初期の美人画が気に入っていて、今度の注文も

『消えいるように美しい美女を描いてほしい』

というのが条件であった。いまの一良としてはもう描きたくないテーマであるが、しかし仕事とあれば描かねばならない。

消えいるように美しい女……

どんな題材がいいのだろうと、いろいろ想を練ってみるのだが、なかなかいいヒントが浮んでこないのであった。

一良の画室には鏑木清方の「築地明石町」がかかっていた。一良は鏑木清方に師事していたので、勉強のために師の絵をずいぶんと模写したものであるが、中でも一番好きなのがこの「築地明石町」で、特に原寸大に丹念

に模写したものであった。その模写は我ながら見事な出来ばえで、表装して壁にかけると、それはあたかも本物の絵がそこにあるような錯覚に陥るほどであった。

この絵を見ていると不思議に心が落着いた。今は亡き師が絵の中から無言の声で呼びかけて、一良をはげましてくれるような気がするのである。だから仕事の後の疲れをいやしたり、あるいは画想を練ったりするときにはすこし離れた位置に坐ってこの「築地明石町」を眺めることにしていた。

髪を夜会巻きにした気品のある女性がすらりと
立って、ふと、うしろをふり返っている。
青瓷色の着物に黒の羽織。
羽織の裏にちらっと覗く赤と、下駄の鼻緒の朱
色とが、清楚ななかに、なまめかしい。
足許には下葉を枯らしはじめた朝顔が乱れ、遠
くに見える東京湾の潮風が、築地明石町まで匂
ってくるよう……

消えいるように美しい美女とは、こういう絵をいうのだろうか。

そのとき、ふと一良のなかに浮んだのが、五條すま子の映画「白鷺」だったのである。「築地明石町」の清澄な女の顔が、「白鷺」の五條すま子の顔を一良のなかに呼び起したのにちがいない。

たちまち一良のなかに白鷺の幻想が霧のようにひろがっていった。

白鷺の精のように美しい美女……。

これならあの実業家も満足するだろう。

一良は昔見た映画「白鷺」の幽美なシーンを憶い出してみた。

一面の雪景色。
川面に音もなく雪が降る。大川端。
水面から翔びたつ一羽の白鷺。
橋の上から川面をのぞく、白鷺の精のように美
しい芸者小篠……、五條すま子の横顔……
……

だがどうしたわけか、小篠に扮した五條すま子の顔になると、どうしても細部がはっきりと浮かんでこないのであった。

しかしそれは無理もないことだった。一良が映画を見たのは三十年以上も前のことである。旧い記憶は次第に細部がうすれて、ただ五條すま子の美しさだけが幻の花のように一良の中でゆらめいているからであった。

だが、またよく考えてみると、五條すま子の美しさというものは本質的にそういう美しさではないのかと、一

良は思うのである。

五條すま子の美貌はそれを構成する細部が一つ一つ美しいというのではなくて、ちょうど霧のなかの白い花の銀幕いっぱいに咲いている……、そういった美しさだと映っている、ということ自体がすなわち美なのであって、顔の形がこうだからとか、瞳がこのように美しい、というのではなくて、顔の存在自体がすなわち美なのであった。美貌の要素をいちいち分析する必要がない。だから観客は見た瞬間、その美の細部に立ち入る前に、その美に霊気のようにうたれるのである。だから、それはあたかも神秘な森の細部を詳述せよといってもそれが出来ないように、五條すま子の顔の細部をはっきり思い出せというのは、それは本来的に不可能なのかもしれなかった。

しかし一良が絵描きとしてその美を絵絹の上に描こうとすれば、絵師としての眼がいったんその細部に潜入しなくてはならないのであった。なんとかして映画「白鷺」をもう一度見ることはできないものか。

そんな思いにかられている、ちょうどその頃、新聞の片隅に、鏡花百年祭の催しの一環として「白鷺」の特別上映が企画されているという記事を見つけたのであった。

やはり「白鷺」は生きていたのだ……。

これで消えいるように美しい美女が描ける……。

しかしその一良の期待はフィルム火災という突然事故によって、あえなく消えてしまったのであった。

心残りが澱のように一良の中に残り、それは日日がたっても消えなかった。それは描こうとしている美人画が挫折したという困惑もさることながら、同時に折角めぐり逢えると思った幻の美女との再会が、こわれてしまった名残り惜しさにもつながっていた。

たとえ全焼したとはいえ、少しぐらいの焼け残りのフィルムがあるのではあるまいか。

そう思うと一良はやにわに電話帳を引っぱり出し、銀座のホールへ電話をかけてみた。しかしフィルムはやっぱり跡かたもなく全巻燃えてしまったということです。

「なぜ全部に火が廻ったのか、今もって不可解なのでこんな事件は今回が初めてで…、映写室がまるで魔火に魅入られたとでも他に言いようがありませんね」

ホールの支配人が答えた。

魔火に魅入られた…、という言葉が、一良のなかで馬鹿に鮮明にひらめいた。そして一良は五條すま子の背後に、黒い魔のようなものをふと予感したのであった。

「そうすると、そちらにお伺いしても無駄でしょうか」

一良は駄目とわかっていながらも未練が尾を引いて、そんなことを言いながらぐずぐず電話を長びかせていた。

しかし支配人は意外に親切で、そんな一良の親切にも顔をしかめずに

「あまりお役には立たないかもしれませんが、なにかお仕事の関係で必要なのでしたら…」

「ええ、実は、少しばかり…」

「それでしたら、あのフィルムの所有者をご紹介いたしましょう。そこへ行けばなにか「白鷺」の手がかりが掴めるかもわかりません。大変な鏡花コレクションの所有者だと聞いておりますから……」

〔四〕

ちょっとした映写機の過熱がもとで、積んであったフィルムまでもが全部焼けてしまうなんて、まったく不可解な気がする。

しかし不可解なことは続いて起るものらしい。一つの不可解が次の不可解を呼ぶように、五條すま子についての不可解な出来事が一良の上に再び起ったのであった。

その日一良は電話をかけてから、神田の古本屋街へ出掛けた。頼んでおいた古い画集が見つかったという電話を受けて、それを受取りにいったのである。

画集を受取った帰り時間があまったので、久しぶりに古本屋を一軒一軒のぞいてみた。いつも一良が探すのは美術関係に限られていたので、自ずと行きつけの店も限定されてしまっていたが、その日は暇にまかせて一軒一軒歩いてみると、種々雑多な本が洪水のように眼の前に押しよせて、結構それはたのしかった。古本の臭いがしめやかにたちこめたうす暗い本棚の間を歩いていると、ふと、一冊の背表紙が眼にふれた。

『新興シネマ名場面集』

それは戦前に出版された古い映画雑誌の臨時特集号で、興味にひかれて頁をめくってみると、その中頃に五條すま子の「日本橋」のスチール写真がのっているではないか。

芸者姿の五條すま子が三味線を片手にしてすらりと立ち、愁いをふくんだ美貌が天井の彼方を見つめている、その扇のように長く裾を引いた立姿が、錦絵のようにすっきりと画面のなかに納っていた。

この写真はどこかで見た記憶がある。たしかに母が持っていたプロマイドと同じものにちがいないと、一良は昔を思い出した。

映画の好きだった一良の母は、女優のプロマイドを買ってきては小さな額に入れ、茶箪笥の上や本箱の上などに飾っていたが、たしか床の間の隅にひっそりと立てかけてあった写真がこの五條すま子の「日本橋」にちがいなかった。母は床の間を床の間として使わずに、鏡台を置いたり、人形ケースを置いたり、小型の本立て、裁縫箱、宝石入れ、それから花瓶に花をさしたりして、家の

中の自分のコーナーとして勝手気ままに使っていたが、五條すま子のそのプロマイドはたしか鏡台のわきに置かれていたのだった。

くっきりとした一重瞼なのに睫毛が濃いので眼もとが怨んだように濡れてみえ、髪も前髪や鬢の大きい古風な髪形なので、黒くて豊かな髪の重い触感がずしりと一良の方に伝わってくる妖しい美しさ…、プロマイドは色が褪せかかって茶色味を帯び、そして床の間はすこしうす暗かったから、五條すま子の芸者姿は神秘さを増して見えていた。

その写真を見なくなって、すでに久しい。もう遠い過去のなかに埋れてしまっている、と思っていた写真が、突然いきいきと鮮明な姿で一良の眼の前におどり出たのは驚きであった。

この写真がほしい。とくに先日、映画「白鷺」を見逃しているだけに、この写真はぜひとも確保しなければならないと思った。

裏表紙をひっくり返して定価を見た。二万円となっている。高いな…、どうしよう…、一瞬迷った。ほしいけど…、二万円では…。考えてみればこの写真集全体が欲しいというのではない。欲しいのはこの五條すま子の写真一枚である。とするとこの写真一枚が二万円ということになる。いくら欲しい写真とはいえ、すこし高すぎるのではないか……。

だがその時、一良のなかにある失敗の記憶が甦ってきたのであった。一年ほど前、大阪へ出掛けたときのことだった。道頓堀に近い小さな古本屋の店頭で一冊の本を発見した。昭和初期の古い映画雑誌で、なんとなく頁を繰っていると、中に五條すま子の「瀧の白糸」の写真が一ページのっていた。

それは馬車にゆられて半ば失神した瀧の白糸の顔を、鳥打帽をかぶった馬丁姿の村越金弥がのぞいている場面で、瞼を閉ぢて倒れた五條すま子の横顔が、くっきりと人形の顔のように白かった。その美しさは一良を魅了した。特に日本髪の似合う純日本風の美人がいなくなったこの頃なので、その瀧の白糸の美しさは美人画家としての一良の心に泌み入るようだった。

しかしその時の一良はとりたてて五條すま子のファンというわけでもないし、また古雑誌の値段があまりに高かったので、購入するのにちょっと迷った。どうせすぐに売れるはずはない、そうたかをくくって翌日買いにいくと、一日違いで古雑誌は売れてしまっているのであった。それはまるで神隠しにあったようであった。一良は少しばかりの値段にこだわったのを悔んだ。だが悔んでみても、売れたものはとり返しがつかない。一良はにわかに掛替えのない貴重なものを掌の中から失ったように思い、失ってみると五條すま子の瀧の白糸はまるで天女のようにますます光り輝くのであった。

あの失敗をくり返してはならない。

見つけた時に買わなければ、買いそびれてしまうにちがいない。そのとき一良はなぜかその古写真集を狙っている別の人間が一良の背後で待ちかまえているような気がして、後をふり返ってみた。しかし勿論そこには誰も居はしない。

一良は思いきって二万円で買った。一冊の古写真集に大枚を投じた軽い後悔と、同時に思いきって贅沢な買物をした後の豊かな満足感にひたりながら、一良は古本街をゆったりとした足どりで歩いて帰った。

だが不可解は、一良が家に帰ってから起ったのであった。

帰宅して画室の椅子にもたれ、さて、ゆっくりあの美しい写真をたのしもうと、わくわくする気持で頁を開いてみると、どうしたことか、あの五條すま子の「日本橋」の場面だけがないのであった。

おかしいな……

頁をとばしてめくってしまったのかもしれない…、もう一度頁を丹念に繰ってみたのだが、やはり無いのである。

そんな馬鹿なことが……。

一良は再度始めから一頁一頁を丹念にめくってみたのだが、しかしどうしても見当らないのであった。

もしかして古本屋の店頭で見た「日本橋」の場面は錯覚だったのか。いや錯覚などである筈はない。一良はたしかに見たのである。間違いない。見たればこそ、二万円も投じて古本一冊を買ってきたのではないか。載っていなければ買いはしない。

すると買う段になって一良は本を間違えたのか。しかしいま眼の前にあるのは間違いなく『新興シネマ名場面集』である。

とすると、あと考えられるのは、その「日本橋」の頁だけを誰かが切り取ったという場合である。だが、そんな隙が一体どこにあったというのか。一良はあのとき古写真集を手にとると店番のおやじに渡し、おやじは眼の前で包装し、一良はそのまま受取って持ち帰ってきたのである。他人が中の頁を切り取るなんて芸当が出来るはずはなかった。

古本屋の店頭ではたしかにあったものが、今はない。不可解である。しかしその不可解が事実として眼の前に起きているのである。一良は愕然とした。

五條すま子の写真が一良の手に渡るのを、見えない何者かが邪魔しているような気がしてならなかった。ちょうど「白鷺」のフィルムを焼いて五條すま子の姿が一良の眼にふれるのを邪魔したように……。そうしてみると大阪で買いそこなった古雑誌も、本当は買いそこなったのではなくて、見えない何者かが邪魔をして、一良が買う前にすばやくそれを隠してしまったのかもしれないの

であった。
なぜ、そんなことが。
そういえば一良は何かの雑誌でこれと似たような話を読んだことがあるなと思い出した。それは、かってある出版社が「芸能鏡花十二選」という写真集を出そうと企画したことがあった。映画の方は五條すま子の写真を、舞台の方はあけぼの寿美と、二人の女優を中心に編集部では写真を集め、編集も終って、いざ印刷製版という段階になって、突然原因不明の火が出て、五條すま子の写真の方だけが全部焼けてしまったということであった。当然その出版はとり止めとなった。しかしライバルの舞台女優あけぼの寿美の方だけは後日「あけぼの寿美十二選舞台写真集」と銘うって、当初企画のものよりもはるかに豪華な写真集が、別の出版社から出版されたということであった。
なぜ、そんなことが。
一良は考えこみながら、ふと眼をあげた。
あたりを見廻した。
そして視線を戸外の広い空間に移した。
するとその広い宇宙のどこかから、この地球の上に見えない手がニューッと、五條すま子の美を奪い去りに、伸びてきているのではないか…、そんな幻想に一良はふとかられるのであった。

〔五〕

翌日、一良は銀座のホールを訪れた。
事務所はホールのあるビルの九階にあった。支配人は初老の落着いた人間で、焼失したフィルムの所有者の名前と住所を教えてくれた。住所は湯島だった。
「もうご年配の方なんですか……」
と一良が問いかけると
「ええ、もうだいぶお年寄りですね」
「どんな方なんですか」
「……」
だが、それ以上は何も答えてくれなかった。
一良はお礼を言って事務所を出た。
タクシーに乗って、湯島天神下あたりで降りた。
このあたりの方角かと見当をつけて道を曲ると、そこは急にひっそりとして、人通りのない、びっくりするような古い家並の路地であった。古びた格子づくりの玄関、格子のはまった出窓、雨にさらされて木目の浮き出た板壁などが直接路地に面して森閑と並び、古色蒼然としたそのたたずまいは、まるで明治時代に一瞬迷いこんだのかと錯覚した。ぴったりと戸を閉めきって死のような家の連りは、果してこの中に人が住んでいるのかと疑われるくらいで、この一角だけにしろ東京の中にこうした家がいまだに残っていること自体が不思議なことのように

思われた。
その路地を抜けたとき、はっと眼の前にそびえ立つものがあった。湯島天神の男坂であった。一良はその急な石段を一歩一歩のぼっていった。教えてもらった番地は同じ湯島でも、そこからは反対の方角のようであった。湯島天神の境内を抜けると、ゆっくり南にさがっていった。
妻恋神社の前に出ると、境内に天を魔す巨大な柳がそそり立っていた。その天のはるかな高みからは柳の枝が、まるで乱れた女の黒髪のように降りそそいでいた。
妻恋を下りて左に折れると、片側が高い石垣の坂道である。坂道の両側には歳月を経た仕舞屋や、塀で囲まれた古い屋敷などが、まだ湯島、本郷という名前にふさわしい臭いを発して、そこに残っていた。一良の探す家は、そこをずっとのぼった奥の一角にあった。
ひときわ古びた板塀ごしに、ここにも大きな柳が茂っていて、柳の葉の雨が道の上に、降るようにせり出していた。
一良はその屋敷の正面に立った。
古びた門はひっそりと閉じ、塀の中に手入れの行き届かない庭木の茂みが見えた。
一良は門の呼鈴を押してみた。だが誰も出てこなかった。留守なのか。もう一度押してみる、今度は少し長く…。しかし何の反応もない。呼鈴が故障なのか。
一良は潜り戸をそっと押してみた。
潜り戸は閉もたてずに、すーっと開いた。
中を覗いた。
庭の荒れ方は予想以上だった。奥の方に稲荷の小さな赤い鳥居が見えた。庭木は勝手な方向に枝を伸して先端同志がからみあい、草はいちめんに乱れて、昨年の枯れた草の間から今年の草が生い茂っている有様であった。
それはまさに廃屋だった。
「ごめんください、ごめんください」
声をかけてみた。
誰も出てこない。人の住んでいない屋敷に迷いこんだのかと思った。
だがその荒れた庭をさらに奥に入っていくと、どきっ、とした。
廊下のガラス戸を一枚あけて、老人が一人で寝ているのが見えたからである。
うす暗い部屋に横たわった老人の顔には、無断で屋敷に入ってきた者に対する警戒心が現われていた。だがその顔の警戒心は単にそれだけではなかった。もっと別の頑なな警戒心と抱き合せになっているような気がした。
一人暮しのこの老人は、偏窟で、狷介のようであった。だから最初は一良は口もきかなかったが、一良が廊下に半ば腰をおろして話しかけると、「わしは『白鷺』のフィルムが焼けてしまったショックで寝ているんだよ」

と弱々しく言った。だがそれは吐きすてるような言い方であった。一良を老人の手許から再び何かを持ち出そうとしてやってきた人間だと警戒しているようだった。

「もう、何も貸さんよ、あんた達には…」

老人はわめくように言った。

「フィルムが焼けた…、今度でもう三回目じゃないか。だから最初からわしは嫌な予感がしていた…、また焼けるんじゃないか…、だから貸すのは嫌だと言ったんだ…。それをやれ今年は鏡花生誕百年記念だから協力してくれの、五條すま子の絶世の美を老人の一手に埋れさせておくのは勿体ない…、なんてうまいこと言って、わしを言いくるめてフィルムを持っていってしまったんじゃ。老人をいたぶるのもいい加減にしろと言いたい。それにわしの手許から持ち出したものはフィルムだけではない。写真もそうだ、映画雑誌もそうだ、プロマイドがそうだ。五條すま子の美の結晶を一つ一つだまくらかして持ち出しては、一つとして戻ってきたことがない。必ずなにか不吉なことが起って、帰ってこない。もう貸さん…、絶対貸さん…、さっさと帰ってくれ」

老人は蒲団から上半身を起すと、憑かれたように一気にまくしたてた。

「私はフィルムや写真を借りにきたのではありません」

「なんだと……？」

「私は絵描きです。五條すま子をモデルに絵を描きたいのです。五條すま子の美を復元したいのです」

老人のなかで何かが変っていくのがわかった。

「五條すま子の美の復元だって……？」

老人はつぶやくように言い、そして

「五條すま子の美の復元…」

次は歌いあげるようにそう言った。老人の頑なな姿勢が急速に甘美な世界へと崩れていくのがわかった。

「あなた、美は絶対ですよ」

老人は言った。

「五條すま子の美は絶対ですよ。それを人々は寄ってたかって壊そうとする、この世から消そうとする、わしの手から奪おうとする。あなたのようにそれを復元しようなんてことを言う人はこれまで一人もいなかった」

「私は絵描きです。絵のモチーフとして、五條すま子の美しさがほしいのです」

「モチーフでも何でもいい。あなたは五條すま子の味方です。私の味方です。私は味方がほしいのですよ、ねえ、あなた……」

老人はいつのまにか蒲団の外に這い出してくると、声を低め

「五條すま子は狙われているのですよ」

ささやくように、哀訴するように、そう言った。

「狙われている？」

「そう、五條すま子があまりに美しすぎるからですよ。

あまりに美しいので、世間に出るのを邪魔されている。誰かが五條すま子の写真が世間に出るのを邪魔している。この世から五條すま子の『美』を抹殺しようと計画している者がいるのです」

「そんな馬鹿な。五條すま子はすでに引退した戦前の女優ではありませんか。今さらそんなことをする人が…」

「ところが、それが居るのです。美は絶対。美は永遠だからですよ。五條すま子の美はたんに戦前だけのものではない。日本映画史上に空前絶後。ちょうど二千年前のヴィーナスが今の世でも最も美しいように、五條すま子は引退してもその最高の『美』は今も生きているのです。考えてもごらんなさい。今の女優のなかで五條すま子の美に勝る女優が居りますか……」

言われればたしかにそうである。

そこまでくると老人は一段とあたりに気遣うように

「ということは私も同時に狙われているのです」

「狙われているって…？」

老人は哀願するような口調になって

「わしは五條すま子についての、かなりのコレクションを持っているが、それが狙われている。不安です。わしは身辺をいつも誰かに監視されているような気がしてならないのですよ」

老人はその昔五條すま子の付け人として、男衆をやっていた人間であった。もっと正確に言えば、五條すま子が華族の令嬢として学校に通っていた頃からの家僕であって、五條すま子が芸能界に進出するとそのまま男衆として付きそってきたのであった。

だから老人は今でも五條すま子のことを「お姫さま」と呼んでいる。昔の気持は今も変っていない。いや、年をとってくると、ますます思いは一途に昔の五條すま子の美へのみに集中し、五條すま子の美の幻のみが頭の中に残り、歳月は醜い記憶は洗い流して、五條すま子の美の純粋さのみがますます老人の中でとぎすまされていくのであった。

晴れた一日が暮れようとしていた。空の彼方はまだ明るいのだが、庭の木下蔭で、部屋の奥まった部分には、暮色が触手をのばし始めていた。

そのとき玄関口の方に、ばさっ、と鳥の羽ばたくような音がした。夕刊が入ったのである。

新聞には今年の芸術賞の記事が大きく取り上げられていて、演劇部門では、あけぼの寿美の受賞が大きく報ぜられていた。

あけぼの寿美

芸術賞　受賞

と四段抜きで書かれた横に、あでやかに笑った写真が大きくのっていた。

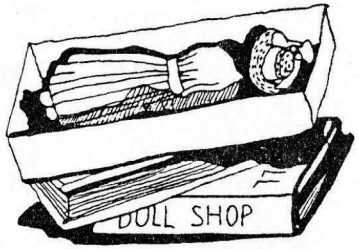
「やっぱり今年の受賞はあけぼの寿美ですね」

ない。
春の日はすっかり暮れていた。
一良は再訪を約してそこを辞した。
夕闇につつまれた門をくぐって道に出たときだった。ふっと後をふり返り、この屋敷のなかに実は五條すま子が住んでいるのではないのかと、一良はそんな予感にかられたのであった。

本郷通りに出ると駒込にむかって歩いた。
片側は大学の構内で、赤煉瓦の塀の中に銀杏の林が黒々と静まり、反対側の商店街には書店や喫茶店やいろいろな商店が、明るく軒を並べていた。しかし久しぶりにこの通りを歩いてみると、古本屋の数がずいぶん減っていた。
だが、その、とある古本屋で、またも一良は第三番目の不可解に出逢ったのであった。
間口は狭くて奥行きの長い、美術や演劇関係の古本ばかりを集めている店だった。そこで一冊の雑誌を手にした。「花形スター名鑑」と題した古い映画雑誌の付録で、百人ばかりの映画、舞台の俳優が紹介され、俳優の素顔の写真のほかに、代表作の扮装場面や、住んでいる邸の写真が紹介され、参考記事として、本名、住所、出身地、身長、体重、趣味、これから演じたい役柄といったようなことが、おきまりのように書かれていた。
女優の部のトップにはもちろん五條すま子の写真がのっていた。そして邸の写真も。
だが邸の写真を見たとき、一良はあっと驚いた。それはいま一良が訪れてきた、あの湯島の老人の家ではないか。門、屋敷を取巻く板塀の形、その上からのぞく屋根の形。まちがいない。柳の木までもがはっきり写っていた。そうするとあの老人の家は、かっては五條すま子の家だったということになる。
一良は「花形スター名鑑」を買うことにきめ、店の奥に坐っている店番の老婆の方に歩いていった。だが、そのとき、一良の中をあの不安がかすめて、ぎくっとなった。
確かめてみなくてはならない。
一良は立ちどまって、頁をめくり、五條すま子の頁をたしかめてみた。
やはり不安は的中していた。五條すま子の頁はかき消すように、なくなってしまっているのであった。神田の古本屋で起った不可解が、またこの本郷の古本屋でも起ったのである。
一良はふっと背後に何かを感じた。背後に誰かが立っている。一良の後に見えない人間が立っていて、見えない手が、五條すま子の写真の頁をふたたび抜きとった…。
背後に誰かが立っている。
その気配に一良は後をふり返った。だが、もちろん誰

も居はしない。気のせいだった。
一良は古本屋を出た。
「誰かが五條すま子の『美』を抹殺しようとたくらんでいる」、哀訴するような老人の声が甦ってきた。こうした不可解な出来事に再三遭遇すると、一良自身も老人の言ったことがあるいは本当なのかもしれないと思うようになってきた。
五條すま子が映画界を引退した時に、何者かの手によって、その『美』を抹殺してしまおうとする陰謀の魔手が、日本国中に網の目のように張りめぐらされたのにちがいない。だからどこかにその『美』が現われそうになると、見えない黒い手が素早くそれを察知して、事前に湮滅しまうのだ。
一良が何回も感じた背中の気配いは、きっとこの黒い魔手にちがいない…、五條すま子の美を追いかけていると、いつもこの魔手に尾行されているような気がしてならないのだった。

（つづく）



編集後記

第十号の記念号を出し、やれやれと思っていたが、すぐに、十一号の締切りだ、校正だという話に追われて、正月が終った感じである。

十一号も九十頁を越え、記念号に迫る勢いで、同人諸氏の健筆を祝福したい。本誌同人の平均年齢はかなり高い。息切れしないように頑張りたい。

第九十回の芥川賞、直木賞が決定した。直木賞は、前回に続いて、高年齢者が受賞された。人生のさまざまな経験を積まれ、五十歳をだいぶ過ぎての受賞。神吉、高橋両氏の今後の活躍を期待したい。

一月二十三日のY氏に『多様な自費出版、第二期のブーム」と題するかこみ記事があり、その最後の方に、「自費出版で世に出た人も多いが、それは例外。自費出版のダイゴ味は、世上の欲とは無縁なところにある』とあった。

たいへん感概深く読んだ。しかし、世上の欲、つまり金銭的なこと、名声などと完全に無縁になり得るのか、とふと考えてみた。同人雑誌に作品を発表している者が、何かを期待してはいけないのか。「自分史」に興味がなく、秘かに作家たらんと願う者は、死ぬまで野心家でいいのではないか。変に悟りすましたふりをすべきではない。己の能力をわきまえ、絶望に耐える心を常に鍛えておくことである。ご精進を祈る。

（も）

「まんじ」第十一号

昭和五十九年二月十日発行　（非売）

編集　大和禎人

印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三ー十一
☎（261・5743）

発行　「作家群」（まんじ）編集部

〒一〇一東京・千代田区神田駿河台二ー九
☎〇三（二九三）〇〇九四　柴田方
郵便振替口座　東京二ー一九〇八一五

……目　次……

故里の案山子……山本儀一……1
さいたま屋歳時記……左老庵……11
モーニングコール……大和禎人……21
○町○丁目○番地（五）……山口健二……29
ハイラル挽歌（十二）……金子正義……38
鏡花の女（下）……三戸岡道夫……50
編集後記……66

表紙・カット：岸田幸雄

故里の案山子

山本儀一

骨高な頬にかすかに赤みがさし、ほつれ毛の見える額から真直に通った鼻筋の下に形のよい唇があった。眼付は少しきつい感じだが、いかにも働きものの商家のかみさんといったところで、亭主と交す言葉のキビキビとハスキーなのも、かえって生々しい。働く女の姿というものは、健康な色気を湛えているものだ。

こういうタイプの女は、商売はなり振り構わず働くだろうし、ベッドの上でも燃え上って乱れるだろう。一旦男に惚れこんだら、後先考えず突っ走るかもしれない。

銀作は小店の女房にこだわって妄想を遊ばせる自分を滑稽に思った。どこかで見かけたような心当りがある顔だが思い出せない。いや、心当りがありすぎて特定できないんじゃないか。漆塗りの箱に敷いた白い飯の上にうなぎらしい一切れが載っており、その隣りに煮干のような尻尾が申訳なさそうに連れそっている。いいんだ。五百五十円のうな丼だもの、そう恐縮しなくたって。香りは確かにうなぎだし、量も銀作の胃袋に合っている。しかし店内はひいき目にもきれいとは言えなかった。ガラス格子をあけると右手にカウンター、高い腰掛が五六脚並んでいるだけ。カウンターの奥には大小のボール箱が乱雑に積んであり、背後の戸棚の色もくすんでいる。通りに面した窓際で亭主はせわしげにうなぎを焼き、女房はお重に飯をつめていた。午下りだが、どこかへ出前があるらしい。

「帰りにタカシを乗せてきてやって、そばだから。少く待っててやれば」

女房は銀作の後ろにかかっている時計を見ていった。亭主はうなずいた。男前だが無精髭が伸びている。

亭主が自転車に乗って出かけると、銀作は二杯目の茶を所望して煙草に火をつけた。入れ歯の間に飯粒が残って、よく口を漱がないと気持が悪いのだ。タカシと言ったな。あいつもたしか、タカシと言ったような気がする。

おれを子分にして威張っていたワルガキだ。
「もうこのお店は長いんですか」
一口すすってから銀作はきいた。
「そう、まだ五六年ぐらいなものです」
素気ない返事が戻ってきた。無意味な問いかけであった。銀平は同じタカシのかあちゃんに、ある懐しさをこめて言ったに違いないのだが。
店を出た銀作は停留所脇の小路を通って踏切を渡り、六十年前に幼年期を過した家並の中へ歩き出した。
妙な事を尋ねた自分が、また可笑しかった。タカシという名をきいて、銀作はうなぎ屋のかみさんの印象を誰かとダブラせようとしたのだ。タカシという名も確信はないが、もうそれでよい。故里の空気がもっている幻想作用なのか。幼時の記憶は綴れ衣のように果敢なく脆いものだ。意識の下に潜んでいるうちに、あるものは消えさり、あるものは鮮やかな色合を加えられて甦る。それが過去の事実と似ても似つかぬ貌となったとしても、記憶の持主にとっては揺がし難い真実なのだ。銀作にとってタカシのかあちゃんが現れるのはたった一つの場面でしかない。
線路ぎわの原っぱで、いつものように銀作はタカシと遊んでいた。兄貴分の子供たちが学校へ行ってしまうと、味噌っかす同志になってしまう。タカシは銀作より一つ年上で来年は学校だったが、背丈は余り変らない。いつまでもよだれをたらして絣の着物の襟を濡らしている銀作よりは、洟をたらしていつも袖口を光らせているタカシの方が格上だ。
タカシのかあちゃんが現れて、二人で何か話し合っていた。母親の言うことをタカシはなかなか肯じなかったらしい。「タカシ」と、きつい顔をして言うのを、銀作は離れたところで見た。それからタカシのかあちゃんは銀作の前にかがんで笑顔を見せた。薄く紅を差した口もとがほころびお白粉の匂がした。濡れた眼だけは笑っていなかった。
「銀ちゃん、タカシと仲よく遊んでちょうだいね」
タカシのかあちゃんは胸もとから赤い暮口を出し、大きな銅貨を撮んで銀作の掌に押しつけた。去って行くかあちゃんをタカシが追うと、かあちゃんは振り返って睨んだ。
この場面はいつまでも銀作の脳裏から消えなかった。むしろ大人になってからこの奇妙な別れの記憶の断片が、今まで気づかなかった意味を加えてくるのであった。銀作はたくさんの兄姉の末子で（かれらの半ばは夭折してしまったが）かあちゃんは四十をとうに越していた。タカシのかあちゃんは銀作の姉と余り違わない若さであったが、別れて行く若い母親のつきつめた表情の美しさというのは、後年の結晶作用の結果であって、この場面が幼い銀作にとって忘れ難い思い出となったのは、これに

続く出来事によってである。
「ギン坊、かあちゃんからいくらもらったんだ」
二人きりになるとタカシは銀作にきいた。
銀作は掌を開いて差出した。自然と顔がほころびてしまうのだ。それは見なくても分っていた。掌に溢れる量感。まぎれもなくそれは真中に竜がとぐろを巻いて盛り上っている二銭銅貨なのだ。
「それはな、おれのかあちゃんが一生けんめいかせいだ金なんだぞ」
タカシはむずかしい顔をして言った。銀作はうなずいた。次の瞬間、掌から二銭玉は消えていた。
「だって、おばちゃんがくれたんだもの」
銀作の声がふるえた。
「だからさ、半分こだ。光ってるのをやら」
タカシは銀作の掌に新しげな貧弱な一銭玉をのせて、
「な、これでいいだろう」
銀作は仕方なくうなずいた。一銭でも貰えることは嬉しいことだ。だがこの無念さはいつまでも忘れられなかったのである。
今思えば、あの大きな梅干のような二銭玉を、タカシは銀作よりずっと憧れていたのかもしれない。銀作はかあちゃんからお駄賃を貰ったり、工場の休みに帰ってくる姉ちゃんからお小遣を貰ったりしたが、タカシは呑んだくれのとうちゃんからお小遣の代りにしょっちゅうゲンコツを貰っていたし、かあちゃんだって、年中家にいるわけではなかった。タカシのかあちゃんはその出来事以来姿を見せなくなったようだ。長屋の噂はすぐ一軒一軒の話題となり、幼い子らの耳に入るのであった。
長屋のあったと覚しき辺りを行きつ戻りつしたが、北豊島郡滝野川町大字滝野川の面影は道の狭さと曲り工合に残っていた。その細い道に面して思い思いに新しげな家が建ち、電柱には滝野川何丁目という標識がついていたが、鼻のつかえるようなせせこましさ。明治の末から大正にかけて地方の細民の吹溜りであった一帯は、依然場末としての面目を保っていた。
長屋は二の字形に並んでいて、中央に屋根のついた釣瓶井戸があり、御影石を並べた大きな流しがあった。かあちゃんたちはそこで洗濯をしたり泥野菜を洗ったり、いわゆる井戸端会議をしたり、いつも賑わっていた。あたりの地面は水に濡れて空の色を映していた。井戸の溝は王子電車の線路側の大溝まで流れて行き、瓢箪池の脇を流れる小川に注ぐ。小川は不動堂の横手からもっと大きな川に滝のように落ちていた。これはやがて王子権現の崖下を流れるのである。飛鳥山の桜も滝野川の紅葉も、幼い銀作には無縁であった。
銀作のとうちゃんが生きていた頃は、かあちゃんが瓶を提げてもって線路向うの小川に捨てにいった。たいてい夜であった。とうちゃんの小便を便所へ捨てると、臭いと

いって汲取屋が買ってくれないからだった。幼い銀作がかあちゃんについていったことがあった。かあちゃんは崖際の木につかまって少し降りてから、溲瓶を逆さにした。銀作は立木の葉をむしって待っていたが、あとで指先の臭いをかいで、とうちゃんの小便の臭いがこの木の葉にも泌みこんだのかと驚いた。家中で悪いことをしているように感じて、誰にも言わず黙っていた。その木がクサギという木だと知ったのはずっと後のことである。

銀作の世界は長屋の路地や前の道からだんだん広がっていった。銀作の物心がついてこの方とうちゃんはずっと六畳で寝たままで、歩くにも足を忍ばすように躾けられた。表の三畳はまだ十六七だった兄ちゃんの下駄作りの仕事場だった。銀作は外で遊ぶほかなかったし、その方がよかった。四才の時とうちゃんが死んだが、ちっとも悲しくなかった。タカシの後について遊んでいた。瓢簞池のそばへはさすがのタカシも行かなかった。首吊りがあったところだし、もともと草薮の深い淋しい池畔であった。線路向うの疎林のある原っぱが一番よかった。線路にビールの王冠を載せて勲章も作れたし、木登りの真似もできたし、チカラシバの葉を結んで罠を掛けっこもした。タカシはこすくて罠にかかるのはいつも銀作だった。

兄貴分のいない時は、タカシがいばっていた。何かで銀作が負い目を負った時、タカシは昂然と言い放った。

「おれのとうちゃんなんか、兵隊に行ってマグソ食ったったことあるんだぞ。やれ」

銀作は仕方なく電信柱の前で絣の着物の裾をまくり生温い小便の筋に人差指をさし込んでそれをしゃぶったのだ。何の償いであったか憶えていない。自分の小便を嘗めるぐらい平気だったが、それを見守るタカシのきびしい視線は幼な心に屈辱を感じさせた。

瓢簞池のあたりは小学校のブロック塀の中にとりこまれ、プールができていた。小川は暗渠となって川筋なりに芝居の書割りのような狭い舗装道路ができていた。昔こわごわ枕木を渡った小さな鉄橋は踏切となり、川向うの原っぱには古びた家並がたてこんでいた。川なりの道を下るとお不動様の通りへ出るはずだが不動堂は見当らない。今は環状六号線の裏通りとなり分断されているが、かってはこの不動通りはメーンストリートだった。残っている一町ばかりのこの一帯に間口の狭い小店がひしめきあっている。大震災にも潰えず戦災をも免かれ、道筋には昔の面影が残っていた。踏切の方へ戻りかけると、イカ焼きの香ばしい煙が漂う屋台がけ風の店の隣りに屋根つきの石仏が横向きに坐っていた。「真言宗智山派本智院」と書いた小さな木札がたっている。石仏の前の狭い階段を上ってみると、ここにも住宅がぎっしりと身を寄せ合いその一軒に寺務所らしい古い看板がとりつけてある。通路が膨らんだ空地に小さなお堂があった。これ

がお不動様のなれの果なのか。銀作の脳裏にあるお不動様は、踏切から小川の縁まで、大谷石を積み上げた境内は広かった。石垣の上の柵には寄進した信者の名がずらりと刻まれていた。護摩を焚く煙が洩れる壮大なお堂の前には、銀作の背も届かないほどの銅の大甕が置かれてあったと思う。お堂の薄暗い奥には火焔を背負って恐ろしい顔をしたお不動様が坐っているらしく、銀作には近よりがたいところであった。

銀作は再び飛鳥山停留所のプラットフォーム（そう呼んでみたいのだ）に立った。その狭さに驚くものは、（昔の少年雑誌には「ものは付け」というクイズがあったっけ）幼い日を過した街通りとわが家の焼跡か。母に抱かれて流れつき幼い日々を過したこの一帯が、銀作には故里といえば故里だったが、高名な詩人が歌ったように、決して帰るまじというほどの所でもなかった。時の流れにとり残されたようなこの一廓だが、残るところは残り変るところは変った。栗材の古枕木に針金を回した、どこでも見かけた線路の柵は、鮮やかにペンキを塗った古レールの柵に変っていた。しかし目の下のコンクリートの斜面に不調和に敷いてあるいくつかの舗石は、六十年前の御影石である。マッチ箱と呼ばれた四輪台車の車体が大きくなるにつれ、プラットフォームはコンクリートを重ねて高くはなったけれど、線路の側面に積んだ大谷石は昔の色を残している。

流れ者の集ったこの場末の一帯に、誰も縁りの者が残っていないのは、当然だが、それでは故里とはいえまい。少年時代の銀作にはイナカのない自分を淋しく感じたことを憶えている。柵の向うの小さなうなぎ屋に寄って、銀作はタカシの事を思い出した。物心つきはじめた頃の銀作の前に厳然と立っていたのは家族の他にはタカシしかなかった。思い出は断片的であった。タカシがいつ銀作の目の前から消え去ったかも定かでない。小学一年の頃の記憶の中には、もうタカシは現れて来ない。とりたてて懐しいとは思わないが、ここがもし銀作の故里だとすれば、やはりタカシは故里の人であった。

梅雨のはれた朝、銀作は急に思いついて川崎市の山の手にある家を出た。小田急から国電に乗りかえ大塚駅で下車した。あの頃王子電車は大塚が終点だったのだ。銀作は少し戸惑いながら都電荒川線のきれいなワンマン電車に乗った。鉄路は鈍色の空を映して、まるで褌みたいに街の生活の隠しどころを走っていた。巣鴨新田だとか、庚申塚だとか、懐しい名が通りすぎ、次は滝野川だなと思っていると、停留所の名は「西ヶ原四丁目」と変っていた。ここを出てすぐ左へカーブすると、飛鳥山まで一直線なのである。銀作はこの長い真直な線路道を見にきたのだ。しかし、直線は意外に短く中間には新しげな停留所までできていて、くすんだ緑の塊はすぐ目の前にやってきた。線路際には隙間なく厳めしげな柵が並び踏切

には洩れなく遮断機がとりつけられ、子供の遊ぶ空地にもみえない。飛鳥山に降りたった銀作は、わがままな苛立たしさを覚えたのであった。

右を見ても左を見ても、真直な線路の端が霞んでみえた。銀作は線路を越えて向側へ渡りたいのだが、なかなか渡れない。一歩踏みだそうとすると、凄い勢で電車が走ってくる。一歩下って機会を待つ。左右を見きわめて、よしと一足出しかけると、またも反対側から電車が風を切って迫る。銀作の足はすくんでしまう。どうしても渡らなければならないのに、行き交う電車は突如として銀作を拒むのだ。他愛ないゲームのような夢を銀作は何度も見たような気がする。何か思い切ったことをしようと決意しながら、勇気がないから躊躇している。そんなふうに銀作は夢判断をして、自分の心の奥を覗きこもうとしたが、それはまた罪深く恐ろしい事にも思えた。

長年の地方公務員生活を停年退職し、心がけていた持家も手に入り、娘も程よい家へ縁づかせ、息子夫婦と同居して老夫婦が年金で余生を送るという生活は、傍目には至極恵まれたものと映るに違いない。沈香も焚かず屁もひらず、ひたすら穏やかに勤め上げた末に得たものに、銀作は不満はなかったが、自分が懐いていた家族の観念が、もはや時代にそぐわなくなってしまっていたのに気づかざるを得なくなった。笑って見ていたホームドラマの筋書が、家の中で起ってみると年甲斐もなくうろたえた。現実の人間は自分を含めてドラマの登場人物のようには物分りがよくはないのである。

どうしても渡ることのできなかった長い線路道が、幼い日々を送った滝野川周辺の王子電車の線路道に違いないと思いついたとき、銀作は愚かな気迷いから救われたような気がした。もともと深くつきつめて考える性質ではなかった。孫たちが凍傷の辛さを知らないからといって責めることはできないが、銀作にとっては、あの貧しい日々が平凡な人生の原点であったのだと思いたい。

銀作の視野に同じ年配の小柄な年寄りの姿が入った。ラッキョウに似た顔貌の頂は踏み荒した芝生みたいに半白のまま禿げている。ボロシャツの上に掌が半ば隠れるほどの黒っぽい古背広を着ている。肩のパッドが異様なほど肩巾の広い姿に仕立てていた。くたびれたズボンは茶色っぽいコールテンでサンダルを半ば隠していた。

「まちがったらご免なさいよ。旦那さん、もしや昔この辺に住んでいた人じゃないかね」

肝斑の浮いた顔の奥の窪んだ眼を見つめて、銀作はあいまいにうなずいた。自分を知ってる奴が生きていたんだ。まさか。清々しい感動を抑えながら、銀作は言ってしまった。

「六十年前に線路っぷちの長屋に住んでいたことがある」

銀作は目の前の老人の顔がみるみる皺の深い笑みにつ

つまれるのを見ると、抑えることができなかった。

「わたしは大木田銀作というんだが、お前さんもしかしたら、タカシじゃないか」

老人の顔がクチャクチャに歪んだ。

「やあ、やっぱり銀ちゃんだったか。そうか、銀ちゃんだったんだなあ。よくおれの名前まで憶えていてくれたな。こんな小汚いなりして、あんたみたいな紳士の前に、幼な友だちのタカシでございますなんて、とても名乗って出られたもんじゃねえもの。銀ちゃん、嬉しいよ」

自分を銀ちゃんと呼ぶ人間はそうたんとはいない。ほろ苦い回想の主人公が突如として出現したのだ。肩を抱き合って歓ぶほどの感動はないが、銀作の心にはようやく故里に来た思いが募った。萎びたラッキョウ面のどこかに、六十年前の幼い面影が残っていないことはない。それにしても、どうしてタカシは自分を「銀ちゃん」と見抜いたのか、銀作の心にはいささかの不安が残った。

「あんたがさっきここで電車を降りた時から、もしやと思って声を掛けたかったが、そのふんぎりがつかねえうちに、そこのうなぎ屋に入ってしまった。二十分ばかり待ったかな。なあに六十年ぶりのご対面だもの、二十分や三十分なんでもねえさ。それから銀ちゃん踏切を渡って小学校の方へ歩いてったろ。おれは見え隠れにつけていったんだよ。あんたはお不動様の前まで一回りして、またここへ戻って来た。家へ帰るつもりだったろ。電車が来たらもう会えないよ。思いきって声をかけてみてよかった」

銀作ははしゃいだ爺さんの声をきいているうちに観念した。これも故里の一つの味わいかもしれない。万にひとつの奇遇ではあるが今更遠い昔の亡霊に出会ったとてどうしよう。この身なりではいくらか摑ませて別れることになろうか。

二人の老人はいつしかプラットフォームを降りて、電車道の側道を歩いていった。昔は線路の路肩を自由に歩けたものだが、今は柵やフェンスが厳重に張りめぐらされている。

「おれは娑婆へ出ると、きっと一度はこの辺をうろついてみるんだ。おれにゃ懐しい思い出といゃこの長屋の頃しかないんさ。いやあ、銀ちゃんに会えて嬉しいよ。ほんとに嬉しいと思うよ」

タカシは涙ぐんで言うのである。銀作は先ほどの警戒心を恥かしく思う。タカシにはタカシの人生があった。自分との再会をこんなにも喜ぶ人間が残っていたということは、ひどくこそばゆい感じで、銀作の重い口も次第にほどけて来るのであった。

「遊び疲れて線路際の草むらに腰をおろしていると、滝野川の停留所を出た小豆色の電車が姿を見せ、陽炎の中をコックリコックリうなずきながら近づいて来る。タ

カシがほらあれ誰の顔に見えるって、おれにきく。おれが考えていると、お前はあれはかあちゃんの顔じゃないかと、さも当り前のように言うんだ。おれはお前を真似して、あれはとうちゃんの顔だという。ずっと寝てばかりいて死んだ親父なんか別に懐しいこともなかったけれど。するとタカシ、お前ははやすのだ。銀ぺのとうちゃん肺病でくたばった。おれのかあちゃん生きている。おれは悲しく口惜しかったんだろうな。お袋に口止めされていたことをはやして返す。タカシのかあちゃん逃げちゃった。男こさえて逃げちゃった。これは長屋の評判だったんだもの。お前は怒っておれを殴りつけた」

「そんなこともあったけかな」

タカシは辛そうな顔をしてみせた。

「父親のない子と母親のない子がいたわけだが、お前はしょっちゅうとうちゃんに殴られて鍛えられていた。貧乏でも末子のおれは甘えられた。タカシは目はしが利いて器用で、おれはいつも割りを食っていたよ」

「お袋に捨てられ親父に殴られ、それでもやっぱりおれにゃあの頃が一番なつかしい。銀ちゃんかんべんしてくれや」

「年のせいか、さすがのタカシも当りが柔らかくなったよな」

銀作はそこで大きくうなずいた。

「やっと思い出したよ。おれはお前に小便を嘗めろと責められて仕方なく嘗めたんだ。なぜそんな目に会ったのか分らなかったが、話してるうち思い出した。おれは近頃、電車道を渡ろうとしても、恐ろしくてどうしても渡れないという夢を度々見るんだが、やっぱりそういう事が実際にあったんだ。電車の直ぐ前を突切りっこしたんだ。タカシは見事に馳け抜けたが、おれは足がすくんで飛び出せなかった。電車が急ブレーキかけたんだろう、ポールが外れて青い火花が散るのを見て、おれは夢中で家へ逃げ帰った。その翌日だった、お前がおれに小便嘗めろとつめよったのは」

タカシが銀作の話に相槌打ちながら、自分から、銀作の忘れている思い出話をしないのが、少々ものたりなかった。いつからかタカシは銀作の前から姿を消したのだが、それからの事はぽつりぽつりと話した。

タカシは小学一年に上るとすぐ奉公に出され、以来転々と渡り歩いた。母親には二度とめぐり逢わず、父親は何年もしないで長屋で死んだらしいが、死目には会っていない。長い兵隊生活が終って帰国してからは、度々危い橋を渡って警察のご厄介になった。

「一時は組に入ってたこともあったが、やっぱりおれは一匹狼が好きだ。一匹狼にゃなれなくて一匹鼠というとこだが。戦後は出たり入ったりの生活だ。おれには殺人未遂という勲章がついているが、これは組にいる時身代りに立てられたもんで、大して自慢にゃならねえ。だ

いたいおれは傷害や強盗なんかは性に合わねえんだ。教悔師の言草じゃねえが、この束のまの浮世に生きていて、互に殺し合い傷つけあうこたあねえじゃねえか。なあ銀ちゃん。おれは余裕のあるお方からちょっと頂くだけなんだ。それだってこの年になると少々かったるくなった。この世をまともに生きていくってことは、なかなかしんどい事だよな。早く定宿に戻りてえんだが、それにゃ、やっぱり何か一仕事してとっ捕らなきゃならねえ」

「どうだ、タカシ。ちょっと遠いけどおれの家へ来てみないか。川崎だがな。四五日逗留してこれからのことを考えてみようじゃないか」

銀作は口に出してしまってから、ハッと口を押えたい気分だ。これまでにも耳当りのよいことを口走っては、後でお荷物を抱えこむ破目に遭ったことは度々あった。家に刑余者の爺さんを引っぱりこんだらどんな騒ぎになることやら。

「ありがとうよ。銀ちゃん」

タカシは銀作の肚を見すかしていたのか。

「おれにそんな言葉をかけてくれる者は他にゃいねえ。その気持だけで十分だ。おれはずっと以前から人間というものを信じなくなっているんだ。他人ばかりじゃねえ手前もだ。銀ちゃんだってそうだ。半日おれと付き合ってみりゃ気持が変るぜ。おれは絶えず人様の隙を狙っている泥棒猫なんだ。お前さんの家へ連れていったところで、二日目にゃ家中の有金かっさらってドロンということにならねえたあ、おれにも自信がねえんだ」

銀作は先ほどから、幼いタカシが陽炎の線路道の果にみたかあちゃんの顔に引き合わせてやったものかどうか、ためらっていたのだが、どうもそれはサディスティックな悪趣味だなと思い返した。不動通りの石仏の前で銀作は立ちどまって、札入れをとり出した。

「あいにく大した持ち合せがないが、これはおれの気持だよ。一枚だけは交通費に残しておく。金だけはお前を裏切らないだろうよ」

万札二枚に千円札が三枚あった。タカシは片手で手刀を切って受けとった。

「すまねえ、おれはいつも銀ちゃんの上前をはねていたような気がする」

「いいんだよ。どうせはじめっからそのつもりだったんだろうに」

古希に近い二人連れは、再び飛鳥山停留所の方へ足を向けた。

王子駅方面行のフォームに立っていると、うなぎ屋のかみさんが、店先を掃き自転車の置き場を直しているのが見えた。仕組んだわけでもない事の結果に、いささか興味をもった。かみさんはふと顔を上げて柵ぎわに並んで立つ二人の年寄りを見た。その場で腰を伸して、五百五十円のうな丼定食の客に相応する愛想笑いをした。

「お客さん、洋傘忘れたでしょ」
「あっ、そうだったな」
「待ってて、今取ってくるから」
かみさんが店に入ると「タカシ、もう塾へ行く時間でしょ」とくぐもった声がきこえた。振り返ると、六十年前のワルガキは銀作から十歩ばかり遠のいて、飛鳥山の上空を眺めている。やっぱり辛いのか。銀作にも古い流行歌の歌詞のように、涙がこぼれそうになったとき空を見上げて堪えた少年の日の記憶がある。
かみさんは丈長の洋傘をもって柵に近より、余りに服装の違いすぎるタカシの方へ目を走らせてから、手渡しした。
「やあ、どうもどうも」
「お客さんあの爺さんと知り合いなの」
かみさんは小声で訊ねた。
「いや、別に。二言三言、口きいただけさ」
「気をつけた方がいいわよ。あの爺さんしょっちゅうこの辺をウロウロして、ユスリやタカリの常習犯だそうだから」
かみさんは急ぎ足で店に姿を消した。
銀作はタカシの方に近づいた。
「タカシ、ここで別れよう。思いもかけない出会いだった。とても楽しかったよ」
「おれも嬉しかったよ。あっ、銀ちゃん電車が来たぞ」
「じゃあな。もう会えないだろうが……」
「こんどは、あの世になるな」
銀作は急いで線路をまたいで早稲田行のフォームに移った。
すぐ姿を消すかと思ったのに、タカシは突立ったままいつまでも銀作の電車を眺めていた。三輪行の電車が陰になって通りすぎても、小さくなったタカシはまだ立っていた。その姿はラッキョウが裃を着けた案山子のように見えた。
〝タカシはカカシ。タカシはカカシ〟
銀作は幼児に還って口の中ではやした。
タカシ、お前はおれが故里でみつけた崩れかかった案山子だ。お前が本物だろうが偽物だろうが、そんなこと知ったことか。そもそもタカシっていう名前だっていいかげんなものさ。それにしても、ジーンとくるような幕切れじゃないか。お前は大した役者だよ。おれのシナリオにうまく合わせ、故里の感傷に浸らせてくれたよな。
電車がカーブするとタカシは消えた。目の前がふっと明るくなって、オオマツヨイグサの花が鮮やかに群れていた。

さいたま屋歳時記

＝日暮里界隈のうち＝

左老庵

「俺は髪結い亭主は嫌いだ」
井中加和寿氏ワンカップ普段より余分に入ったので、その加減もあってツイ大声で放言した。そこにいる十人程の熱心な立ち呑み連中の誰にというわけではなく、いわば独り言である。止むに止まれぬ独り言である。
かれは自分でも、そう信じているし、人様にも言うことがある。「酒呑みながら独り言言う奴は用心しろよ。近よらん方がいい。そういう奴は充分精神病の素質がある。いきなりグサッときたり、ザザッとガソリンかけられるぞ」　だが、かれのこの断言を真剣に頂戴する者はいない。大がい、「そう云うもんですかな……」と懐疑的な顔つきになる。かれ井中加和寿氏も心理学とか、何とか学と言う本を読んでそう言っているのではない。つい先日、〝タゴサク〟と偶然二人だけで、さいたま屋で呑んでいた時、かれが段段独言がひどくなったのである。
「あいつが怪しい」「屁みてえなもんだ」「気つけなきゃ」「ああいやだ、いやだ」「それでいいって言うんか！」
この独り言は前後何のつながりもなく、いわば、切れ切れで、しかも酒呑みの独り言だから低音で一種の凄みを含んでいる。かれは呑むだけ呑んだ挙句、そばの井中加和寿氏にちゃんと言ったのである。
「失礼しました」
そしてかれは、東京ではこの一月空に珍らしく、霏霏と降る雪の中を、風に吹き飛ばされそうな恰好で立ち去った。
そもそも井中加和寿氏は、タゴサクがノルさんと一緒にこの店に入って来た時から、〝この男知能が少し低いぞ、それとも天才かな〟と思ったのである。と言うのは、かれは酔うに従って、物凄い速度で喋り始める。相手が解ろうと解るまいと一向気にしないのである。〝こう言

う人にはまま天才的な人間がいるもんだ〃と井中加和寿氏は考えていた。だが、そのうち何度か顔を合わせるにつれて、タゴサクはノルさんの乾分ぐらいな存在で、二人とも野球で名のきこえた○×高等学校の出であることを知ってからは〃天才じゃない、だが精神病の気は充分ある〃と言う結論に達したのであった。

このノルさんが、夏のころ突然立ち呑み連の群れの中に加わって、世間の出来事について声高に喋るのを聞いているうちに、〃気のきいたことを言う若者だ、ほかの連中よりや頭がいいぞ〃と思ったことがあった。元来、井中加和寿氏は自分が酒呑みのくせに、呑む程に同じことを繰り返す酔っ払いをきらった。それから呑む程に威張り出す酔っ払いもきらった。それは氏の体力が此処のところ七十才近くなってひどく衰えて来て、歩く足許がふわっとゆるんだり、握手をする握る力が、自分でも感じられるほどに弱まって来たせいもある。かれ自身は若い頃は、この威張り出す素質は充分そなえていた。ノルさんには同じことの繰り返へしがなかったし、威張り出すくせも見当らなかったので氏は心を許して〃頭がいいぞ〃と思ったのである。

氏は呑み助が同じことを繰り返したり、威張り出す態度でかれに近づいて来ると素気無く言うのである。

「うるさい…あっちへ行け、イヤあっちへ行って下さいョ」

「うるさい、あっちへ行け」だけでは、相手によっては、それだけではおさまらずに犬同志の喧嘩沙汰に発展することが往々ある。いつぞやも〃ニシさん〃が井中加和寿氏の隣で味噌の包みのは入っているダンボールに腰かけて、盛んに同じことをくりかえして氏に共感を求めて来た時、氏が「うるさい！あっちへ行け」と怒鳴ったら、かれは立ち上って噛みついて来た。

「何だ、センセ、センセっておだてりゃいい気になりやがって……何がセンセだ」

そこで井中加和寿氏も立ち上って、常用の桜のステッキを握りかえて言ったのである。

「何を！」

立ち上ってみると、ニシさんの丈は井中加和寿氏の肩位までしかない。十七・八ぐらいから六十七・八まで犬同志のような喧嘩沙汰を決して辞さなかった氏は〃さて、この小男の脳天に一撃加えてやろうか、それとも、ちょっと足かけて突きころばしてやろうか〃と策を練っているうちに、ニシさんは氏の並並ならぬ決意をよみとったとみえて、自分から店の外へ飛び出し、道の向う側まで言って叫んだのである。

「何が何んだちゅうんだ、あんなのがセンセイだから、ガキが悪くなるんだ」と丁度狼が首をのばして遠くの山の峯に向って吠える恰好で遠吠えをしながら数回店の前を往来していたが、他の客の誰も取りあってくれないの

で自然に声が低くなって、そのうち姿を消した。さいたま屋ではとるに足らない出来事で、他の客も主人の柔一も、女房のぜに子も少しも動揺しない。だが井中加和寿氏は、その時「うるさい！あっちへ行け」と言うのはこのせまい店の中では一方的宣言で相手の人権を無視した言い方だったなと反省して、以後「あっちへ行って下さいョ」と附け加えることにしたのである。かれ井中加和寿氏は、たしかに教員あがりで、五十の半ば頃、おそまきに校長と言うことにして貰ったが、〃こりゃ世間態は悪くないぞ〃と思っただけで、立ち呑みも、パチンコも、喧嘩もそのために止めることはしなかった。かれは五十を越して肺病のくせに、土地の商人に挙骨を振り廻して、新宿駅の焼けあとに闇市場を立て並べさせた小津なにがしと言うやくざの親分を秘かに〃仲々えらいぞ〃と思う気持があった。尤も井中加和寿氏自身がその途に入っていたら、かれはとっくにあの世へ行っていたと自分を反省している。やくざの世界で兄貴まではいいがオジ貴、代貸……組長・親分となるには、そこらの中小企業の社長になるよりもっと強い運勢と頭の働きが必要だとかれは人間の生きる途を見ているのである。

井中加和寿氏はさいたま屋で、ずい分いろんなジンブツに出会って来ている。〃通り魔〃の名称で一時テレビ新聞を賑やかした男も、事件を起す数日前さいたま屋で一杯やっている。氏はかれとはさして深い縁が出来あがらぬうちに、かれは刺身包丁で街頭でやたらに人をさした。かれはさいたま屋の近処の小料理屋の板前だった。気が変になると言うことは、ある日ある時突然起るので自覚症状などと言う気のきいた言葉は全く当てはまらない。ただかれも、呑みながらヂット一点に目を据えて、時々何やらつぶやいていたことはたしかである。

ある日〃将軍〃が井中加和寿氏に言った。

「センセ、軍服持ってたら貸してくれねえか？、俺、写真とっておきてえんだ」

「うん、軍服な……俺、金に困って三十年前に売っちゃったが……持ってるもんに借りてやるよ」

〃将軍〃は〃銀さん〃が元陸軍大尉だったことを知っているのだが、「あいつは好かん」と云って井中加和寿氏に申し込んだのである。

銀さんもさいたま屋とは古い縁で、魚河岸の外店で働いている頃は朝二時三時にさいたま屋の前を通って駅へ行くので、ツイ自動販売器に手が出る。一日に一升ぐらい呑むのでいい客である筈だが、どうも立ち呑み連に敬遠されている、夕方から長物を着て兵児帯をたっぷりとたらし、上等の草履をはいて、自分の持ち物についていちいち人様にみせびらかす癖が、災いしているらしい。その上金について利口すぎる所がある。魚河岸に出入り

していて、上等な荒巻きを安くしておくと言うので井中加和寿氏は正月の年始廻りにと、十本程景気よく頼んだ。箱に奇麗に包んであったので中味がわからないまま、行く先き先きで〃こりゃ河岸から直かですから、そこらの魚屋のとちがいますぜ〃と鼻高々と配って歩いて、さて残ったやつを自家で包をあけてみたらどうにも肉がゆるんでいて、包から汁がにじんでたれて来る程の品物であった。多分将軍も同じような目に会ったことがあるのであろう、かれが戦争中に馬に乗って、当番兵を従えてさいたま屋の前を通ったもんだと言う自慢話も立ち呑み連中には鼻持ちならないのかもしれない。

銀さんも「センセェ俺も六十六になっちゃった」といつぞや、井中加和寿氏に年を正確に告げたのである。かれが未だ四十才台だった頃、だから日本が〃終戦〃ということをやって、まだ正味十年経つかたたない頃、かれが馬に乗ってさいたま屋の前を通ったことのある誇りが未だ完全に消えないでモヤモヤしている頃、〃キッチちやん〃とひょんなことから「何を！」と云うことになったのである。宇宙へ初の人工衛星があげられたり、米国とソ連の宇宙でのせり合いが激しくなったりする空気が、まさか〃銀さん〃と〃キッちゃん〃に影響したのではなかろうが、銀さんも九十才の母親に死なれ、〃子供は女房に似て出来がいい〃とさいたま屋の主人の柔一の母親のカメが井中加和寿氏にもらしていたその子供たちも二十才に近づいて銀さんに正念場を感じさせる頃であったし、キッちゃんも、代貸をやっていた組の〃オイシイ話〃にもあぶれ勝ちで、もっぱら娘のくれる小遣いと、借りのみで毎日を過しているくらしの中で、お互にとげとげしくなっていたのであろう。銀さんは四十代で柔道は三段ぐらいまで若い頃やったことがある。尤もかれは立ち呑み仲間には講道館四段だと称していたが。片やキッちゃんは五十代で、これは全く修羅場で踏んだ喧嘩度胸だけで肩の肉もゲッソリ落ちていたから、いきなり、店の酒瓶のわきに置いてあった包丁を右手に持って、それを尻のあたりにかくしたのである。その包丁が坐っている井中加和寿氏の丁度鼻のあたりにあったから、氏はあわてながら落つきを装って低音で叫んだ。

「キッちゃん、やめろ！刃物はいけねえ」

銀さんの顔も少し青味走って、その包丁が逆手に持たれてキッちゃんの尻のあたりにあることを知っていたから、自分の腕の一部を切らして、一発の当身でこの五十男をしとめないと酒瓶を何本も割る仕儀になり、弁償も大変だなと考えながら拳を固めて立っていた。店の中の警察権の持ち主の柔一は配達に出ており、女房のぜに子がズボンのバンドをゆるめながら便所に駆けこんだほんの束の間の出来事であった。

そこえ丁度、立ち呑み連でない堅気のお客が、「頂戴な」と入って来たので、井中加和寿氏は右の眼をキッちゃんの手の包丁にそそぎながら、「おぃいお店だよ」と店の上りばなの座敷ごしに便所のある方角に向ってぜに子を呼んだ。ぜに子がズボンを引き上げながら飛び出して来て「いらっしゃい」と草履をうしろむきにつっかけている間にキッちゃんの右手がゆるんだ。それは井中加和寿氏が柄に手をかけるとぽろりと落ちるまでゆるんでいた。余り固く握っていたのでゆるむのも早いのかもしれない。

「銀さんもやめなよ」

それで四十男と五十男の真昼の決闘は幕をとじたのである。

そもそもこのぐらいの小ぜり合いはさいたま屋では日常のことで、酒を呑むと前後をあまりかえり見ずに自分を主張し度くなるのは酒呑みのくせとも言えるようだ。井中加和寿氏だって、そのくせのために、今日程足許がゆるんだり、握る力が弱まらない頃は、何度も立ち呑みのジンブツたちと「何を！」と言うことはあった。何しろ三十年と言う時間が経っていることだ。だがある時は氏の目つきがある種の肉食動物や食肉鳥類のような形と光を持っていて相手を底しれなくこわい気分にさせて、ひるませたり、ある時には〃将軍〃や〃ガリ屋〃のように若くて、啖呵が切れて、喧嘩もうまい者を自然に手下にする技が身についているためでもあるらしい。要するに氏はやくざの兄貴ぐらいの素質はあったのである。だから将軍の軍服借用の申し入れにも心よく応じたばかりでなく、自分の親類筋で将校だったあれやこれやを頭に浮べながら言ったのだ。

「うん、軍服な、俺、金に困って売っちゃったが、もし持ってるもんいたら借りてやるよ、似合うぜ貴殿は、日本刀をこんな具合についてな……」将軍は未だわかいのに、ぴんとはね上る髭をたくわえている。

氏はこの将軍を虫がすくと言った感じて見て来た。かれがこのさいたま屋に現われてから矢張り三十年近い時間が経っている。十七・八の餓鬼のくせに、呑んでいる所へこれ又十八九の産毛に白粉の浮いたまゆ毛のうすい女がむかえに来たりした。かれは酔った年寄りたちの放言にじっと耳を傾ける風であった。何を生業としているかは全く不明で多分何々組と言った人間の集りの中で修業中のように見うけられた。仲間づき合いで格子のある箱部屋から出て来た朝など、風呂好きの井中加和寿氏とばったり未だ客の来ないガラ空きの〃烏の湯〃の浴漕の前で出会うことがあった。風呂好きということは汚れたままではいられない気質の現われである。「やーセンセ」と挨拶して、下を流している中腰のかれの姿は均整がとれて尻がきりっとしまり、のびやかな足、腕は、運動神経が極度に充実して喧嘩をさせたらさぞ素早やかろうと思われた。ただ折々キラリと光る目は感情が急速に上昇する傾向を示している一方、頭の働きも鈍角でないこと

も示していた。
そのかれが一年もさいたま屋にあらわれなくなって、ある晩、井中加和寿氏の夢の中に、顔中血だらけになって現われたことがある。
その次の晩、氏はさいたま屋へ行った時、主人の柔一に言った。
「あの将軍どうしたんだろうなぁ、ここんところちっとも来ないな」
柔一は答えて言った。
「行くとこへ行ってるんじゃありませんか」
「うん、俺ゆうべあれの夢みたんだよ。どうしてあれの夢みたんかな……しかも顔中血だらけだったぜ」
「何でも関西へ行ってるって話ありますがね。何しろ喧嘩早いからねぇ」
「うん」
それから又一年の余も経って、将軍は可成り疲れた顔でさいたま屋でしょんぼりという風情で呑んでいた。
「どうした、え」井中加和寿氏は声をかけた。
かれはうつむいたまま「ひでえ目にあってね」とうなだれ気味であった。苦みばしった青白い顔に髭はなかった。そのかわりに、縦横にかみそりで切った風な切り創がかくされていた。
それから三年たった。
顔面のきずは二筋ばかりの疵痕をのこしていた。かれは沈んだ声で言った。
「関西の奴等は卑怯だな、七人相手だったが、後ろへまわった奴がいて、俺の脳天丸太でやりやがって……俺が気が遠くなったとこで身体中きざんで逃げやがった。センセ、俺は一種の白血病になってョ」
それから又五年経った。
新しい女と夕方の巷を足早やに歩いている将軍が見うけられた。髭は又立派に出来上っていた。女に話しかけるかれの態度には充分やさしさが見えた。井中加和寿氏も息の切れそうな教員という職を、無事とは言えぬがすれずれのところで勧奨退職という形でやめて、貰った金で郊外へわずかな土地買って家建てたりした。さいたま屋でも、嫁に来たばかりであったぜに子も子供たちが長男は私立の中学に入り、二番目の双生児も小学生になり、ひとまず夢中の子育て階段も最初の踊り場に出た感じであった。M大学という大学を出た柔一も父親の貫助が死んでからはすっかり酒屋の主人になっていた。
その頃、また将軍がさいたま屋に現われて、浮かない顔で酒を呑んでいることがあった。かれがいると立ち呑み連はシンとなる風情があった。というのは、かれが関西で一寸刻みになりながら生きかえったこと、立ち呑み連のうちでさいたま屋で下地をつけてから梯子をかける〃呑み屋横丁〃での将軍の荒れ方が評判になって大方は触らぬ神に祟りなしをきめこむようであった。だが、か

れが血だらけになっている夢を見て、丁度その頃かれが関西で卑怯な奴等に一寸刻みになっていたらしいということが自分と何か神秘的なつながりがありそうだと信じている井中加和寿氏は一向将軍を敬遠しない。氏はかれにやさしい声で言った。
「どうした、え将軍、元気ないぞ」
「うん、ぼくウエーキ島へ行こうと思うんだが……金がなくて……」
かれは暗い顔のまま言った。
〃ははん、アメリカの傭兵にでもなるんかな、それともむこうの飛行場整備の土方かな、どっちにしても俺にゃもう出来んことだし、壮途に出る感じだな〃井中加和寿氏は考えながら言った。
「少しなら用立ててもいいぞ」
「一万円でいいんだ、着る物ちょっと用意しなけりゃ……」
「そうか、此処にや持っていねえが俺んちへ来いよ」
将軍の顔に赤味がさして、かれは言った。
「いいんですか？」
井中加和寿氏は、将軍を従える気分で、十分程離れている自分のすま居へ向ってさいたま屋を出た。氏は娘と二人暮しである。女房と他の二人の子供は氏が六十を越して漸く建てた郊外の家の方へ一年も前から避難する気分で移っている。別居の形である。娘は長女で、かの女は四五才の頃氏が遊び相手の意味と物凄いあばらやに一点救いをあたえようとかっていた文鳥が死んだとき一晩中泣いてその死がいを抱いていたことがあるからやさしい気性なのであろう。郊外の家の女房と一緒に避難した次女の方は「死んじゃったのは死んだ鳥が悪いんだわ」と放言したからこれはやさしい気性ではないと氏は判定していた。その長女は物凄いあばら屋をものともせず、寒くなると壁の崩れかけた所に新聞紙や広告紙を貼って修理したり、雨が降るとずれた屋根瓦の破れ目から直下する雨水を洗面器や馬穴で受けとめる作業を手伝いながら父親の氏から離れようとはしなかった。だから氏は娘と二人暮しということになる。
「おねがいします」
将軍が玄関で大声を出した。それは丁度「おひかえなすっておくんなさい」と言うやくざの挨拶の方式にかなっているような、又は、「たのもう」と言う武者修業者の道場破り挨拶のように堂々としていた。多分かれは井中加和寿氏以外の家人に対して先手を打って挨拶したのである。氏は真すぐ自分の寝起きする部屋へ突進して、金庫がわりにしているお茶のあき罐から一万円をつまみ出した。娘が台所から氏のうしろへ来て言った。
「オトオさん、あの人なあに……すごく古風な挨拶じゃないの」
「うん、将軍だ、おれ将軍に一寸金貸すんだ」

井中加和寿氏は、将軍の男っぷりや、気ッ風に娘が引かれちゃいかんと大急ぎで玄関にとってかえして、娘の前に立ちはだかる恰好で将軍に対峙して一万円をぐっとつき出した。

「じゃお借りします。有がとうさんでござんす」

将軍は飛ぶような勢で立ち去った。

それから又三年経った。

さいたま屋の主人柔一から、将軍がちょくちょく飲みに来ると言う情報があった。何でも女房を東北の実家にあずけて、かれは島から帰って東京で働いているらしいと云うことであった。その頃が、さいたま屋にひとむれの立ち呑み連が定着して、夕方など一斉にそろうと〃オールスターキャスト〃と云った盛観であった。

ある夕方、店から上った部屋の茶ぶ台をはさんで、柔一と一人の中年の男の顔が見えた。まぎれもない〃ガリ屋〃である。男も柔一もきちんと足をそろえて端坐している。

ガリ屋は四年前まで床屋であった。ガリ屋とは同じ立ち呑み連の〃ヤス〃がつけた渾名である。ヤスは富山県の豪農の長男だと自称しているが家を出て二十年近くなり井中加和寿氏が「おめえ富山の家へ帰った方がいいんじゃねえか」と忠告めいたことをしても「まあね」と口をにごして受け入れる気は微塵もないことを示した。こう言う家出から初まった立ち呑み連の人生はおおむねふしあわせを背中にしょっていて共通するところは後妻の母親がいると云うこと、女房との縁が、これまたその不しあわせに上塗りする様なつながり方であると云うことである。だがヤスは自分の女房を「ありゃ可愛そうな女で、俺が救ってやったようなもんだ」と言い言いしていた。そのくせ、夕方キャバレーかスナックかそんな所へ働きにゆく女房に店で呑んでいるところを外へ呼び出されて「あんた何してんね」とまともに頬っぺたを一発張られたりする。こう言う不しあわせの条件は〃ニシオ〃の場合にも〃オオノ〃の場合にも〃ガン〃の場合にも、水道屋の〃スケさん〃〃ガクさん〃の場合にも、ガリ屋の場合にも当てはまる。〃キサカ〃や〃画伯〃にも条件の半分は当てはまるがキサカは刑務所から出て来て身許引受け人がいない者のための保護観察施設にいるうちに出来た女との縁がよかったらしく、この頃では身なりも結構ととのって、人に意見する身分になった。画伯も、近処の大西洋美術と言う一種の美術学校に通っている頃はどうなることやらと思われる節があったが、学校の近処の娘に惚れられて一緒になるようになってからはアトリエなども作って貰っていつの間にか画伯と言う渾名で通るようになっていた。

四年前までと云うのは、かれは四年のつとめを終えて

その夕方出て来たのである。

四年前のある晩、ヤスが駆けこみ訴えの気合いで井中加和寿氏に言った。

「センセ、ガリ屋のやつ、ついにやりやがった」

ことのいきさつはこうである。さいたま屋で、したたか呑んで、その帰り途に友達のアパートに寄って更に焼酎を重ねているうちに隣りの部屋の男女の話声がうるさいと文句をつけに行って、ことの成行きで、その女のスラックスに疵をつけ、同席していた男や女と乱闘気味になって、かれは勝ったばかりでなく、その女のスラックス脱がして戦利品として自分のアパートへ持ち帰ったのである。だから当然その罪名は強盗・傷害と言うことになる。その上、その女が妊娠していて死産したのでその上に殺人という罪名もその夜の出来事と死産との因果関係が言われると成立するらしい。

ある日ぜに子が井中加和寿氏に言った。

「センセ、うちのパパ床屋の身許引受人になるんですって、実の親がいるんですがねえ……」

氏はぜに子に言った。

「よした方がいいぜ、保証人と云うものはこわい仕事だぜ。場合によっては、この位の店すっかり持って行かれることもあるんだぜ」

井中加和寿氏は五十年近く前にかれが法律学生であったころの知識の片鱗をひけらかしてぜに子を威した。数年前に亭主の貫助に死なれたカメと嫁のぜに子の仲は漸く世間で言う嫁、姑の亀裂も深まっていたから、ガリ屋の身許を保証するという柔一の決意をきっかけに柔一とカメ対ぜに子の対立は激化したようであった。カメは何度もガリ屋に面会に行ってやって柔一を支持した。ある夏の暑い日中の日暮里駅で井中加和寿氏は柔一に声をかけられた。かれの顔は悩みで青味がかり、汗がふき出していた。

「センセイ、佐藤の刑がきまりました」

かれは公判からの帰り道であった。井中加和寿氏は暑さのせいもあってか、佐藤という姓とガリ屋とを結びつけるのに数秒かかってそれでもかろうじて話しを合せて言った。

「どのくらいだった」

「四年です」

「相当重いな、執行猶予なしで……」

それから四年目であった。井中加和寿氏は腕をのばしてガリ屋と握手して言った。

「よかったな」

もう夕方であったから立ち呑み連もつめかけていて、中にはガリ屋とガリ屋の事件のことを知っている者もいた筈だが、それらが、どんな言葉でガリ屋を迎えたか、ガリ屋がどんな挨拶で店には入って来たかは井中加和寿氏は知らない。これは氏にとって心残りなことである、

柔一とガリ屋の四年ぶりの会見は充分他人行儀であり、正式の方式にかなっているかに見えた。

それからは、ほとんど毎晩さいたま屋にガリ屋が見受けられた。かれは井中加和寿氏が入ってゆくと、自分が坐っていたたった一ツの椅子をあけて言った。

「ロイヤル・ボックスあっためてあります」

でも井中加和寿氏は、ガリ屋が〃こんなに毎晩酒を呑んでいいのかな、でも仕方がない、久しぶりだからな〃と思ってみるのであった。段段日がたつにしたがって、ガリ屋は柔一に対しても四年ぶりにみせた慎しみがうすれてゆく風で、氏に〃はてな〃と思わせることがあった。でも氏の知らない所で、ガリ屋は昔の床屋仲間の、拾年ぐらい若い人の経営する店にやとわれて、預金通帳と判を柔一にあずけて近くのアパートに独り身の生活を初めていた。

「センセ、俺ももう四十七になっちゃったよ」

ガリ屋は井中加和寿氏に年を打ちあけた。

街灯にうす緑色の灯が遠く白山、池袋の空にあかあかと燃える夕陽を背景にしてともる頃、〃ガン〃〃ヤス〃〃ゴロ松〃〃特攻隊〃〃ヤリちゃん〃〃クリちゃん〃〃自衛隊〃〃銀さん〃〃ガリ屋〃などが相前後して店先にあらわれる。〃久公〃はもう朝から店さきの酒がめに腰をおろして焼酎をなめ、詩人の〃コダマ号〃は青むくんだ顔で、これ又立てつづけにコップに四五杯重ねて、〃青空の果て知らなく、雲ひとつふたつ、龍胆のむれ丘の上に、ああ、づつと遠い女よ〃と自作の詩のような文句を絶叫し、「ねえセンセ」と井中加和寿氏に共感を求めるのであった。

（つづく）

モーニングコール

大和禎人

昭和四十年九月十八日、この日は土曜日でしたが、なお残暑の酷しい中を台風二十四号が関東甲信越地方に大きな被害を与えて一過いたしました。それは一過というにふさわしい悪夢のような駆けぬけ方で、あたら一人の青年の命を奪い去っていったのでありました。ラジオ関東のアナウンサー橋本文雄君がその吹きすさぶ暴風雨の中に若い命を散らしたのでありました。

葬列へ向けてスピーカーから、当夜遭難前後の状況を伝える録音が再生され流れておりました。故人の声が生々しく参列者の胸に呼びかけるようで、いっそうこの場の悲しみを深める効果をあげているように思われました。

……

「ラジオ関東の東京一号車、FMカーの橋本アナウンサー……」

……

「はいはい、こちらラジオ関東の一号車、FMカーです。ただいまFMカーはちょうど有明四丁目付近におります。と、申しましてもはっきりおわかりにならないと思いますが、海に向いまして正面が羽田空港、それから右手後方が銀座、そして右手の横が東京タワーです。明かりがポツンポツンと見えます。それから左手がゴルフ場になっておりまして、その先に問題の夢の島があります。こう申しておりますうちにも、マイクを通じまして風の音がお耳に達したかと思いますが、一時はたいへん強く吹きまして、ほとんど立っていられないほどでした。

一時やんだかと思ったんですが、また強く吹いてまいりました。（バサバサーッという風の音がマイクに入る）

……ここに警戒に当っておられるお巡りさんがいらしゃるので、お話をうかがってみたいと思います。

……

……先ほどもお伝えいたしましたように、この風でござ

います。たいへんな風なんですけれども、その風にあおられる材木置場、しかし材木はしっかりと結わかれておりまして、先ほどそちらへちょっとまいりましたら、材木の下の方でコオロギが鳴いておりました。この強い風とコオロギの音、なにかウラハラな感じがいたしますがいかにもこの台風が早く去って、秋が待ち遠しいといった感じでございます。ここ有明四丁目からお伝えいたしました。それではマイクを加賀アナウンサーにお返しいたします。加賀さん、どうぞ……」

橋本アナウンサーの声がマイクにのったのはこれが最後でした。

人懐っこいあの童顔が笑みをうかべて、しかし急なことでしたから写真を間にあわせるためにいくぶんか修正を施され、それが不十分なところがかえって哀れをそそるように思われました。嵐の実況放送にかわって、読経のスピーカーを流れる中を、促されて葬列は焼香のため動いておりました。野分のあとの、なにか吹き千切られた小枝など散り敷いたままの露路、急に訪れた秋の気配もよそよそしく悲しみを深めているように見えました。

（やはり彼女だった、彼女に違いない）

葬列の中にその人はいました。姿勢のよい、背筋をまっすぐにのばしたその人はしかしこの場に臨んでもあの彫りの深い顔にあまり感情を浮べてはいませんでした。

「先生、同窓会の会計の精算を近いうちにやりましょう、今いそがしいんですよ、一仕事終ったら都合をつけてゆっくりやりますから、それから今年中に僕も結婚しますのでよろしくご指導ください」

まるで最後の別れを告げにきたように、この言葉を残し、いとも気軽く冥土へ仕事に出かけていったような気がしてなりません。

（僕も結婚しますのでよろしくご指導ください）

と言いながらさすがに少しく恥らうようすでしたが、ご指導くださいと言うあたりのソツのなさは彼一流のもので、初々しさの中にたのもしさがあり、弱冠ながら世故に長けたこうした物腰はいったいどうして身についたものであろうかと思われました。

「ふーむ、それはおめでとう、で、誰、君のフィアンセは、」

「え、まあ、見ていてください、僕の選んだ人を、誰かさんのお嬢さんの真似じゃありませんが……」

とテレ気味に、しかし、茶気満々の体でありましたから、なおのこと哀れでありました。彼のことだからそうした人生の設計にもきわめて機敏なところはさすがと思えたのでありました。

彼に結婚話があり人生の花ひらく未来を望みながらと申しますと、形容は月なみですがほんとうに胸つく思いをさせられます。非命の彼の死を悔まずにはいられませ

ん。

ほんとうに惜しいことをした。何度でも惜しいと言いたい。将来ある若ものを失うことは大きな損失である。かけがえのない人物を失ったものだ。同窓会にとっても残念でならない。

彼と私は学級や教科の関係はなかった。在学中は生徒会長と顧問教師、卒業後は同窓会役員と同窓会顧問という関係で長いつきあいであった。とくに同窓会のことについては、彼の熱心さと世話好きの気性から、実によくやってくれた。彼の温和な人懐っこい態度がだれからも親しみ愛され、また彼の天性といえる人に接するやさしいまなざしと、ほがらかな笑みは人をひきつけるに充分なものをもってもいた。またその弁舌はさわやかであり、ユーモアたっぷりの話術をもって花を咲かせ、人を飽きさせることがなかった。同窓会の役員として彼ほどうってつけの人物はあるまいと思われた。個人的にもつきあいを深めるほどほんとうにいい男だった。

同窓会のように何の利益もない単なる友好団体を運営する役員はとかく成人になると忙しさを理由に離れていきがちなものであるが、彼ばかりは違っていた。どんなことでもいやがらず困難な運営をまとめ、後輩の面倒もよく見てくれた。いずれは会長になってもらいたかった人物だった。いまは彼の冥福を祈るのみである。

こんなふうに、追悼の文章を綴ってみましたが言い尽せない憾みが多すぎるようです。彼の死を伝えられたショックはまだ続いておりました。彼の葬儀に駆けつけ、柩を見送りながら、この痛恨を生前の彼に親しんだものの一人として書いておかねばならぬと思いつつも、慣れぬこととて思うようには筆が運ばないのでありました。月並みの文字を拾うだけでは彼の人間性は伝えがたい憾みがあまりにも多すぎ、もどかしいという思いばかり走りました。文筆の才などもともとありませんから口惜しいことでありました。

突然、死という運命に連れ去られてみると、その人間について実はほんとうは何も知ってはいなかった、という思いだけが残ります。好事の眼を向けるわけではありませんが、彼の身辺におこっていた結婚話なぞ真相は露も知らないことでありました。学校の教師とその卒業生という間柄では立入ることのできないプライバシーであったかも知れません。とくにその結婚の相手があの人とすればなおさらかも知れません。

モーニングコールともいうべき秘事について知ったのに四十九日の時でした。その日は小春日に恵まれ、さわやかな秋の気の中、はや納骨が行われました。永遠の眠りをいまこそ泉下に、彼の霊も安らぎを得るであろうと

思われました。

「おや、どなたか、お花をお供えくださって・・・」

当然墓前の供花は家族の方の用意もあったのですが、すでに墓の花立には季節の厚物の美事な菊が供えられ、香華が煙っていたのでした。

「あの方でしょう、そうに違いありません、文雄が可哀そう、あの方はなおさらお可哀そう、・・・」

と文雄君の母上がつぶやかれるのを耳にしました。

客殿にもどりまして供養のときの席になりましてからあえて母御にご挨拶をしながら思いきって尋ねました。

「文雄君には結婚のお話もあったようですが、お母さまのさきほど仰有っておられた（あの方）というのは誰でしょう、ご存知なのですね・・・」

「いいえ、それは存じませんの、ただあの子は私が寡婦だもんですから、はやくと思ってのことでございましょう、心あたりにしていたお嬢さんがあったようです・・・、いずれひきあわせると申しながら」

「そうでしたか、お母さまもご存知のないまま・・・そうでしたか」

触れてはならないお母さまの心の中をこれ以上は踏み入ってはならないという自制が働きました。お母さまが寡婦であったということもこの時はじめて知りました。マイクをつきつけ、理不尽な質問を迫るあのマスコミと同じようでは申し訳ないことになります。これ以上は遠慮しなければなりません。残念ですがそうしなければなりません。

「しかし、お母さま（あの方）と文雄さんの相手をどうしてお気づきでしたか」

とそのことだけは知りたいと思いました。

「私もこれ以上のところはご遠慮いたしますからせめて・・・・」

「はい、それは電話のベルでした、毎朝の、きまった時間にかかってきてプツリと切れる電話のベルです。あのベルを鳴らしつづけたお方こそ息子の嫁になる人と思っておりました」

その頃、電話はまだようやく普及しはじめたばかりでございましたが、あれが仕事上どうしても必要があり、架設したばかりでございました・・・・、とお母さまは語られ、涙をほんのりと浮べられました。私はどうやらマスコミを軽侮しながら同じような行為をしていたようでございます。

「リリーンと鳴って切れ、またリリーンと鳴りまして、それで息子のどうやら起きるらしい気配でございました。どういうことでございましょう、受話器をとれば料金をとられるからでございましたのでしょう、そしてあの方の姿もまぶたに浮ぶのでしたが、それは私の独り合点かも知れませんので、息子の方で言い出さない限りその方

はわかりようもないのではございませんか」

そう仰有ってあとは堅く口を閉じられ、二度とお口をお開きになりませんでした。これ以上はお心の中に入りようもございません。多分お母さまのお胸の中に浮んでいる幻の人はあの人に違いないと思われました。そう笹川明美、きっとそういう名に違いありません。私はその人とは赴任以前の、橋本君とは同期の卒業生ですから知りようもないことでございますが、ほとんどこの直感は間違ってはいないでしょう。弟の隆君は運動会の仮装行列でその頃人気の赤胴鈴之助のよく似合う美少年でした。その隆君とそっくりの女性に毎朝出勤の途上会っており、あの少年の姉に違いないと思いこむようにいつかなっておりました。彼とともに編集に努力し、それだけ親しくもなったあの仕事、それは同窓会員名簿を作製するということであったわけですが、計らずもその九期に橋本君とあの人が同期であることを知ったのです。

そしてあの葬儀の日に、その人の会葬する姿を見て確信を深めました。

（あの二人なら似合いの夫婦ではなかったか）

と思われました。母上の語られたモーニングコールにそうした二人の愛の深さを測れるように思われます。

「台風の海に消えたラジオ関東放送車　災害報道に挺身した記者魂」

もちろん彼の写真が添えてあり、クレーンで引揚げられるＦＭカーの、車体の横腹にＪＯＲＦという文字も見える無惨さ。

そして、

台風24号は、ラジオ関東の取材班六人の生命を奪った。なぐりつけるような暴風雨と、吠える波との闘い、実況中継の終えたあと、局に帰ると言って消えてしまったのだ。「ラジオ関東、東京一号車」はついに応答しなかった。

こんなふうに小見出しが続いております。当時の週刊誌、「週刊サンケイ」がスクープした事件直後の号の紙面に見える記事です。橋本君一人の死ではなく他に五人もの取材班の犠牲を出している事故の全貌が明かです。そしてたまたまアナウサーとして橋本君一人が華々しく脚光を浴びた経緯を読みとれます。報道の（声）を残した冥利はせめてものことと言えるのでありましょうか。生前の彼がこの職場を誇りとし、その使命に生きて（ラジ関）の愛称で職場を呼び、私たちもまたその（ラジ関）の橋本アナウサーとしての彼の活躍を大いに期待したものですから、そうした意味からいえばあるいは男子の本懐であったかも知れません。

生ける橋本君に恋路があった。お母さんの語られたモーニングコールのことはおそらくは橋本君のアイデイア

であったかと思います。電波にのせて自己を殺してのアナウンスに憂身をやつし、それも地声ですべて勝負するアナウンサー、ときにはトチりようもないところでトチリ、ひたすらプロデューサーに平謝りに謝り、生放送の困難を身にしみて味わってきた橋本君でした。電話を架設し、プライベートの時間にも取材に努力し、知識を肥やしてきました。モーニングコールは激務に疲れ切った彼を目覚めさせ、リリーンとベル音だけを繰り返えし、さらにはまた今日という日の頑張りを誓わせるものであったはずに思われます。記者魂の燃え盛りはそうして促されていたのではなかったかと、今にして思われます。

（まことの恋は忍ぶ恋）

というまことに古風な、あくまでも古風なものであったという遺憾を残しましたが、それというのも母親への細やかな心づかいであったらしいことは、あのお母さん自身の言葉から想像のつくことです。受話器をとりあげることはたやすく、若者らしいラブコールを交わしたい心をおさえる、そんないじらしい自制をこの若者がしていたことに驚きます。

前年には春四月、地方選挙がありましたが、彼はまだ学生の身で、ある候補の宣伝カーに搭乗し、得意の弁舌をふるう姿を街頭で見かけたことがありました。もちろんアルバイトであったはずですが、少々突飛な行動のように印象を刻まれた覚えがあります。たかが区議選にせよそうした政治活動に身を染める危険を感じたのでありました。幸いその候補者の属する党は無難なものでありましたが、何党にせよ彼が一方に同窓会の役員であることを忘れてもらってはこまるという思いが頭をかすめました。車上の彼と一瞬視線が会ったように思われましたが、さすがに意識して彼の方がそれをそらしたように思います。徐行していた宣伝カーが心なしか小走りに通りすぎ少し先へ行ったところで、再び彼のマイクをとりあげる姿が見えました。生徒会の立会演説会で巧みな弁舌を駆使し、聴衆を魅了して生徒会長に当選した彼ですから、また大学では政治学科に籍をおく彼でしたから、あるいは存外この方向を志していたのかも知れません。

（それにしては区議選とは少し志向が小さいではないか）

と一方では彼の才を知るだけに惜しむ気持もあったのですから、矛盾しております。

しかし、このことについては一切彼とは話題をもったことがありません。持って生れた度胸の良さ、男らしく図太いとも言える神経に眼を見張る思いでした。

そう思えばなおのことモーニングコールの慎しさは意外というほかないのでありました。人間にはこうした意外な側面があるかと思えば、また他面ではすこぶる大胆なふるまいをしでかすというわけのわからないところがある、とこう過去を思いあわせ、このような感慨を浮べ

たことでございました。

早いもので、やがて一周忌を迎えますと、私ごときもお招きをいただき、法要の席に連なりました。

この年昭和四十一年は二月に全日空機の東京湾墜落、一三三人の死亡、三月にはカナダ航空機が羽田に燃え、死者六四、さらにBOAC機富士山麓に墜落、一二四人全員死亡、さらにはこの一周忌から、ほぼ二ケ月先の十一月になるとYS11型機が松山空港に墜落五〇人死亡とふしぎに航空機事故の相次いだ年でした。これほど多く人間の命があっけなく散り、消えるのをみると一アナウンサーの死が前年にあったことなど遠に忘れ去られてもなんのふしぎもないと思われることでありました。

さて、再び文雄君のお母さまに会うことができました。四十九日の時と同じ菩提寺の客殿でした。

「しばらくでございました、お変わりものうて：」

どちらかの訛らしいものを語尾に、懐しげに彼のお母さんが語りかけました。

「あ、あれいらいすっかり、お元気でなによりですねみなさんお変わりありませんか」

「はい、お蔭さまで：：」

お言葉の通り、お見かけしたところもうすっかり傷心も癒えられ明かるいお顔に拝見いたしました。幸い彼には下に年齢のかなり離れた弟妹があったことをこの席で知り、よそながら胸をなでおろしました。

「先生、やはりあの方が文雄の墓に、ええ、そうですいつかお参りいただいたものと見えお花が、：：それを見るなり胸が迫りまして：：」

「そうでしたか、やはり」

「はい、文雄は幸せものです、ほんとうに、でも泣けましてね、もうそれは恥しゅうございました」

「：：：：：」

私は言葉の返えしようもなく目頭の思わず熱くなるのを覚えました。

：：材木の下の方でコオロギが鳴いておりました。この強い風とコオロギの音、なにやらウラハラな感じがいたしますが、いかにもこの台風が早く去って、秋が待ち遠しいといった感じでございます。：：：：

あの九月十八日、魔の午前一時三十分から二時十分まで、二十五歳の青春を賭したアナウンスが甦えります。埠頭に消えた民放（ラジ関）のアナウンサーのこの最後の放送はコオロギのすだく材木置場の描写が印象的であったことをあらためて想い起します。有明四丁目の位置を目のあたりに、（問題の夢の島）を紹介してこの年梅雨期異常発生したハエ騒動を思い出させるなど周到流調さは天晴れのものでありました。同夜トランジスタラジオのスイッチを入れダイアルを（ラジ関）に合わせると、偶然、彼の放送が聞えたこともなにか因縁話めいたこと

で、いまにして思えば虫の知らせでありましたろう。
（ほんとうに惜しいことをした。何度でも惜しいと言いたい。）
と拙い追悼の文章を書き出しておりますことは引用の通りですが、彼に対する愛惜はとうてい言い尽せるものではありません。

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

＊同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

連載

○町○丁目○番地（五）

山口　健二

ぷんと黴の匂いが漂ってくる。三枚重ねられた敷布団に、とっぷり肩まで覆う綿の厚手な掻巻きの中で、廉作はうす暗い部屋を見まわした。これが一番おくの客間であろう。二間に仕切られた床の間や、違棚、掛物、置物のたぐいがそのことを語っている。この黴の匂いは、土蔵から出したてのためであろう。〝そうだ、こんな掻い巻きだったナ〟廉作は亡父の木曾夫が夜具にしていた掻い巻きの重さと匂いを思い出していた。子供の頃は、それが異様に大きく、煙草と男の体臭のからんだ大人の匂いに目眩いがする思いであった。この掻い巻きには人臭さがなく旧家の土の匂いをはらんだ黴くささであった。

〝こんな北関東の寒い冬の中じゃ、こんな掻い巻きが工夫されるんだナ、おやじも母に注文をつけて自分の父親たちが使っていたあんな掻い巻きをつくらせたんだろうナ〟

隣室から喘息気味に咳きこむ音がつづけさまに激しくきこえてくる。当家のあるじの利左ェ門であろう。〝おやじの咳きとそっくりだナ〟

今日一日中ひるま、このあるじの姿は見えなかった。

「今畑の方の別宅へ行ってますんで」

とおカナは言い訳めいた口つきだったが、廉作には、何かこの家の歪みが隠されているように感じられた。

〝別宅なんてえのもあるんかナ〟

ピラミッド型に積まれた米俵や、土間に無雑作に山積みされたジャガタラ薯に空き腹の鳴るのを気にしながら招じこまれた囲炉裏ばたで、次ぎつぎとかれは見たことのない顔と引き合わされたのである。一番初めは、赤茶けた顔いろの、髪の毛のちぢれた女で、この家の長男監物の妻女のハナェであった。監物のことは廉作はわかっていた。かれが見たことのある三夫婦そろいの祝いの写

真で、おカナの隣に坐っていた男の子がそれであろう。未だ支那の戦線から帰って来ないと云う。

〝わたくしの一番幸せだったのは、あのひとが秋田の聯隊にいた時、面会に行った時ですワ〟とこの妻女は自己紹介気味につけ加えた。〝それじゃ、ずっとヨメさんに来てからふしあわせなんですか〟と廉作の尖った神経が言いそうになったのを、かれは唾といっしょに呑みこんだ。

〝何言ってる、あんなに米積んで何の不しあわせだ〟

監物は、この妻女が秋田の聯隊へ面会に行った頃は、聯隊副官だったと言うから、多分大尉ぐらいだったのだろう。廉作は空腹にあわせて、内臓がキシキシ痛む程自分が過さねばならなかった屈辱的な軍隊生活や、下級将校になってからも南太平洋の島で受けた聯隊副官の仕打ちを思い出していた。それは、かれが生家へ復員して、やがて帰って来る兄の恵太や弟の幸太が、自分より上官で、謂われなくかれに敬礼を強いる軍医であったことに、いたたまれない苛立ちを感じて、荒野の東京へ出て来た動機と通じる一種の嫉妬めいた感慨でもあった。

そこへ、おカナの目にちらりと陰りが見えて、髪ふりみだした肉のぶ厚い顔つきの、肩のあたりのがっしりした女が現われて言った。

「よくおいでなさりましたデ」

おカナの目が動いたように廉作には思えた。その目は〝あっちへ行っていなさい〟ときつく言っているようであった。続いて、十二、三の子供が二人現われた。その女と子供は土間の裏からか、厩のあたりから現われたのである。子供の一人は顔立ちも普通であり、もう一人よりは年恰好も上のように見えた。もう一人は、この世の不幸を全部背負いこんだと思われるクシャクシャな顔つきで、二人並んで言った。

「おいでなさりました」

おカナはニコニコはしても何もこの子供らの由来について言わなかったが、廉作は、十数年前、かれがまだ旧制高等学校という学校の生徒であった頃、血みちをあげて読んだことのある野呂栄太郎の〝日本資本主義発達史〟の傍線をやたらに引いた頁がチラリ頭のすみをかすめた。

〝作男ってえのかァ〟

そこへ、囲炉裏の間より一段高くなった座敷から柱や敷戸につかまりながら、かなりしっかりした顔つきの老婆が、〝いってえどなたさんがね〟と言って現われた。それは〝もうじっとしておれぬワ〟と云った風情にも廉作には見えた。〇町〇丁目〇番地に逼塞している加寿刀自より四五才上ぐらいの年頃に見えた。

「なにや、木曾夫さんどこの二番目だとな」

老婆は言った。廉作は、この老婆は写真でも知っていたし、拾数年前に一度このひとが伊勢参りの途中だと立寄った二三日のことが思い出されていた。当主利左ヱ門

の母親のサヤである筈だ。こういう農家では、サヤの様な老婆の地位は、まだまだゆるぎない有様で、魔法使いの老婆そのもののように廉作には思えた。木曾夫の長兄金之助の妻女であり、当主利左ヱ門の母であり、長兄金之助と三十才も年のちがう木曾夫もこのひとにおぶさったり、抱かれたりして育ったのだから、この老婆が伊勢参りの帰り途にその木曾夫を訪ねて来た時に、木曾夫はまだ就学途中にある子供たちに金のかかる真最中であったのに、この兄嫁に金五拾円也を小遣いとして贈ったのだった。五拾円と云うと今日の五拾万円を越える金額で、中学を出て役場などに勤める者の月給が三十円前後であり、それで妻子が養えた頃であった。そのためもあったろう、ラクは廉作のきこえるところで〝おサヤさんてば、なんだネこれっぽちッていう顔つきで、受とったんだよ、それに朝ッぱらからお酒だとサ〟と台所へ下りながら言ったのを廉作は覚えていた。〝山出しのような百姓は、金の入る時はどっと入るんだろう〟五拾円やそこらは金じゃないとおサヤがその時思っても、それは割合自然なことなのであろうか。廉作は父親が保存している手紙類の中を若者特有の好奇心であさって、伯父金之助が父木曾夫に出した学資の返済を求めた達筆な手紙を判読して「当今農家の現金収入のみちも著しく困難を極めおる折柄……」という一節があったことを思い出していた。木曾夫はこのひとの背に背負われたりして当主利左ヱ門とならんで兄弟のように育ったという話をきいたこともあった。

廉作はこの老婆につつしみをこめて言った。

「おサヤおばあ様ですね。木曾夫の二番目の廉作でございます。こたび戦地から帰って来ましたので、先祖にご挨拶などいたしたく……」

「うん、よがったな、木曾夫さんも若死ちゅうもんで、みんな大変だったんべ。どこさ戦ってただや」

「ハイ、南太平洋の島におりました」

「そうかや、食うもんあっだかや、うちのケンモツもまだ帰らねえんで、どうなっだるこどやらな、支那ちゅう国はおっぴろかんべえよな、ありゃカラテンジュクて言っだもんじゃ」

おカナはこの二人の会話が余りちぐはぐにならぬようにと気ぜわしく入れかえた茶や、菓子がわりの漬物をすすめたりする。

「おれも、こんなもん食っでるだよ」

老母は腰に突支棒（ツッカエボウ）の手を当てながらもとの坐である部屋に戻り、茶だんすをあけたてして、やがて何か持って囲炉裏に出て来た。それは小皿に盛られた干し納豆であった。廉作の目には塩にからまれて干からびた干納豆が、甘い菓子に見えてくるのであった。でもこの老婆にしてみれば、〝おれにこんなモノしが食わせねえんだ〟と云う嫁のおカナへの苦情が聞えてくるようであった。

「あんだも大変だったんべネ、こないだも、此処さ軍ぶく着た若けえ男がへえって来てよ、〝一ぺえ、めし食わせてくれっ〟て云ったもんだよな、ほんで、十杯ぐれえ呑むように喰っだかな、どこか北の方で軍ていがちりぢりになってよ、歩いで来たんだと・・・。ダッソーちゅうんだんべが、よめのおカナがああいう人だがらよ、いろいろ面倒みでやって、気車賃も持だしたんべよ・・・・・それがらなぬも音沙汰なすだよ。えろんなごとあるもんだよな」

この老婆のことばはこのような北関東の山並みに近い村々にも敗戦の混乱が押しよせていることを語ると云うよりは、米を貰いに来た廉作の下心を見ぬいているかのようにかれには聞えて来た。

そこへ物静かな細い腰の若い女が現われて、小腰をかがめておカナに何かささやいた。消える程の声で、多分廉作のもてなし方について相談したのであろうか。ハナヱは風呂場の方で風呂を焚きつけているようであった。

「廉作さんや、これが」とおカナはその女を引き合せ気味に膝をずらせ、「葦夫のつれ合いでござんす。ついこないだ老川に・・・・・ご存じでしょう老川へ行ったうちの主人の弟の・・・・・あれにすすめられて老川の方の親類筋に当りますこのひとと一緒になりましてね」と言った。

葦夫は監物の弟で三夫婦祝いの写真で、おカナの膝の上にいた子である筈だ。年も廉作より一ツか二ツしか上でないので、何故かかれは監物よりはいきなり親しくなれそうな気がしていた。それにかれの母ラクが何かの折に〝監物さんはキチンと髪を分けポマードをつけたいい男ぶりだが葦夫さんの方は田舎のオッサンの様な坊主頭で、無愛想なひとだよ〟と批評したことがあったが、廉作はその頃中学二年ぐらいであったろう、学校の漢文の本でならった〝巧言令色鮮矣仁（イウニ・タクミニシテ・イロヲヨクスルハ・ジンスクナキカナ）〟と言う孔子のことばを思い出して母親の若やいだ批評に反発を感じたことがあったのだ。

長い戦争で主に女によって守られて来たらしいこの旧家の周囲には、いつかはやばやと夕闇がうっすらと藍色に立ちこめ始めていた。

廉作は、今朝おそく手みやげの怪しげな和菓子の折を闇市場で買ったあとで、巷に立ち並ぶ屋台で一皿の焼そばと称するものをひとつまみ腹に入れただけである。その和菓子にしてもどこでどう云う菓子店が砂糖や粉を手に入れて作ったものやら・・・・・又焼そばは鉄板の上で生きの悪いキャベツのぶつ切りをふんだんに入れて量をふやしたもので、うっすら石油の匂いをふくんでいたのはヤミの油の質のせいであろう。かれの目は何度も土間の隅にころがっているジャガタラ薯の方に走りがちであった。

「葦夫さんも兵隊だったんじゃございませんか」

廉作は話題を求めて言った。

「ハイ、あれも輜重兵隊で・・・・・カンブコーホセイって言うんですかしら、将校とか云うものになっていたんですが召集がこないうちに適当な人がいないからって大勢の方にせめたてられて村長にさせられまして・・・・・そのまま戦争が終りました」

「それじゃ今、大変ですね、うちのこと村のこと・・」

噂をすれば何とやらと言われるが、その時大杉戸がゴリゴリとあけられて自転車ごと葦夫が帰って来た。外の夕暮れの藍色はさらに濃くなって来ていた。

「やあ廉作さん」

かれはヨロリと立ち上って迎えようとする廉作を、手の平でおさえながら気軽に言った。同じように二番目であると云う兄弟姉妹関係の仲が、廉作の気持をも親しみで軽やかにしていた。囲炉裏ばたをさけて奥へ着がえに入ろうとするかれを、廊下に坐って迎えた先程おカナが照会した妻という女が「お帰りなさいませ・・・・・」とその先が聞えない程細い声で言い、目は大家族の中の重苦しい我慢をしいられる新妻が夫を迎える信頼と訴えにうるんだと廉作には見えた。「ああ」と無雑作に答えた葦夫にも、廉作は妻に対するいたわりとあわれみの情をよみとった感じで、初めてみる日本の妻のういういしさをそこにみた。監物の妻ハナヱに対する感じとは何か遠い距離がそこにあった。

「廉作さん、全くよく来てくれたなあァ、今夜はすこし呑もう、自家製の焼酎ですがね」

葦夫は廉作の方をふりむいて言った。

〝自家製でも何でもいい、俺だって島で、椰子から酒をつくることを自分でやった。米軍の爆撃でこわされた爆撃機「呑龍」から鉄板や管を剝ぎとって来て土がまの下でマングロープを焚いて蒸溜ということやったんだ、塩だってそのデンで自分らで作ったんだ、濃い灰色の塩が甘いことを知ったのもその時だったッけ〟廉作はいつ時空腹を忘れて島での原始生活を思い出して、闘志がつき上げてくるのを感じていた。だがその心の底には、米の俵をピラミッド型に積み、ジャガタラ藷を土間にころがしながら敗戦を招いた内地の人々に、〇町〇丁目〇番地の風呂屋の流し場で、あたりの商家の旦那衆の油ぎった腹部のふくらみに感じたと同じやり場のない嫉妬に似た怒りがよどんでいた。

大杉戸が三度開かれた。三、四才の女児を先頭にその妹らしい子供を抱いた女がは入って来た。廉作が一番初めに東の門をは入った時、縁側で足をぶらぶらさせながら鶏に餌を投げあたえていたひとであった。それにつづいて先程廉作に挨拶した二人の少年と六十才を越えていると見える老人が農作業のいでたちでつづいた。今日の畑仕事が終ったのであろう。先頭の女の児が屈託のない声を張り上げた。

「おばチャン、お風呂いれて」
いつもの風呂を貰う時間なのであろう。
「今夜はお客さんが先だよ」風呂場から出て来ながら監物の妻女のハナヱが言った。つづいてその母親らしい先刻のひとが、その児たちを抑えてあらためて廉作に、「先程は失礼しました、神尾のシヅでございます」と名乗った。廉作は突嗟にこのひとが監物や葦夫の妹で、神尾という家へ嫁に行ったひとだなと見当をつけて、あわて気味に外交的に言った。
「存じております。廉作です……」そしてハナヱとナカに、どちらへともなく言った。
「ボク風呂頂戴しません、実は少し風邪気味ですし……それに……」この言葉のよどみは明らかにかれの空腹に由来するものであったし、風呂につかるより一刻も早くこの家の全貌を見ぬかねばならぬ、そして米を貰うていのいい切ッ掛けをつかまねばならぬ。"この女も人の妻であるか"と云う得体の知れない失望もまたサッと心の隅を走った。"何世帯いるな、これで堅物が帰ってくれれば四世帯同居だ、それに当主の利左ヱ門は畑の別宅の方へ行っているというが、これにゃ……さっきの髪ふりみだした女中風の女がからんでいそうだな……"廉作は底しれないマクロコスモスの広がりの中で望遠の見当のつかない苛立ちを感じていた。
「それじゃお前らお入り、トラさん入れてやってくれませんか、それからシンどんもイシどんもどんどん入ってしまいナ」
ハナヱは、老人をトラさんと呼び二人の少年をシンどんイシどんと呼んだ。
「それでは廉作さん、こちらへ移りましょうか」
おカナはサヤと廉作を囲炉裏の部屋から一段上った十畳程の部屋へ導いた。そこには、卓子にもう夕食用の皿小鉢が並べ初められていた。
「まあ……どうぞこちらへ……」とカナは廉作に坐布団をすすめ、サヤをいたわりながら廉作とは余り話の通ぜぬ上座の火鉢のわきに更に置炬達をしつらえていた。
和服に着がえた葦夫が、帯をぐるぐる巻きつけながら廉作のむかいに坐って言った。
「廉作さん、信州のラクおばさまのところからですか、おばさん元気ですか、戦地はどこでした」
矢つぎ早やの質問である。
「ハイ、母のところへ復員して来たのですが未だぼく一人で兄も弟も帰っておりません。もう帰って来そうなんで……ぼく東京の山上のところへ今来ています。そこからこちらへ……」
「ああ山上さんね、ラクおばさまの実家でしたかね。東京はひどい。うちの妹のシヅの一家も渋谷の松濤で焼け出されて今、東の門の長屋に旦那の三郎君やお姑さん、

子供たちと来ています。三郎君は満鉄の調査室ってえところにいて、運よく兵役をのがれたんですが……丸焼けで神尾家の仏壇を運び出すのが精一杯というところだったらしいですよ」
葦夫の話は何の衒いもなくこの家の襞を語ってくれそうであった。
風呂から次々とあがった子供たちは、見知らぬ来客を珍らしがって、裸のまま夕食の卓子のまわりを跳びまわってカナや葦夫の新妻に追いかけられつかまえられて服をきせられる騒々しさがいっとき続いた。廉作にはだが、このような風景は十何年忘れられていたもので、大人たちの企みのある日常にさっと一陣の風をたたきつける傍若さが、家の歪みや傷みを繕って、不図かれに"家庭のしあわせ"と云う空気を感じさせ、又々得体の知れない焦りと苛立ちが心の底に立ちのぼる気配であった。
東京があんなに焼き払われても、このひとたちには逃げ込む大家族制度がある。俺は古本屋街の裏の長屋に、狂人をかかえた祖母と一緒に米に困っている。それに叔父大野に月壱千円の部屋代を入れる身分だ。失業者だ。満鉄の調査室だか何だか知らぬが、戦争が負けて会社はつぶれても応分の手当はあったろう。それに渋谷の松濤と云えば、大邸宅街だった筈だ。金持ちのせがれじゃないか。とその焦り、苛立ちは心中でつぶやいていた。その時、東の門の長屋へ子供たちを連れて大杉戸から帰ってゆく先程のシヅと名乗った女と、声高に笑い声を交えて何か話し合っていた若い女が、のっそりとした廉作と同年ぐらいの色白の男と連れ立って入って来た。
「廉作さん、三郎君と妹のマキです。"三ぶちゃん、信州の木曾夫叔父のところの廉作さんだ"」
葦夫は最初の焼酎を廉作のコップにつぎながら、言った。"ははん、これが渋谷で焼け出されて女房のうちへ逃げ込んだ男か、色男だな"廉作の漠然とした嫉妬めいた気持はくすぶりつづけた。マキと云う葦夫の妹は何故かけたたましい声をあげて笑いながら真すぐ廉作を見た。かれに"俺の服装におかしな所でもあるんかな"と思わずギョッとさせる笑い声であった。
「廉作さん、マキは三郎さんの世話で学校でてから満鉄につとめていたんですが、今夜は小学校の宿直室で、お華の稽古があったんで、センセイ格で行っておりまして……」とおカナが葦夫の紹介につけ加えた。"お華のお稽古か、ふん"廉作はコップの中の焼酎を殊更肩を張る気分になって呑んでいた。
「おい左マキ、小遣やるよ」
三郎がそう言って分厚い財布から新しい百円紙幣をつまみ出して無雑作にマキに渡した。"そんなこと派手に俺の手前でやることなかろう"廉作は先日狂人の叔父利秋のふところから八枚の新円証紙のはってある十円紙幣の入った皮袋をうばい取った自分を、それで上野山下で、

毛皮の外套をきてはいたが、ボロボロとくずれかけたズロースをはいていた女をつかまえたことを、空きッ腹にいきなり流し込んだ焼酎のせいもあってか、吐き気を催しながら思い出していた。

葦夫は、×橋教導学校という幹部候補生上りの将校を養成する所を出るとすぐ大陸へやられ、昭和十三年には張鼓峰でのソ連軍との鞘当ての折に、又昭和十四年にはノモンハンの日ソ衝突の時に、その戦闘の周縁を兵器糧秣を運ぶことに営々と働いたことを訥々と語り、廉作もまた、全く戦闘の様相は別であったが、南太平洋の小島での飢えた三年の籠城の話をした。二人に共通の場面がいくつかあった。それは×橋教導学校の生活のことであった。何度か乾杯めいたコップのやりとりの間に廉作は電灯の光が黄色くキラキラと眼前にちらつくのを感じ始めた。目の前には、実に何年も見たことのなかった白米が盛られている。魚がある。それは近くの川でとった大鯰を開いて囲炉裏で串焼きにしたものであろうか、卵がある、その卵を着せたオムレツがある。中の肉は、庭にいた鶏を一羽締めたものであろうか。つゆもある。豆腐が入っている。野菜の甘煮もある。蓋のある壺には何が入っているのであろうか、つとめて笑顔を作りつづけて来た廉作の顔がゆがんで来た。

〝此処にゃまだこんな食い物がある、俺は帝国大学というところを出たんだが、そんなところを出たということが一体、敗戦の荒野の東京で何になるんだ。満鉄の本社勤めの社員なら、兵役もなくて済んだのだろうか、あいつの分厚い財布の中の金は……〟ゆがんだ顔の額には汗が吹き出して来た。天井が右左に揺れていた。

〝俺は一体、昨夜あのめしを食ったんかな〟廉作はどんよりと重い感じのする腹の中に、枕許の水差しからごくごくと水を流し込みながら記憶をたどっていた。隣室からは利左ヱ門のしきりに咳きこむ音がつづく。

〝俺はめしの途中で意識を失ったんかな、そんな不様なことをやる筈はない。たしかに誰の手もかりずに、めしも食って、ちゃんとあいさつもして此の部屋へ、此の布団の中へ入った筈だ。腹が重いのは、めしを充分食ったからだ〟かれは切れているいっときの記憶を、自分の都合に合うように継ぎ合わそうと暫らく眼をとじた。遠くでボヌボヌと時計が四ツ鳴って、かれをどこか暗い穴に引きづりこむかと思わせる静けさがあった。〝あんなにいろんな者につぎつぎ会ったが、あれらは皆この屋根の下のどこかにおさまって寝ているのであろうか、隣からは洩れて来た咳のほかに人気が感ぜられないから、利左ヱ門は独り寝であろう。妻のおカナは又別の部屋なのであろうか。利左ヱ門は誰かが山出木曾夫の二番目の廉作が来たことを別宅とかいう所へ知らせて、俺がめしを

終えて寝床には入ってからかれがやって来たのだろう、利左ヱ門は俺と……年は親子のちがいだが従兄弟同志ということになるんかな。おやじの兄金之助の子供だから、おやじと利左ヱ門は叔父、甥だ。そうすれば従兄弟ということになるナ。昨夜俺は米を貰い度いとうまい切ッ掛けをつかまえて言っただろうか。どうもそこらが怪しい……。米のことを言わなけりゃ此処へ訪ねて来た意味がないぞ。そうだ今朝は従兄弟の利左ヱ門に直接言おう、それにしても……」

廉作は暗い天井に目を据えて、利左ヱ門の人柄を、父の山出木曾夫が母ラクに洩した切れぎれの言葉をつなぎ合せて、さぐろうとしていた。

〝利左ヱ門は仕様がない奴だ〟

〝あれは鉄砲打ちは名人芸だ〟

鉄砲打ちの名人と仕様がない奴とはどうしても素直にはつながらない。仕様がない奴とは家業に精を出さぬと云うことであろうか。

〝山出水瓜と言われる水瓜づくりの名人だ〟とも言ったことがあったッけ。そうすると家業を満更捨てた人でもなさそうだナ。

「金之助アニさんは孫の監物さんが剣道が強いんで特別可愛がって父親の利左ヱ門さんを剣道やらないで鉄砲打ちばっかりやってたから嫌ったんだね。親子の間でも性が合う合わないってことはあるもんだよ」とラクがいつか言ったことがあったが、そんなもんかな。その上「利左ヱ門は仕様がない奴だ」と云う木曾夫の言葉に対して、母のラクが「おサヤさんが自分のせがれの利左ヱ門さんに肩持って、おカナさんに男がメカケテカケ持って何悪かんべ、甲斐性ってもんだって、この前来たときお酒飲んであたしに言ったんですヨ」と普段に看護婦との交渉が自然に多い木曾夫に主婦権を主張する調子で言ったこともポカリと頭に浮んで来た。

〝別宅ちゅうのは、そういうことか、そう言えば昼間挨拶に二人の子供と一緒におれの前に現われた髪ふり乱した頑丈そうな女のことばはこの北関東よりもっと北の国の訛りを、その抑揚の中に含んでいたし、おカナが心なしきびしい目になって「お前の出てくる所じゃない」と無言で言っている様であったのが頷れると言うもんだ〟

廉作のあたまはうすあかるくなってゆく障子の色合いにも似て、この家の歪みをほぐしかけてゆくようであった。

（未完）

連載

ハイラル挽歌（十二）

第一章　海拉爾の白旗

金子正義

（十八）

静かに夜が明けた。八月十七日の太陽が、河南台陣地に昇ると、南北二粁、東西一、五粁の陣地全面を被う、蜂巣状の砲弾破壊穴が浮び上がり、防禦施設の残骸や、瓦礫の山が露き出された。戦車壕や崩れた塹壕には、収容できない彼我の屍が無惨に晒されている。日が高くなると凄惨な地上を隔絶するように、蒼穹が高く深く広がっていった。

無気味な静寂を破って、M一四、M三四戦車数十台が、悪魔のようにキャタピラを軌ませて攻め登って来て、日本軍の反撃の無い戦場を、我が物顔に走り廻って陣内深く進入した。地下の旅団司令部の位置迄は、もう五百米程となった。如何に抵抗しようとも、三、四日で日本軍は全滅の運命であった。

最も要害堅固な第二地区陣地ですら、その有様なので、他の要塞は殆ど潰滅であった。既に伊東台第五地区陣地は藻抜の殻であり、安堡山第一地区陣地は真先に全滅していた。松山第三地区陣地では、白兵戦を絶望的に繰返しているが、落城寸前であった。ソ連軍に全く無視されていた梅が丘第四地区陣地も、十五日の夜襲でソ連軍を刺戟したので、今は猛烈な砲撃の下にあった。

野村少将は、戦闘司令部のベッドに臥せてはいたが、暁近くまでまんじりともせず、ハイラル要塞六千の将兵の運命を考えていた。そして遂に最後の一兵に至るまで戦い抜いて玉砕するよりは、潔よく軍門に降ろうと決意した。假え、戦争終結が謀略であっても、将兵の生命を救う好機であると思った。

ベッドから出ると、森脇副官を呼んで、

「九時に部隊長会議を行ない度い、例の件を謀る」

と命じた。森脇少佐は直ぐ通信隊に命じて、地下ケーブルで前線の各部隊へ連絡したが、前線部隊の隊長が戦闘司令部へ駈けつけるにも容易でなかった。早朝なので、

ソ連軍の砲撃は未だ始まらなかったが、連日の激戦で連絡壕は寸断され、地下道は至る処で崩れていた。いくら待っても来ない隊長もあって会議が始ったのは十時を過ぎていた。狭い会議室に座った隊長達は苛烈な前線のようすを鬼面のような形相に表わして、玉砕直前に今更何んの会議かと訝り焦ら立っていた。

先ず、森脇副官が十五日以降の通信隊が捉えた終戦情報を説明した。目前の敵と悪戦苦闘を繰返していた隊長達には、正に寝耳に水であった。誰もが呆然として暫くは声も無かった。

野村少将が徐ろに立ち上って姿勢を正すと、全員が一斉に起立し、佩刀と長靴の踵が戛然と鳴った。

野村少将は、

「これは、陛下の戦争終結の大命である。直ちに聖旨を奉戴して戦闘を停止すべきであるが、吾が旅団の停戦については、各隊長の腹蔵無き意見を聞き度いと思う」

と常日頃と変らぬ言調で言った。

直ぐに藤森大尉が、

「閣下、それは敵謀略であります。絶対に迷ってはならんと思います」

と語気鋭く叫んだ。引摺られるように若手隊長が、交々に叫び出した。

「現下の戦況は、利非らずとも、大東亜共栄圏建設の聖戦を、中途にして投げ出す訳が無い。これは老獪卑劣な連合軍の謀略であります！」

「我が国の軍隊に降伏などあり得ない、勝敗は時の運、局地の犠牲は大局の勝利を齎すものである。此の期に及んでは、全満蒙の戦局を有利に転換する為に、我がハイラル要塞は、潔よく全員突撃を敢行して玉砕すべきである」

「いや、我が旅団の使命は、ハイラル要塞の死守にある。籠城戦には謀略はつきものである。如何なる謀略にも惑わされることなく、最後の一兵に至るも地下要塞に拠って戦い抜くべきである」

と腕を振り廻し足を踏み鳴らして絶叫した。

収拾のつかない状態になりそうなので森脇少佐が、

「各地区要塞が分断され、孤立している現在、ここ数日で全滅は必至である。河南台の本要塞も、五日が限度である」

と説明したが、隊長達は耳を貸さず、後方へ脱出して開嶺の師団に復帰すべしの意見と、死守玉砕の主張との激論となった。藤森大尉が大声で、

「一、二の不確定な情報に動揺することなく、予定通り今十八日夜半、全部隊は陣地を脱出して敵包囲を突破し、興安嶺の師団陣地に向うべきである」

と強く主張すると、一同は次第に藤森大尉の主張に傾き始めた。

原中佐は、野村少将が冒頭に『陛下の大命に従うべきである』と言っているので、既に停戦降伏の胆を据えて

いて、各隊長には唯、言いたいことは存分に言わせているに過ぎないと思って、成行を見守っていたが、もう限度であろうと思ったので、

「自分は、十五日以降の情報は謀略では無いと判断する。玉音放送に『堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カント欲ス』と仰せられた。今は、聖旨を奉載して停戦し、一人をも損耗させず復員させるべきと思う」

と言った。一瞬、邃として冷やかな沈黙があった。原中佐は野村少将に決断を求めるように。

「閣下！」

と呼びかけた。黙念と将校達の激論を聞いていた野村少将は、

「そうせい」

と徐に言った。後に続く言葉を待ったが、少将はそれきりで瞑目している。余りにも短かい言葉なので将校達は呆然として顔を見合せた。原中佐は旅団長の意を体して、

「旅団長閣下の断に従って、我が旅団は明十八日午前四時を期して戦闘を停止する。各隊長は守備陣地に戻り、部下将兵に此れを徹底させ、明朝四時に各守備陣地に白旗を掲げるよう。濫りに異を唱え、非を鳴らして同胞排拆して乱ることなきよう軍規を厳守せよ」

と命じた。

各隊長は憤懣やるすべもなく、低く暗い天井を睨みつけていた。中には両眼に泪を溢れさせ、歯を喰いしばり、軍刀を床にゴツゴツと打ちつけて無念がっている者もいたが、次々と席を立って行った。

原中佐は第三地区陣地の太田少佐、第四地区の金井中尉に電話で停戦を命じようとしたが、何度掛けても地下ケーブルが故障して通じないので、通信隊長の板垣少佐に、電話線の修復をして両陣地へ、停戦の旅団命令を徹底させよと厳命して、戦闘司令部内の停戦準備にとりかかった。

白旗の準備を命ぜられた飯塚曹長は、下士官達と地下兵舎から敷布を探してきて、

「これで良くありますか」

と髭面を撫ぜ乍ら、下士官達に拡げさせた。

「どうも縦長すぎるな、原参謀殿どうでしょうか」

と森脇少佐が飯塚曹長と敷布の両端を持って引っ張って見せた。

原中佐は、日本軍が白旗を掲げるなど、夢想だにしなかったので、白旗の規格など念頭になかったが、要塞の望楼に掲げるには小さいように思った。だが、此の期に及んで国際法上の規定を確かめる迄も無かろう、と二枚縫い合せるように命じた。

飯塚曹長は、下士官達と馴れない手つきで、ブスブスと縫い合せて持って来た。原中佐と森脇少佐は顔を見合せて、粗雑な出来栄えの白旗を不潔な物のように凝視し

ていた。

藤森大尉は『要塞を脱出して敵中突破し、開嶺の師団と合流する』と最後まで主張していたので、停戦降伏の決定には承報できず、忿懣を抱いて部署に帰った。

揮下の中隊長には何にも伝えず、心中秘かに十八日払暁、単独突破しようと決意して、まんじりともせず暁を迎えた。だが、停戦通告の四時になると、流石に狂気のような昂奮も冷えて、単独突破は自殺行為にすぎないと思い直すと、各中隊長を召集して聖断と、旅団長命令を伝えた。最後の玉砕突撃の命が下るものと集合した中隊長達には、青天の霹靂であった。

藤森大尉は、中隊長達が非難の声を発する余裕を与えず、

「兵隊達には俺が直接伝える。直ちに中央最前線に全員を集合させよ」

と命じた。中隊長達は万感を堪えて前線壕に戻って行った。その後から藤森大尉も地下壕から出て、朝霧の中を歩いて前線に向った。

戦野は砲撃も無ければ、一発の銃も無く静寂であった。確かに戦闘は終結したのだ。彼は始めて降伏を実感して泪が滲んできた。

最前線の崩れ残った砲塔の蔭や、防衛壕に生き残った兵隊達が集結して待っていた。藤森大尉が近付くと、低く折敷した姿勢が蠢めき、最後の突撃を覚悟して、魚のような目を一斉に向けた。藤森大尉は一兵一兵を見届けるように緩っくりと見渡して、

「皆んな良く聞け、今暁は一発の砲撃も無い、戦争は終ったのだ。……残念乍ら日本は降伏した。だが我が部隊が負けたのでは無い、我がハイラル防衛八十旅団は、勇戦奮闘克く軍人の本分を尽して最後まで戦ったのだ。特にお前達は軍人精神の本領を発揮して克く戦った。ご苦労であった。大隊長として心から感謝する。……

今から武器を捨てて陣外に出て、ソ連軍との停戦協定に従う。何にも不安、動揺することは無い、最後まで軍律に従って行動せよ。解散！」

兵隊達は茫然と聞いていた。兵隊達は、如何なる事態がおころうとも驚くことはなかった。余りにも多くの戦友が死んだ。百雷が一時に落ちるような砲爆撃に感覚が痳痺して仕舞ったばかりか、精神も鈍く反応を失なっていた。もう玉砕であろうが、脱出であろうがどうでも良かった。だから日本軍の降伏と聞いても何処か遠い外国のことのようにしか感じなかった。

唯、何にか魔法にかかっていたような、希薄な精神が醒めていくようであった。雁字搦めの呪縛が緩んだように思った。全身を覆い被せていた重圧が急に消えて、五体から力が抜けて行くようであった。

秋の茫野のように怪しく並び立った銃剣が、波のように揺れて兵隊達が動き出した。

（十九）

中央要塞の地下兵舎には、各砲塔の生き残りが集まり、地下道には、外部陣地から撤退して来た兵隊が溢れていた。誰もが、十八日未明に決行されと伝えられる肉弾突撃を、今か、今か、と待っていた。

だが、三時を過ぎ、四時となっても何の動きもなかった。兵隊達は、長い緊張に疲れて、ぐったりと睡ったようになっていった。

梅地軍曹も、自失したように睡っていたが、慌しい物音に目覚めた。何にか辺りの気配が緊迫していた。愈々要塞脱出の突撃かと帯剣を締め直していると、森脇副官が入って来て、薄く照らす針金で被った電球の下に立った。横に従った飯塚曹長が、

「全員起立、動けぬ者はそのままで良い。森脇副官殿より重大命令があるから良く聞け！　敬礼！」

と大声で言い渡した。森脇少佐は沈痛な顔で答礼すると、徐に声を発したが、低くて何にを言っているのか始めは分らなかった。

「……我ガァ……大日本帝国ハァ……天皇陛下ノ」

兵隊達はハッと身を引締めた。愈々玉砕の命令だと血の気がさっと引いていった。

「……御仁愛ニヨッテ……亦タ、大平ヲ開カント……ソ連軍ト停戦協定ヲ締結シタ……オ前達ハ直チニ軍装ヲ解イテ地上ニ整列セヨ。爾後ノ行動ハ自分勝手ナ判断ニヨラズ、指揮官ノ命ニ従ッテ堂々ト行ナイ、絶対ニ軍人ノ本分ニ悖ルコトナキヨウ行動セヨ……」

梅地軍曹は、停戦と聞いて全身の力が一度に抜け落ちて、伝達が終ると崩れるように腰を落した。直ぐには戦争終結の反応が湧いてこなかった。唯、茫然として身も心も空洞になって仕舞ったようだった。将兵の誰もが同じであった。沈黙のみであった。立ち罩めた玉砕の熱気が、すっと消えていった。

梅地軍曹は、砂のように乾いた虚ろな心に、何にか温味が蘇えるように思った。

「嗚噫、外の空気が吸えるな、太陽が見られるな」

と呟いた。

十八日五時、外は昏く雨がしとしと降っていた。砲撃に痛められた戦闘指揮塔の、焼け曲った鉄柱に括りつけられた旗竿に白旗が掲げられていた。白旗は雨に打たれて悵然と垂れていた。恰も全軍の悲しみを象徴しているようであった。

焼け着いた厚い鉄扉を押し開けて将兵が出て来た。真暗闇の地下壕に馴れた瞳に外光は目を焼くように強く、暫くは目を明けられなかった。薄く瞼を開くと、空も四方の丘陵も黄金色に輝きぼやけて判然としなかった。目が馴れると地上に散乱している壊れた兵器や、彼我の屍が見えてきた。崩れた砲塔も、大きな破壊穴も、泥土の

ように転っている死体も、湿っとりと小糠雨に濡れていた。梅地軍曹は惘然と破壊と殺戮の戦野を眺め、一変した周囲の山容を仰いだ。

「此の地獄の様相は一体何んだろうか、天地自然も、営営と築き上げた要塞も、唯一図に敵味方が破壊し合って瓦礫の山にして仕舞った。人間同志が狂気のように殺し合った戦闘は、一体何んだったのだろうか、全ては神の御心によるものなのか、あの天地を鳴動させて炸裂する砲弾の中で、のたうち廻って死んでいった多くの戦友達、非戦闘員の邦人や、婦女子の無惨な自爆は何んであったのか。無辜の満蒙人の畑や家は焼かれ、家族を失なうこと迄、神は必要とされるのか、そして今、何事も無かったような静かさの中で戦闘は終っている。今、俺は生きているのが不思議のように生きている。次の今には何にが待っているのだろうか、過ぎ去った破壊と死の今と、希望と平和への今は、一体何処で繋っているのだろうか」

梅地軍曹は茫然と雨の荒野に立っていた。

雨霧に車輛の響きが大きく近づき、濃霧の内にロシア語がして、突如と目の前に見上げる程のソ連兵が現れた。髯面の大男揃いのソ連兵は、日本兵に銃剣を突き付けて一人一人の体中を撫で廻して武装解除した。時計、財布手帳の私物まで取り上げると、銃剣を振り廻して山を降りろと追い立てた。日本兵は無念に耐えて顔を硬張らせ二列をつくって歩いた。

山を降りるとソ連軍の砲兵陣地であった。三十糎もある重砲が数十門も並んでいた。此れで撃たれては山容も変るのも無理ない、その猛砲撃に克く耐えて頑張ったものだ。梅地軍曹は自負の念が昂まってきた。日本兵は誰も同じなのだろう。重砲の前に立って物珍らしげに、通過する捕虜の列を眺めているソ連兵の前を、捕虜の身を忘れたように胸を張って歩いて行った。

野村少将を始めとする旅団司令部の将兵は要塞内の整備に残留していた。午前八時ソ連軍将校がジープでやって来て、原中佐、森脇少佐が軍使となって要塞を出た。ソ連軍将校は傲然と構えて原中佐から軍刀を取り上げ、ジープに乗ると目隠をした。ジープは砲撃で掘り返えされた荒地を大きく揺れ乍ら一時間程走った。ジープから降りると目隠が取られた。原中佐はどうやら其処が、第五地区陣地の東側に在る農林屯部落であると思った。ソ連軍司令部はハイラルの郊外を遠く三十粁も離れていたのだ。何度か敵司令部に夜襲を試みたが行き着けない筈であった。

二人は大きく張ったテントに連行された。中央のテーブルに小柄な中将と濃い髭の少将が居た。挙手の礼をした原中佐に中将は座ったまま答礼すると、厳しい口調で喋り出した。傍らの赤軍通訳が、

「何故ハイラル一帯の日本軍の降伏が遅いのか、未だ抗戦している要塞には日本軍指揮官は降伏を通報しなかっ

たのか」
と訳した。原中佐は、
「我が独立混成八十旅団には未だ正式の軍命令は届いてない。貴軍よりの通報も無かった」
と答え、通訳するのを待ち、更に、
「松山の第三地区陣地及び梅が丘の第四地区陣地には何度も電話連絡をしたが、ケーブルが切れて通じなかったかも知れぬ」
と言うと、
「今夕五時迄に降伏するように伝えよ」
と中将は厳しく言った。原中佐は、
「電話が通ぜず、貴軍と戦闘中では連絡がつかない。貴軍が攻撃包囲を解けば、我が方より伝令を向けて停戦を伝える」
と答えた。中将は隣席の少将と顔を寄せて協議していたが、中将が、
「ダーダー」
と言った。原中佐は更に、
「第三、第四陣地に停戦を徹底するには離れているので十八日午后五時は無理である。十九日朝の五時迄二十四時間の猶予を願い度い」
と言うと、中将は直ぐ、
「承知した」
と頷いた。

森脇少佐は独り残され、原中佐は再びジープに乗せられて要塞に引き返した。野村少将に報告後、直ちに停戦を命ずる旅団長命令を、第三、第四地区陣地に伝える親書を下士官二名に持たせて急行させた。

（二十）

八月十八日午后五時、松山の第三地区陣地の守備隊長太田少佐は、河南台第二地区陣地全体の砲声が朝から焉み、旅団司令部との通信連絡も途絶したので、その方面の日本軍は全滅したものと思った。愈々第三地区陣地も最後の時が来たと覚悟を決め、各隊長を要塞本部に集めて、十八日夜半十二時を期して一斉に前面のソ連包囲陣に突撃を敢行し潔よく玉砕せよと、命じて別れの水盃を酌み交わしていた。

要塞地下壕の一隅にはアムクロ引揚げの婦女子が残っていた。八月九日アムクロを脱出して以来、夫や親に別れたままであった。既にアムクロ警察隊は陣地の前縁で歩兵部隊と共に散って仕舞ったが、彼女達は未だ知らなかった。砲弾雨下の激しい鳴動の中では逢えようとは思えなかったが、皇軍が必ずソ連軍を撃退して、夫婦親子が再会できる日が来ると信じていた。

第三地区陣地に辿り着いた時から弾薬の運搬、負傷兵の手当と健げに働き、次第に追い詰められて要塞地下に逃げ込んで三十五名となって、絶望的な状況となったが

悲鳴をあげたり、喚めいたりする者が居なかったのは、警察隊長夫人の丸山貞子がいつも冷静な態度で、毅然として女子隊の中心に居たからであった。

十八日午後から戦車の来襲も砲撃も無く無気味であった。そのうち兵隊から今夜半全員突撃して玉砕すると伝えられ、アムクロ警察隊は既に全滅したと知らされた。

「私達の夫や兄弟、そして子供達はお国の為に此のハイラルの煙となって昇天しました。私達も愛する夫や兄弟達のもとに参りましょう」

と夫人は静かに言って、怖れ震える年若い娘や、年寄に手榴弾の安全栓を抜いて手渡し、発火の要領を教えた。

「さあ、二人ずつ固まって発火させ、手榴弾を胸に抱くのよ」

と落着いた語調で言った。幼い子供はもう泣く気力を喪っていた。老婆の感情は既に枯れてしまった。最初の一組は三名であった。互いに向い合って頭を下げ、別れの挨拶をすると二発の手榴弾を同時にシューと発火させた。闇が一瞬瑠璃色に鮮明になると、三名は覆い被さるように重なって倒れた。爆発までの数秒間息を詰めた。轟然と壕内に反響して手榴弾は炸烈した。

見守った者達が次々と立ち上って、丸山貞子にペコンと頭を下げ挨拶して手榴弾を発火させていった。膝や腰の辺りをはたはたと叩き、砂塵を払って最後の身嗜を整えて死に臨む娘もいた。凄惨な最後であった。殉教者の昇天のように崇高であった。反響する炸裂音と青白い閃光の中で声も無く魂が去っていった。

丸山貞子はこの世の姿とも思えない集団自決を最後迄見届けると、大きな安らぎを覚えた。足もとの血に塗れた毛布を拾い上げ、親子三人頭から被って手榴弾を発火させ、右腕に長男、左手に長女を抱いて沸き出る閃光に覆い被った。

自爆の余煙が壕内に立ち罩めている時、旅団本部よりの伝令が、松山第三地区戦闘指揮所へ駈け込んだ。

『停戦協定成立。第三地区陣地ハ直チニ戦闘ヲ停止シテ陣外ニ白旗ヲ掲ゲ、明十九日午前五時、全員要塞前ニ整列スベシ。爾後ノ事ハ命令ヲ待テ』

と野村少将の署名があった。伝令は、既に第二地区旅団本部は十八日午前八時。ソ連軍に引き渡されたと言った。

太田少佐は壕の闇に目を据えて声も出なかった。暫く瞑目していた太田少佐は集合していた各中隊長に、直ぐ部署に戻り、将兵を纏めて明朝五時迄に戦闘指揮所に全員集合するように命じた。中隊長達は停戦協定に疑問を抱いたが、ノモンハンの例もあるので、彼我入り乱れて接近している前線に一刻も早く伝えようと、愴惶として飛び出して行った。

杉山上等兵は河南台第二地区陣地に着いて以来、何度も守備陣地が変っていた。苛烈な戦闘で手薄となった前線を転々として最後に国生大尉の松山陣地に居た。十六

日以降は最前線の松山南端台地に分隊長として孤立していた。幾度か死線を越え擦り傷一つ負わないのが不思議であった。彼の壕はソ連軍攻撃の盲点となっているのか、彼が到着した時から砲撃も戦車の来襲も無かった。

連日北松山方面や河南台西側が猛攻撃を浴びているのを望見していたが、十八日朝から静まり返って砲煙もあがらないのが不審であった。日中時折り偵察機が松山方面を旋回しているが、依然として砲声が絶えたままであった。台地から四方を望見しても煙も見えなかった。そのまま森閑として日が暮れ、不安な夜が明け、妙な予感がする十九日の朝となった。

中隊本部から伝令が来て、

「直ちに戦闘を停止して中隊本部へ復帰せよ。陣内の兵器弾薬はそのままにして軽装で引き揚げよ」

と言って引き返した。杉山上等兵はやはり不安な予感は適中したと『こりゃ、只事でないぞ、停戦協定なら、兵器を放置する訳が無い、どうやら降伏らしいぞ』と独白し乍ら未だ充分使える迫撃砲や、機銃をそのまま残置するのが残念なので、戦車が襲来したら爆発するように爆薬を仕掛け、八名の分隊員と急いで中隊本部に駈け戻ったが、既に藻抜けの殻であった。呆然として散乱する兵器具を見廻した兵隊達は、愈々戦闘停止は本当だ、一刻も早く第三地区陣地の中央戦闘指揮所に行こうと飛び出した。

生き残った兵隊達は生命の助かった嬉しさに翔ぶように走って行った。杉山上等兵は未だ信じられないようにあれこれと惑い乍ら緩っくりと最後尾を歩いて行った。崩れた斜面を登りつめると中央陣地の台地が見えた。しとしとと煙る雨の下に死体や破壊物が累々とした中央陣地が展望された。丘の中央に雨に打たれて白旗が悲しげに垂れていた。杉山上等兵は始めて降伏が厳然とした事実として目前にあるのを知った。敵戦車に破甲爆雷を抱いて体当りして散った戦友を思うと、胸が迫って泪が後から後からと溢れてくるのだった。

孤立した砲塔や、取り残された前進陣地から生き残った将兵が次第に集って来た。誰もがどこか負傷していた。未だ生々しく血の滲む繃帯をして戦友に助けられてやっと辿り着く兵もいた。

兵隊達は、小糠雨にうたれて長い時間悄然と立っているので、裂けた夏衣が膚に貼りついて寒かった。激戦十日の籠城に耐えた髭面は威厳があったが、疲労と飢えで捕らわれの順番を待って震えている間に、惨めな敗軍の将兵と変っていった。

杉山上等兵の脳裏には、生きて虜囚の辱めを受けずとの、戦陣訓の文句が浮んでは消えた。ソ連軍の捕虜となったらどうなるのだろう。まさか日本兵全部を銃殺しないだろうが、厳重に調らべられソ連軍に重大な損害を与

えたり、ソ連兵殺傷の事実が判れば、直ちに処刑されて仕舞うだろう。譬え助かったとしても投獄されてシベリア送りとなるだろう。と次第に不安が募ってきた。

軈てやって来たソ連軍は、日本軍を武装解除すると、自動小銃を構えて日本兵を小突き廻して、五十名一組として尋問を始めた。通訳を通して一人ずつ官姓名、所属を問われ、一々記録された。尋問の済んだ日本兵は、自動小銃を構えたソ連兵に囲まれて喪家の犬のように地面に座らされていた。惨めな思いで数時間がたつと、見上げる程の大男のソ連兵の後から女兵士がやって来た。日本兵は驚きと好奇心の視線を集中していると、金髪美人の女子将校が近付いて、

「戦争はもう終りました。直ぐお国へ帰します」

と日本語で明るく言った。日本兵達は顔を見合せて、この分だと捕虜になっても殺されないぞと微笑み合った。

女兵士の出現に合せたように雨が上り青空が見えてきた。雨に濡れ震えていた日本兵には恵みの太陽が出たが、未だ凝っと大地に座されたままであった。待つことは軍隊生活で馴らされていたが、囚われて処置を待つのは死を待つように不安だった。随分と長い間放置された果に急に追い立てられた。陣地東側の丘陵を降り乍ら眼下を展望すると、戦火に爛れたハイラル市街が痛ましく拡っていた。進行は、ハイラル市の南を迂回して第四地区陣地の梅が丘の南の方向に進んでいた。途中満人部落を通過して行った。

嘗っては日章旗を翻えした満人の茅屋には戸毎に赤旗が翻っていた。子供達が路傍や土造りの家の陰から蔑みの目を通過する日本軍に向けていた。空偉張した少年が肩を張って列の側らに来て目を露いたり、何にやら友達同志でひそひそと囁き合って、横を向いてペッと唾を飛ばしたりした。大声で「日本東洋鬼（リーベントンヤンカイ）！」と叫んでは石礫を投げた。それでも無抵抗の日本兵を見縊って、路傍の瓦片けや石塊を拾って投げつけ、石が見当らないと土塊まで掴んで投げた。兵隊達は黙々と固い表情で歩いた。

隊列の右側の杉山上等兵の頭に石礫が当たり頬に土塊が当って黄色い粉となって風に散った。涙が頬を伝わり歩き行く大地に点々と落ちた。無念の涙であった。敗北の悔しさでもあった。

五族協存、王道楽土の夢が消えた悲しみでもあった。兵隊や開拓者達は、日本帝国の侵略などとは少しも考えず、長い間原住民と助け合い、信じ合ってきたと思った。日本の敗北に一朝にして住民の態度が豹変するとは信じられなかった。こうした戦争や、人間の憎しみを杉山上等兵はただ悲しく思った。

（二十一）

ハイラル要塞全地区の戦闘停止を確認したソ連軍は、二十日午後、野村少将以下の旅団司令部要員を収容する

車輛を向けて来た。
要塞正面の入口を出た野村少将は、直立して崩れた要塞の正面に向って挙手の礼をした。そのまま次々と正確に向きを変えて、安堡山、松山、遙か遠い各要塞に満腔の意をこめて挙手の礼をしてから黙々とジープに向った。戦勝国の軍使として臨んでいるソ連軍将校や兵士達も、小柄な将軍の厳粛な態度に打たれて尊敬の念をこめて丁寧にドアを開けた。
旅団司令部幕僚達はジープ、トラックに分乗されて、後に続いた。十九日夕刻より自爆を始めた地下火薬庫が、連続爆発をしていた。その都度、崩れ残った要塞ペトンや砲塔が砂煙をあげて崩れた。第三地区陣地周辺にも黒黒と爆煙が昇っていた。
軍使として先にソ連軍司令部に行っていた森脇少佐が迎えに同行して、原中佐のトラックに同乗した。
「参謀殿、通訳の白系露人は、帰化していたウラジミールじゃないですか、あいつ奴、軍商人と良く司令部に出入していたが、スパイだったな！」
と口惜しそうに言った。原中佐は既に最初軍使としてソ連軍の方面司令部に行った時、通訳の内にウラジミールが居るのに気付いていた。
満洲里よりハイラルにかけて多くの白系露人が、ソビエットロシアを嫌って亡命していた。亦、ハルピンを中心に数万が根を下して五族協和の新満洲建設に協力していた。ハルピンの一劃には白系露人の街があって、玉葱型の院塔を聳やかすギリシャ正教の寺院すらあった。フランス風のキタイスカヤ通りは満洲のパリーとも云われ、日、露、満、支の男女が自由に享楽する街でもあった。政商や大陸浪人の謀略や日、ソの情報戦の坩堝であった。
帝政ロシアの頃より東支鉄道に拠って勢力を伸ばした権益は、日本の満洲支配に先んじて確っかりと根を下しているので、流石の関東軍も満洲里よりチチハルを経てハルピンに至る権益には手をつけなかった。
国境方面でも、共存共栄の名の下に白系露人は確っかりと根を下していたので、三十年の長い歳月を通して亡命者を装ってスパイ行為をしていた者も居たであろう。彼等の中には、日本人に遜っていながら、生活態度や言葉遣いに、わざと貴族の片鱗を示して生きている者もいた。それ等がソ連軍の侵入にその先導となって道案内をしたり、傲然と肩を聳やかし、腰にピストルを吊って通訳として乗り込んで来たとして不思議はなかった。
原中佐は憤りを覚えるより、革命動乱、逃亡、そして祖国軍の侵入と、波乱の中に足掻く彼等を哀れと思った。それはまた自分達の予測されない未来を暗示するようにも思えた。
原中佐は激しく揺れるトラックに身を任せて既往を思い未来を考えた。戦いは終った。明治以降幾年月の満蒙の経営は僅か旬日の夏の戦いで夢と消えた。アジアの盟

主日本の栄えある武人としての己れも一挙に虜囚の身となった。明日は何処へ行くのであろうか。山を降る道の遙か南東何百里に、海を隔てて祖国がある。北西の幾山河、曠野の果には粉塵の舞うシベリアがある。果して日本軍捕虜の行く先はいずれであろうか。
トラックから戦火に焼け果てたハイラル市街が一望され、裸になったハイラル駅が見える。ホームには北西に向けた列車が黒煙を苦しげに吐いていた。原中佐は日本軍捕虜の行く先は、雪女の衣が舞い狂う魔境のようなシベリヤであろうと思った。

第一章了

鏡花の女（下）

三戸岡道夫

〔六〕

湯島の老人の家から帰って一週間ばかりたった頃であった。

あけぼの寿美の主催する「藤の会」から一良のところへ絵の注文があった。

芸術賞受賞を記念して、あけぼの寿美をモデルにした絵を祝品として贈りたいので描いてほしいという依頼であった。そしてテーマは受賞作の「白鷺」の舞台からとってほしいというのも尤もであった。

一良は絵を描くことが仕事であるからもちろんこの仕事を引受けた。が、それにしても偶然とはいいながら、「白鷺」の絵を二枚も引受けてしまったのは、どういう運命のいたずらなのか。戦前と戦後を挾んでライバルであった二人の女優の「白鷺」を一良は絵にしなければならない立場に立たされたわけである。もちろん実業家からの注文はただ「消えいるように美しい美女」という指定であるから、必ずしも「白鷺」である必要はない。しかし頭の中にはすでに「白鷺」のモチーフが決ってしまっていたから、今更これを変える気はなかった。だが、

『あけぼの寿美なんて亜流ですよ、あなた…』

湯島の老人の呪いの言葉が耳に残っている。これはとんでもない仕事を引受けてしまった。だが引受けた以上は仕方がない。仕事を進める外はないだろう。

そのためには一度あけぼの寿美の舞台を見なくてはならないと思った。

「藤の会」に連絡して緊急に席をとってもらうと、一良は帝都劇場まで出かけていった。

受賞のために一段と人気が湧きたった劇場の内部は華やかで、受賞を祝った花輪や生花が広いロビーを所せましと飾り、観客席は二階まで補助椅子が出るほどの満員であった。

舞台はさすが芸術賞を受賞しただけあって立派だった。その芸者小篠は絶品で、彼女が青い照明の中に立つだけで、鏡花の幽幻の世界が絵となってそこにあった。芸者小篠のはかなげな美しさ、哀しさが、白鷺のひそやかな羽ばたきのように観客の胸に伝ってくるようだった。

とくに感銘を受けたのは、終りに近く、小篠の生霊の現れる場面であった。死を前にして、雷雨の料亭に閉じこめられた小篠の生霊が、恋人の稲木のところへ逢いにいくのである。

照明を落した花道に小篠の生霊が幻のようにせり上ってくる。

髪が乱れ、顔が水のように蒼い。

うつろな眼を舞台にむけ、着物を引きずり、舞台にむかって流れるように動いていく。

と、舞台の暗闇に、ふっと消えた。

一瞬場内は水を打ったようにしーんとなり、観客はその幽幻の世界に吸いこまれていくのであった。

これはただならぬ舞台だと思うと同時に、これであけぼの寿美の「白鷺」のテーマは決ったと思った。

夢幻のような生霊…。

最後の幕が下りてからも一良はしばらく椅子に腰掛けたまま、そのテーマを心の中で反芻していた。あの凄い美の底にあるものは何だろう。あの哀しく、悲しく、妖しい美しさを支えているもの。それはあけぼの寿美の天性の美貌と、入神の演技力なのであろうか。だが、あの魔のような生霊の凄さは…、それだけでは決してないような気がする。

何かがなければ、あんな凄い舞台が演じられる筈がない。

それはいったい何なのか。

あけぼの寿美の全身にひそんでいる、なにか不気味で、正体不明なもの、不透明で暗いかげりのようなもの…、一良は夜道を歩きながら考えてみた。それが突きとめられなくては、彼女の「白鷺」は描けないと思った。

その時ゆくりなくも一良は、あけぼの寿美の受賞を報じた週刊誌のなかの、「あけぼの寿美の隠された謎」という一文を思い出したのであった。その美の凄さは、この「隠された謎」の中から湧き出てくるのではあるまいか。

……

その隠された謎とは、彼女の上にときどき起る失神なのであった。

彼女には子供の頃からある持病があった。あるいは奇癖と言うべきなのかもしれない。不意に狐つきのような失神の状態に陥るのであった。眼はうつろになって一切の意識がなくなり、失神から回復すると、おびえたように激しく泣きわめくのであった。大人になるにつれて一旦おさまったかに見えたが、映画から舞台に転ずる頃に

なって、ふたたび頭をもたげてきた。それは五条すま子が映画界を引退した頃にも当る。

ときどき呪詛の巫女のように失神した。身体の中から魂が抜け、魂が見えない魔界を遊泳するように見えた。それは楽屋の化粧鏡の前に坐って舞台化粧に精を出し、鏡の奥で舞台姿に変身していくときに突如として起ることが多かった。牡丹刷毛を持った手が一瞬とまり、眼はうつろになって鏡の中の一点を見つめ、全身が硬直して動かない…。だがその失神から目覚めると、まるで生き返ったようにみずみずしく輝くのであった。失神はあけぼの寿美にとって回春の泉のように思われた。

そう思うと一良は、あけぼの寿美の舞台を見ただけでは不十分で、どうしても直接本人に逢って、その素顔を見なければならないと思った。逢ってその本性をつきとめた上でなくては、本当の絵は描けない。

一良は「藤の会」に電話を入れて、あけぼの寿美の楽屋訪問を申し入れた。

〔七〕

そんなある夜、一良は五条すま子の夢を見た。

暗い部屋の中。

五条すま子の全身が細い紐で縛られ、もがいていた。暗闇の中なのに、五条すま子の身体だけは銀色に光って幻のように見える。

細い紐はよくみると女郎蜘蛛の糸で、五条すま子の身体が網にかかって、もがいているのであった。それはあたかも映画「白鷺」の中の、簪で喉を突いて死ぬ寸前の、五条すま子を思わせた。白い横顔が凄艶に傾き、面やつれした顔にかかる重たい黒髪が、豊かに崩れている…。その妖しい責め絵に一良が思わず

「あーっ」

と夢の中で声をあげ、銀色の糸を辿っていくと、それはある一点にしぼられており、糸の端は誰かの指に握られている。誰の指だろう…、闇のなかに視線をあげていくと、そこにはあけぼの寿美の顔があった……。

この気味の悪い夢は、醒めた後でもはっきり一良のなかに残った。たとえ夢の中とはいえ、五条すま子とあけぼの寿美との、こうもすさまじい対立を見ようとは…。

だがこの夢は、ひょっとして世間からまったく姿を隠してしまった絶世の美女の現世（うつしよ）を暗示したものではあるまいか…。

世間からまったく姿を隠した五条すま子の謎は、何度かテレビや雑誌でさわがれたことがあった。テレビやマ

スコミが普及して、生存している有名俳優でマスコミに再登場しない者はほとんどないという情勢なのに、唯一の例外が五条すま子で、最近の美女不足、企画貧困の芸能界の中にあっては、彼女のカムバックは最後に残された切り札といってよかった。だがこれまで五条すま子のカムバック作戦に、どこも成功した所はない。

それを今年の始め、あるテレビ局と雑誌社とが組んで、鏡花生誕百年を期してそのカムバック作戦を再び展開したのであった。

『ほとんど九十九パーセント、五条すま子のカムバック、奇蹟的になる！』

というような確定的な記事が雑誌の巻頭を何回も飾った。一良の気持は、カムバックしてほしい気持と、ほしくない気持とが半分半分と言えようか。謎につつまれた絶世の美女が今どうなっているのか、もちろん知りたい。だがもう一方、寄る年波には勝てない、カムバックによって不滅の美が崩れることへの恐れが同時にあった。

五条すま子の生存は神秘のベールに包まれていたから、巷間には諸説が紛々と流れていた。彼女はいまだに独身で、広大な屋敷の中で静かにワインを飲みながら、ひねもす鏡花の小説に読みふけっている、というのが最も広く流布されている噂であった。しかし発狂して精神病院に入っているという説もあった。そうかと思えばさる政界の大物の愛人になって人目のつかぬ世界に住んでいるとか、いや、もう海外に移住してしまってこの日本には居ない、ひどいのになるととうの昔に死んでしまったのだ…、などときりがなかった。

古い屋敷と、広い庭。庭は荒れはてて、人の世から隔絶された風情のものでなくてはならない。一良にとっての五条すま子は、そうした庭木のみどりがしたたる下で、一人ワインを飲み、鏡花の本を拡げている、夢のような女でなくてはならなかった。いつかの夢に見たような、悲惨なものではならなかった。

するとその屋敷はどうしてもあの湯島の老人の屋敷だという確信がますます強まってくる。あの古びた屋敷のどこかに五条すま子は隠れ住んでいるのにちがいない。そして人目につかない時間を選んでは、湯島天神や妻恋坂、ときには不忍池あたりまで、散歩に出るのではあるまいか。

その雑誌の五条すま子特集記事の中に、ある作家の「私はなつかしい人五条すま子に逢った」という記事がのっていた。彼はある日新宿の街頭で五条すま子に逢ったというのであった。彼は腰を抜かさんばかりに驚き、憑かれたようにその後を尾行した。もちろん五条すま子の方はそんなことは夢にも知らない。

そんな内容であったが、一良はこの記事は嘘にちがいないと思った。週刊雑誌の記事用に、いかにも本当らしく書いただけにちがいない。というのはそもそも五条す

ま子のような絶世の美女が新宿などという雑踏に行くなどということは決してあり得ないからである。彼女が歩くところといえば、湯島、本郷の、それも月あかりの中でなくてはならない。ちょうど神が絶対人目にその姿を現さないように、五条すま子は決して雑踏の中などに姿を現わしてはならないのである。

一良は五条すま子のカムバックは絶対に実現しないだろうと思った。そしてその予感通りに、いつの間にかこの企画は消えてしまったのであった。

〔八〕

ふたたび一良は湯島の老人を訪れた。

老人はこの前と同じように廊下に蒲団を持ち出し、荒れた庭を眺めていた。が、その姿は急にやつれて、元気がなく、

「ああ、ちょうどいい所へ来てくれました。ほんとうに、うす気味悪くて、どうしていいのかわからなかった…」

誰かが助けに来てくれるのを待ちわびていたような声で言った。

「なにかあったのですか…」

「……」

老人はおびえた眼つきで、黙って一通の大型の封書を差し出した。一良が中味を取り出してみると、剃刀が一本と、剃刀で無惨に切り刻まれた五条すま子の写真であった。一良もその不気味さには背中がぞっと冷える思いで

「これが送られてきたのですか」

「ええ」

封筒の裏をひっくり返したが、もちろん差出人の名前はない。

「気味が悪いですね。誰でしょう、こんなものを送ってきたのは…。いやですね」

「わかりません」

「なんのために…」

「脅迫、嫌がらせ…、とにかくお姫さまは狙われているのです」

今日は老人からこれまで誰にも見せたことのない、老人の秘蔵品を見せてもらうことになっているのだった。老人は「すま子の部屋」というのを作っていた。秘蔵品というのはその「部屋」である。

暗く、しめっぽい廊下を曲りながら、一良は老人の後についていった。雨戸も閉めきったままの廊下や奥の部屋は黴くさくて、この世のものと思えない、別の世界に誘導されて行くようであった。

「すま子の部屋」は屋敷の一番奥にあった。部屋は十畳ほどの広さで、一方だけが庭に面し、そこの庭だけはきれいに手入れされていた。

部屋の中には古びた桐の箪笥、衣桁掛け、鏡台、長火鉢、手文庫などが位置を占め、友禅染めの鏡掛けと、派手な模様の座蒲団が、その部屋になまめかしさを与えていた。気のせいか、ほのかに髪油の匂りや、お白粉の匂いもする。

「これがお姫さまのお部屋ですよ。お姫さまがいつ来られてもご不自由ないように、こうして準備しておるのです」

老人はうっとりと言った。

老人が丹精して作ったその部屋は、五条すま子がいま住んでいる部屋だといっても少しもおかしくない情緒に濡れていた。あるいは本当に彼女はこの部屋に住んでいるのかもしれない…。事実この家の近くで五条すま子らしい女を見かけたという噂を一良は聞いたことがあった。

「この部屋は実は蔵の中なんですよ」

追っかけるように老人は説明した。

「蔵の中?」

そう言われて、なんとなく普通の部屋とはちがう、うす暗い理由がわかった。明るさも庭に面した障子から入ってくるだけで、その冷え冷えとしたほの暗さが部屋を幽邃なものにしていた。

「昔の蔵を改造したのです。この壁の厚さ、さわってごらんなさい」

老人が指さす壁をとんとん叩いてみると、それは蔵特有の、厚く、底知れず固い、漆喰の壁であった。

「なるほど…」

「だから火事になっても扉を閉めてしまえば絶対焼けません。安全です」

老人は五条すま子が出演した何十本という映画のおびただしい写真を、蒔絵の手文庫や箪笥の抽出しにしまっているのであったが、部屋の壁には一枚の大きなパネル張りの写真がかかっていた。これこそ一良が目ざす写真だった。五条すま子の等身大のもので、映画「白鷺」のスチール写真であった。

芸者姿の五条すま子が蛇の目を片手に雪のなかに立っている。背景は大川端の一面の銀世界。
黒髪が濡れたようにつややかで、純日本風のうるんだ眼もとが哀願するように雪の一ひらを見つめ、今にも折れんばかりのたおやかさで橋の上に立った姿は、まさに文字通りの白鷺の精。

やっと探しあぐねた「白鷺」に逢えたという想いが一良の胸を突き上げた。

一良は持参した絵の道具を拡げると、さっそくデッサンにとりかかった。

早く描かなければならないと、一良は切迫した予感のようなものを感じた。早くしないとこの写真もなくなっ

てしまうのではないかという不安に、たえずおびやかされる。この蔵の奥深くにしまわれたこの写真にも、それを狙う魔の手がしのび寄っているような気がした。さっき見せられた剃刀がそれを予告しているのではないか。

早くしなければならない…。

一良は筆を急がせ、ほとんど日がとっぷりと暮れるまでぶっ続けに描いた。

夜おそく一良は屋敷を辞した。

春の夜の、あまい闇が、木立のかげに立ちこめている。一良は根をつめた仕事の後のすがすがしい疲労感にひたりながら、春の夜の空気を思いきり吸った。なまめかしい味がした。

降るように枝を垂らした柳の下に、女が立っていた。着物姿の日本髪。粋筋の女のように見える。それがほんのりした月のなかに、浮かびあがったように立っていた。

妻恋坂を下ったところでふり返ると、その女が、一良のなため後を歩いてくるではないか。

二人の足どりはいつしか同じ歩調になり、やがて肩を並べるようにして歩いた。

髪を粋なつぶし島田に結って、黒繻子の襟をすっきり着こなした女は、五条すま子なのであった。

片側が湯島の台地になった湯島天神下に通ずるその細い通りは、車も人の往き来もなく、ひっそりと静まっていた。青い中天にかすんだおぼろの月の光に浮かんでいるのは梅の花であった。どうして今ごろまで梅の花が咲いているのだろう。

まるで映画の「婦系図」の中を歩いているようだと一良は思った。

そういえば五条すま子の姿はまぎれもなくお蔦の姿で、年令も二十三、四。五条すま子はきっと「婦系図」の中から抜け出してやってきたのにちがいない。

しばらく歩いていると、梅の花が、いつしか桜に変っていた。

すると今までお蔦の姿だった五条すま子も、「白鷺」の小篠の芸者姿に変っているのだった。たしか映画「白鷺」の中に、桜の梢を見上げる小篠の顔を、桜の花群越しに俯瞰したシーンがあったのを、一良は突然のことのように思い出した。

二人は天神下あたりまでやってきた。

と、五条すま子の姿はそこで花の闇の中に吸いこまれるように消えてしまったのであった。

一良はそのまま一人で歩いていった。

上野の街の灯がまぶしく眼の前に輝き出すと、一良はにわかに疲れを感じた。それは魔の世界を潜り抜けてきた後のような、ずしりとした疲れだった。

一良は喫茶店に入って熱いコーヒーを飲んだ。熱いコーヒーの苦さで、意識が少しはっきりとした。急に夢か

らさめたようだった。

窓から外を見た。

喫茶店の窓ごしに見える上野の森に、いまを盛りの桜の花が、夜の光に白く光っていた。

〔九〕

帝都劇場の楽屋の入口は、正面から左に廻った横に歩道に面してぽっかり黒い四角な穴をあけていた。

帝都劇場へは何回となく来たことはあるが、楽屋を訪れたことは初めてである。一良はちょっと入るのをためらった。舞台に関係のある者だけが出入りするその通路に、関係のない者の入場を拒絶する冷たさを感じたからである。

無愛想な廊下を少し行くと、そこが楽屋の入口なのだろうか、両側の壁に下足棚が並び、老人が椅子に腰掛けて番をしていた。

「速水と申します。あけぼの寿美さんにお逢いしたいのですが…」

老人はスリッパを出して揃えてくれ、部屋の位置を教えてくれた。

時間はちょうど昼の部が終り、夜の部が始まるまでの、休憩時間だった。廊下で俳優たちにすれ違ったが、楽屋で見る俳優の姿はすっかり変っていて、誰が誰と、さっぱり見当もつかなかった。

階段を上ったり、右に曲ったり、また戻るように歩き、複雑に曲りくねった廊下をあやうく迷子になりそうになったが、この辺がどうもそうらしいと、やってきた男衆に声をかけると、その左手の方が探している楽屋で、男衆は

「あけぼの先生、速水さんがお見えです」

と声をかけてくれた。

「先生はただいま準備中です。ちょっとここでお待ちください」

男衆はそう言い残したまま、忙しそうに奥の方へ行ってしまった。一良は言われた通りしばらく廊下の隅で待っていた。しかし何の音沙汰もない。いろんな人が一良の前を行ったり来たりはするのだが、楽屋というものがどんな仕組みになっているのかわからないので、声をかけていいのやら、悪いのやらもわからない。

一良は少しじりじりして、左手の奥へすこし歩いていってみると、廊下が曲り、また道に迷ったようになってしまった。あわてて引き返すと、曲る方角をまちがえたらしくて、一良は奇妙な場所の一角に足を踏み入れてしまったようであった。

眼の前に暖簾が掛っていた。

紫地に白く「寿美」と染め抜いてある。

偶然であった。一度はほっとした気持になり、案内も乞わずに暖簾の中をのぞいた。

一人の女がうずくまっていた。が、暖簾が動いた気配いに女はぎくりと顔をあげ、鋭い眼つきで一良を見上げた。そして手にしていたものを、すばやく浴衣の裾のなかに隠した。突然の闖入者に女は狼狽し、一良に対する警戒心が恐怖のようにその顔に現れていた。

女は大柄な紺の浴衣をしどけなく着て、化粧を落したまっ青な顔は死人のように見えた。

二の腕までまくった浴衣の袖からは腕が白い蠟燭のように垂れさがり、その手の中に女は剃刀を持っていたのであった。だが一良に見られまいとして女はすばやくそれを隠し、瞬きもせずにしばらく一良の方に向けた顔は凄かった。

あまり突然の異様な女の出現で、それが誰なのか一瞬判断ができなかったが、驚いたことには一良が今日逢いに来たあけぼの寿美本人にまちがいないようだった。うりざね顔の形や、きれ長の眼の鋭さが、それを物語っていた。だがこれがあの舞台で見る妖艶なあけぼの寿美だとはとても信じられない。一良は道に迷ったばかりに、見てはならないあけぼの寿美の顔に最初からぶっつかってしまったのであった。

「こんな所を絵描きさんに見られては困るわねえ…、でも、見られちゃったものは仕方ないわ」

最初見せた狼狽は嘘だったように、すぐに落着きを取り戻すと、ゆったりと腰をひねって、斜めの角度で一良に対した。さすが見事な大女優の貫録だった。

そしてこの瞬間

「この顔だ…！」

と一良は絵のモチーフを探しあてた気がしたのだった。

だがそれにしても、あのとき隠した剃刀で何をしていたのであろうか。それは気になることだった。

初めて見る楽屋の内部は珍らしかった。大きな三面鏡が正面に置かれ、さまざまな化粧品が並び、強いライトが眼を射るように光っていた。紫色の大きな座蒲団の上にあけぼの寿美はゆったりと坐り、ファンから贈られた高級な蘭の花がその周囲を埋めていた。

あけぼの寿美はいつのまにか薄化粧をすると、こざっぱりした着物に着かえて坐っていた。

一良は素顔のその顔を、まず二、三枚、スケッチした。絵にする場合のイメージはすでにさきほどの凄い顔で摑んでいた。だから後は、それを具象化する場合の形が得られればそれでいいのだった。

あけぼの寿美の特長はどこなのだろうか。やっぱりそれは眼だなと思った。

凄い眼。

浮世絵の女のように切れ長の美しい眼なのだが、鋭くて、冷い。同じように美しい眼でも、五条すま子のように哀愁がただよう感じがなかった。寄ってくるものを冷酷に突き放し、残酷に踏みにじってしまう。ぞっとする

ものが底にある。

コンテを盛んに動かしながら、この悽惨な眼を、あけぼの寿美の「白鷺」の支柱にしようと、はっきり決めた。

スケッチも五枚、六枚と数がふえて、楽屋の雰囲気にもだいぶ慣れてくると、多少あけぼの寿美の身の廻りに注意を向ける気持の余裕が一良の中には生れてきた。すると三面鏡の横に置いてある手文庫の存在が、なぜか気になって仕方がないのであった。

それは手文庫といっても普通のものと違ってかなり大きなもので、年代的にもかなり古いもののように見受けられた。見事な秋草蒔絵の手文庫で、各面が稲妻型に黒地と梨子地に区切られて、黒地には曲線的な秋草の文様、梨子地には直線的な竹の文様という、調子のちがう図柄の組み合わせによって強い装飾効果を出していた。それは高台地蒔絵を思わせたが、もちろん桃山時代の本物が軽々しくこんな場所にあろう筈はないから、後世それに似せて作ったものにちがいないのだが、しかし画家の一良が見ても見事な出来ばえだった。

だがその手文庫が気になるのは美術品としての価値にあるのではなくて、どうも何処かで見たことがあるという気がしてならないからであった。だが、それが何処なのかすぐには思い出せない。だが次第に記憶の輪郭がはっきりしてきて、それが湯島の老人の「すま子の部屋」にあった手文庫と同じものではないかわかったとき

「あっ…」

一良の背筋に寒いものが走った。

どうして、あの手文庫が、この楽屋に……。

いや、いや、そんな筈はない。これはあれとは別の手文庫で、たまたま蒔絵の文様が似ていただけにすぎないのではないか。

夜の部の開演の時間が次第に近づいていた。十枚ばかりのスケッチを終って、一良は絵筆をおいた。

「絵かきさんのモデルになるなんて初めて…、疲れますわねえ」

あけぼの寿美はそう言って膝を崩した。

だが一良が描いたスケッチの方にはほとんど関心がなかった。普通の女性なら、

「どんなふうに描けたかしら」

とすぐ画面を見たがるものなのに、彼女はまるで他人事のように関心を示さないのだった。一良の描いたものを無視していた。それは描かれた美よりも、生身の自分の美の方を誇るかのようだった。

そろそろ舞台化粧にとりかからねばならない時間が迫っていたが、一良は少し話しかけた。

「先日舞台を拝見いたしましたが、さすが生霊の場面は凄いですね。感動いたしました」

「そうですか。やっている本人はどの場面も夢中で、ちっともわかりません」

淡々とした調子というよりも、そっけない口調でそう答えた。そのそっけなさに自信のほどが現われている。

「ご注文の絵、あの生霊の場面を描きたいと思っていますが…」

「……」

彼女はわずかに嫌な顔をしたが、その表情はすぐ消えて

「ええ、どうぞ。どんな場面でも存分に描いてくださいな」

それは幾分なげやりな調子にも聞えた。

「あけぼのさんから見て、鏡花の原作「白鷺」はどう思いますか」

「どう…、とおっしゃられても…、原作は原作、舞台は舞台と思っております」

「あけぼのさんの「白鷺」のほかに、たくさんの「白鷺」がありますね。舞台にも、映画にも、それについては…」

「別にどうとも思っておりません」

「戦前の映画の「白鷺」は五条すま子さんでしたね。五条さんの「白鷺」はどう思いますか。あなたの舞台に影響しているようなところは…」

「五条すま子…、そう、そういう女優さんがおりましたわねえ、でも、ほ、ほ、ほ…」

高らかに笑って

「私、なんとも思っておりません。私は私、五条さんは五条さん。私の舞台とは関係ありません」

びっくりするほど、きっぱりとそう言った。

「映画の「白鷺」と、舞台の「白鷺」とでは、どちらが原作に迫っているのでしょうか」

一良は画帖の間から一枚の写真を取り出して、あけぼの寿美の前に置いた。それは五条すま子の「白鷺」の写真で、「すま子の部屋」のパネルから複製したものだった。

あけぼの寿美の顔が硬直した。顔がみるみる水のように青ざめ、視線がその写真に固定したまま切れ長の眼が吊り上り、瞳孔が見開いて、一瞬、失神したようになった。

それは仮死の顔、動かぬ能面のように見えた。そして全身が前後に激しく揺れはじめ、失神というよりも、それは全身を嵐のようにもみしだいて呪う祈禱女のように見えた。

失神の噂などマスコミのでっち上げだろうと半信半疑だったのに、その実態を眼の当りにして、一良はたじろいだ。

だがその失神はほんの一瞬の出来ごとで、彼女はすぐもとの顔に戻った。舞台化粧にとりかからねばならぬぎりぎりの時間が、彼女を本能的に蘇生させたのにちがいない。

「先生、そろそろお仕度を…」

付人が一良の存在を無視するように言うと、彼女は座蒲団の上でくるりと方向を変え、鏡に向って化粧にとりかかった。

一良は鏡に向ったあけぼの寿美の背中をしばらく見つめていたが、もう背中は何も一良に語りかけてはこなかった。三面鏡の中で白粉が塗られ、次第に別の何ものかに化身していくあけぼの寿美は、もはや一良とは完全に無縁の存在になっていた。

一良は立ち上った。

だが彼女は鏡の中から視線を動かそうともしなかった。

一良の中には明確に一つのイメージが出来上っていた。妖艶な舞台の顔の裏に潜んでいる凄い顔、五条すま子へ呪いの炎を吹きかける夜叉の顔…、美しい「白鷺」の小篠の顔の底に、一良はその凄い鬼女の面をしっかり彫りつけようと思った。

楽屋を出た。

階段を下りるとき、一良は踏み外して二、三段、すべり落ちた。足首に痛みが走った。付人の男衆が走ってきて、一良を抱きかかえるようにして起してくれた。

「どうされました…?」

「いや、大丈夫です」

だがしばらく階段の途中に痛みをこらえて、うずくまっていた。

足を踏み外した瞬間、画帖が手から離れて廊下に散乱していた。それを男衆がすばやく拾って一良に手渡してくれた。

家に帰って画帖を拡げたとき、異変が起きているのに気がついた。画帖の間に入れておいた五条すま子の写真がないのである。楽屋であけぼの寿美に見せた後、たしかに画帖の間に挟んだ筈である。それが無い。一良の頭の中を、階段で滑ったとき散乱した画帖を拾ってくれた男衆の姿がかすめた。

楽屋で道に迷ったばかりに偶然眼にしたあけぼの寿美の浴衣姿は、こうして鮮明に一良の中に焼きついて残ったのである。だが剃刀でいったい何をしていたのであろうか。一良に見られた時の狼狽ぶりは、明らかに人に見られてはならないことをしていた証拠である。

それがあるすさまじい呪いであることを知ったのは、暫くして、ある芸能記者の口からであった。それを聞いたときまさかと思った。しかし楽屋の異様な失神を思い出すと、それはありうる事かもしれないと一良は思い直した。

その呪いは楽屋で行われるのである。

舞台化粧にとりかかる前のこともあれば、化粧が終って完全に舞台の人となり、舞台に出ようとする寸前に行

われることもあり、その時の感情の工合によって時間は一定してはいなかったが、それは見えない美への挑戦の前奏曲のように思われた。ちょうどタイのキックボクシングの選手が試合前に、悲しくも賑やかな音楽にあわせて勝利の祈りをリングの上で踊るように、舞台を前にして呪いの舞を舞うのであった。

舞台の出が近づくと、あけぼの寿美の瞳はにわかに妖しく輝き出し、しなやかな手先が秋草模様の手文庫に白い蛇のように伸びるのである。その手文庫の中には、どこから集めてくるのか、五条すま子のあらゆる写真がつめこまれてるのであった。

彼女の右手には剃刀が握られている。

手文庫の中から五条すま子の写真を取り出すと、剃刀で切り裂いて、破りすてるのであった。

一枚が終ると、もう一枚と、あけぼの寿美は自分の手の中で、五条すま子の美を切り裂いていくのである。めちゃめちゃに切り裂いて、その美を滅失させてしまう。

最後に断片を火の上にかざして燃してしまうのであった。

五条すま子の美の残骸は青い焔となって、透明にもえた。五条すま子の美が死に絶える絶叫を焔の色に聞くと、あけぼの寿美の眼許に静かな笑いが戻った。

こうして不気味な洗礼を受けると、あけぼの寿美は衣裳の裾をひるがえして舞台へと立っていくのであった。

あの日一良が暖簾の蔭で見た浴衣姿は、この呪いの行事をしていたのにちがいなかった。今になってそう思うと、まさしくあの楽屋は現世ではない、一良があやまって踏みこんだあやかしの世界ではなかったろうか。

〔十〕

二種類の「白鷺」の制作に忙しくて、一良はしばらく湯島の老人への訪問を忘れていた。が、ほぼ下絵も出来あがり、ほっと一息つく段階になって、久しぶりに老人を訪れてみようかと思った。

だがその時老人はすでに死んでいたのであった。

屋敷はある会社に売却されて独身寮かなにかになるらしく、一良が訪れたときは、もうその工事が始っていた。

柳の古木だけは残っていたが、「すま子の部屋」のあった蔵も取りこわされて跡形もなくなっていた。古く美しいものが荒々しく壊されて、無味乾燥なものに変っていく。こうして一つ一つ明治がなくなっていくのだ一良は思った。

老人の死は老衰であった。一つの明治がこの湯島の中で消えたように、老人も死んだのだと思った。

老人は一人暮しだったので、しばらくその死がわからなかったらしかった。新聞や手紙類がたまり、郵便受から道路にこぼれているのを近所の人が見つけて、発見された。横浜の方に住んでいた息子夫婦がかけつけてきて

葬儀は行われたが、その日を今になって数えてみると、ちょうど一良があけぼの寿美の楽屋を訪れた日に当っていた。一良はぎょっとしたものを感じた。

そう言えば老人が死んだその日の夜、若い女の幽霊が屋敷のまわりに出たという噂が近所に流れていた。人々はおびえた眼ざしで古い柳を見つめ、幽霊はその柳の下に出たのだという。手入れがしてない茂った柳は、さながら幽霊の黒髪をおもわせるのに充分だった。

老人が死ぬ時は、五条すま子が同時にこの屋敷から居なくなる時だということが、一良にはわかっていた。老人が息を引きとると、五条すま子は蔵の中から出て屋敷を去ったのである。その後姿を近所の人々が柳の下に見たのにちがいない。

だが建設会社の手によって古い屋敷が壊され、その跡がコンクリートの建物に変身していくにつれて、近所の噂も消えていった。だが一良の中だけには、いつまでたっても消えないもう一つの噂が残っていた。それは息子夫婦が「すま子の部屋」に足をふみ入れたときの驚きであった。

それは殺人現場を見るようであった。壁にかけられた等身大の五条すま子の「白鷺」のスチール写真が、鋭い剃刀でずたずたに切り裂かれていたのであった。その幻の花のように美しい五条すま子の顔は残酷なまでに切り刻まれ、ほとんど顔の形を残していなかったという。誰の仕わざともわからず、息子夫婦は息をのんだ。

そしてそのとき息子夫婦は手文庫が紛失しているのに気がついたのであった。

「たしかに秋草蒔絵の手文庫がこの部屋には置いてあったのに…」

首をかしげると

「そう言えば、そうねえ。おじいちゃん、五条すま子の写真をたくさんその中にしまっていたわ。わしの宝物だなんて大切にしていたのに、どうしたのかしら…」

だが他の部屋を探してみてもそれは見つからなかった。

「何もなくなっていないのに、手文庫だけなくなるなんて、変ねえ…」

一良は

「やっぱり楽屋のあの手文庫は…」

と思った。あけぼの寿美の白い手が蛇のようにのびて、その中から写真をつまみ出す秋草模様の古風な手文庫…。

一良が帝都劇場の楽屋を訪れた日に、湯島の老人は死んでいる。そして死んだ時、手文庫は老人の秘蔵したおびただしい写真とともに、魔界へと消えたのである。

十一

一良はいよいよ「白鷺」の絵の制作にとりかかった。

最初に絵筆を染めたのは実業家の方から依頼を受けた、

消えいるように美しい美女。その準備のためにすでに何回となく鏡花の原作「白鷺」を読み直していたが、そこで得たイメージと、湯島の老人の家の写真パネルのデッサンからとで、下絵はすでに出来上っていた。

下絵の構図は地唄舞の「雪」からとった。「雪」の女の姿をかりて、白鷺の精を象徴化したのである。銀屏風を前にして、女が濡れた柳のように立っている…、その傘を支えた、たおやかな腕の曲りに雪が降りかかる……。銀屏風には見えない雪が音もなく降り、女の着物の裾があたかも雪の大川端の流水のように画面にとけこんでいる…。

その原寸大の下絵を基にして、一良は画室に拡げられた絵絹に絵筆をおろそうとしていた。じっと眼をこらして純白の絵絹を見つめていると、その底から、あの雪景色の幻影がありありと浮かんでくるのであった。

……

一面の雪景色
雪が音もなく川面に降る、大川端
その水面に立つ一羽の白鷺
それがばたばたと羽音をたてて翔びたつと、その白鷺の精のように、橋の上から川面を覗く、
その美しさが凄いような、芸者小篠の横顔

……

舟から降りた客の上に、蛇の目をそっと差しかける小篠のたおやかな腕の曲り……

……

この幻影は絵絹に鮮烈な魂を吹きこんだ。

一良は絵筆を濡らすと、流れるような曲線を次々と走らせていった。

絵の完成には十日間を要した。

そして出来上った絵には「雪のまぼろし」と名づけた。

完成した「雪のまぼろし」を壁にかけて眺めていると、それに呪いの炎を吹きかけるように、もう一つの絵のイメージが自然と一良の中に湧き上り、

「怨のまぼろし」

と題名も決った。

帝都劇場の楽屋での蒼白く殺気立った、浴衣姿のあけぼの寿美の顔…、剃刀で写真を切り裂く女…、それを一枚一枚焼きすて、たちのぼる青い焔を見守る鬼気迫る女…、そして突然起るあやかしの失神…、女の魂は一瞬その肉体を離れて魔界をさまよう…。

一良の中では急速に「怨のまぼろし」の構図が形をとりはじめていた。

「ご注文の絵、生霊の場面を描きたいと思いますが…」

帝都劇場の楽屋で言った言葉をもう一度一良はくり返

すと、あけぼの寿美の「白鷺」の舞台を瞼に甦らせた。

雷雨の料亭に閉じこめられた小篠が、死を前にしてその生霊が恋人のところへ逢いにいくのである。照明を落した花道に小篠の生霊がせり上ってくる。そして舞台に向って流れるように動き出す。

突然、一良の中ではげしい稲妻が光った。そしてはげしい雨。

……

はげしい雨。
きらめく稲妻の凄さ。
いやがるのを無理やりに料亭の一室に閉じこめられた芸者小篠。
「帰らせてください、お願いします」
追いつめられて泣きくずれる小篠の髪から、ぱらり、簪が落ちる。
畳の上の、銀の簪の、大写し。
はっと憑かれたように、それを見つめる小篠の横顔。
やがて小篠の指先が畳にのびて、簪はぐさりとおのが喉へ…。
外は狂ったような稲妻の凄さ。

……

一良は憑かれたように絵筆を走らせると、「怨のまぼろし」も十日ばかりで完成させた。

女の髷はがっくり崩れ、たっぷりした黒髪が蛇のように背中に乱れている。顔は蒼くて水のよう、死人のような唇に銀の簪をくわえ、剃刀のように切れ上った眼は張りさけんばかり…。その眼には絹の裏側から金泥を施すという工夫が、この世ならぬ生霊のあやかしの効果に、見事なほど現われていた。

それは「白鷺」の女に姿を借りた、まさしくあけぼの寿美という女の怨念の形相であった。

こうして二本の絹の絵が出来上り、表装が出来上ると、一良は改めて画室に並べて掛けてみた。

雪のまぼろし
怨のまぼろし

すると一瞬、一良は西銀座のホールで突然フィルムが焼き切れて、白い炎が斜めにゆれてかけ上っていく、スクリーンを見ている錯覚に襲われたのであった。

編集後記

第四十七回、国際ペン東京大会が新宿で開催された。日本の井上靖会長のご心痛はどれほどであったろうか。戦後間もない頃、新宿の小さな飲みやの奥座敷などで、井上氏に何回かお目にかかっている。何時間でも沈黙を守り、静かに杯を傾けていらした姿が昨日のことのようだ。先日、テレビで氏の記念講演をきいた。寡黙で、華やかな表舞台に立つことをいとう氏の苦衷を、話される顔の表情から読みとれたと感じたのだが…。

十二号も連載作品が多く、本誌を初めて手にされた方の印象はどうであろうか。私の読後感は、前号の作品についての記憶がかなり薄れているにもかかわらず、それぞれ味わいがあり、さわやかであった。昭和史をまるまる生き抜いてきた者でなければ書けないもの、いまどうしても書いておかなければならないものの重厚さである。

回顧録や自分史をまとめることは、その人にとって素晴しい大事業であり、惜しみなく声援を送りたい。しかし、自分の手もとに秘蔵するのでなく、いまを生きている人の眼にさらすのであれば、いまの読者をも念頭においてほしい。現代的な鋭い感覚で、過去の経験を再構築し、読者をたのしませてもらいたいのだ。読者は、年齢などは超越して、作者とよろこびをわかちたいのだ。

私にとって、自戒のことばでもある。（も）

「まんじ」第十二号

昭和五十九年六月十五日発行　（非売）

編集　大和禎人

印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三―十一
☎（261・5743）

発行　「作家群」（まんじ）編集部

〒一〇一東京・千代田区神田駿河台二―九
☎〇三（二九三）〇〇九四　柴田方
郵便振替口座　東京二―九〇八一五

……目　次……

縁日屋の平さん……大和禎人…1
さいたま屋歳時記……左老庵…13
連載　○町○丁目○番地（六）……山口健二…24
編集後記……32

表紙・カット：岸田幸雄

縁日屋の平さん

大和禎人

平さんのチビた鉛筆書きの雑記帳、いや近ごろでいうノートにこんな覚え書きがあります。

一の日、ちよだ　日比谷神社
　　北　　身代わり善光寺
一、二一日　足　西新井大師
一、一五、二八日　江東　富岡八幡　深川不動
一、一四、二四日　葛　清重稲荷
一、一五、二八日　板　出世不動（観明寺）
三の日　北堀船　愛宕地蔵　目　油面地蔵尊
四の日　墨　霊性院子育て地蔵　豊　とげぬき地蔵

……

のぞき見してもわけのわからぬものもあり、しかもこの雑記帳は手ずれ黄ばんで、彼だけにわかる体のものになっております。もっとも彼にとってはそれを繰るまでもなくすべては頭の中に入力してありますから心配はいらないのでした。健康を誇る限り、いまだお脳の方が軟化の傾向になければすべて暦はその心の底にしっかりと蔵われているものでありました。

ここに書かれる（ちよだ）、（北）、（足）とあるのはそれぞれ千代田、北、足立といった区名で彼一流の定期の「お縁日」を並べる〃商売ごよみ〃なのでありました。

もっとも近ごろは毎月十日虎の門と目黒の不動尊の方の八の日出店を固定して久しくなります。さすがに年齢は争えずいつか自愛の念を抱くようになったようすに見うけました。それにしても、板橋の奥から大八車をひいて昔ながら商いに営々いそしむ姿は一徹そのもの、ご本人にそんな意識はなくとも、江戸前の風物詩の中に生きる姿でありました。年に一度の朝顔市、ほうずき市に一種いなせの賑わいを愛する人たちも、さすがにこの平さんのような市商いが市井の一隅に守られ、健在であるな

どお気づきではないのではないかと思われました。悪く言えばなんとも旧守固陋の姿でありました。

さて、縁日屋の平さんこと佐藤平作氏がこのところ自動車教習所かよいに汗をしぼっておりました。まさに一念発起の体でありました。と申しましても実は十五年ほど以前にも企てたことがあって、こんどが二度目のチャレンジということになります。前の時もそういえば夏のことでありました。なにも暑熱の最中をと思われますが、一つには二ッ八の商いの都合で、つまり閑散期を選んでということもありましたが、前の時は、

「平ちゃん、ひとつ軽免でもとったら、八月いっぱいで免許法が改正になると軽がなくなるよ、既得権を有効に生かすチャンスだよ」

と松風園の岡本創一にそそのかされたのがきっかけでした。（キトクケン）と創ちゃんがささやいたのは平ちゃんと違って万事新しがりやの彼が以前スクーターを乗り回していてその実績から軽免にスライドする改正の味を一度しめていたからでありました。お互に（ちゃん）づけの親しい仲でしたが、そこは（縁日屋）&（植木職）という図式の対抗心をあおる内心の騒ぎがあり、よしっ、いっちょうおれだってという経緯があったのでした。

「……てやんでえ、いくら気どってみてもはじまらねえ」

駅前に進出して「御菓子司」の看板をかかげるようになった菓子屋の親父と同じことで、もとはといえば同じ町内、こちらはしかも同業で北豊島郡の昔、駒込村の奥植木の名所で知られた染井に育った幼な友だちでした。大正十二年の関東大震災後培養地を北郊にもとめて集団移住し、大宮盆栽村をなしたのと同じで、彼らの父親の代は本郷団子坂あたりに盆栽園を営んでいたものであり、たまたま二人の場合はさらにあの大戦争に流離の運命にあいながら、また同じ板橋に住みついたものでありました。染井からはさして遠くないにしても二人は生業の上ではよほど以前、縁日屋と植木職に岐路を分ける経緯をたどったものでありました。ただ創ちゃんの方だけが「松風園」という屋号を守っていますが、それは名のみという内実でした。今様なら脱サラと似たケースの（脱盆栽師）であるという共通点のある二人ではありました。

さて、軽トラックにしろ機動性を駆使する様がわりをすでに遂げている松風園に比べれば立ち遅れは明かですから、平さんは必死のチャレンジをしました。

（平ちゃんよ）

と侮られないために、……

しかし、失敗でした。長胴短足という典型的な日本人である彼はいかにしてもアクセルの踏みしろで苦しまなければならなかったのです。その教習所の練習車は中古のハンドルシフト式で運転席の前後をレバーいっぱい調節してみても、アクセルはもちろんギアチェンジのペタ

ルを踏みこむのに足がとどかないのでありました。

「お前さん、あきらめた方がいいな」

指導員の軽蔑にあいました。彼はこの上なく不当な屈辱を味わいました。

「平ちゃんよ、そこはあんた工夫しなくちゃ、いいから座布団をもってお行き、関取の控え座布団みてえにできるだけ厚手のを用意するんだな、なアに、それこそかみさんに頼んでさ、作っておもらい」

だが、平さんはその初回の挑戦をあっさり棄てました。創ちゃんの提言は親身なものであっても、屈辱の方が大きすぎたのです。創ちゃんの方は一つ二つ年長でしたが、兵隊にも長くいっており、船団が沈められて九州佐賀とかの呼子の海を泳いだ勇士であり、万事機敏で今も町内会の役員をし、消防団員としても活躍するなど、なかなかの活動家であり、他人の面倒見も良いのです。寸足らずの国民兵役であった平ちゃんにしてみれば口惜しさはもう遠の昔、いまは戦争中とはすっかりなにもかも違う世の中だと思いつづけ、われとわが身に言い聞かせたことが足もとからくずれる思いでした。

「うんにゃ、やめるよ、おいらにゃ大八車がお似合いさ、ありがとうよ」

人を疑うことをしなかった平さんがこの時ばかりは創ちゃんまでを恨めしく思ったことでした。

（ことによったら、おれはまんまとはめられたのかもしれない）

相手を陥しいれて優越感を味わう人の悪さを創ちゃんの顔色に読みとろうとしたほどでありました。

松風園の創ちゃんは植木職もはや四十年になろうとしておりますが、いまだ本職には成りきっておりません。親父の時代の松風園はかなりお出入りを許されたお屋敷も多く、だんな衆に可愛いがられたものですが、

「あ、松風園か、こんどはなに、また五葉かね、見たところ石槌あたりらしいな、葉性がどうかな、鉢は古渡りらしいから、まあまあとして、ま、置いといてご覧」

「へ、お眼の高いことで、……」

「連れているのはせがれさんかね、なかなかいい子じゃないか、下の方で菓子でももらっておやりな」

そっくり山全体が持ちもので、仕候よろしくご気嫌を伺った山上は二号さんの家というとてつもないお大尽には子供心にあきれもし、つくづく父親の卑屈さかげんを創ちゃんはいやになったというのでありました。石槌が福島であろうと、また鉢も古渡りが実は新渡品でも時代をつければだんな衆にはそこまでを見破る眼はもたないのが普通でした。そうしてなにくわぬ顔で手をすり足をする体に引上げるのでございますから、そんな商いの卑屈さがたまらなくいやでありました。

「な、思ってもみねえ、そうだろう、わかるだろう」

「うむ、わかる、よーくわかる」
それにしても、昔は鷹揚なものだったなと思われます。盆栽師の生業もそれで成立っていたのですからふしぎに思われます。（お預り品）として盆養を任されていて、管理の手当をうけ、展覧会その他の出陳などすべて宰領するだけの信用をうける、これが盆栽師の身上なのでありました。
さて、ここでは植木職の創ちゃんの脱盆栽師に走ったあらましを理解していただければよろしいのですが、さらに蛇足を加えればこの世界の世襲的な因習をぬきには考えられないということです。協会があって連帯の強固なことは結構なのですが、反面のわずらわしさがあります。一匹おおかみの自由を得たいと思いましたら、とうてい我慢できません。なじめぬものはその垣の外にという成り行きでした。
毎年二月、国風盆栽展という斯界の権威とされる展覧会が上野にひらかれます。日本盆栽協会が主催し、文化庁、東京都が後援するというもので、今年は五十周年を記念し、第五十八回を数え、年ごとに盛況を見ております。
「ふーむ、（野梅・和長方）ねえ、岸さんは梅が好きだねえ、去年もたしかそうじゃなかったか」
「かもね、覚えていねえけど、そう言えばな」
宮内庁、秩父宮家とならぶメインに元首相は席を占めます。岸信介氏は亡き吉田茂氏の後を襲う二代会長なのでした。よほど座わり心地が良いとみえ他の名誉職は棄ててもこれだけは辞めそうにないと楽屋雀のささやきを聞いていました。配列の妙はほぼあい隣って茅誠司さんの席札を発見することです。
「ふむ、茅さんは（山もみじ・鴻陽楕円）か、学者先生らしい素朴な素材が良い」
平ちゃんが珍らしく講評します。この名を知っていました。
「そうよな、お前さんは雑木の方が好きだからな」
「そうよ、雑木呼ばわりはしゃくだがね、」
松柏と違う庶民性を雑木と総括するのを平さんとしてみれば納得できないのでした。
今年は小品盆栽まですべてで二〇六点、記念展として「昭和の盆栽史展」という企画に協会設立前の初代会長として松平頼寿伯遺愛の小鉢の名品、愛用の用具の特別出品を見ることができました。
「お殿さまだねえ、ほら下屋敷の染井にあった、あの一角なんざ跡かたもねえ変わりようさ、能舞台があったっけ、サヌキの殿さまでよ、最後の殿さまだあな」
創ちゃんもなかなか詳しいことでした。
「たしか、戦争もおしつまって葬式があったけねえ」
「防空づきんをひっちょって、ゲートルまきで町方も焼香にいったもんだ」

「創ちゃんこっちの写真は軽井沢の疎開さきだねえ」
「なるほど、いいご身分さあね、それにしても殿さまいい時に死んだねえ」
そう言いながら、二人はその古びた写真の中になにやら感傷を発見するらしく会話を途切らせました。おびただしい盆栽人口の雑踏の中をふみ迷いながら、その胸を占めるものが盆栽への郷愁に似たものであることは明かでありました。
（脱盆栽師）の心底がゆれる、それは口には出さないお互に共通するものであったようです。ですから、どちからともなく誘いがあり、展覧会へのみ腰をあげるのです。大丸の「作風展」を皮切りに京成、伊勢丹、そごうとデパートを会場とする展覧会を見て歩きます。盆樹の姿を鑑賞する適期がそうした初春になりますから、二人にとっては仕事の閑散期に重なるということもありますが、彼らのこの季節の血の騒ぎは父祖からゆずりうけたものに思われました。
松風園の創ちゃんがいくら四十年頑張ってきても植木職が本物でないとは小声で言わねばなりませんが、前に書きましたことは事実なのです。植木職の道だって奥が深いのです。
彼の整枝、剪定は荒っぽいもので、素人衆ははらはらする体に枝払いを思いきって施します。これは腕力を感じさせても、施主にとっては得心のいかない場合を生じます。徒長枝を払い、からみやかえる、逆さなどの忌み枝を落していくうち、ついつい深切りをしてしまう、
「創ちゃん、ちいっと深すぎないかな」
「いえね、このくらいでちょうどですよ、この樹あたりはいくら痛めても大丈夫、若樹の伸びざかりだから」
施主が口を利きすぎては職人に嫌われる、その手加減をするうちに切り落されてしまうというあんばいでありました。一服しては眺め、眺めする植木職の気風は創ちゃんのもっとも嫌うところでありました。能率をあげる腕っ節を買ってほしいのでありました。植木職にとって一服して樹形を眺め、透かし見る時間は大切な仕事のうちという奥技は創ちゃんにはほど遠く、これからも身につかないのではないかと思われます。
「またあの植木屋さんですね、あの人が入ると花が咲かない、こまった植木屋さんですね」
ご近所の評判は遠慮がありません。施主の方で気づいていることを図星をさされますから、お得意さんを失うことになります。花木の花芽は樹種によって発芽の時期が違い、また発芽を見る部位が異なります。もっとも手入れをする時期によって、整枝上止むを得ず切る場合もありますが、花木の特性を一々承知した上の作業でないといけません。百日紅の場合のように枝先に花をつけるものは落葉を待って思いきり切り戻しをする要領が必要でありました。創ちゃんの腕っ節に任せると花が咲かな

くなるという現象はやはり、技いまだしという評価を避けられないのでありました。

この冬、珍しい大雪が都民を驚かせました。根雪の融けやらぬうち、何度も見舞われておりますから、都会地でありながら雪害という予測になかった現象を経験いたしました。

豪雪地帯ではいっそう深刻で表層雪崩が渓流を越えて旅館をおしつぶした清津峡の（清津館）の悲劇など、たまたま仲間うちと語りあいであるツアーに参加した平さんにとって印象も生々しい数ケ月後のことですから驚き入りました。

「清津館もおしんさんだけが助かったなんで、悲劇だねえあのときの孫も若夫婦も、あの人の主人も惨いねえ」

サービスで名取の舞を披露し、おけさの美声を聞かせてくれたその女主人は働きもので、昼間は孫を背負っての甲斐がいしさはまことに美事で、清々しく心に焼きついており、

「清津館の再建は恐らく困難だろうねえ」

と痛ましく思うのでありました。一家六人のうちの五人までを災害で失ったのですから、こんな無惨なことはありません。折からテレビの人気番組の「おしん」さんになぞらへ、清津峡のおしんとその女主人を呼ぶことがたとえ人気番組とはいえ浮薄を免れないように思われても、これはたしかに実在するおしんさんとしてその再起を念じる気持がいっぱい胸をおおうのでありました。

平さんの商いにも雪害は手痛く響きを与えました。これまでなら、油断して軒先の雪が落ちて枝を折るていどのことはありましても、空模様を見てその部分を避けあらかじめ他へ移すとか工夫をすれば難を免れることができたのですが、今回ばかりはお手上げでした。ねこの額ていどの培養地積にひしめく鉢ものをどう避難させる手立てもありません、手をこまねき、手をこまねき、天に向って祈るばかりでございました。雪見の酒などと風流を愛でるうちに、度重なって凍傷をおこし、ついには凍結枯死するものが出てきたのでございます。（お預り）品を数多かかえる盆栽師ならこれは大変なことでございます。

身代を傾け、腹を切ってもおわびの通らぬことでございましょう。こちらはその点安気の自前の品物でございましても零細な市商いの商品でありますから、価格は比べものではございませんが、直ちに生活にかかわるのでございます。それはもう真っ青になりました。気づいて雪を払いましても追つくことではなかったのでございます。

室囲いをしてあるものがほんの少数で、大小の鉢ばかり仕入れのわら包みのまま沢山囲ってありました。湿気

を加えて時代をつける、そんな皮算用で平さんの秘法ともいえるもの。

この雪の中にそこばかりはわらの臭いが充満しておりました。平さんの得意な鉢物が春にさきがける（ぼけ）を中心とするものであったことは例年と異ならないようすでありましたが、市商いの一番手としてはやはりこれらの（ぼけ）に人気が集中いたしますので、泣くに泣けない気落ちのしようで妻君のトクが見かねて創ちゃんの家に走りました。

走りこんでみてもどうなるものでもないとわかっていながら、ふだん重い腰のトクをつき上げたものはさすが夫婦の情というものでありましたろう。

同じ区内とはいえ、平さんの家からはかなりの道程です。大雪の中、まだチェーンをつけなければ走れない道路事情の中、がむしゃらに彼女は自転車を乗り出し、ハンドルをとられがちのところを曲乗りに近いペダルを踏んできました。平作とのつりあいが（ノミの夫婦）といわれる大柄な女でしたから、なにやらおおぎょうに、はく息も荒いしまつでありましたから、

「なにごとかね、平ちゃんがどうかしたんか」

ちょうど、消火栓の除雪作業に出るところとかで、創ちゃんは消防の団服に身をかためていて、りりしくいなせに見えました。ピンと背筋をのばしところがなかなかの男前でありました。ひょっとしたら、トクはこのいなせな男に魅かれているのかも知れない、とはじめて気づきました。真近かに顔をあわせた瞬時の感情でした。（近い親戚より・・・・）という頼りがいを感じていたには相違ありませんが、さえざえとした雪景色の中、思わずはっとする閃光のように走って消えたことでございました。

「そうかい、そいつあ痛棒だな、なにしろこの雪には泣かされるね、雨降りが土方を殺すって道理はこちとらだって同じこと、天道さまがこんどばかりはたんと恨めしいねえ、ま、あとでのぞいてみるよ」

奥には創ちゃんのかみさんもいたようですが、トクは門口から引き返えすあんばいに雪道を創ちゃんとならんで歩きはじめました。

彼の方ももちろんトクの女盛りの熟しきったもののもつ香りを鋭くかぎとりながら歩む成り行きでした。色白のえり首にそよぐおくれ髪、豊かな線をそこからさりげなく視線のうちに捉え、なでおろす、

（前から思っていたが、この迫力はどうだろう）

創ちゃん持合わせの語いにこんな（迫力）なぞという言葉が飛び出そうとは本人も思いがけないことでありました。

（ノミの夫婦か知らねえが、平作のやつうまくやりやがって）

つづいてそれはここには書けないような妄念に結びついたのでありました。

（あの荒い息づかいがよくなかった、お前さんが悪い）

門口に立ったトクの異様さがすべてを導いたのです。

「じゃあな、消火栓はここからまだほかにいくか処もある、雪除け絶え間なし、今年はひでえもんだ、なにね、これは奉仕さね、世のため人のためいざという時困るからね」

消防団員は心をとり直すように言ってスコップの柄をにぎりしめました。

「さ、お行き」

順調を追えないまま、今年の花暦はすべて狂い通すあんばいでなにもかもいっぺんに花期を見る成り行きでした。地域にもよりましょうが、沈丁花、梅、もくれんがほとんど同時になり、平さんの目玉にしていたぼけの鉢物がせっかくの開花期の印象を薄れさせ、出番の鮮明を欠くありさま、もっとも平さんの囲っていた商品が雪害を手痛くうけたことは前記の通りで、梅は「思いのまま」、ぼけは「雪御殿」などが無事なのはまあまあとして、どうやら紅梅や、寒ぼけも名古屋性あたりの紅い花をつけるものがなぜかもろかったようでした。せめて市商いに並べられる数だけはあり、ほっと胸をなでおろしましたが、こうしたピンチに「縁日屋」が弱いという実態に悲哀をつくづく平ちゃんはかみしめていました。あれいらい落ち込みっぱなしなのでありました。

海どうの開花が四月にずれこみ、藤も遅れが目立ちましたし、気品において庭樹の優等生仲間のもっこくが雪に弱いということも、雪の被り方で枝によっては部分的に枯れこみがきているのをはじめて知り、整枝に往生しました。

ともあれ、松風園の創ちゃんの方もようやく稼ぎに追われ去年入れた新車の中形トラックを駆り、忙しげに走りまわっていました。植木職独特の三脚ばしごをつけた荷台の横腹には、

（造園　松風園）

その他の文字が見えます。造園という新しいムードを乗せて走る、単に昔ながらの植木職というよりはかっこいいところが得意気に見えます。

さらにもうひとつ、これまでと違う大きな変化はその助手席に息子を同乗させていることです。この春園芸高校を卒業したばかりのせがれ年高君でした。

（せがれはまだ一人前ではないんで二分の一だけ日当計算させてもらいます。はい結構なんで）

といいながら、それなりでこれまで割高の日当を払った助っ人にまさり、かえってとくのいく勘定でありました。それにいつまでも半人前の遠慮をつづけるわけではありません。いや、むしろいまでこそ年高君は親父さんを立てておりますが、園芸の基本はみっちり知識をもっておりました。研究熱心という点でも親父さんに優るものがあります。牧野植物図鑑といった本につとめて対照するなどの熱意がうかがわれます。造園というからには一応図面も引けなければならないはずを年高君ならそれをこなせるはずでありました。

徒弟で鍛えあげた創ちゃんの技量程度のものは易々としてそのうち追い越す予想が成立ちます。大学進学の希望を断念して、家業を継ぐ気になってくれた孝行もの、自慢の息子だけのことはあります。地下足袋ばきの職人渡世の地味にどれだけ性根をすえ、やりぬけるか、創ちゃんのこれからの育て方にかかる問題にも思われます。

しかし、よくしたもので年高君は創ちゃんを立て、すでに親父さんを抱えこんで松風園を背負う心配ばりも天晴れなものでありました。

（松風園はいい息子を持って幸せだな）

とささやかれます。

「へい、ありがとうさんで、いいえね、学校で教えることはハンチクでいけませんや、この商売はなんといっても年季でござんすよ、これが一人前と呼ばれるなあほど先のこって」

しかし、ことせがれのこととなると相好をくずしっぱなしで、まんざらではないようすでした。

虎の門のように毎月十日の縁日は月次祭縁日と呼びます。桜田の通りに面して鳥居と石柱がある虎の門金刀比羅宮の縁日でありました。丸亀の殿さまが現地に藩邸を移転するにともない遷座したのが延宝七年、明治四年に京極家を離れ、同六年府社に列したといわれます。江戸の頃は大祭の十月十日と月次祭の毎月十日だけ邸の門を開き、一般の参拝を許し縁日商人が大道狭ましと居並んで、大変なにぎわいだったといいます。その伝統をひく上、官公、ビジネス街の地の理を得ておりますから、商いは面白いように繁昌したのでございました。

出店は午前十時ごろが慣いでございますが、平ちゃんの場合は払暁に家を出ませんことには虎の門にたどりつきません。冬場にはそれこそ星を天にいただいて大八車を引き出します。まず巣鴨へ出て、あとは昔の都電がありました頃の日比谷行の路線に添ってトコトコという具合です。ここで昔の（かご町）がいま千石で、いまはここからバイパスが春日へ抜けておりますが、平ちゃんはそれをたどらずに白山へ抜けます。昔、電車が走っていた頃は白山上でいったん停車し、それからブレーキをかけつつ徐行して指ケ谷町へ下って行ったものです。どうかして坂上にかかる少し手前に折返えしのポイントがあって金属音を立て、ポールがそのあたりで架線からはずれることがありました。車掌の腕の見せどころで、そんな光景をのんびりまた自分の車の方を止め一汗ふくあんばいに興深くながめるといったのんびりした時代がありました。平ちゃんの大八車はそんな風景では一向に違和

感を抱かせることもなく誰怪しむこともない点景として融けこんだものでしたが、近ごろはそうはいきません。バイパスと違って歩道のない、昔ながらの狭い道幅を疾走する自動車の流れは昔とは大違いの織るようでございますから、千石からこちらへはもっとも危険の多い通路をなしておりました。

いったんこうと決めた経路を変えようとしない、これも平ちゃんらしい頑固さによるものです。車をひいてその速度の加減、時間の配分まで道が決っていれば長年の勘でほとんど狂いはない確信のようなものをいつか平ちゃんは身にしみているのです。

「オオ、クロマツ」

「イエース、ブラックパイン」

平ちゃんは外人客が好きでした。無理をして英語をあやつる楽しみもあるのでした。

「枝ブリ　イイネ、ハウマッチ」

近ごろは外人も知識が肥えていて、根張り、枝順、葉性などと吟味の目安を知っております。外人向けにはやはり松柏が一番で、平ちゃんとしては雑木の妙味を主張したいところなかなかそうはまいりませんので、松柏の鉢も若干は仕入れることにしております。

「お目が高い、それは仕立て方によっていいものになりますよ、ええ、もちろん山採りですよ」

お目が高い、と客をほめてかかるのが商売のコツでした。市商いをひやかす天狗連もこのあたりは多いようです。官公署のお役人たちと思って間違いありません。口舌が多くて知識をひけらかす。聞いていて腹の立つことがあります。

「これが山採りかね、ちいっとまゆつばじゃないの、おやじさん」

おやじさんときます。いったい買う気があるのかと言いたくなります。

「いつもお目の高いだんなですが、こいつばかりはね、いいですともそういうお方には売りませんから」

と切りかえします。盆栽の道は盆樹に注ぐ人間の愛が絶対欠かせない要件になると、平ちゃんは日ごろ思っていますから、こうした客あしらいは自分の方でも腹を立ててはならないと、心を戒めながら時には虫の居どころが悪い場合だってあります。

「おやじさん、豆ものはどうして扱わないの、いまブームじゃないの」

「へ、ああした手の混むものは手前どもでは扱えません、豆盆栽だからって気安く扱えるもんじゃございません、水遣りから手入れ、ミニなりの手数が大変、おまけに鉢にしたってピンからキリまで吟味するとなれば天上知らず、これは縁日向きじゃございません、お客さんの方でよほど可愛がって下さらないことには枯らしちまうのがオチでさあ、そう思ったら扱えるもんじゃございまことあります。でも結果は（異常なし）で、なぜ授からないのか医者も首をかしげるようすで、シロはシロでも二人には別に何らかの欠陥があるのではないかというご託宣でありました。

あの前夜、二人はこんな会話をかわしたものだそうです。

「お前が悪いのだ」

「なによ、あんたに決ってる」

これでは水かけ論、いつもの伝でありました。

そこで、トクが言い放ったものでありました。

「試験管ベビーでも産むほかないわ、こうなったら」

「この野郎メ、なにがこうなったらだ、もう一度言ってみろ」

こんな口げんかは犬も食わないことを万々承知していながら、せめていまは二人の相寄りそう心理でもありました。しかし、それがこの日ばかりは違っていました。トクはいきなり雪の朝を飛び出していったのです。

（あいつめ、どこへ行きやがった、試験管ベビーなんぞとこきゃあがって）

ざっとこんな始末でございます。それこそ犬も食わぬことの次第でございました。しかし、

（あいつめ、それほどまでに）

と思うと泣ける部分もあり、このところ縁日の方は（雪ひでり）でもあり、クサクサしておりますから、トクせんや」

これは平ちゃん一流の商いの良心でした。買ってからのことは責任がないというのでは商いの道に外れるという考えでした。

都会地には珍らしいあの大雪の中、まこと、雪女が門口に立った……。その日からもうかなりの日数が経っています雪女はまぎれもなく平ちゃんの妻君のトクで、まるでキツネにでもだまされたように、一時、色男らしくヤニ下ったのは創ちゃんでした。下手な小説家はそれから先を多分妖しく、怪しいことに筋を組み立てるのかも知れませんが、現実ではなかなかそうはまいりません。ただし、妻君のあの際はじゅうぶん誤解されてもしかたのないふん囲気を運んで、創ちゃんの内心に負い目を授けたことはたしかなのでありました。とんだ授かりものを残し、雪女は姿を消したのです。豪雪のもたらした悪戯のように……。それはふしぎな第六感ででもありましたろう、一方の平ちゃんもまた常ならぬ気配をその日、実はおのれの女房トクに感じるところがあって、なんともそれが微妙に尾をひいていたのでありました。

ところで、実は平ちゃんたち夫婦は子宝を恵まれていないという事実がありました。これまで恥を忍んで二人そろって医者通いもしております。ビーカーに二人協力してあのドロドロしたものを採取して検査してもらった

との行為のあとの温もりを残す布団を頭からかぶって寝てしまいました。

そんなふて寝からさめて見ると、トクは帰ってきておりました。

「どこへ行ってやがった」

ノミの夫婦ですから、腕力ではどうかわかりませんがそこはやはり（おす）の面目でもありました。

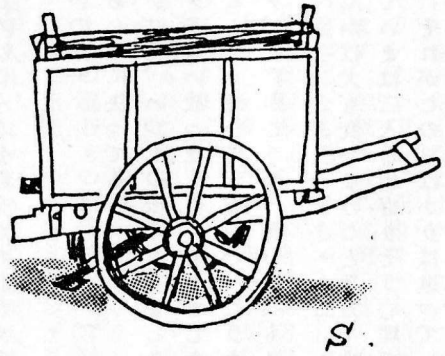
「創ちゃんのとこよ、悪かったかしら」

というトクのうそぶき方に平ちゃんはカッとなったものでした。男である以上は面白くない経緯でした。まして相手が創ちゃんとなると怒りがメラメラとこみあげ、

（くそっ）

とくちびるをかんだのです。

平ちゃんは期していたかのように、二度目の自動車免許にチャレンジをしました。創ちゃんにヒントを与えられていた座布団を持参しての教習所通いでした。座布団の利点はそれが厚ければ厚いほど、その厚みだけ運転席のシートを前にせり出せる理屈でした。創ちゃんの言った（関取の控え座布団）の効果でありました。その効果がはたして好首尾を結ぶものか、それは予想もつかないことでございますが、トクはケロリとして毎朝門口まで送り出し、いくぶんかテレ気味に手を振るようすに見えました。縁日屋の平さんにめぐってきた二ッ八の暦、それも今年はどうしたことか汗をしぼるような暑い暑い夏最中（さなか）のことでございました。



さいたま屋歳時記（承前）

＝日暮里界隈のうち＝

左老庵

「こだま号ッて何してる人？」井中加和寿氏は主人の柔一にきいたことがあった。

「産業新聞の記者ですよ。あれで歌詞作家だって言ってますし、いつぞやレコード会社だかテレビ会社のうたの募集にうかったって言ってましたよ」

「カシサッカ？お菓子屋さんかね」

「いえ店はそば屋さんです。奥さんとおッかさんで店やっていて・・・あの人婿さんですよ」

「あゝそう・・・髪結い亭主だな」

"こだま号"とはヤスがつけた渾名で、本名の児玉に号をつけて"ひかり"よりおとる位の意味であるらしい。青白くむくんでいて酒がいい加減入ると大声で威張り出す。東北弁がひどいから余り相手に通じない。ただ威張る文句の中にS前総理大臣と同じ村の出だと云うせりふが交っていたので、それ以来井中加和寿氏の気分を損なって来ている。だから氏は「ネーセンセ」と云い寄られても、かれの詩的な心境にそっぽを向いたのであった。

この"こだま号"のむくみ方が黄いばんで来たなと氏が見ているうちにかれはさいたま屋に来なくなった。七月が梅雨のうっとうしさを突きぬけて、毎年のことながらカッとした明るさを街のアスファルトにたたきつける頃、更に他の連中との年月のかかわり合いをつけると、ガリ屋の刑が明ける半年前、将軍がウエーキ島から舞い戻っていると云う情報が流れている頃、「こだま号死にましたよ」と柔一が井中加和寿氏にささやいた。"こだま号"は孤高の精神があったせいか、他の連中とのつながりもなく、その死を話題にする者もなかった。それは一種の淋しい死に方とも云えよう。母親と女房がやっていた立ち食いそば屋も店を閉じてどこかへ引越した。店をやっていた頃は、「うまくないけど、お互様ですからネ」と言いながら柔一は三日に一度は近処のとりつけのチンチン亭やマンチン軒のかわりに昼めしを"こだま号

"の店からとっていた。「毎度ありがとうございます」と岡持を持ちこんで来る"こだま号"の女房は小柄で笑窪があり可愛らしい顔の女であった。そう云う時に、立ち飲み真最中の"こだま号"を横目で冷たくちらりと見るだけで、"こだま号"の方もむくみで張れた頬を更にぷうッとふくらませて知らぬふりをしている。こういう二人の態度は完全に冷えた夫婦であることを物語っている。そこで井中加和寿氏は、たくましくもない想像をめぐらしてみるのである。

将来、見込みある詩人の新聞記者"こだま号"は仲人口で、母子二人だけの家へ婿入りした。婿にはむこ向きの男とむこに向かぬ男がある。母一人、娘一人の熱い関係の中に、むこに向かない孤高の精神の持ち主"こだま号"は酒が好きであり、酒の中で心を拡張した気分になり続けた。その上更に小柄な女房に子供が出来なかった。こだま号の呑む酒は深くなって肝臓を参いらせて来た。詩的精神と総理大臣と同村である誇りとはバランスがとり憎い。日頃、母と娘の親愛な関係はかれに不安と不満をあたえ続けたにちがいない。死ぬ数日前に、初夏の程よく晴れた街をうれしそうに晴ればれと女房ならぬ女と肩をもつらせながら笑いさんざめく恰好で駅からさいたま屋に行く坂を上ってくるかれを遠くから眺めて井中加和寿氏はかれの不しあわせを考えていた。

「もう五十万円しか貯金がなくなったから・・・そろそろ働かなくっちゃ」

いつも店の入口で呑んでいる"ハゲ鷹"の死を柔一が氏にささやいたのは、"こだま号"の死から半年後であった。店の入口あたりから"ハゲ鷹"が一番奥まった所で呑んでいる氏のところまで近づいて来て、"そろそろ働かなくちゃ"と告げた夜から二日目であった。かれは炬燵に入れた片足を膝のあたりまで焦がして死んでいたと柔一がつけ加えた。夏に入っていたのに・・・多分突然心臓がとまって横にころげた時に置き炬燵のスイッチがはいって、電気で焦げたのであろう。

「あれはコックさんだったッけね、コックなんていい仕事何んでやめちゃったんかなぁ・・・」

「いや、あの弟がコックなんですよ。弟の方は板前を料理屋へ周旋するような仕事していて、ハゲ鷹の葬式には立派な花輪や相当な人も集っていましたよ都会議員とか区会議員とか、兄貴の方は何していたんでしょうかね」

「そう云えば何度もあれら兄弟の間に背の小さい爺様がはさまってお宅で呑んでたことあったね。爺様兄貴のハゲ鷹の方に懇ごろに気つかっていたぜ、それに兄弟全然似ていなかったな、オフクロ違いの兄弟かな・・・」

「さあねえ」

柔一は井中加和寿氏の様な感傷的な気分に陥らずに、あっさり言った。かれはいつもニコニコしながら客のコップに酒をつぐのであるが、それは下ぶくれの顔つきがニコニコに見せるので、その実はニタリニタリしているのかも知れぬ。客の酒癖や酔いの具合を測定して、"この男、どのくらい呑ませればあの世ゆきになるかな"と思っている節々もある。立ち呑み連の酒癖や酔いの測定は、あるじの商売柄大事な技術である。余りひどく酔い易い客には「もう駄目だよ、やめなさいよ」と忠告を発する必要もあるし、場合によっては、店のそとへ押し出すぐらいの実力行使もやらねばならない。は入って来た途端に「今日はもう駄目、呑ませないよ」と断わられる客もいる。何しろ近くの神社の床下に潜んでいて、賽銭箱から釣り上げた金で呑みに来る客もいるし、近くの都営の霊園の墓石にのせられた酒で下地つけてくる者もいる。でもそのような術は、柔一が大学の商学部と云う所を出て、死んだ親爺の跡をついで三十年、かれが五十才を越えて漸く身についたと井中加和寿氏は観測しているのである。

「旦那、あんた大学の商学部出たことが、店やってゆくのによかったなあと思い当ることある？」

丁度柔一の長男がもう高校の三年になり、"大学など行く必要ない、ボクはこれやるんだッて毎日ギター肩にかけてキャバレーだかバァーだかの演奏会へ行ってしまうんですよ"と母親のぜに子が井中加和寿氏に訴えた頃であった。

「別にありませんね、それよりマージャンばっかりやっていて独乙語が不合格だって言われて、店のウキスキーで一番高いやつ親爺に内緒で自分で先生んとこへ持って行って、その翌日教務科で合格だって言われたぐらいで、マージャンの方が案外役に立ってるように思えますよ」かれはニコニコしながら言った。

「そう言うもんだろうねェ」

井中加和寿氏は三十年前に教えた生徒を母親の願いに男気出して、柔一の出た大学へコネつけて、拾万円で入学させたことを思い出していた。その生徒は三十年経った今、会社の社長と云うものになっている。毎年、盆暮三十年近く氏に挨拶をしつづけている。多分女房子供への口止め料の意味合いであろうか。

その夕方であった。奥のダンボールに腰おろして呑んでいる井中加和寿氏にヤスが近づいて来て言った。かれはどうしても納得がゆかぬという顔つきで何度も首をかしげながら

「佐藤がやられたよ、いきなりだぜ」

氏は、ガリ屋は佐藤だったな、又やらかしたかと云う顔付になって言った。

「佐藤ってどいつだ、どの佐藤だ、まさかガリ屋じゃあるめえ」

「将軍よ、おひげよ、いきなり後からさ、だから将軍

だってかなわねえよね、警察が来て、将軍救急車よ」
どうもヤスの話はいきなりで要領を得ない。何処で、何時、誰が、どのようないきさつで将軍をうしろから襲ったのかヤスの言い草では一向わからない。氏の精神分析法によるとヤスは甚だ独りよがりで客観的妥当性と云うものに欠けるところがあると言うものだ。
「いやぁね、俺とそいつが呑んでいてよ、そこへおひげの佐藤が入って来たのよ、ほら、下の赤提灯でョ。それで俺があいつに〝ありゃ強えんだぜ、おめえだってかなわねえよ〟って言ったら、あいつビール瓶で佐藤のうしろからいきなり頭たたいたのよ、あッと言う間さ、俺とめようもねえのさ」
「あいつッておめえのだちか」
「いやん、ただあそこで一緒になっただけさ、余りしょっちゅうは見ねえ顔だ、山谷あたりじゃねえかな」
「そいでどうなった」
「あいつぁサツ行きよ、将軍病院行きさ」
それから三日目に将軍こと、おひげこと、佐藤がさいたま屋に現われた。ヤスの話では一向ラチがあかないから井中加和寿氏は直接将軍に声をかけた。
「何だか知らねえが、ひでえ目に会ったそうだな。治療費や何かとれる相手かや」
「何だかわかんねえですよ。いきなりだからね。警察じゃあとの事は相手と話し合えッて言うんですがね、俺はあんな奴から金とろうたあ思わねえ」
将軍は見栄切ってかあっさりしている。しかしこれはただの見栄ではなくて将軍の方にだっていきなり後頭部を瓶でやられるような埃も洗えば出て来るのだろう。そう云うことに根掘り葉掘りするのは氏は好きでない。他の立ち呑み連も、将軍の呑み屋での荒れ方からすりゃ、そんなこともあろうと、さわらぬ神に祟りなしをきめこんでいる。要するに将軍は敬遠されているのである。
そう云う将軍でさえ一目おくジンブツがさいたま屋に現われるようになった。〝オオノ〟である。かれは初めて店に入って来たとき、午前中から焼酎なめなめ、出入りする立ち呑み客に愛想ふりまいていた〝久ちゃん〟と根本久吉をみつけると「おい根本、呑めよ」と尻のポケットから裸のまま三千円つまみ出してポイと投げた。十年も年かさの〝久ちゃん〟に対するこのやり方は大様で貫禄たっぷりである。どんな人からでも、何処からでも入って来る金には分けへだてしないひとだよと姑のカメが悪口云うぜに子が金銭登録器の前に坐っていたが、きらりとその三千円の方へ目を光らせた。久公は柔一から少し借り呑みの分があるらしい。〝オオノ〟が一杯ぐっと呑んでさっと出て行ったあとで、ぜに子が井中加和寿氏にささやいたのである。
「あのオオノさん、店の前背広で颯爽と通ったもんだったけど、今夜の服装あんまりいかさないわ。あぁいう

人余り店へは来て欲しくないんだけどなぁ」
〝オオノ〟は住友連合というその途の事務所と云う所につめているとぜに子は井中加和寿氏に知らせたのである。成る程、かれの左手の小指は欠けているし、腕から胸にかけてちらちら紋々がのぞいていた。だが氏にはやくざも他の呑み助も同列である。やくざもえらい奴はえらい。駄目な奴は駄目である。
それ以来、毎日と言っていい程〝オオノ〟は呑みに来るようになった。これはかれの身上に何か変化があったにちがいない。高級料理屋で〝おいしい話〟をしながら仲間うちとつき合えなくなっているにちがいない。ある日氏は〝オオノ〟に言った。
「オオノさん、あんた今一匹狼だな」
「そうです、そうなんですよ」とかれは我が意を得たという顔付で言った。そしてさいたま屋の酒の売上伝票の裏に大野大陸と書いて氏に差出しながら言った。
「このつき当りに○×信用があるでしょう。あそこがボクの家だったんですが、ボクが感化院から出て来たら、おやじは死んでいておふくろと姉が信用組合の裏の長屋に引込んでいましたよ、おふくろは本当のおふくろじゃねえし、おやじはボクの喧嘩相手だったから、そんなことあどうでもいいんだが、ボクその足で信用組合へ乗り込んで店長に、こかぁおれの家だから返せってあばれたんですよ。姉が可愛想でね」
かれはその頃から五六才若い将軍を従えて交番へ殴り込みをかけたりして遊んでいた。それから段々貫禄をつけて四十才を二ツ越える今日まで三十年近くを刑務所で暮す仕儀になったのである。将軍の方は十五、六才頃から〝オオノ〟について交番なぐり込み遊びや、喧嘩で身体から噴出する得態の知れないうっ憤をはらしているうちに型のように最初の女と一緒になった。井中加和寿氏が、二十余年前、さいたま屋で見かけたうぶ毛に白粉の浮いた女がそれで、その時分かれは、年寄りのそばで呑みながらじっと耳すませて世の中の出来具合をベンキョウしていた様であった。ベンキョウ心があったから〝オオノ〟のように指をつめることも、身体に墨を入れることもせずに済んだと教員上りの氏は考えるのである。
〝オオノ〟と〝将軍〟が顔があっても、二人の間に昔のつき合い振りについて思い出風な話はなく、何かよそよそしい照れ臭い仲という素振りは多分やくざ道をばく進して来たオオノと堅気の方を選んだ将軍のソリが合わぬためであろう。それでも将軍はオオノを〝アンチャン〟と呼びオオノは将軍を〝お前〟と呼んだ。ある日井中加和寿氏は将軍に聞いた。
「オオノどうもえらくならないな」
「駄目だよ、ありゃ金と女にだらしがねえから」将軍は答えた。

〝オオノ〟が足繁くから殆んど毎日さい玉屋で呑むようになってから〝ゴロ松〟や新聞屋の〝ヤマちゃん〟など極北組だと噂される連中が呑みに来るようになって、巷の堅気のお客の中には「さいたま屋は何だかこわい」と言い出すものもあった。代貸くずれのキッちゃんは、もう二年も前に、さいたま屋で呑んでいるうちにズルズルと崩れる姿勢で倒れ、救急車で病院に運ばれたが、一週間後にあっさり死んだ。脳に通じる血管が切れたと柔一が井中加和寿氏に報告してくれたのであった。だからキッちゃんと、オオノの出会いはなかった。これはすれちがいという現象である。そんなこんなの間に、根本の久吉も痔が嵩じて、ズボンの尻の部分をぬらしているので不潔だからと柔一に店に入ることを断られ、寝ぶくろ肩に店の表のビール箱、酒箱の山の谷間で焼酎をなめる呑み方に変っていたが、ひと冬越して漸く街路の両側の植え込みの躑躅が真赤な花をつける頃、寿司屋のおかみになっている姉の出資で病院に入り、脳に水が溜っていると頭を割る手術をうけて死んだ。その手術をうけてから井中加和寿氏がかれを見舞ったら十数名の雑居病室の病人が一斉に見舞いの氏をギョロリと睨んだ。見舞人など絶えてない別棟の施療病室だからなのである。久公は頭を包帯でつゝんで殆んど意識あるかなしかの態で横たわっていたが、氏が枕許に近づくと「おぉセンセ」と言った。医者が氏に「こう云う浮浪的な生活をする人は、生命力が強いね」と批評した。頭を割って水を取る手術は初めから実験材料式に行われた趣がある。享年五三才であった。

〝オオノ〟が「ウおーッ」と虎が吠える様な唸り声をふりしぼって、まず上体を酒瓶やつまみ物の入れ物の並べてある台にどさりと衝突させてそれからコンクリート張りの床に倒れたのは、それから半年とは経っていなかった。かれは倒れるまでは、堂々と胸を張って鳶び職の〝クリちゃん〟に刑務所生活について回想談を発表していたのである。網走のことであった。店の中はうす暗く〝クリちゃん〟と柔一とぜに子がいるだけの真昼のことで、ぜに子は一一〇番しようかと柔一にきいている。〝クリちゃん〟は棒立ちの姿勢であった。そこへ井中加和寿氏は何時ものように昼の部の酒を入れるために常用の桜のステッキで恰好をつけながら店に入って行ったのである。

「何だ、どうした、まさか・・・」氏は言った。

「オオノが倒れたんです。暫らくこのままにしておきゃ、そのうち気がつきますよ」柔一は狎れた落着を示して言った。

はだけた厚い胸に、紋々があらわである。目はあいたままで動かない。泡をふいている形跡はないが、のぞき

込んで井中加和寿氏は形のように手首をとって脈を計る恰好で言った。

「やっぱり救急車が入用だぜ」

「何しろ此処んとこ不摂生がたたってるんですよ。ろくに食うもん食わずに呑みつづけですからね」柔一が女房のぜに子の相談をふんずけ気味に井中加和寿氏に言った。〝クリちゃん〟が肩口を抱いてオオノの体をおこしかけると、オオノも足をふんばって立ち上ろうとした。オオノの太い材木のような身体を起せる腕力はこの際鳶のクリちゃんだけがたのみである。ぜに子が電話をかけたのか〝ぴーかぷーかぴーか〟と云うとげとげしい音が店先でふっ切れるとどさどさと白衣の係員らしい男が二人飛び込んで来た。表通りには通行人が立ちどまって見ている。係員と〝クリちゃん〟がオオノを車に運び込んだ。三分とせぬうちに車は〝ぴーかぷーかぴーか〟と立ち去ったのである。それは清掃車が粗大ごみを持ち去る速度であった。

「オオノ死にましたよ」柔一の母親のカメが井中加和寿氏にささやいたのは、それから一週間たっていなかった。カメは夫貫助が死んでから嫁のぜに子を憎む気持と、お店を大事にする気持が一緒にいよいよ募って来て、「オオノ死にましたよ」と云うかの女のささやきには厄介払い出来た安堵があった。氏にしてみれば、〝俺もこんな風に言われる日も近かろう〟と八十に近いカメの元気さに小腹を立てて言った。

「おばあちゃん、オオノの死んだの見届けたんかね、あぁいうのは死んだと噂立てておいて世の中から雲がくれする術も使うんだぜイントンの術って言うんだ」

カメが月に一、二度氏の小屋へ水菓子一袋とか、煙草三個持ってぜに子と柔一の悪口言いに、別の言葉で言うと、〝気晴し〟に来ることがあるが、人の悪口の相手は氏の根気が余り長くつづかない。

「ねえ、あれじゃ男のモノが泣くってぇもんですよセンセ、なめられ切ってるですからね」

「男のモノってあれか、おばぁちゃん、俺のも泣いてるんだがナ」

「センセのは泣き方ちがうんだよ、そんなもん泣かしときゃいいよ。うちの方はお店に尻が来ますからねー、あたしゃお店大事だと思えばこそ、この年してお店にもおりるし、昔からのお客さんに頭下げて歩くんですよ。何しろ昔のお客さんの中にゃ、あの嫁が店にいると買いたくなくなるって言う人もいるんですからね」

「そりゃ、ぜに子さんは商人の家の育ちじゃないからさ、ありゃ実家は農家だろ」

「あたしだって生れは農家ですよ。だけど姑さんに仕込まれたし、一生懸命姑さんにつかえて来ましたからねー」

「無理だよ、今の嫁さんにおばあちゃんの時代の嫁さ

んのやり方真似ろって言ったって・・・それより金がなくなる事件その後ないの？」

もう三年ぐらい前になるが、一日の売上げがそっくりぬすまれて、ぜに子の熱心な提案で警察沙汰にしたが結局埒があかないまま、うむやむになったことがあった。その時分には柔一の弟の数奇夫が未だ同居しており、カメが井中加和寿氏に易を立ててくれとやって来て〝断じて数奇夫の仕業じゃない。ぜに子は自分の行李の底に貯金帖がかくしてあって、それに入れたにちがいない〟と氏に主張したのである。易占の方は〝もう家の外へ出ていて戻らぬ、方角は北東〟と出たが事件はそのままであった。

「いえね、こないだ・・・」とカメはいいこと聞いてくれたと云う顔になり、つづけて言った。

「柔一が風呂に入ったんですよ。あれはいつもお店しめてからしまい風呂に入りますからね、ぜに子ですか、さっさと先に入って二階へ上っちゃいますよ。柔一はそれから夕飯前に独りで少し呑むんですよ。その晩はあたしがおかず作っておいてやったからそれで一杯やってたんでしょ。十二時頃、〝カアさんおれのズボンのポケットに入ってた二万円知らないか〟って二階の部屋まで来て言ったんですよ。配達で受け取ったお金ポケットに入れたまま店しめて風呂に入ったって言うんですよ。一杯やってるうちに思い出したら無いって・・・」

「それで金出て来たかい」

「出て来っこないですよ。うちんなかにドロボー飼ってるんですもの・・・自分の子供にゃあんた、一人前三千円もする寿司、夜食に食わせてサ・・・よそ様から頂きもんあるでしょ、お菓子とかおさかなとか・・、そう言うものあたしは仏様に供えて、死んだお姑さんやこれ一番にして、それから子供たちにちゅう風にやって来たもんだけれど、ぜに子はあたしにや残しておくってことも しないよ。だからあたしあ独りでおそば屋へ行って気晴しするのよ」

これと言ってカメは親指を立てた。死んだ亭主貫助のことである。井中加和寿氏も、ぜに子のやり方も少しひどすぎるなと云う感想を持つのであるが、カメが五、六軒の貸家の家賃の上りを押さえているのがそもそもの原因だなと見当をつけるのである。

「センセ、うちのおばぁちゃん随分家賃の上りがあるのに何処へ使うんでしようね」

ぜに子が氏に見当ちがいな難問をもちかけたことがあった。

「そんなこと俺が知ってるかい、おばぁちゃんの言う所じゃ何しろ十五人色男がいるそうだからな、俺は十六番目だ」

氏はカメがぜに子や柔一のことを零しに来るたびに持って来る水菓子や煙草もぜに子の勘定に入っているなと

察しをつけるのである。氏の正式の感想によれば、カメが家賃の上りを握っていて、その積立てを数奇夫のためにと思うところに無理がある、その他、柔一の妹で、最初の結婚を、ぜに子の長男とおない年の子供をおいてご破算にした柔一の妹のツヨ子が、その後面食い気味に自動車の運転手と一緒になり、ちょくちょくカメに金借りに来ることもカメの荷物である。

「あれで柔一もずるいんだからね、あたしが数奇夫のためにと思って買っておいた土地をいつの間にか自分の名にかきかえて売っちゃったんですよ。この間も郵便局へぜに子があたしの貯金がいくらあるかって聞きに行ったんですよ。郵便局であたしにおしえて呉れたんですがね・・・郵便局じゃさすがに教えなかったって言いましたよ、そこえいくと信用金庫だめだね。ききに来たぜに子にべらべら喋っちゃったのよ。いつもうちへ日銭集めに来るあの男よ、ぜに子に気があるんじゃないかしら」

うちの中のことはひたすら隠しても何となく世間にもれる。店をひらいていれば、それだけ外にもれる口が大きいと言うもんだ。柔一がガリ屋こと床屋の佐藤の保証人になることを決心したことも、カメとぜに子の仲をけわしくするきっかけになった。ガリ屋は床屋の休日の月曜日には午前中からさいたま屋に来て呑んでいる。貯金帖や判こやらあずけてある身元保証人の柔一の店へかれが休みに顔を出すことは実直と云うもんだと井中加和寿氏は考えて、一週間に一回月曜には自分で漬けた漬け物や、梅干を持って行ってやる。ガリ屋はそれに対して折にふれてさいたま屋で売っているウキスキーで高級な部類に入るホワイトホースとかジョニ赤を返してよこす。こう言うやり方は氏をガリ屋が余り好きでないか、それともかれの見栄っぱりなところのあらわれであると氏は踏んでいるのである。カメも折にふれて煮物などガリ屋のアパートに持って行ってやったりする。ぜに子はガリ屋が高級ウキスキーを買ってくれるのはいいが、それ以上煮物をくれたりして面倒みる必要はないと、主張するのである。柔一は配達をためておいてカメとぜに子の仲が険悪になると配達に出ることにしている。そう言うやり方は真底平和を愛する者のやり方である。

ガリ屋は刑務所を出て来て半年位は挙措動作に慎しみが見られたが、段々氏が〝果てな〟と思う程あたりに威力を発揮するようになった。そうなると、立ち呑み連中をシンとさせる将軍と鍔ぜり合いになる筈であるが、同じ佐藤であるところから、どちらが誘ったか不明であるが、何時の間にかさいたま屋以外の場所で条約を結んだらしく二人は近い関係になっていた。その夜もガリ屋の佐藤はポケットから睡眠薬の白い粉を取り出して井中加和寿氏に言った。

「これパット一包のんでねるんですよ。夜はむなしいからね」

夜がムナシイと言うことは氏も全く同感なのである。時には真夜中の一時、二時に戸をあけはなって新らしい空気を吸わないと、そのまま呼吸が止まるかもしれないと言う底知れない恐怖におそわれることがある。時には又真夜中に風呂に入ってみたりする。ムナシイのである。だから氏は腹の中では〝余り薬と遊ぶなよ〟と思いながらもガリ屋のむなしさに同意して「俺に一服くれんか」と言ってみる。

「あぁいいよ、俺医者からいくらでも貰えるんだ。こんな薬も呑んでいるんだから相当参っているらしい」

かれはGパンのズボンをたくしあげて脛のあたりを指で押して、ぽこぽこ凹ましながら病院の薬袋をいくつも取出して言った。

「医者は心臓がまいってるって言うんですよ。まあ俺も長かないな」

その夕方も井中加和寿氏は自分で漬けた白菜の水を切ってビニールの袋に入れてガリ屋にくれる心づもりでさいたま屋には入って行った。店の一番奥にある普段柔一やカメが店番する時に腰かける椅子に腰をおろすやカメが上り口の座敷から首を出して言った。

「サトウ今朝救急車で行ったんですって」

「おどかすなヨおばあちゃん、俺ゆうべ一諸に此処で呑んだんだぜ」

「そうよ。何だかゆうべはあれからぐずぐずしていて仲々帰らなかったんだよ、虫が知らせるんかね、とうとう店しまうまでいてさ、結構呑んで酔ってたんですよ。薬も呑んだりしながらョ」

「あいつ薬遊びしてたからな。今度は救急車遊び初めたかな」

井中加和寿氏はガリ屋の病院行きを救急車遊びぐらいに受けとって、その晩は気嫌よく定量の焼酎を吸い上げていた。柔一もぜに子も店の仕事に忙がしく何も言わない。

「ガリ屋いけない様ですよ。あれが働いている店の主人から電話ありましてネ、今日午後病院へ行ってみたら瞳孔開いちゃって何も言えないんですよ」柔一が氏に言ったのは、その次の日の夕方であった。

「でも・・・左の目であたしを見て涙が少し出ていたよ」カメがそばから口をはさんだ。ぜに子は何も言わずに立ち呑み連の間を泳ぎながら酒をついで回っている。その背中は〝やれやれこれで厄介払い出来そうだ〟とつぶやいている。

「俺見舞ってやれねえが花のひとつもあげて下さい」氏は千円札を一枚つまんだ。

「それじゃ一緒にしましょう、お返しなしってことで・・・」

柔一は〝クリ〟〝オク〟〝ノーさん〟〝ニシさん〟の名前の次に氏の名前をつらね、札を袋に入れた。

「でも多分いけなくなると思うんですよ。何しろモノが言えないんですからね」柔一は言った。

「あたしの顔みて涙出してたから、あたしやいい供養したことになるってもんだ」カメはぜに子に聞えよがしに言った。

立ち呑みの一群の中に一分間程沈黙が行きわたった。それは誰か司会者がいて号令でやる黙禱の儀式より深い、底しれない静けさを呼んだ。将軍の髭もその夜は赤ちゃけて垂れさがり、その先が水鼻でぬれていた。

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

＊同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

連載

○町○丁目○番地（六）

山口健二

二日後の朝早く、深い霧に包まれた○町○丁目○番地の裏小路の倉庫あとの長屋に帰りついた時、この焼けた東京の片隅にも変化があった。狂気の利秋は蜜柑箱を裏がえした台の上に置かれた壺に入っていた。壺の前には空鑵に一本線香が燃え残って、加寿刀自は長火鉢に伏せたまま廉作をむかえた。

「ただ今帰りました」

「お帰りやす・・・」

片膝ついた廉作と伏せたままの加寿刀自を沈黙のしじまが包んでいた。でもかれには、この二日のあいだの出来事は全部見えた。かれが亡夫木曾夫の生家へ米を貰いに発ったその日の真昼、利秋は乾いた笑いをつづけながら息を引きとった。生みの母の刀自にさすられながら、型の様に唇もぬらして貰い、その朝訪れた次兄の大野貞之助にも見守られたのは空襲の業火の中に、又は異国の雨の中に、雪の中に、又は砲煙火焔の中に、又は大洋の波にもまれながら命を失って行った者たちに比べてせめて少しは幸せであったと言うのであろうか。かれはその次の日大野が表通りの古本屋から借りて来たリヤカーに乗せられ、大野貞之助と長兄の貞一に引かれて三河島で灰になり、かくは蜜柑箱の上の壺におさまっていたのである。戦闘という場所であっと云う間に肉塊になって飛び散り、又は炸裂する砲弾の空圧で腹部がガッと割れて内臓がだらりと垂れ出して、或いは仲間の兵士が海水で煮た薯の葉や浅瀬から拾い集めて作った貝の塩辛のような馳走を枕許にしながら栄養を失調して口に入れる精気もなく命を落した者たちに、ついこの間まで狎れ切った廉作の心を、叔父ではあるが狂気の利秋の死がゆすぶる筈はなかったが、かれが南方の島に運ばれるまでは、この国の上流意識の上に胡座をかいていた山上家の一員のこの死に様に、かれは矢張り腹わたをしぼられる怒りの持って行き場もなく、蜜柑箱の前に坐っていた。手は自

然に腹に巻きつけた二升余りの米の入った手ぬぐいをぬった袋をほどいていた。かれはとうとう最後まで木曾夫の生家で「米を下さい」とは言えなかったのであるが、カナが廉作の気を汲みとって、袋は娘のマキがぬってくれたものである。途中電車の中で経済警察官にとりあげられぬように腹に巻くようにつくってある。それを腹に巻いてかれの腹部はようやく普通の腹の形に見える程であった。かれはそれを脱ぐと、蜜柑箱の上にどさりと置き一息入れて、経らしい文句をとなえ初めた。

島にいた時、初めのうちの二、三の兵士の死体は、マングロープの薪の上で石油をかけて焼いて骨を拾った。頭蓋の中味と内臓はぐずぐずと焼けしぶって丸一日はかかる。中隊に応召前に坊主であった軍曹がいて読経して通夜と云うこともやった。経はかれが誦んじている般若心経であった。廉作は何度目かにはこの経を一部誦んじていた。それを読み上げ初めたのである。かれはそれによって利秋の魂がどうこうなると云う感じ方考え方は少しもないが、火の無い長火鉢にうつ伏せた老刀自との沈黙の空気の中で自然にとられた仕草であった。かれは経の文句を所々忘れていたのでそこは飛ばした。只最後のくだりは坊主軍曹の調子そのままに〝掲諦掲諦波羅掲諦波羅僧掲諦菩提娑婆呵般若心経〟と荘重に抑揚をつけて結んだ。

「ありがたいお経だすな・・・」

加寿刀自はうつぶせていた頭を上げて言った。うつぶせていたのは、悲しみに伏せていたと言うよりは居眠っていたのでもあろうか。廉作は老祖母に「ありがたいお経」と言われてさすがに照れを感じて、蜜柑箱の上にのせた米の袋を忘れてそそくさと二階に上った。半分は老刀自に分けようと思ってはいたが袋ごと差出すつもりはなかった。だがかれが着がえして、これも山出の家で包んでくれた一束の葱と青菜を持って階下へ降りて行った時には、蜜柑箱の上に置いた米の袋はもうそこにはなかった。加寿刀自の背後にある押入の奥深くに秘められたトタン製の米櫃におさめられたのである。その米櫃には廉作は覚えがある。山上家が未だ西大久保の屋敷に○首相の私邸などと軒をつらねて住まっていた時分、台所にあった米櫃であった。米櫃だけは持って生きのびていることに足の裏を摩られる思いであった。だがその米櫃に二升の米袋を素早くおさめた刀自の素早さは廉作に生ましい憎しみを感じさせずにはおかなかった。「あれの父親の出た家は大百姓ですよ、あれに米を運ばせましょう」と云う大野貞之助が加寿刀自に廉作の出京を認めさせた時の言い草がこのやわらかい京都弁をあやつる、昔宮廷深く女官をつとめた老女にか様な素早やさをあたえたのであろうか。

口に出して言えぬことも文字には書ける。突然の訪問の詫びと、厚い接待に対する礼を、実は米を貰いに行ったのであるが、つい言いそびれてしまったこと、山上森之助一家の無惨な戦災ぶり、利秋の最後などを縦糸に、敗戦の無念さ、東京の片隅に焼け残った〇町〇丁目〇番地附近の風景を横糸に、廉作は久しく書いたことのない文章に溺れ切った筆つきでめんめんとした手紙を書いた。配給になっていた玉蜀黍の粉を塩味で炒めた夕食を、二十触光の裸電灯の下で舐めながら書くと云う切羽詰った暮しはかれの手紙に迫真力を添えるようであった。父祖の家を訪れた感傷など、恋文とも思える情感をただよわせていた。そのような礼状の効果と言っては穿ち過ぎるが山出マキが野菜の荷物の中に少々の米をひそませて〇町〇丁目〇番地の長屋の玄関に立ったのは、それから五日後であった。多分かれの手紙を恋文風に受けとったのであろう。山上の老母がまさかこれまでみじめな状態にあるとは想像も出来ず、まだ少しは昔の面影をとどめた生活をしているだろうとカナや利左ヱ門の思惑がマキを使いに立てて見舞わせたという節もあった。

利秋が死んで出来た空間には加寿刀自の長火鉢のある六畳との間の襖をとり払って大野貞之助の妻のうしが同居していたのも廉作が三日の留守の間に起った変化であった。大野にしてみれば自分の妻に老母の身辺の面倒をみさせることで、利秋名儀になっている鈴掛通りに面する店一軒と、それにつづいている裏の長屋を自分のものにしてゆく手を打ったということにもなる、かれは実際、加寿刀自のために闇市から水菓子や野菜を手に入れては来た。だがかれのモーニングの内ポケットにおさめられた小型手帖には、それらの品物の闇値が克明に記されていた。

廉作が帰りついた時にはうしは外出していたのであるが、その外出について加寿刀自はかれに言ったのだ。

「よく外に出歩くひとだよ。帰りにはお芋のふかしたのをどこぞで手に入れはって、ひとりこっそりお手洗しながら食べはったる。あれじゃ貞之助がいやがるのももっともや」

廉作にしてみれば〝よく外に出歩くうしも便所でかくれて芋をかじるうし〟も皆々この戦災非常の人間の寄り合い生存の場では当り前のことで殊更にうしを貞之助にふさわしくない妻女だとも自分の叔母にふさわしくないとも思うことはなかった。かれだけが二階の八畳間を独占し、田舎から辛うじて運び込んだ机や、田舎の物置にあった古い藤椅子セットを据えつけて、結構この屋の主人公めいた恰好でいることは、毎日職を求め、食をあさることをのぞいては、この焼野原の東京の中で〝住〟にめぐまれていると言わねばならなかった。土手に防空壕や家財保存用に掘った横穴の入口に垂らした簾や毛布をまくって背広姿の勤め人が出入するのは、その様な土壕

すら人間の住居に使われていると言うことで焼野原に化した東京を捨てて田舎の親類筋に、友人、知人を頼って逃げのびた者たちも、日毎に万という数で東京へと流れ返して来ていた。その流れは米麦の流れ込み同様、一片一条の防止法令ではとどめ様もない勢いであった。〇町〇丁目〇番地の裏側の鈴掛通りに焼け残った商店は、店頭にラヂオを張り出しやけくそにヴォリュームを最高にしてがなり立て生存の印とした。惣菜屋で配給材料以外に闇の物資のはいるルートを持つ店は朝五時頃から客は群をつくり一、二時間で売り切れた。ラヂオは戦争犯罪人という奇妙な犯罪ニュースや、買い出し人の女ばかり百四十余名死亡の列車事故、三九八四戸焼失の田舎の町の大火、死者一〇五七余名のキャスリー台風、利根川堤防決潰のことなどこれでもかこれでもかとわめきちらし、空には日夜重苦しい飛行機の爆音がこもっていた。その様な街角に、一日中当てどの確かでない職を求めての帰りの足をとめた廉作は、地平線さえ所々見える夕方の空をあおいで、爆音だけで姿を見せぬ米国の飛行機を求めながら「畜生・もう一度戦争やれ、今度は死んでやるぞ」とつぶやいているのであった。

廉作は国がかれを兵士として徴兵延期という猶予を打切って兵営に送りこむまで、特にこれと云った高い理想を持って勉学にいそしんだ覚えもなく、又生命に対する執着も時々不図その機会があれば折れてしまいそうな不安の中で辛うじて少年時代に仲間と競い合って負けなかったと言う記憶に支えられて三十年を生きて来たのであるが、子供の頃から〝そんなことはある筈がない〟と教えられ、信じても来たこの国の敗戦と云う事実に南方の島で出会い、上陸して来た米軍の兵士軍人と小半年過した間に、かれがなにがしかアメリカ国の言葉を解し、連隊の長であった土田大佐から命ぜられてかれらと接触する通弁の役を命ぜられてから、他の日本兵士より一層深く敗戦のみじめさを内臓に染み込む屈辱感とし定着させていた。敗戦までは直径百米余の小島の長に過ぎない少尉のかれを歯牙にもかけなかった所謂高級将校と称せられる者たちが手の裏を返したように命を惜しみ米軍将兵に対して卑屈になるのを目の前にして、内地に帰りつくことが出来てもかれらの国の言葉を口にして生きてゆく職にはつくまいと漠然とながらきめていたことが殊更かれの職を求める範囲をせばめていたようであった。

「廉作さん。お父さんが出た家のかたでしょう。山出マキさんと云う若いお嬢さんが二階でお待ちですよ」

うしが巷から帰って来た廉作の鼻の先の破れ障子をあけてニヤリとしながら言った。このニヤリは苦っぽく複雑なかの女の感情がこめられているようであった。

廉作が未だ学生であった頃、山上森之助や母ラクの負負する帝国大学生であったと云うこと、兵士になってからも兎も角最下級ながら将校になるということで、大野

貞之助には娘運子の相手にと云う気持があった。かれが見習士官であった頃一度Y市の大野の家を訪ねさせられたことがあったのだ。もしその時廉作の父木曾夫が生きていれば勿論優生学とかいうものの常識によって頭から反対されたことであろうが、木曾夫は廉作が兵役に服して未だ一等兵の位にあった冬二月、死んでいたのである。だからこのことも廉作がはっきり意識しない中で仕組まれた一種の見合劇であったのだ。そして運子も廉作も少しも気の進まぬままかれは少尉になり南方の島へ送られることになった。廉作の属する連隊を中軸にした編成部隊が8パイの輸送船につめこまれてK港を出港し、日本本土近く張りめぐられた米軍の潜水艦網をくぐって南方へ向おうとする途中、先ず熊の灘沖で魚雷攻撃をうけて知多半島がかかえこむ湾域に逃げこみ、二度目は伊豆半島沖で又々魚雷攻撃をうけて東京湾に逃げ込んだ。潜水艦に対して護衛風についていた二ハイの駆逐艦から放たれる爆雷の激しい爆発音と衝撃が廉作たちに日本近海でもう戦闘に入ったことを知らせ、今迄兵営内に閉じこめられていたとは云え、今日まで聾桟敷におかれていたおのれらを漠然とながら不甲斐なく感じさせていた。東京湾に逃げこんだのは行方をくらますためであろうか。そこに数日間無為に停泊を続ける間に、所謂高級将校だけが短艇で上陸したという噂が船内に流れた。中隊長位はその仲間に入れないで兵と一所に畳鰯のように船腹につめこまれていた。廉作は夕方陸地に点滅する電灯の光を甲板から遠望して、これが日本国の見おさめになるかも知れぬと底知れぬ感傷と、上陸出来る者に対する羨望の中に沈んでいた。〝あのあたりがY市であろうか〟運子が女として、恋しいものとしてサッと廉作の心の隈をかすめ去った。

その運子をY市大空襲の中に、遺体もわからぬなくし方をしている母親うしの心は、自然と鬼気を帯びたニヤリとした微笑になったのである。

「あッそうですか」

廉作は身構える心になっていた。もうこの時刻では、トンボ返りにマキを袖が谷村へ帰すわけにも行かぬ。そうすれば一夜は此処に泊めねばならぬ。如何に戦争中の非常になれた若い者と言っても女である。泊まれる空間は廉作が居る二階の八畳間だけである。それは廉作と若い女の一夜の同棲を意味する。うしのニヤリの中にはそう言う見通しも含まれていたのであろう。野菜といくばくかの米をみやげに貰った加寿刀自はひっそりと何も言わずに控えている風であった。

「今夜は二階に泊めてやって下さい」

廉作はうしへとも加寿刀自へともなく言って二階へ駆け上る勢いであった。既に夕闇が漂よい初めたその部屋の黄色い壁を背に電灯のスウィッチにさえ手も触れずにマキは身体を固くして坐っていた。

「此処がよくわかりましたね」

これは廉作の素直な挨拶ではあるが、その裏にはこんな所に来て呉れてと云う虚をつかれた者のたじろぎもあった。

「ハイ、此処らは共立へ行っている時分よく歩きましたので・・・」あぁそうかこの女は共立を出たとあの時母親のカナが言ってたな。廉作は弱い所を逆なでされる感じを隠しきれない。

「・・・それで下のお祖母様にお野菜とお米を少々・・・」

「あぁもう一人ばあ様いたでしょう、あれ叔母です。Y市で焼け出された大野の女房ですよ。米や野菜くれてやる甲斐のない人たちですよ」

廉作は自分が持って帰った米をそっくり奏早く米櫃におさめた老刀自への憎しみと、大野の下心に対する憎しみをあから様に口に出した。どうして俺の方へ出してくれなかったんか、生きて行くために皆ちりぢりばらばらなんだぞと腹の中でつぶやいていた。

「今日は泊って行って下さい。布団は一人分しかないが・・・まあいいや・・・」

まあいいやは捨て鉢な独りごとであった。廉作にはこの父祖の家から来た娘に対して二十数年前この娘がこの世に現われていなかった頃、亡夫木曾夫お国入りの華やかさの中で子供心に焼きついた田舎に対する町の者の誇りがくすぶっていた。今の暮しのみじめさをまざまざと見られては恥部を無態にさらさねばならぬ者の屈辱感さえ感じていた。

階下の六畳に床を並べた加寿刀自とうしは、長い間の灯火管制の暗さに狎れたのかそれとも電灯の料金を惜しんでか早々に横たわっていた。刀自は山出の娘が持って来て呉れた野菜の実で久々に味噌汁を造ってすする希望を口中に感じながら目を閉じていた。〝味噌はこの前大野が手に入れて持って来てくれたのが押入れにある筈〟うしは夫貞之助の母である加寿刀自と添い寝の形でいるうちに、大野との結婚の最初の夜のことを不思議にも思い浮べていた。それは披露の宴の酒に酔った新夫貞之助に「刀を持って来い」と命じられて角かくし花嫁衣装で父親が山上家との縁結びを機会に古道具屋から買い求めた一具の鎧、兜と一緒に玄関に飾ってあった野太刀を捧げ持って来た一駒、その野太刀を振って、どう見ても即席で、大野一族威嚇のためとしか思えぬ新夫貞之助の舞いの一駒、そう言う幻想には身体がほてって来る筈もなく、かえってこの様な男を夫と定めて連れ添う覚悟をきめていた自分をいじらしく思い浮べていた。かの女の幻想は闇の中で、あの日、夫貞之助の酒の配給をとりに〝一寸行って来るワ〟と出たまま、突如低空からY市に侵入した米軍艦載機の空襲、それにつづいた大空襲と火災の焔の中に遺体すら求めることが出来ずになってしまっ

た娘運子のことが暗闇一杯に広がり、一度は運子と縁を結ぶことになりかかっていた廉作が、かれの父親の出た家の娘とこもる二階のしじまに向ってかの女の耳は尖ってゆくのであった。

翌朝、二階から殊更音たかく降りて来た廉作の足音にかくれるようにマキの足音も重なってはいたのだが、階下の二人は未だ床の中に黙然と沈んでいた。

「行ってまいります。そこまで送って来ますので…」

廉作は部屋の隈に一コの骨壺めいたものが蜜柑箱の上に置いてあり、長火鉢の上の棚には埃にまみれた狐の像が二体、手招きする恰好で置かれている部屋に横たわった二人の老女からマキを出来るだけ早く遠ざけたい思いで言った。

「お世話になりました」

そそくさと出て行く廉作のあとから、マキは加寿刀自の布団の足のところに坐って形のように両手の甲でつくった三角形に鼻をうずめて挨拶をしていた。

「マキさん、朝めしは浅草へ出てからにしましょう・・・上野でもいい・・・」

廉作は加寿刀自やうしとマキの言葉の空間をうめるために口早やに言った。二人とも昨夜の心の格闘の跡を反芻して軽々しく言葉をかわせない気配がつつんでいた。

昨夜、田舎から辛うじて運んだ入院患者用の木綿の綿がごりごりに固った布団をマキに与え、自分は羽毛のすり切れた毛布にくるまった廉作は、椰子の葉を敷いた手製ベッドに寝て過した三年のことを考えればそのことは大した苦痛ではなかったが、三十一才、既に充分女体を知っている彼が、闇の中に息をひそめて横たわる女をそのままにして睡眠に入ることは、如何に食うものも碌に食わない栄養退潮の身体でも、それは自然ではない。若い女は闇の中に一条の香気を発つのか、それとも廉作の鼻孔からエクトプラズム態の物質が延びて女の香気を嗅当るのか、何れにしても香気を含む気流が廉作とマキをつないだ。「父祖の家の女を犯してはならん」と云う至上命令が廉作の身体を固くさせていた。

マキの方にしてみれば、共立女子専門学校に在学して、渋谷松濤の姉シヅの嫁入り先から通学していた頃に、友達らと巷の裏通りを探険気味な興味で歩き廻ったことがあったが、"あぁ云う長屋には一体どう云う人間が住んでいるんだろう"と暮し方の様々な姿に漠然と少女らしいおそれを抱いたその長屋に、廉作が、しかも位階勲等を持った山上森之助を夫に持ち自らも宮廷につかえていたと話に聞いていた加寿刀自と一緒に住んでいるのを訪ね当てて、立ちすくむ思いであったのだ。そして招じ入れられるまま二階に上り、夕方まで廉作を待ったことを悔いる気持であった。"あのままお米と野菜を置いて帰ればよかった"その頃もう夕闇が何時の間にか湿った畳を這い上っていたのだ。「今日は泊って行って下さい・

・・まあいいや・・・」と廉作の言葉は気さくには聞えたが、田舎に初めて訪ねて来たかれを見た時、かの女は思わず嬌声をあげた自分を振り返っても見た。戦争に加わらなかった身体的にも劣った男を見なれて年頃になったマキには、決して姿、形のいい男性とはうつらなかったが戦場での血の臭いを肩のあたりにとどめている廉作は矢張り男らしいものにも見えたのである。その上あの夜母カナに言われて全く酔ったかれを寝室に案内する廊下でかれが無法な抱き方でいどんで来たことが、廉作の帰りを待つ心にかの女を追い込んでいたことも事実であった。淙々と闇の中を気流は流れつづけマキは、「マキさん」と呼び掛けて来る廉作を待つ心もあった。その様にして男と女は結ばれてゆくのであって、それ以外の一切の理性とかそれに附属する仕来りなどはただ十重八重に人間を取りかこんだ果てしない堂々めぐりの遊びの場を提供するに過ぎないと思える敗戦直後の心の荒廃と格斗の一夜であった。

「めし食ってから映画でも見ましょうか」

市電の席に腰をおろした廉作は漸く〇町〇丁目〇番地の空気からとき放たれてホッとした風に言った。

「ええ」

マキの答えは、昨夜の心の渦を追いつづけていて、曖昧であった。廉作は未だ十八、九の少年時代、祖父山上森之助の家に居候風にあずけられた頃、毎日と言ってもいい程、学校へ行くと称して、浅草で遊んで夕方街灯のともる頃になって金七銭也の電車賃さえ使い果たして、市電の線路を頼りに新宿まで歩いて帰った無暴さをなつかしく回想し初めた。その頃"笑いの王国"と名乗った常磐座の榎本健一・渡辺篤・三益愛子などの芝居が田舎出の廉作にうつつをぬかせる力があった。マキという若い女と連れ立った廉作に久しくおさえこまれていた放胆な遊びの心がむくむくと夏雲のように湧き起って来るのであった。"金のことはどうでもいい、どうせ一度は信州の田舎へ帰ろう、親爺の残した蔵書でも売ってもう暫らくは生きのびる金を造らねばなるまい"かれは腹の中でつぶやいていた。

（未完）

編集後記

十三号はこの夏の猛暑のせいか、寄せられた作品が少なく、淋しい号になった。同人諸氏に一層の頑張りを期待したい。もちろん私を含めての話である。

文芸雑誌をめくってみると、おびただしい広告もさることながら、自費出版の案内や、同人雑誌の同人募集の広告が目立つ。昔の「文学生活」が、いま、「文芸生活」と誌名を改め、同人を募集している。主宰者、発行所共、昔のままで、引き続いて中沢氏がやっている。私がいたのは有馬頼義、十返肇が顔を出していた頃だ。当時創作を発表していた草川俊が、全く畑違いの単行本を出して好評を得ている。なつかしい。

「感性を磨く」ということばが、私は好きだ。いいとしをして恰好つけるな、と笑われそうだが、私はいまだに磨き足りないと思い、絶えずおのれをむち打っている。最近、油絵をかきはじめて痛感することは、いままで、いかにものをしっかりみていなかったかということだ。伊藤整は「自分の実感だけでものを書け」といっていた。これは磨き抜かれた感性なくしてはかなわぬことだ。

早乙女貢氏が水彩や油絵の個展を開くという新聞の小さなかこみ記事が眼についた。新宿へ行ってじっくりと時間をかけて鑑賞したい。

爽かな、人生の秋を感じる今日この頃である。（も）

「まんじ」第十三号

昭和五十九年九月二十五日発行　（非売）

編集　大和禎人

印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三ー十一
☎（261・5743）

発行　「作家群」（まんじ）編集部

〒一〇一東京・千代田区神田駿河台二ー九
☎〇三（二九三）〇〇九四　柴田方
郵便振替口座　東京二ー九〇八一五